

スーパーロボット大戦  
OG 無限のフロン  
ティア 異世界からの  
依頼者

ダス・ライヒ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

統合連邦、惑星同盟の二つの巨大勢力による異世界進出と言う名の競争で始まった次元戦争は、更に激しさを増すばかりであった。

エンドレスフロンティアも例外ではなく、この二つの巨大勢力の争いに巻き込まれ、戦場となっていた。

そんな戦場となったエンドレスフロンティアに、ある女が人探しの為、世界を作り替えた男、ハーケン・ブローニングの元に訪れる…！

pixivで三年前に投稿していた作品を、少々の修正を加えて投稿した多重クロスSSです。

# 目次

荒野の魔女	1
バカが異世界から来た	15
依頼者	46
強行突破	70
勇者たちの行方	92
武神装攻ダイゼンガ―第六話 卑劣なる 連邦軍	112
母を求めて三千メートル	149
連邦軍の悪行	175
武神装攻ダイゼンガ―第九話 悪を斬れ ！ 斬艦刀!!	205
物量の波	236

来る古の帝国	261
Rock s! 前編	285
Rock s! 後編	322
あとがき	345



# 荒野の魔女

無限に広がる開拓地：そこは様々なありとあらゆる文化と科学、魔法の世界が繋がっていることから意味している。刻でさえ混ざり合う事もある世界さ。

前は次元の壁に隔てられていたが、ある事件を境にみんな繋がっちゃった。その経緯については、ああ、面倒くさいから今は言わないでおくか。

その世界には様々な物がある。まずは種族から言えば、人間にアンドロイド、獣人に魚人、妖精や様々な種族が居る。最近じゃ、修羅って奴らも居る。とにかく飽きることは無いだろうさ。

二つ目は様々な技術だ。化学に魔法、更には拳でなんでもぶっ壊せる物や、忍術や妖術と言った類もある。それにかつては空中国家まであつたな。今は地上に落ちてウルフキングの領土になつてるが。

さて、めんどくさい話はここまでだ。

最初に名乗ってなかって済まなかったな。格好良く名乗るぜ、覚えておけよ？

俺はハーケン・ブロウニング、バウンディング・ハンターをやっているさすらいの賞金稼ぎさ。最近じゃ、世界を創り変えた男なんて呼ばれてる。

お古と呼ばれそうだが、先代の親父より引き継いだ地上戦艦「ツアイト・クロコディー」の艦長もやっている。それに乗って、今日もまた気長に旅をしながら仕事をしてるってわけさ。二十年以上前の時代遅れ感のある物だが、多少の無茶をしてもまだまだ元気に走り回れるぜ。

俺の国はロストエレンシア。機械技術が発達した地域で、近くには過去に異世界から来て墜落した馬鹿デカイ巨大戦艦が突き刺さってる。今はもうただのオブジェだが、艦内にある転移装置から異世界の物が出て来る。普段はガラクタとかそんな物ばかりだが、たまに生物が出て来ることもある。

で、今のエンドレス・フロンティアだが、異世界に迷惑を掛けまくるはた迷惑な馬鹿デカイ二つの勢力が、我が物顔で歩き回ってる。

しかもその二つの勢力は現在絶賛大喧嘩中だ。全く、喧嘩は他所でやってほしいもんだな。

一つは統合連邦。人間中心：いや、人間至上主義のデカイ連合国家って奴だ。

ここもエンドレス・フロンティアと同じく、何かが原因で様々な世界が混ざり合ったように、対立してる連中も一緒に来たのか、みんな仲良ししましょうとかで結託してそいつ等と戦ってる。なんでここに戦果を繰り広げるのか、全く迷惑な奴らだぜ。

理由はともあれ、自分たちの世界が荒廃すんのを避けるためだろうが、なんで他所に

迷惑かけてまで戦争を続けるのかが理解できねえぜ。

おまけに難癖付けて異世界にまで領土を広げている。ここも例外じゃ無く、西の辺りが連中の勢力下にされ、資源を貪られてる。何とかしたいが、敵は今までより巨大すぎる。それに手出しをすれば、どうなるか分からねえ。どうしたもんかね。

それで、連邦の連中の対抗馬は惑星同盟だ。こいつらも連邦と同じ世界の連中で同じくらいのはた迷惑な連中さ。違いは宇宙人ばかりだが、やれ解放やら、民主化とかぬかしつつ、やつてゐることは連邦や悪党と変わりやしねえ。戦争なんてろくなもんじゃねえな。

連中も資源採掘のために連邦とは反対側の東側を強引に占領し、同じく資源を貪つてゐる。

こいつらも同様で、逆らえば容赦はしねえ。この世界の誰かが盾突けばその瞬間、住人が反逆者一人に付き十人も殺されるから下手に手を出せねえ。指加えて見てるしかねえつてことよ。やれやれだぜ。

と、まあ、俺たちの世界でやりたい放題する悪党共を紹介した…。でもまだあるんだよ、これが。

いま紹介した二つの帝国よりもマシなのが、異世界に行った時に共に戦った美しいバトルレディと同じ名を持つ勢力「ワルキューレ」だ。

初めはこの世界に開拓団として来た。占領軍じゃなくな。更に大砲を向けてこの世界に我が物顔でやって来た二つの帝国よりも先に、大砲なんて向けずにやって来た礼儀正しい先客さ。

俺たち現地民が話の通じる奴と分かれれば、武器を持たず、テーブルに腰を下ろして面と向かって交渉して、未開拓地を貰い、そこで田畑を耕し、兵器を生産しない軍事工場を建て、街を作り上げて俺たちと数カ月の時を共に過ごした。

で、後から来た連邦や同盟がそれを滅茶苦茶にしたわけさ。

連中は自分のクロスゲート、連中から言えば次元転移装置でこの世界に入ってくるなり大砲の砲口を向け、「我々はワイルドキャットの圧制からこの世界を解放しに来た解放軍だ！」と抜かして、先客のワルキューレのお嬢さん方を見るなり所構わずその大砲をぶっ放した。

俺の知る限りじゃ、エンドレス・フロンティアに居るワルキューレは特に大した軍事施設何て無かったし、兵器を量産する工場も殆ど無かった。ただ軍病院や軍服とか軍人の日用品を生産する工場しか無い。なのにあいつ等はワルキューレと分かれればとにかく撃ちまくって皆殺しにしちまったのさ。酷い連中だぜ、何が解放軍だ。

同盟軍も同様に、ワルキューレと見りや直ぐに大砲をぶっ放して手当たり次第に火の海にした。周りの現地住民も巻き込んでだ。



こいつ等、他所の連中がどうなっても構わねえらしいな。けつ、笑わせやがるぜ。

それに連邦も同盟も同様に機動兵器をわんさか投入している。俺が新西暦と呼ばれる世界に来た時に見た20m級が多かった。他には動物に恐竜に化け物まで居たな。

それに気になる事がある。連邦軍に俺が新西暦の世界で共に戦った仲間の機体の量産タイプが混じっていたことだ。同盟側には敵として出て来た機動兵器もある。

まさか正義感たつぷりで、あんな邪道染みた行為をする極悪軍隊に気のいいあいつ等が入っている筈がねえ。入ったとしても、あんな真似は絶対に許さず、身を挺して止めに来るだろう。もしくは、抜け出して抵抗組織を築き上げて連中と戦っている筈だ。

堅苦しい話はここまでにして、明るい話と行こうか。

この二つの大悪党共に、一泡吹かせた奴が現れた。

それは小さいとつてもキュートな勇者ガールで、お連れにおつかないヘルファイターに、おつちやつつけボーイ、そして美しいワルキューレ、後はキザな男、後はボーイとガールを二人ずつ連れていた。

最初は俺と共に戦った仲間であるシユラボーイの故郷、波国はこくに現れ、そこでやりたい放題で暴れ回る同盟軍のクソ共に一泡吹かせて撤退にまで追い込んだようだ。他人の土地を踏み荒らすからさ、いい気味だぜ。

ワルキューレもその勇者ガールを狙っているのか、追跡隊が出て来て連邦のクソ共の

勢力下に逃げたって話だ。

後でシウラボーイに聞いた話、そいつ等はともビューティでセクシーだそうだ。一度会ってみたいな。まあ、話を通じるかどうか分からねえが。

連邦軍の制圧下は、フェアリープリンセスの王国「エルフェイテル」全国だ。

当の我が物顔で不当に占拠してる悪党共に寄れば、「住民に圧制を敷いているから解放しに来た」だ、そうだ。俺から見れば、あんた等が住民に圧制を敷いている様にしか見えんのだがね。

そこで勇者ガール一行が訪れれば、愉快痛快な話さ。

圧制していた悪党共に一泡吹かせた。フェアリープリンセスと共に協力してな。

都合よくワルキューレの解放軍が現れ、エルフェイテルを解放してエスピナ城に凱旋した。住民の祝福を受けながらな。

勇者ガール一行はどうしたって？

そりゃあ決まってる。直ぐにトンスラして俺のところへ来たのさ。それも神様付きでな。

その神様が俺に依頼してきたのさ。「この娘をワルキューレの手が届きそうも無い世界へ送ってやってくれ」ってな。

最初は断るつもりだが、可愛らしい美少女に頼まれてはこのハーケン様が断るわけに

はいかねえ。

直ぐに料金を受け取り、近くにある同盟軍のクロスゲートを奪い取って、勇者ガール一行と神様はそのゲートに送り込んだ。

この際に、ワルキューレのヴァイキングなワイルド追跡隊が追って来たが、神様が去る際に、「脅されてやったと言え」と告げられた。

依頼人を裏切るような真似だが、ワイルド隊は容赦しねえから、仕方なく勇者ガール一行と神様が去った後に、そいつ等に神様が言えと言ったことを告げれば、あっさりで見逃してくれた。

もつと詳しく話せて？

おいおい、楽しみが無くなっちまうだろう？ 少しは楽しめって。

その後は、仕事三昧さ。たまに昔馴染みに顔を合わせる程度だ。まだ連邦や同盟がこの世界を不当に占拠してるが、それさえ我慢すれば快適だ。

おっと、こう思ったらアウトだ。何か、こいつ等をこの世界から叩き出す良い方法は無いかね？

これを見ているユーたちは、どうやってエンドレス・フロンティアから二大悪党を追いつけると思う？

後で意見でも聞かせてくれ。参考になるかもしれないねえ。

エンドレス・フロンティアと呼ばれる様々な世界が融合した世界にあるロストエレシアと呼ばれる地区の荒野にて、白馬に跨った女が長い金髪を靡かせ、この距離からでもはつきりと見える地面に突き刺さった巨大宇宙船「シユラーフェン・セレスト」を指し向かっていた。

女は茶色のカウボーイハットを被り、服装はその帽子に合わせた物であった。彼女は金髪碧眼の白人であり、カウボーイと呼ぶよりカウガールだろう。

カウガールは一般的に露出度が高いと思われがちだが、あれは間違いであり、あのような露出度で砂漠以上に紫外線の強い荒野に出れば、肌にやけどを負うこと間違いなしだ。

彼女は顔以外に肌の露出の少ない服装で、荒野に出る服装として理想的とも言える。

そんな彼女の腰のガンホルスターには、西部劇で有名な護身用の拳銃である回転式拳銃、いわゆるリボルバーは収まっておらず、代わりに黒光りする自動拳銃が収まっていた。

白馬には様々な旅用の装備がぶら下がっているが、白馬はそれを物ともせず、成人女性位の体重はある彼女を乗せながら軽々しく進む。なお、彼女が跨る白馬は雌であるが、雄の馬並みの体格を持っている。体力も競走馬並みにありそうだ。

「もう少しね」

遠くから見える巨大宇宙船の傷付いた装甲板が双眼鏡ではつきりと見えたのか、彼女はもう直ぐ到着すると思ひ、水筒の蓋を開けて水を一口飲んで喉を潤した。

荒野と言え、砂漠と同様の気温だ。熱中症に注意を払わねばならない。その為に小まめな水分補給は不可欠だ。

「おい、姉ちゃん！ ゲヘヘ！」

そんな彼女の元へ、半装軌車ハーフトラックに乗った柄の悪い連邦兵達が下品な笑みを浮かべながら来た。

乗っている全員は柄が悪く、服装も軍人とは思えず、盗賊のように着崩れており、無精髭も伸び放題だ。どうやら懲罰部隊所属のようだ。

その盗賊のような連邦兵等は、彼女の近くにハーフトラックを止めれば、手にブルパップ式の突撃銃を持って下車し、彼女を取り囲むように包囲する。

「おいおい、こんな荒野の中で一人で散歩かい？」

「そんな荒野を歩き回るよりも、俺たちと遊んだほうが楽しいぜえ？　なんとたつて気持ち良くなれるつてもんよ、フヘヘ!!」

どうやら彼女に淫行を働くようだ。取り囲んだのはその為だろう。

だが、彼女に遭遇した彼らが無事ではいるはずが無かった。

「来る……」

「来る？　そいつあ俺たちと一緒に来るって意味かい？」

「おい、とつ捕まえて直ぐに連れて行こうぜ！　偵察機に見られたら俺たちや……」

彼女が一言、何かが来ると呟けば、それを誘いと受け取つたと勘違いしたごろつき兵隊たちは、目前の一際美しい金髪碧眼の北欧美女を連れて行こうとした。

だが、気が短い男が自軍の偵察機に見られる前に、彼女を無理やり連れて行こうとした瞬間に、その男は地面より出て来た何者かに胴体を切り裂かれて無残に殺された。

「な、なんだこいつ！？」

「も、もしかして同盟軍の……!？」

殺された仲間を見て、同様した兵士たちは慌てふためき始める。中には失禁して居る者もあり、地面より現れた者は、それほど彼らに死の恐怖を与える者なのだ。

そんな目前の敵に向けて銃を乱射する彼らの元へ、更に地面より現れた殺戮者達が、兵士たちを次々と殺していく。それも惨く、残忍に。

一人は片一步の脚を引き千切られ、それで顔を強打されて殺される。

「ひっ、や、止める！　来るなあ、来るな!!」

何名かは生き残り、銃を乱射しながらハーフトラックに乗ろうとしていたが、地中より現れし殺戮者たちが逃すはずが無く、残らず殺し尽し、逃げ場であるハーフトラック

ですら破壊した。

「わあああ!!」

生き残った一人が銃すら捨てて悲鳴を上げながら逃げていたが、彼は他のごろつき達と同様に無残に斬り殺され、荒野の上にその死に様を晒し上げた。

この光景を見ていた女は、直ぐに自分の愛馬の尻を叩き、安全な場所へと逃した。

「グオオオ……!」

地面より現れた殺戮者は異様な姿であり、両手にはごろつきの兵隊たちを殺したとされる返り血が付いた鋭利な刃の得物が握られていた。

そんな殺戮者達は、獣のような唸り声を上げ、その恐ろしい眼で敢えて残した悲鳴も上げず、ただ遠方に見える地面に突き刺さった巨大船を見つめる彼女を殺そうと、一人目が鋭利な鉞で斬り掛かる。

「グオ!?!」

だが、殺戮者が鉞で斬り掛かる前に、その殺戮者は下半身から胴体を切り落され、乾き切った大地の上に赤い血を流しながら倒れた。

早過ぎて見えなかったが、殺戮者を上半身と下半身に分けたのは、彼女が右手に握っている長剣ほどの長さのある刀身である片手半剣、つまりバスタードソードだ。刀身には斬った影響で付いたとされる血がこびり付いている。

「グオオオ!!」

仲間を殺したのは目の前の女だ。

そう確信した異形の殺戮者達は、鋭利な鉈で彼女の肉を切り裂こうと、一斉に飛び掛かった。

凄まじい唸り声を上げ、手にしている鉈を振り翳さんとするが、彼女に届く寸前で飛び掛かった全ての殺戮者達は肉片と化する。

まるで斬られたことにも気付かず、獐猛な殺戮者達は自分たちが殺めたごろつきの兵士たちと同様に、荒野の上でその死に様を晒した。

「雑魚……」

そう自分が原形を留めない程に肉片にした殺戮者達に向けて吐き捨てれば、刀身に付いた血を振り払い、剣の鞘を何所からともなく召喚し、その中へ刀身を収めた。

「グオオオ!!」

「っ……!」

だが、敵はまだ残っている。油断したところを見計らって、彼女の背後から地中より飛び出して来たのだ。

両手に付けている鋭い鉤爪で自分に気付いた女を引き裂こうとしたが、素早く彼女が腰にある拳銃を素早く引き抜き、直ぐに狙いを定めて拳銃弾を撃ち込んだ。



狙った箇所は額。素早い照準の速さとは思えず、狙った場所に弾は命中する。額に銃弾を受けた殺戮者は、銃創から人と同じ赤い血を流しながら荒野の上に倒れ、そのまま息絶えた。

「……いつ等、こんな所まで……」

連邦兵達を惨殺し、それから自分に襲い掛かって来た殺戮者達に関して何か知っているのか、彼女は殺した彼らの遺体を見て眩いた後、口笛を吹いて馬を呼んだ。

白馬は口笛に応え、自分の主である金髪の女性の元へ戻って来る。

そして、自分の愛馬が近くまで寄って来れば、馬具に足を掛けて上に乗り、再び大昔に墜落した巨大宇宙船を目指した。

馬に揺られながら目標である巨大な置物へと目指す中、腰に付いている小型無線機から着信音が聞こえて来る。それを彼女は手に取り、自分に向けて掛けて来た相手に応える。

『マリ、聞こえるか？』

それは男の声であり、マリ、つまり彼女ことマリ・ヴァセレートヴァセレートの協力者であるミカルと呼ばれた北歐系人種の青年だ。

マリがこのエンドレス・フロンティアと呼ばれる世界に来たと言う事は、ルリに関するの手掛かりがあつての事だろう。

自分に連絡してきた同じ人種の男に対し、マリは何らの情報を聞こえると思ひ、彼の  
話に耳を傾けた。

## バカが異世界から来た

「艦長、もう直ぐトレイデル・シユタットです！」

「OK、いつもの場所へ止めてくれ。副長」

陸上を走る巨大な砲塔の無い戦車、いや、地上戦艦と言うべきか。地上戦艦「ツアイト・クロコデイル」のブリッジにて、山賊のような服を着た八頭身の人型の虎である副長の呼び掛けに応じ、さすらいの賞金稼ぎと自称する男、ハーケン・ブラウニングはいつもの場所へと止めると命じた。

このキザな男の服装はこれまた派手な物であり、一目見れば印象に残る物だ。

そんな男は、周りからは自らが自称するさすらいの賞金稼ぎではなく、世界を創り変えた男として呼ばれている。

ちなみに、自分等が乗っているツアイトは、ハーケンが先代であり、里親であるジョーン・モーゼスより名と共に受け継いだ物だ。

ハーケンは艦長の席から降りれば、外へ出るためにブリッジを後にした。

艦橋から見える景色は、墜落した巨大宇宙船から発掘された物で、かなり発展した未来都市が広がっていた。

中々の活気に満ち溢れていると思われているが、街のありとあらゆる場所にある出入り口には統合連邦軍と呼ばれる強大な軍に属する兵士たちが検問を張り、鋭い眼光をこの街に入ろうとする者達に向けている。

手には自軍で正式採用されているライフルが握られ、いつでも撃てるように引き金の近くに指が添えられている。まるで占領下のようだ。

連邦軍がこの華やかな都市に進駐する理由がある。

それはトレイデル・シユタットをここまで発展させる要因となったシユラーフェン・セレストだ。

先客であるワルキューレを一定の個所に追い込んだ後、この未知なるテクノロジードで溢れる巨大宇宙船に目を付けた連邦軍は、敵方である同盟軍にその船のテクノロジードを渡さぬように、七十万もの兵力を派兵し、そこら一帯を占領下に置いた。

同じくその船のテクノロジードを狙う同盟軍は、これに対抗して勢力下近くにあるロストエレシア国境付近に軍を集結させ、いつでも侵攻できるように準備をしている。

連邦軍が何らかの行動を起こせば、ハーケンの国はたちまち巨大勢力の戦渦に呑まれ、ありとあらゆるものが破壊尽されてしまうだろう。

無論、巨大宇宙船も例外では無い。

それを恐れてか、連邦軍はただ大兵力を置くだけで細々と発掘作業を行っていた。

この船には幾度か盗掘屋も忍び込んでいるが、それを防ぐために連邦軍は一個大隊以上の戦力をシユラーセン・セレストに配置し、盗掘を働こうとする者を問答無用で射殺している。

さて、話を戻し、ハーケンは自分の育ての親であり、妹でもあり姉でもある？ 家族？ である緑色のロングヘアが印象的な人型女性アンドロイド、アシエンを伴ってツアイトを降りた。

彼が地上戦艦から降り立った先には、検問を行う連邦軍の憲兵たちが待ち受けており、ハーケンらを見るなり不敵な笑みを浮かべて近付いて来た。

将校の腰には自動拳銃を収めたホルスターが吊るされ、四名の部下達の手には短機関銃が握られている。いつでも撃てるように、安全装置の近くには親指が添えられている。

「おやおや、ご帰宅ですか。プロウニングさん」

「やあ、ミスタードナルド。相変わらず仕事熱心なこと。で、通行料の件かな？」  
得意げに話しかけて来る憲兵隊の将校に対し、ハーケンは余裕を崩さず、それに応える。

「ああ、通行料だ。こいつは二十年近くの老朽艦で、主砲も外されてるようだが、自衛の対空砲や対空ミサイルでも我が軍にとっては十分に脅威となりえる。分かっているな

「？」

「OK、アシエン。駄賃をミスターに渡してくれ」

「了解でございますよ」

それが通行料であることをしっているハーケンは、アタツシケースを持っているアシエンに持っている物を将校に渡すように指示する。

これに応じ、アシエンはおかしな返答をしてから通行料が入っているケースを憲兵隊の将校の前に出し、中身を空けてちゃんと金額が入っていることを見せる。

アシエンがおかしな言動をするのは、言語機能になんらかの障害があるからだ。それ故に、相手に対して失礼なことを言う事もある。いわゆる毒舌と言う奴だ。

「お主も悪よのう」

ケースの中に金額、それも本物の金塊が詰め込まれているのを確認した将校だが、アシエンがまた変なことを言い出すので、彼はハーケンに言動がどうにかならないのかを問う。

「全く、こいつはどうして敬語が話せんのだ？」

「育ちが悪いんでな。そこは、勘弁してくれ」

どうやらこの将校は、アシエンがアンドロイドであることに気付いてないらしい。

だが、彼女がアンドロイドと分かれば、厄介なことになりかねないので、ハーケンは

そのことを目前の連邦の将校には明かさず、育ちが悪いと適当に返して流した。

「ふん、野蠻人共め。よし、これで暫くはお前の船をタダで通してやる。だが、期限切れの時にこのおかしな言動の女を俺の前に出してみる。貴様とその女、部下諸共豚箱入りにしてやるからな。もしくははこの場で盗掘罪として全員を射殺し、そのオンボロ地上戦艦を接收する。それとお前が盗んだ機体を、追っているISAの連中に知らせる。分かったか？」

「OK、次からは出さないでおく。だから落ち着いてくれ、ミスター。それにちくるのも無しだぜ」

「分かったらさっさと行け。これを後ろの四人以外に見られたら厄介なことになるからな」

「そんなにカリカリすんなよ、ポリスオフォツサー。そんなじゃ、ありがとな」

アシエンの言動にかなり苛立っているのか、将校は蔑んだ目付きで警告した後、自分の部下以外の憲兵たちを気にしつつ、二人に早く通るように告げた。

これにハーケンを宥めながら、アシエンと共にツアイトに乗り込み、検問を通して自分の家へと帰って行った。

「やれやれ、自分の家に帰るつてのに、通行料を払わないといけないとわな」

「ビッチ戦士たちのワルキューレと結託し、ここの腐れ連邦共を追い払ったりしないの

でござんすか？」

「却下だ、バトルジャンキー。そうなれば、トレイデル・シユタツトどころか、ロストエ  
レシア全体が戦場になっちまう。それだけは避けねえとな」

アシエンは口汚く先客であるワルキユーレと共同戦線を張り、ロストエレシアを奪還  
しないのかとハーケンに問うが、故郷であるロストエレシアを戦場にしたいくない彼は彼  
女からの提案を暗い表情を浮かべ、帽子でその表情を隠しつつそれを却下する。

「すんまへん、艦長。あの軍隊マツポーが気に食わなかつたもんで」

「俺もだ。だが、あいつとこの將軍ジェネラルのおかげで俺たちはゲシユペンストを盗んだ件を  
見逃されている。銭を払わなきゃ、持ち主たちに引き渡されるのがオチさ」

急に関西弁で謝罪したアシエンは、奪還の提案を出したのは、自分たちの故郷でデカ  
い顔をして歩き回る連邦軍が気に食わないことだと理由を述べれば、ハーケンもそれに  
同感しつつも、連邦軍より機動兵器「ゲシユテンペスト Mk-II」を盗んだことがあつ  
た為、手出しも出来ない。

もし駐屯軍に逆らえば、軍から機体を盗んだ罪とテロの罪で憲兵隊に逮捕され、公開  
処刑に処されるだろう。ハーケンの里親であるジョン・モーゼスも同罪として処刑さ  
れること間違いなしだ。

「ちつ、こんな時にボスとスーパーな連中が居ればな…」



ハーケンは前に別世界へ転移した時に戦った仲間たちの事を思い出してぼやきつつ、艦橋へと向かった。

一方で、未知なるテクノロジーズが溢れるシユラーフェン・セレストの次元転移装置がある区画にて、ある？ バカ？ がこの無限の開拓地と称される世界へやって来た。

バカの服装は、黒のタキシードに黒のテンガロンハットと奇妙な格好だ。それにバカは男であり、かなりの高身長と覗える。

尚、転移装置もとい、このシユラーフェン・セレスト全体の機能は驚いたことにまだ生きており、数百年、否、数千年もの間にこうして転移装置より吐き出したバカを含める異世界の物を艦内に吐き出し続けている。他の区画も、朽ちることなく動いている。そのおかげでロストエレシアはエンドレス・フロンティア随一の科学力を誇っているのだ。

「んだここあ…？ 確か崖から落ちて…」

バカはこの世界に来るまでの経緯を、頭を抱えながら思い返した。

腹が減って崖沿いを彷徨っている所、うっかりと足を滑らせて谷底に落ちたが、落ちる途中で妙な物が現れた。

ちようど落下の通過点にあつたがため、そこに上手く入り込むことに成功し、見事に

一命を取りとめた様子だ。

「…俺、運良いな」

谷底から足を滑らせて落ちて、もう死んだと思ったのに生きていた。

思い返したバカの脳裏には、それだけしか浮かばなかったようだ。

「にしても、ここ汚いな…：ガラクタとか、食い物も散らかってるし…」

バカは辺りを見渡し、そこが自分の同じく他所の世界から来た物で溢れていると認識する。

実際バカの言う通り、転移装置のある区画には様々なガラクタや物で溢れかえっていた。

「腹減ったな…：これ、食えんのか？」

とにかく腹が減っていたバカは、周囲に落ちてある食べ物に目を向け、なんと床に落ちてあるパンを、埃か砂が付いている可能性があるにも関わらず、それを平然と口の中に入れて平らげてしまった。

「おっ、食えんな」

普通に食べて何も感じないバカは、そのまま落ちてある食べ物全てに手を付け、それを次から次へと胃の中へ納めて行く。袋に包まれている物に対しては、封を開けて中の物を口の中へ行儀悪く放り込む。

「調味料とかねえかな」

次々と落ちてある物を食べつつ、バカは調味料も無いか探し始める。無論、食べながらである。とてもはしたない男だが、本人は微塵も気になどしていない。

調味料を見付ければ、それを台無しになるくらいにまで振り掛けてから食べる。もはや何も言わないだろう。

割れず、腐つてない牛乳瓶も見付ければ、蓋を開けて流し込む。

「ふう、食ったな」

粗方の食材を腹に収めたバカは、転移装置で流れて来たと思われるソファアの上で横になり、そのまま寝ようとした。

このバカの名はヴァン、姓名の無いヴァンだ。

ヴァンはエンドレス・フロンティアを作り変えた男であるハーケンと同じく通り名で呼んでいる。例えば食い逃げのヴァンや無職のヴァン、二日酔いのヴァンと言う酷い異名を付けられることがあるが、たまに良い例で鋼鉄のヴァンやヴァン・ザ・ナイスガイとも呼ばれている。

だが、本人が一番気に入っているのは、夜明けのヴァンと言う物だ。

この由来は、彼が師匠であるガドヴェドを倒した際に、次の目的地へと向かおうと矢先に夜明けが訪れた時である。そんな彼は、暴力と争いが絶えない世界とは違うこの異

世界の地で、前に経験した痛快極まりなかった復讐の旅とは違う別の旅をするとはまだ思ってもみない。

「いっぱい居るわね」

自身が目的地へとしている場所に、ヴァンと言う先客が来ているとも知らず、マリは連邦軍の嚴重な警備網を抜けてシユラーフェン・セレストの船内へ忍び込むことに成功していた。外の嚴重な警備網とは違い、中は正反対であった。

船内ではやる気の無い歩哨が、銃を担ぎながら面倒くさそうにうろつくだけで、周囲を見ようともしない。それに巡回を行わず、サボっている兵士もチラホラ見える。どうやら外のアリー一匹入りきれない程の警備網で安心しきっている様子だ。

これなら楽に、彼女は目的地である転移装置のある区画まで忍び込むことが出来るだろう。周囲に警備兵が居なくなったのを確認すれば、マリはすかさず隠れている場所から飛び出し、頭の中に叩き込んだ船内の地図を頼りに目的地へと進む。

「たくつ、捕まえた盗掘屋はウルセエな」

「ああ、全くだぜ。確かピンクの猫の獣人だったか？」

目的地である区画へ向かう途中、二人組の兵士が雑談を交わしているのが見えた。何か情報になる物を聞けるかもしれないと思い、物陰に隠れて盗み聞きを行う。

「そうだ、出してくれたら割引するとか抜かしてたな。だから無視したよ」

「結局金を取んのかよ。見上げた根性だぜ」

「しかし、あの猫の獣人の女、良い身体つきしてるぜ。幾らでやらせて貰えるんだろうな」

「おい、獣人の女なんかとやったら病気がうつるぞ。止めとけ」

「<sup>サッ</sup>コンドーム<sup>ッ</sup>付ければ病気はうつらねえだろ」

「サックでも駄目だ。衛生兵に銃殺されるぞ」

「けっ、早く交代要員は来ねえかな！」

邪なことを考えていた兵士だが、同僚に止めろと言われて苛立ったのか、怒鳴り声を上げながら自分の担当区へと、八つ当たりにもそこら中に転がっている鉄屑を蹴ってから戻って行った。

「マジで殺されるんだからな…」

彼を怒らせた同僚も、そんな兵士を見ながら一言呟いてから自分も担当地区へと戻る。

周囲に人気が無くなったのを確認すれば、マリはその場から離れ、目的地へ巡回兵の目を盗みながら向かう。道中、赤外線センサーや監視カメラ、その他に様々な防犯装置があつたが、マリはこれらを難なくカメラにもセンサーにも触れることなく掻い潜り、

まるで幽霊のようであった。

幽霊のような存在であるがため、船内を警備する兵士たちは全く侵入者の存在に気がついていない。いつも通り、予定に組まれている退屈な警備スケジュールをこなすだけだ。そんな兵士たちのおかげで、マリは目的地である転移装置のある区画へと辿り着くことが出来た。

「…一人だけね」

目的地へ続く出入り口の前には、一人の警備兵が持ち込んだ椅子の上で鼾を掻きながら寝ていた。

彼を起こさず、ドアを開けて中へ侵入すれば容易な物だが、ドアの上には空いた瞬間になる小さな鈴が仕掛けてあった。そのまま起こさずに通り過ぎてドアが開けば、鈴が鳴ってドアの近くに居る警備兵だけでなく、他の警備兵たちにも自分の存在が知られてしまうだろう。反対側も同じく、同様の防犯装置が取り付けられている筈だ。

「あるじゃん、別の道」

出入り口のドアを諦めて別の侵入経路を、目を凝らして探してみると、それは直ぐに見付かった。通気口だ。マリでも身を屈めば十分に通れるほどの広さがある。

物音を立てず、蓋を静かに外し、中に入ってから再び蓋を閉め、埃とゴミだらけの通気口の中を進む。

「はいね」

上へ進み、通気口から転移装置を見付けければ、物音を立てずに蓋を外し、目的地の区画へと飛び降りた。

「…誰？」

転移装置のある区画へと降りたマリは、先客であるヴァンを見付けた。ソファアの上で絶賛爆睡中であり、マリが降りて来た時でもまるで反応せず、ただ鼾を掻いて寝ているだけだ。

彼は転送装置によって転移してきた様々な食材を平らげて寝た後であり、こうしてソファアの上で横になって寝ている訳だ。

「…まあ、良いわ。取り敢えず、あの娘は何所に…？」

寝ているヴァンに、少々呆気にとられたマリであったが、そんな馬鹿に気にすることなく転移装置の端末を動かし、自分が探しているルリが何所に行ったのかを確認する。

「駄目だわ…どれもガラクタばかり…数カ月前に、人間二人とロボット一体あるけど…絶対あの娘じゃない」

端末の転移記録を探ったマリであるが、件のルリとその仲間たちを別の世界へ送り込んだ記録は一切無い。人を送り込んだ記録はある物の、それはルリが失踪するより前の記録であるがため、全く何の役にも立たない。

他の端末の記録を探ってみても、どれも少女を別の世界へと送り込んだ記録は無かった。

「ここには手掛かりは無し…」

「手掛かりが無し？ あんた、何言ってるんだ？」

「っ!？」

ルリに関しての手掛かりが無かったため、その場を離れようとした時、寝ているヴァンが起きたのか、マリに背後から声を掛けて来た。

突然、背後より声を掛けられた彼女は、凄まじい反射神経で腰のホルスターにある自動拳銃をコンマ単位で引き抜き、自分に声を掛けて来たヴァンの眉間に向けて銃口を突き付ける。引き金には指が掛かっており、いつでも力を込めれば撃つことが可能だ。

「おい、お前！ なんで鉄砲なんか向ける!? 危ねえじゃねえか!!」

『おい、誰か居るぞ！ 開けろ!!』

『っ!？』

声を掛けた女が突然、自分の眉間に拳銃の銃口を向けた為、ヴァンは激怒したが、そんな二人が居る区画に、騒ぎを聞きつけた連邦兵達が入って来た。

「な、なんだお前たちは!!? まさか、盗掘屋共か!!」

入って来たのは、対能力者用の装備を身に着けたサイキックハンター達だ。



マリとヴァンを見るなり手にしている銃の安全装置を外し、銃口を向けて引き金を引こうとした。

「ちっ、こんな所で……！」

入って来た敵に対し、マリは銃口をヴァンの眉間からサイキックハンター達に向けた。

「あ、あの女ぎゃ?!」

「撃って来たぞ！ 散会しろ!!」

マリは一人に照準を合わせれば、直ぐに引き金を引いて驚きの余り膠着している一人の眉間を撃ち抜いて射殺した。

一人が殺されて我に返った数名は、即座に遮蔽物へ身を隠し、持っている銃火器で反撃を行う。

それに合わせ、マリも近くの遮蔽物となる場所へ身を隠して応戦する。ヴァンも銃撃を避けるために、彼女が隠れている場所へ飛び込んで来た。

「ちよつと！ あつち行きなさいよ！」

「うるせえ！ 俺がハチの巣になつちまうだろうが!!」

自分が身を隠している場所へと押し込んで来たテングロハットな黒尽くめの男に対

し、マリは無理に追い出そうとしたが、ヴァンはそれを了承せず、我が身大事で必死にその場で踏ん張る。

「回り込め！」

「手榴弾を投擲しろ!!」

「ああ、もう！」

手榴弾を投擲しろと言う指示が飛べば、直ぐに手榴弾が一つほど飛んでくる。

無論、安全ピンが抜かれた物だ。種類は破片を撒き散らすタイプであり、ほんの数秒後で爆発して周囲に破片を撒き散らすだろう。それを見たマリは、手榴弾を蹴り込んでから伏せる。

数秒ほどで手榴弾は爆発し、周囲に破片を撒き散らしたが、マリとヴァンには破片は届かなかった。手榴弾で仕留められなかったサイキックハンター達は即座に次の策を転じ、二人を銃撃で抑え込んでいる間に、二名ほどを死角へ回し込ませる。

「死つ、ぐあ!?!」

回り込んだ一人が短機関銃で二人を撃ち殺そうとしたが、ヴァンが腰に下げたある奇妙な銃のようで布のような物で攻撃され、短機関銃を撃ちながら打ち倒される。

「いきなり鉄砲何て撃つんじゃないか！」

「き、貴様も能力者か!!」

それは刀身が変形する奇妙奇天烈な蛮刀であり、布は硬直して刀身となった。

その蛮刀を手にしつつ怒鳴ってから、怯まずに銃を撃とうとして来るもう一人のハンターに向けて斬り掛かる。もう一人もヴァンに倒されたハンターと同じく短機関銃を持つていたが、彼は銃弾の雨を軽やかに避けつつ、撃ちまくるハンターの懐へコンマ単位で滑り込み、一瞬の内で打ち倒した。蛮刀は刀身が重く、打撃に近い武器だ。刀身は布のようでしなやかに仕舞え、伸縮自在で鋼のように固くでき、更に鋭く出来るようだ。

「の、能力者か!？」

「奴も撃ち殺せ!」

回り込んだ二名を倒したヴァンを見て畏怖したハンター達は、マリと共に彼も標的に加え、集中砲火を浴びせる。

だが、ヴァンは先ほどの倍近い銃弾の雨を臆することなく突っ込み、超人的な身体能力でそれを避けつつ、一気にハンターたちの居る出入り口近くまで近づく。

「馬鹿な!?! これ程の銃撃を!?!」

一発も被弾することなく接近してきたヴァンに対し、ハンター達は驚く余り何も出来ず、彼が手にしている蛮刀で叩かれて気絶させられる。

「凄い……!」

誰も殺さず、しかもあれだけの銃撃に対して一発も被弾することなく全ての敵を打ち

倒したヴァンの強さに、マリも舌を巻くほどであった。

「よし、まずは外に出てっ」と

区画に入ってから来たハンター達を倒したヴァンは、外へ出ることに決め、マリを置いて勝手に外に通じそうな通路へと進み始める。

「(あいつについて行けば楽できるかも)」

心の中で、マリはヴァンについて行けば自分は楽が出来ると思い、SIG SG551自動小銃を何所からともなく取り出してから、彼の後へと続いた。

当然ながら区画に響いた銃声は船内中に聞こえており、それを聞き付けた内部の警備兵たちが一斉にそこへ集まって来る。

所定の位置の者はそのまま、ライオットシールドや散弾銃を持った対策班が向かって来る。数は一チーム四人であり、合計で三チームほどがヴァンやマリが歩いている通路へと向かう。

「居たぞ！ 侵入者だ!!」

散弾銃を構えるポイントマンがヴァンやマリを見るなり叫べば、彼は即座に手にしている散弾銃を撃つ。それに合わせ、ポイントマンに随伴する三名が左手に盾を構え、右手で拳銃を撃ちながら近付く。

「(れじゃ…)」

流石のマリでもこの銃撃に恐れをなしたのか、不死身なのに飛び出さず、そこへ隠れているばかりだ。

だが、ヴァンだけは違う。自分の行く先に障害物があるうと、それを乗り越えて行く精神なのか、勢いを付けて数秒間ほど壁を走り、一瞬で四名の対策班を蛮刀と己の身体能力のみで全滅させた。

「動くぎやっ!？」

「へえ、凄いじゃん」

単独で厄介な四名の敵兵を倒したヴァンを見て、マリは背後から近付いて来た兵士を自動小銃で撃ち殺してから関心の声を上げた。

それから進む度に多数の敵が出て来るが、誰もヴァンやマリに敵うことなく、打ち倒されるか、撃ち殺されるだけだ。

そうして狭い船内通路の中で敵を倒しながら進んでいけば、マリは侵入して間もない頃に盗み聞きで聞いた捕らえられた盗掘屋が閉じ込められている檻を見付けた。

「そ、その御方! お助けを!!」

ヴァンとマリを見るなり、桃色の髪の上に猫耳を生やした女性が助けを乞うてくる。

服装は和風で、胸には包帯でさらしを撒いており、その上に袖の長い青い羽織を羽織っている。下の方はミニスカートで、自慢の美脚を露わにして、尻尾を見せびらかし

ている。

「お前、なんで捕まってるんだ？」

「それはかくかくしかじか……」

自分に声を掛けて来た猫の女性に対し、ヴァンはどうして捕まっているのかが理解できず、なんで捕まっているのかを問う。

このヴァンの問いに、猫の女性は捕まった理由をはぐらかすような返答をする。

「ここに忍び込んで捕まったんですよ？」

その答えにマリが本当の事を言えば、猫の女性は猫であるがために猫を被っていたのか、先ほどの口調とは一転して本性を現し、早く出すように告げる。

「ちっ、察しの良い女にや。良いから早くだせにや。兵隊共を呼んじまうぞ」

この態度に対し、マリは牢屋の鍵を捨てる素振りを見せれば、猫の女性は態度を改めてせがんで来る。

「お、お慈悲を！ 忍び込んで見付かって捕まってる様なんですう！ 早く出してください！ 安く致しますからあ〜！」

「良いわよ」

改めた態度と、自身が捕まった経緯と行商人であることを明かせば、マリは牢屋の鍵を開けて彼女を解放した。

「ありがとうございます！ 私、移動商店「猫騒堂」を営む猫又の行商人である琥魔こまです！ どうぞお見知りおきを〜！」

猫の獣人、否、猫又である琥魔は自分を助けてくれたマリに礼を言う。

「俺は夜明けのヴァン。ヴァンだ。よろしく、猫の人…」

「金目もねえ野郎は黙ってるにや。とにかく、早くこつからズらからねえと、兵隊共に嗅ぎ付けられるにや。では、皆さん、急ぎましょう！」

同じく挨拶するヴァンであるが、金目の物を持たないと一瞬で見抜かれ、本性を現した琥魔に黙るように言われた。

マリよりもこの船の警備を担当する部隊の状況を知る琥魔は、素を隠してから二人を引き連れて外へ出る。

「おい、捕虜も一緒に…」

出合いがしらに一人の敵兵と遭遇したが、マリに最後まで言い終える前に撃ち殺される。

「良い腕ですね〜、惚れちゃいそうです〜！」

「そんなの良いから早く行って！」

会敵して数秒ほどで敵を撃ち殺したマリの射撃力の高さに、琥魔は感激の声を上げたが、彼女に頭を叩かれ、再び外へ通ずる通路へと進む。

「こちらへ…わぁーっつと!」

「棺桶ね…」

もう少しで外へと思いきや、出入り口で待ち伏せていたのはアーマード・トルーパー、通称ATが三機ほど待ち伏せていた。

機種は連邦軍なので、スコープドックであり、手には屋内戦を想定したのか、銃身が切り詰められたヘビイマシンガンが握られている。

「あれ食らったらヤバイな」

流石のヴァンでも驚異的な連射力を誇る大口径のマシンガンの前には、迂闊に飛び出せないのか、身を隠している場所から様子を覗う。

その間にマリは、ATの装甲を容易く貫通できることが出来る大口径ライフルであるバレットM82を取り出していた。この対物ライフルは人体に対して凄まじい火力を有しており、イラク戦争では、2300m先の標的の身体を真つ二つにしたと言う報告がなされている。

使用する弾丸は、改良型のA3で使用する軽装甲車両の装甲を容易く撃ち抜けるタイプの徹甲弾だ。ATの装甲は他の大型機動兵器とは違って薄いので、意図も容易く搭乘している人間を撃ち抜ける。そんな凶悪な銃を手にしたマリは、遮蔽物から飛び込んで、標的にした三機のATに向けてその強力過ぎる弾丸を撃ち込んだ。



『馬鹿め、死ぬ…』

先頭の一機に乗る搭乗者が飛び出して来たマリに向け、機体の手が手にしているカービン型のヘビイマシンガン撃とうとしたが、胴体に撃ち込まれて貫通してきた大口徑弾を自分の身体に受けて即死した。

他の二機も同様で、搭乗者は貫通してきた徹甲弾で撃ち抜かれ、搭乗者が乗ったまま死んだATは、その場で立ち尽くすだけであった。

「え、ATが…!？」

「やられた！　なんて女だ！」

「総員退け！　我々の適う相手では無い!!」

AT三機が数秒もしないうちに無力化されたのを見て、恐怖した将兵達は、指揮官の退却命令を聞き、一目散に逃げ始める。自分等が命じられたシユラーフェン・セレストの警備を放棄して逃げたのだ。その命令を守っている自分等に命は無いと思っただろう。

「終わった…」

「いやー、お強いですね。この琥魔の用心棒としてついてきてくれませんかあ？」

「嫌、無理」

「そうでございませうか…」

一人で一個大隊を撤退に追い込んだマリを見て、琥魔は用心棒を頼んだが、ルリを探すので忙しい彼女はそれに一切応じなかった。

頼みを断れた琥魔は心奥底で酷く苛ついたが、ここで本性を現せば、殺されると思っ  
て抑える。

「じゃ、お外に…」

『待てい!!』

「っ!?!」

敵を撤退に追い込んだところで、外へ出ようとしたヴァンであったが、ここに来て新たな援軍が現れた。

『この量産型ビルトシユバインで、踏み潰してくれるぜー!』

それは三機の20m級の大型機動兵器であり、手にはサイズに似合う実弾式のライフ  
ルが握られていた。

機体名は乗っているパイロットが名乗った通りに量産型ビルトシユバイン。

機種はパーソナルトルーパーで、通称PTタイプの統合連邦に参加した異世界の連邦  
軍の主力機であり、並のパイロットでは扱えない原型の高価で量産性の無いPTである  
ビルトシユバインを、並のパイロットも扱え、さらに量産性も上げたPTだ。これによ

り、量産型ビルトシユバインは瞬く間に連邦軍の主力PTの座を手に入れた。

マリ達は現れた三機の量産型ビルトシユバインに対し、何の手出しも出来ない。対抗する手段があるにはあるのだが、直ぐにそれが飛んでくるわけでは無いのだ。

「格納庫に置きつ放しだった…」

この時にマリは、近くに自分が殺された領主より貰った可変戦闘機、VF-25F「メサイア」を近くに隠して無かったことを後悔した。

あの機体さえあれば、マリは一瞬で目前の三機の機械の巨人を倒せただろう。

だが、それは左腕に付けてある腕時計に見立てた端末を動かしても適う事は無い。

「ふ、踏み潰されちゃうにや！ 早く何とかするにや!!」

向かって来る三機の巨人に怯える琥魔は、マリの手を挿んで何とかするように言うが、対抗手段を持っていない彼女にはどうする事も出来ない。

「ヨロイが三体……ここは、ダンの出番だな……!」

ここへ来て臆さないヴァンは、目前の巨人に対してうつつけの手段を持っているのか、前に出て自分が被っているテンガロハットに付いている輪に指を引つ掛け、輪を左側に持つていく。それから刀身に複数の穴が空けば、刀をVの字を描くように斬った。

「…あれ、来ないな?」

「あいつ、何かこっつけてこけてるにや……」

この動作を行えば、対抗手段は来るはずだが、異世界なのか来なかった。琥魔に頭がおかしくなったと思われる。マリも同様の気持ちであった。

「くそつ、なんで来ねえ……!」

『どうした? お遊びは終わりか? ならば踏み潰して……』

ダンが来ないことに焦るヴァンに対し、量産型ビルトシユバインに乗るパイロットは、踏み潰そうと近付いて来た。

だが、空より突如となく飛来してきた巨大な物体に気付き、即座に背中のスラスターを吹かせて回避行動を取る。

『な、なんだあれは!?!』

「来たか、ダン……!」

空から飛来してきた巨大な物体は、剣のような物であり、それが地面に突き刺さった。この瞬間に剣は、人の形へと変わる。量産型ビルトシユバインと同じくらいの巨人に。手足はまるで人間のようであるが、機械らしき形状は殆ど無く、まるで巨人のように見える。

『MSか? いや、PTか……!?!』

「分からねえのか? ヨロイだよ。ただし俺のダンはオリジナル7つて言う特別なヨロイだけだな」

拡声器で問い掛けて来る敵機のパイロットに対し、ヴァンはコックピットらしき空間に入り込んでから答える。

その空間へ入り込んだヴァンは、自分の刀を下に突き刺し、取っ手が自分の右手に巻き付いたのを確認すれば、音声認証コードなのか、ある言葉を呟く。

「ウェイクアップ、ダン……」

彼がその言葉を呟けば、コックピットのハッチらしき物が閉まり、ダンと呼ばれる巨人は起動した。

碧く光っていた部分は黒くなり、顔の辺りには、二つの赤く光る眼が浮かび上がる。

起動したダンは、ヴァンの操作を受け、背中 of 鞆から刀を引き抜いて戦闘態勢を取る。

その太刀筋はまるで侍のようであり、人間のように自然であった。

木曜日の名を冠するオリジナル7の一体であるこのヨロイの正式名称は「ダン・オブ・サーズデイ」だ。バカのヴァンは、覚え辛いのでダンと呼んでいる。

突然、剣の状態となつて空から現れ、更に人型に変形したダンを見て、マリと琥魔は余りの驚きの言葉を失っていた。

『それが、どうしたって言うんだよ!!』

そんな一体しか存在しないヨロイを目にした量産機のパイロット達は、それがどうしたと言わんばかりに手にしている実弾のライフルを撃ち込む。

『なっ、何所に行った!?!』

だが、標的にしたダンは撃った瞬間に消えていた。

ライフルを撃った機に乗るパイロットがダンを探し始めた途端に、搭乗機が左右に両断された。いつの間にかダンが背後に回り込み、手に握る刀で敵機を真っ二つに切り裂いたのだ。

切り裂かれて左右に倒れた量産型ビルトシュバインは大破し、破片が周囲に撒き散らされる。

『う、うわあああ!!』

一瞬の内で背後に回り込み、そればかりか友軍機を一刀両断にしたダンを見て恐怖を覚えた残り二機のパイロット達は、辺り一面にライフルを撃ちまくる。この時にダンは大きく飛躍して大空を飛んでいた。

フルオートであり、排出口から巨大な空薬莖が幾つも排出され、荒野の上に大きな音を立てながら落ちて行く。

その火力は凄まじく、大口径の機関砲が恐ろしい速さで連射されるのと同じであり、外れた弾丸は大地を削って行く。これを受けければ流石のダンとで一溜りも無いだろう。だが、当たらなければどうと言う事は無い。

「当たたら無ねえよ!!」

分かり易いように、ヴァンは敵機に向けて大声で言えば、辺り一面にライフルを乱射する一機の右手を刀で斬り落とした。

腕から離れた右手は、そのままライフルを撃ちながら地面へと落下する。

ライフルを持ったまま斬りおとされた右手が落ちる前に、ヴァンは二撃目を両足に打ち込み、バランスを崩させて更に左腕も斬りおとして戦闘力を奪った。

『ッ、ッ、っいっめ!!』

残った一機は近い距離に居たのか、ライフルを捨てて携帯している近接兵装であるビームソードを抜き、目にも止まらぬ速さで友軍機を無力化したダンに斬り掛かったが、ビームの刀身が正体不明の機動兵器に届く前に、胴体を切り落された。

『ば、バカな…!?!』

まだ拡声器の機能が生き残っていたのか、気付かぬ間に斬りおとされたことに驚愕しつつ、パイロットは機体と共に運命を共にした。

この荒野の中で立っている機械の巨人は、ヴァンが操るダン・オブ・サーズデイのみであった。

周囲には、ダンに敗北した三機の量産型ビルトシユバインの残骸が敗れ去った敗者の屍のように転がっている。

爪痕も少々残っていたが、マリと琥魔、それにシユラーフェン・セレストには一切流

れ弾は当たっていなかった。ダンも同様であり、一発の被弾も無く、三機のPTを意図も容易く撃破したのだ。

「な、なんて奴だ…！ イレギュラーだ…この世界に強力な機動兵器を操るイレギュラーが…!!」

一人、ヴァンの情けによって生き延びたパイロットは、新たに現れたダンを操る異世界より来た男の事を報告しようと、携帯式の無線機で、この世界に居る連邦軍司令部に知らせようとする。

だが、その報告は司令部には届くことは無い。何故なら背後からそれを阻止しようとする人物が彼の命を奪うライフルを手にしているからだ。

背後より迫る人物の殺意に気付いたパイロットは生にしがみ付く余り、自分の任務を忘れて命乞いを始める。

「ま、待て！…このことは司令部には知らせない！…だから助け…」

一発の銃声が響き、命乞いをしたパイロットは糸が切れた人形のように荒野の上に倒れ込んだ。

即死だ。即死の原因は眉間を小口径のライフル弾で撃ち抜かれたことであり、後頭部から飛び出た脳と肉、それに骨の破片が入り混じった物が血と共に荒野の上に流れてい



る。

撃たれて即死したパイロットは、命乞いの泣き顔を見せたまま息絶えていた。

そんな彼に無慈悲な死の一撃を行ったのは、情も敵に対する優しさを当の昔に捨て去ったマリだ。彼女の手には、先ほどのパイロットを射殺して銃口から硝煙を出しているSG551自動小銃が握られている。

「結構頼りになりそうわね…あいつ」

マリは殺した泣きじやくるパイロットを殺したことも気にも留めず、ただ自分の関心がある方向に居る最強のヨロイであるダンを見つめていた。

## 依頼者

「おい、ハーケン。お前の彼女か？ お前に会いたいわって女が来てるぞ」

ハーケンの自室にて、黒い上着と帽子をハンガーポールに掛け、机の上でコーヒーを啜りながら自分の銃の整備をしている彼の元に、このトレイデル・シュタットの代表であり、自分の前代で義理の父親であるジョン・モーゼスが、吸っている途中の葉巻を片手にドアを開けて声を掛けて来た。

「俺に彼女？ 心当たりはあるが、ケリは付けたところだが？」

「ケリは付けた？ おいおい、あんな飛び切り金髪美人を手放しちまうとわな。とにかく、その彼女がお前に用件があるらしい。行って用件を聞いてやりな、ボーイ」

「そいつは一目見たいところだね。四十秒ほど待つてくれ。直ぐに済ませる」

冗談交じりで知らせに来たジョンに対し、ハーケンは彼女と聞いて心当たりはあるが、既に解決した物であると返して、義理の親父の指示に応じ、客に会わせる格好をするため、手早く机の上に置かれている銃器を置き、ポールに掛けてある帽子と上着を取る。

「ほう、これなら不機嫌な彼女も気を直しそうだ。だが、口説くなよ？ お客さんだから

な」

「そこまでの男じゃないぜ、フアーザー。じゃ、行つてくる」

葉巻を啜えて口説くなど冗談半分に告げる義理の親父に対し、そこまで不摂生な男で無いと返してから、待合室で待っているとされる金髪美女の元へ向かった。

「ご用件は何かな、お嬢さん？」

「あんたが私のルリちゃんを異世界にまで送り込んだ運び屋？」

待合室に向かったハーケンに依頼してきた金髪美女は、マリであった。

待っている間に煙草でも吹かしていたのか、それを灰皿に捨ててから、ルリを異世界にまで送り込んだのかを問い詰める。

「ルリ？ はて、ルリと言う愛らしい名前は有り触れた物でしてね。何所の誰やら……」

「これ見ても分からない？」

「ヒュー、勇者ガールじゃねえか……まさか、この絶世の美女が……」

問い詰められても、ルリと言う名前に覚えのない振りをするハーケンに対し、マリは分かり易いように写真を見せながら再び問うた。

写真に写る美少女に見覚えのあるハーケンは、その美少女がルリである事が分かり、目前で居場所を問い掛けて来る目の前の絶世の美女が、ルリが話していたどこか懐かしく感じる女性であると直ぐに分かった。

「てっ、ことはつまり君が勇者ガールの言っていた……？」

「何の話をしてるの？ この娘、何所行ったか知らない？」

「OK、このビューティフルガールの行く先なら知ってる。なんとたつてクロスゲートまでエスコートしたのはこの俺だから。何所の世界に行ったのかは知らないが……」

ルリが話している絶世の美女なのかを問おうとした時に、マリは誤魔化されたと思っ  
てもう一度問い詰めて来る。

これに依頼者である女性の機嫌を損ねるのは自分のポリシーに反すると思つてか、異世界を渡るゲートまでルリを送り込んだのは、自分であることと明かして落ち着かせようとする。

だが、これが逆に感情を逆なで仕舞ったようだ。

「何所の世界に行ったか分からないですって？ あんた、最後まで付き合わなかったの？」

「そいつには深いわけがあるんだよ、レディ。最後までついて行こうとしたが、付き添いの神様に用がねえと追いつけられちゃってな。結局、何所に行ったのか分からず仕舞いだ。それに」

「それに？」

激昂しそうなマリに対し、ハーケンは落ち着かせるようにルリの行く先が分からない

理由を答える。更に理由を告げるために、彼は何所に行ったのか分からない理由も述べた。

「使ったのはライアーアーミーズ、つまり惑星同盟軍の次元転移装置だ。国境付近のな。最初は強行突破しても問題が無いくらいの数だったが、送り込んでから警戒でもしたのか、すげえ大部隊が守ってる：行かないのが身のためだけ、レディ」

ルリ達が異世界への移動に使ったのが、ロストエレシア国境にある惑星同盟軍の次元転移装置であることも明かした。

その際に、強引に奪い取る形で次元装置を使用したので、戻って来た同盟軍に警戒されて守備が厳重になっていることも告げた。

「そう、そこね。でも関係ないわ。皆殺しにして何所に行ったのか突き止める」

「おいおい、たった一人で行くつもりかい？ すげえ大部隊って言っただろう。流石にレディが幾ら美しかろうと、クソツタレの異星人共がはい、どうぞと通してくれるわけがないぜ。だが、俺が居れば、通れるかもしれない」

「？」

それでも関係なく押し通ると返すマリに対し、ハーケンは自分が居れば通れると得意げに言う。これにマリは疑問の表情を浮かべる。そんな彼女に、ハーケンはその訳を語る。

「俺も行くつてことですよ、お嬢さん。あの勇者ガール一行が、何所の世界に行ったのか俺も気になるんでね。レディ、ご同行してもよろしいかな？」

疑問の表情を浮かべる彼女に対し、ハーケンは紳士のような笑みを浮かべ、共にルリとその仲間たちがどの世界へ行ったのかを突き止める旅に同行しても良いか問う。

その問いに対して、マリは強行突破が少しは楽になると思い、ハーケンの同行を許した。

「好きにしても良いわよ。でも、途中で帰るなんて抜かしたら、速攻殺してあんたの船も頂くから」

「ふっ、ジョークが過ぎますよ、お嬢さん。逆にこの俺が貴女をお守りしましょう。二言はございません、プリンセス。例えば火の中水の中……」

「そんなキザでキモイ台詞を堂々と吐く辺り、あの猫商人の言つてた通りの世界を創り変えた男のようね。認めるわ、報酬もそれなりに用意する。失敗したら許さないわよ？」

「サックス、このハーケン・ブラウニング。貴女がもう良いと言うまで何所までもついて行きましょう」

ハーケンが噂通りの本物の世界を創り変えた男であると確信すれば、マリは期待を掛け、彼は期待に応えて見せると返した。

ここで直ぐに出発と言いたいところだが、マリは先の戦闘で少々汗を流したのか、それとも疲れているのか、このトレイデル・シユタツトで休息を取る事に決め、ハーケンに何所か快適なホテルが無いかを問う。

「じゃ、直ぐに行きたいところだけど、ちよつと疲れてるから何処かで休むわ。なんか良いホテルとかある？ 安全で快適な所」

「ああ、それならキャットガイの……」

「それはこの琥魔にお任せ……！ 実は私、民宿もやっております！ 女性一人の宿泊は完全に安全！ それに盗撮の危険性もありません！」

「おいおい、このレディに俺を紹介したのは、マジェントキャット、お前か？」

「はい、その通りでございます……」

自分が知る一番のホテルの場所を言おうとした時に、マリをここに紹介したのであろう琥魔が呼ばれても居ないのに出て来た。

出て来た琥魔に対し、ハーケンは彼女に、マリをここに紹介したのかと問えば、彼女は言い訳をするわけでも無く接客の笑顔を見せながら答える。返つて来た嘘偽りも無い答えに、流石のハーケンも呆れた様だ。

「はあ、何も言葉が出ないぜ……」

そんな呆れるハーケンに、次なる難題がやって来る。

「艦長、あそこの調味料クラッシュャーはどうしますか？」

「アシエンか。調味料クラッシュャー？　おいおい、今度は何だ？　失礼、お嬢さん。その守銭奴キャットは、金さえ払えばちゃんと仕事をする。金さえ払えばね」

琥魔の次に、アシエンが知らせに入ってきた。

様子を覗うため、ハーケンはマりに琥魔は金を払えば信用できるものと伝えてから待合室を後にした。

それからアシエンの知らせた人物を一目見るべく、ハーケンは彼女の後へ続いて食堂を目指す。そこに居たのは、注文した料理にあらゆる調味料を掛けて食しているヴァンの姿があった。彼が掛けに掛けまくった調味料は混ざり合って不気味な色へと変色し、液状となってテーブルを汚している。

「おいおい、なんだあの男は？　ここのコックの作った料理が台無しじゃないか。なんで止めないんだ？　あれは料理人に対する冒瀆だぜ」

「いくら言ってもあのゲテモノブラックは聞かないのであります。取り敢えず、一発ぶん殴ってしめますか？」

当然ながら驚き、ハーケンは料理を作った本人に対する冒瀆的な物であると怒りを露わにする。そんなハーケンに対し、アシエンは拳の武器を起動して、食堂からヴァンを叩き出す許可を求める。



だが、ここで暴力行為に出るのはハーケンにとっては問題外であるため、それとなくでこの不躰な男がここに入って来た訳を知るために、待合室に居るマリの元へ戻ると告げる。

「いや、暴力は出来るだけ避けよう。取り敢えず、あのブラックアウトマンがどうしてここに居る理由を調べなきゃな。俺は、あのお嬢さんの元へ戻るぜ」

「あの金髪雌豚の元へですかい。あつしはあの調味料ジャンキーを見張ってるで、SMプレイしてでも吐かせてちよんまげ」

「おいおい、あのプロンドガールはSだぜ？俺の見る視線がどうもな…じゃ、聞いてくる」

アシエンは相変わらずの口調であり、しかもマリの事を金髪雌豚と言いだめた。

そんな言語機能がおかしいアンドロイドに対し、ハーケンは訂正してから彼女の元へ送った。

「失礼、お嬢さん。あの男は、貴方の連れですか？」

「ええ、連れよ。まあ、転移装置から出て来たの」

待合室に戻り、食堂に居るヴァンのことを琥魔から宿泊コースのプランを見ているマりに問えば、彼女は転移装置から出て来た男だと答えた。転移装置と聞けば、シユラーフェン・セレストしかないと判断したハーケンは、連邦軍によって完全に占拠されたあ

の船に潜入したのかと問う。

「転移装置…まさか、あの船に忍び込んで連れて来たって言うのか…?」

「いや、そこら辺に居た連中を撃退してから連れて来たの」

「…そいつはキツイジョークだぜ」

マリはありのままの事を告げれば、ハーケンは厄介な人物の依頼を受けたことを後悔した。

「OK、前の同じだ。地獄の一丁目まであのお嬢さんと付き合おうか」

だが、目前の美女の願いをここで蹴るのは自分の信条に反するので、ハーケンは最後まで依頼を最後までこなすと自分に言い聞かせ、これより始まる旅に備え、旅支度を始めた。

後日、昨日の夜に旅支度を済ませたハーケンは、コールガールを呼んで共に行為を含む夜を明かした後、シャワーを浴びてから身支度を済ませて部屋を後にしようとした。

「ハーケン?」

先に起きて自分の普段着に身を包んだハーケンを見て、まだベッドの上に居るコールガールは、なぜ出て行くのかを問う。

代金を踏み倒されたと思って、隣にある机を見れば、ちゃんと代金の札束、それも上

乗せ分が置かれていた。

問うてくるコールガールに対し、ハーケンは先代より受け継いだ帽子を被ってから紳士のように答える。

「悪いね、俺はこれから旅に出るのさ。そいつは饞別だ、それで寂しさを紛らわせてくれ。だが、また会える日は来るさ。その時はよろしく頼む」

「ふふ、ちよつとカツコつけ過ぎじゃない？」

「いや、俺的には決まってると思うんだがな……じゃ、また会おうぜ」

「ええ、待つてるわ」

暫しの旅に出ると答えたハーケンに、変にかっこつける彼の言動に少し笑ってから、彼女は部屋を後にする彼を見送った。

一夜限りの恋人であるコールガールからの見送りを受けて部屋を出たハーケンの元に、アシエンが寄つて来る。

「こつちは準備万端でヤンス、スケベ小僧」

「その口ぶり、調子は良いようだな、アシエン。じゃあ、お嬢さんをお迎えに上がろうか」

「アイアイサーでゴワス」

アシエンの報告で調子が良い事を確認すれば、ハーケンはマリを迎えるべく、彼女が宿泊しているホテルへと自家用車を使って向かった。

琥魔が運営するホテルは現在地点に近く、僅か数分程で目的地へと到着した。このホテルを副業で運営する琥魔は、金の匂いを嗅ぎつけたのか、何処かへと去っていた。

「早いですね。連邦の奴らに目でも付けられてやんでしまうか？」

「ああ、あいつの事だからな。さて、受付嬢、あのお嬢さんはもうチェックアウト済みかな？」

琥魔が居ないことに、アシエンは連邦に目を付けられて逃げたと推測で言えば、ハーケンはそれに納得して受付の女性に、マリがもうホテルを後にしているのかいないのかを問う。

「食堂の方で待つております。お連れの御方が三人ほど見えますよ」

「三人？ 二人増えてるな。どんな顔か確かめてみるか」

受付の女性から、マリの連れがヴァン一人から二人ほど増えているので、どんな顔でどのような容姿をしているのか確かめるべく、彼女らが居る食堂の方へ向かう。

その発見は容易であった。料理に調味料をありったけ掛けて食すヴァンが、わざわざ音と立てながら食べているので、直ぐに見つけることが出来た。

彼の他には優雅に朝食を取るマリと、連れである二人が見える。一人は北欧系の美青年であるミカルで、もう一人は女性であり、同じ北欧系である黒いショートヘアが特徴的な女性だ。二人はヴァンの食べ方に呆れ果て目線で見えており、その表情には周囲から

色眼鏡で見られていることに大変迷惑を被っている様子が見える。

そんなヴァンの朝食に無視して食べるマリと、周囲を気にしながら朝食を取る北欧系の男女の席へとハーケンは寄り添った。

「グットモーニング、エブリワン。連れが二人ほど増えているが、誰ですか？」

「私の連れ」

「そうか。で、ミスターは誰かな？」

一言だけ答えるマリに対し、ハーケンはミカルは何者かであるか問う。

「僕はミカル、一応情報屋をしている」

トーストを食べながら自己紹介するミカルに、ハーケンは礼を言えば、黒髪のシヨ

トヘアの女性に名を問う。

「サンクス、ミスター・ミカル。そこのお嬢さん、お名前は？」

「私はリンダよ。メカニック担当。で、その調味料ぶっかけてる奴は……」

「ヴァンだ、夜明けのヴァン。んで、あんた誰だ？」

リンダと名乗った女性は、ついでに聞いてなかったヴァンの紹介をしようとしたが、本人が食べながら自分の名とその通り名で自己紹介し始めた。

それにヴァンは名前を聞いて来たので、ハーケンは帽子を取り、自分も自己紹介を始める。

「ソーリー、ミスター。俺はハーケン・ブロウニング。さすらいの賞金稼ぎさ」

「ハーケン、ああそうかい」

自分では格好良く付けたつもりだが、ヴァンは特に気にすることなく食事へと戻った。

そんな彼に対して半ば呆れつつ、ハーケンはこんな男を用心棒として使うかどうかをマリに問う。

「おいおい、このブラックテンガロハットは本当に大丈夫なのか？ 何所か抜けてるぞ？」

「大丈夫さ。彼には頼もしい武器がある」

「本当にそうかね…？」

マリの代わりに答えたミカルの言葉に、ヴァンの素性を知らないハーケンは疑わしく見る。それから数十分もしないうちに朝食は終わり、マリとヴァンを旅の仲間に加えたハーケンたちは、自分の地上戦艦「ツァイト」がある倉庫まで向かった。

「おい、副長。お送りするのはこの四名だけのはずだが。あのパーソナルトルーパーはなんだ？」

倉庫に着いて早々、ツァイトの即席ハンガーに、連邦軍から盗んで新西暦の世界で自分が乗っていたゲシユペンスト風味に魔改造した量産型ゲシユペンスト Mk-II の他

に、見知らぬ20m級のPTが積み込まれているのを見て、ハーケンは整備長と共にいる副長であるリー・リーに問い詰める。

そのPTの他に、ファイター形態のVF-25F「メサイア」と同型機二機が共に積み込まれていたが、ハーケンやツアイトの乗員から見れば、ただの戦闘機にしか見えなかったもので、何も口出しなどしなかったようだ。

「はい、そこのお連れの美味そうなお嬢さんが積んでくれたので、積んでいる途中です」

「ミス・リンダだな。で、このPTはまさか連邦から盗んだってわけじゃねえだろうな？」

「盗む？ これは払い下げって奴よ。誰も乗りこなせないから、現地の部隊がくれたってわけ。もちろんお金は払ってるわよ」

「連中が気前良くくれるとは思わんね…」

リーの答えにハーケンは、積み込みを命じたリンダであると分かれば、連邦軍から盗んだ物でないかと問い詰めた。この問いに対し、彼女は決して盗んだ物ではないと強調するが、PTを運用する勢力は大々的に連邦軍しかないのです、疑いの目を向ける。

彼女を疑いつつ、運び込まれたPTがどんな機種であるか問うた。

「で、このPTは？ ゲシユペンストの仲間のように、連邦軍の高性能MS、ガンダムタ

イブに似ているが？」

「RTX-008L/R、ヒュツケバインよ。こんな良い機体を売り払うなんて、連邦軍ってよっぽど腐ってるんでしょうね」

「ヒュツケバインか。新西暦の世界じゃ、名前くらいしか聞いたことねえな……これがかなるほど」

名前しか知らなかったPTの実物大を初めて拝んだハーケンは、感心してヒュツケバインを眺めた。

全長はゲシユペンスト・タイプH擬きより1m低く、背中のバックパックには、小型ミサイルを収納したコンテナが装備されている。

なんといっても特徴的なのは、連邦軍の伝説的なMSであるガンダムタイプに似た頭部だ。この機体を運用している部隊は、ヒュツケバインのことをガンダム擬きと呼んでいるらしい。

機体の動力源に、ブラックホールエンジンと呼ばれる異星人の技術で作り上げた物が使用されているが、事故の前例もあつて別のエンジンに差し替えられて量産が進められている様子だ。

「で、誰が乗るんだ？ 武器が幾つか積み込まれているが……」

「あの人よ」



「あの人？ ああ、ブロンド・ビューティホーか。彼女も俺と同じPT乗りか。嬉しいね、あの美女と同じPT乗りとは」

そのヒュッケバインに乗り込むパイロットをリンダに問えば、彼女はマリであると答えた。

機種は違うが、あの絶世の美女が同じPT乗りと聞いて嬉しさを感じたハーケンは、その嬉しさを口にする。

ツアイトにヒュッケバインの積み込みが完了したところで、ハーケンらはマリ等と共にツアイトに乗船し、惑星同盟軍が保有する目当ての次元転移装置がある国境付近を目指して出発した。

「さあ、今度は異世界の旅へと出掛けるか！ 派手に出向するぜ、野郎共！ エンジン始動!!」

「アイアイサー、キャプテン！ エンジン始動！」

そう艦長であるハーケンが掛け声を上げれば、副長はそれを復唱して操縦士にエンジンを始動させるよう指示を出す。

こうして、マリとハーケンの痛快奇天烈な旅の幕が切つて落とされた。

『こちらは連邦地上軍第608哨戒中隊！ これより先は同盟軍との前線区である!!』

即時停船し、退き返せ！ 繰り返す、即時停船し、退き返せ！ 指示に応じぬ場合、貴官を撃沈する!!」

トレイデル・シユタットを出て数時間余り、もう同盟軍との前線が近いのか、連邦軍の哨戒部隊が警告を出して来た。

警告を出して来た部隊は、主砲を搭載した地上戦艦であり、その主砲を対空設備しかないツアイトに向けて威嚇している。もし、このまま突き進もうなら、あの地上戦艦の艦長は撃つてくるだろう。

「どうします、艦長。このまま突破すれば確実に……」

「さて、この二十年物の老朽艦で何所まで逃げ切れるかね……」

警告を出してくる連邦軍の地上艦艇に対し、二十年以上前に建造された地上戦艦でハーケンはどう対処するか悩む。前にもこの地上戦艦で、無茶なことを何度もやって来たが、今は持つかどうか分からない程だ。それをやろうとした時に、自慢のマッドサイエンティストである女性科学者がブリッジに入ってきた。

「エンジンを全快にして突破すれば良いじゃないですか」

「ドクター鞠音まりおん、そいつは思い付いたが、これからの事を考えると……」

入って来た鞠音と呼んだ耳の長い女性科学者に対し、ハーケンはその手を考えていたが、これから先の事を考えれば、ここで無茶をさせれば途中でエンジンが爆発する恐れ

を抱いているのか、出来ないと言った。

だが、これに彼女の癪に障ったのか、ツアイトがそれほどにオンボロ船でないといい返し始める。

「おや、艦長はこの船がもう限界であるか？ いえ、違います。貴方が居ない間に修理兼ねてこの船をオーバーホールしましたのよ。外見に変化はありませんが、中身は別物ですってよ」

「…そいつは知らなかった。では、新しく生まれ変わったツアイトの実力を試してみるか……」

「是非、そうしてください。連邦軍の大量生産品など、この私の手によって生まれ変わったツアイトの足元にも及びませんわ」

「なら、その言葉を信じてやるか！ 操縦士、エンジン全開だ！」

自分が居ない間に改造したと告げた鞠音に対し、それを今知ったハーケンは、少し驚いたが、信用できる科学者であるため、彼女の言葉を信じ、ツアイトの操縦士に全速力で連邦の地上戦艦を振り切るように指示を出した。

これに応じ、操縦士はエンジンを全快にしてツアイトを全速力で走らせる。警告に應じなかったため、連邦軍の地上戦艦が主砲を撃ってきたが、高速で移動するツアイトには全く当たらず、外れた砲弾が砂塵を上げるだけだ。

こうして一瞬の内で連邦軍の前線区を抜け出し、同盟軍の勢力圏内へ入り込んだツアイトであったが、こんな速度を出して艦内が無事であるはずが無かった。

『おい、なんだこの揺れは!? 説明してくれないかブrowning!』

「無事だったか、ミスター・ミカル。ご覧の通り、うちのマッドサイエンティストのおかげで目的地まで後少しだ。先ほどの揺れは済まなかった。今度やる時はシートベルトを着用するように指示を出す」

『全く、君たちはいつもこうなのか? おかげで服が台無しだよ』

「ああ、たまにすることだがな。では、着替えを持ってこさせよう」

ミカルからの苦情の通信を受け、それに適切に対処したハーケンは、入った場所が同盟軍のテリトリーなので、周囲に警戒しつつ目的地へと進むようにリーに指示を出す。

「よし、同盟軍のテリトリーに入ったな。ここからは対空監視を怠らずに、目的地まで進んでくれ」

「はい、艦長。総員に通達、ここからは敵の勢力圏内だ! いつ撃たれてもおかしくない! 対空監視を怠らず、周囲を警戒しつつ前進だ!」

リーは指示に応じた後、艦内放送を使って全クルーたちにハーケンの指示を通達した。これに応じ、ツアイトの対空砲が動き始め、監視塔には双眼鏡を持ったクルーが周囲警戒を行う。

いつ敵に見付かり、撃たれると言う緊張感を保ちつつ、一行は目的地へと向かった。

「艦長、同盟軍のクロスゲートが見えました！ 凄い数の部隊が守っております！」

副長のリーからの報告で、ハーケン は双眼鏡で同盟軍のクロスゲートの様子を確認した。

「ヒュー、こいつは凄い数だ。前の倍以上はいやがる」

彼の報告通り、双眼鏡で見れば、物凄い数の同盟軍機がゲートを守っていた。

大部隊が地上を埋め尽くすほどに駐機しており、更には哨戒任務に就いている航空機がひっきりなしに飛び交っている。同盟軍の地上戦艦も、七隻以上が見える。他にも歩兵が連隊単位で防衛陣形を組んでいる。このまま突っ込もう物なら、一個師団以上を相手にすることになるだろう。

「ミス・ロングブロンド、あれを突破しようと言うのかい？」

「ええ、そうよ。関係無いわ、いくら居ようと」

隣に立っているマリに、あの数を相手にするのかと問えば、彼女はハーケンに対して関係ないと返す。

この返答を聞いて、ハーケンは半ば呆れたが、前にもこのような事態は何度もあったので、彼女に付き合うことにした。

「艦長、あの数を本当に相手にするのですか？」

「イエスだよ、副長。この手の無茶は何度か経験があるのさ」

「はあ、今度は生き残れるかどうか分かりませんな。良いでしょう、乗り掛かった舟です。最後まで貴方に付き合いますよ！」

「OK、その意気だ副長。チョウジョウって意味だ。派手なパーティをおっぱじめようか！」

リーはあの数の敵と戦うのかと問えば、この手の苦難を何度か経験しているハーケンはやると意気揚々と答えた。

その返答を聞いて、少しため息をついたりリーだが、艦長の事だから仕方ないと後悔の念を水に流し、最後まで付き合うと言えば、これに満足なハーケンは、かつての仲間の口癖を言いつつ、大変満足であると返す。

「じゃあ、行ってくるぜ副長。船は任せた」

「ええ、任せてください。艦長が不要とも思える程の働きを見せてみますよ」

「そいつは怖いね。だが、良いジョークだ。意地でも生きて帰ってツアイトの艦長の名を守らないとな。サンクス、リー副長」

ついでにゲシユペンストで出撃するので船を任せると告げれば、リーは意気揚々と冗談交じりで艦長の座を奪うような発言をしたので、ハーケンの緊張が緩んだのか、彼は

そんな冗談を言った彼に礼を言いつつ、ハンガーへと向かった。

「よう、調味料ジャンキー。あんたも出るのかい？ あの戦闘機で？」

ハンガーへと向かう最中、同じくハンガーへと走るヴァンを見掛けたので、あの戦闘機、それも可変戦闘機で出るのかと問うた。

この時、ヴァンが空から人型のロボットのヨロイであるダンを呼び出すことなど、ハーケンはまだ知らない。

「いや、俺にはダンがある。他はいらねえ」

「ダン？ おいおい、あんたは戦闘機乗りじゃねえのか？」

「戦闘機？ 俺はそんな物には乗れない！ 乗れるのはオリジナル7のヨロイ、ダンだけだ」

「一体それがどこにあるんだ？ まさか召喚するつてわけじゃねえよな？」

「外に出るまで待つてろ。そこでダンを見せてやる」

どうやらハーケンは、ヒュツケバインと共に詰まれたVF-25シリーズをヴァンの愛機と勘違いしてしまっているようだ。その証拠を見せるために、ヴァンはハンガーの外へ出て、蛮刀を展開してからダンを呼び出す動作を行う。

「あの右脚に巻いてるのは拳銃じゃねえのか…」

この時、ハーケンはヴァンが右脚に巻いているのが初めて蛮刀であると初めて知っ

た。

それからものの数秒後に、待機状態のダンが空か振って来る。先端が地面に突き刺さり、ダンは待機状態から人型形態へと移り変わり、主であるヴァンが乗って来るのを待つ。

「こいつは驚いた……新西暦の世界でもあんなタイプは見たことは無いが……」

これを見たハーケンはやや驚き気味であったが、今までの旅でこれに負けなくらいの物を見て来たので、対して驚きはしなかった。

主を迎えたダンは、ヴァンの音声認証で起動し、乗っている彼の思った通りに背中 of 刀を取り出して、ツアイトの進路上に居る敵の大部隊に単騎で突っ込む。

通常、敵の大部隊に単独で突っ込まない物だが、ヴァンは馬鹿なのでしょうがない。

「おいおい、一人であの数に突っ込む気か？　しょうがねえな、ゲシュペンスト、出るぜ！」

彼を援護するために、ハーケンは新西暦の世界で乗っていたゲシュペンスト・タイプH風味に改造した量産型ゲシュペンスト Mk-II のコックピットへと乗り込む。

コックピットの座席は二つあり、一つはハーケンの操縦席、もう二つは鞠音博士の改造によって付けられたアシエン用の座席だ。このゲシュペンストの改造には、ハーケン立会人の元で、彼の記録だけで行われている。その二番目の座席へと、アシエンが飛



び乗って来る。

「準備完了でヤンス。艦長」

「OK、じゃあ、出撃と行くか！」

アシエンが乗って来たのを確認すれば、ハーケンは機体を起動させ、開いているハッチから操縦桿を巧みに動かして飛び出した。

## 強行突破

ハーケンのゲシユペンストの次に、ビームライフルと大型の盾を持ったヒュツケインに出撃する。

「ヒュツケバイン？ 乗っているのは、ブロンドのお嬢さんかな？」

『そうだけど、何？』

「ビング、やっぱり風格クイーンか」

後から出て来た白い塗装のヒュツケバインに乗っているのが、マリと当てたハーケンは、的中していることに感激し、映像通信で出た彼女に向けてウイंकを送る。

このウイंकに、マリは不快な表情を浮かべたが、先攻して単独で敵陣に突っ込んだダンの討ち漏らした数十機ほどの敵機が攻撃してきた。

その敵機は戦闘機に手足が生えたような外見であり、左側に装備している兵装で弾幕を浴びせて来る。

「あいつは、新西暦の世界で見た奴だな。形はちと違うが…」

「魔改造されまくっちゃってますね、ありゃあ」

異世界でPTに乗って戦っていたハーケンとアシエンは、その敵機に見覚えがあつ

た。

敵機の名はリオン。ロボット工学者、フィリオ・プレスティによって開発されたアーマードモジュールシリーズの一つ、リオンシリーズの元祖だ。

全シリーズに小型のテスラドライブを標準装備し、優れた空戦力と宙間戦闘能力を有している。数多くのバリエーションやカスタム機もあり、陸戦仕様や海戦仕様も存在する。構造も単純で製造コストも安いため、その上に通常兵器に勝る機動力を持っているため、多くの新型機が導入されて居るにも拘らず、様々な組織、勢力によって生産され続け、運用がなされている。

新西暦の世界では、連邦軍や開発と製造元のデイバイン・クルセイダーズ、通称DCに運用されていたが、何故か異星人勢力が多い惑星同盟軍によって運用されていた。その生産力の高さ故だろうか。各勢力によって改造されたりオンが、統合連邦軍の敵方であるPTと戦火を交えているようだ。

後継機である人型に近くなっているレリオンも、他のリオンシリーズ同様に惑星同盟軍で運用され、破壊される度に増産が成され、連邦軍との果てしない消耗戦へと順次投入されている。

そんな傑作大量生産機動兵器に対し、改造したゲシュペンストMk-IIを駆るハーケンと、ヒュツケバインを駆るマリは、手持ちの主兵装で対空射撃を行い、次々と撃墜す

る。

乗っているパイロットは、連邦軍と同様に前線にパイロットを送り込むために、短い期間の訓練しか受けていない様子であり、元々PT操縦技術を持っているハーケンと、人間離れた操縦技量を持つマリの相手は不可能なようだ。我武者羅に暴れ回るヴァンが駆るダンにも敵わず、ただ延々と撃墜されるばかりだ。

『な、なんて強いんだ!? 俺たちは数で圧倒してるんだぞ!』

たった三機の機動兵器相手に、苦戦する味方の部隊を見たレリオンに乗る士官級のパイロットは、驚愕して拡声器で声を出してしまう。

それを聞いてか、配下の兵たちは動揺を覚え、戦意を損失し始める。

『お、おい…勝てるのか…?』

『俺が知るか! でも、数の上ではこっちの方が上なんだ…! 撃ちまくれば、問題は無い!』

動揺する将兵らであったが、相手はたったの三機だ。数の上ではこちらが勝っており、数を撃てば幾ら強力な敵とで、一瞬で蒸発するだろう。

そう思った将兵達は、自機の火器を目前で味方を次々と刀で切り捨てて行くダンに向けて放った。

「うお!! やべえ!!」

自分に攻撃が集中してきたので、ヴァンは即座にダンを数分ほど前に破壊した大型指揮車両の残骸に身を隠して弾幕を避ける。

「畜生、ここの数が多いと、幾らダンでも骨が折れちゃうな…」

残骸から見える自機に集中砲火を浴びせる無数の敵機を見て、流石のヴァンも、あの数の敵には骨が折れる様子だ。現にダンの背後には、無数のリオンやレリオン、陸戦型のリオンの残骸が無残に転がっているが、それを上回る数の敵が目前に居る。散々無茶をしてきたヴァンでも、あの数の敵に単独で挑むのは多少の無茶があると言う事だ。

だが、無謀な者はヴァン一人だけじゃない。後方より無数のミサイルが飛来し、自分に向けて弾幕を浴びせていたりオンシリーズに命中して多数を撃墜した。驚いたことに放った分のミサイルの分まで敵機が墜ちていた。パイロット達がダンを浴びる出すことに夢中になり過ぎた所為だろう。

『よう、ブラックガイ。さっきの勢いはどうした?』

「お前、かっこつけのカウボーイ。あれをやったのはお前か?」

『いや、ビューティホーウーマンだぜ。同盟軍のパイロットが弱すぎるのか、あのお嬢さんが凄いかどつちか分からねえな』

通信チャンネルが繋がり、視界に邪魔にならない範囲でハーケンが映っている映像通

信が表示された。

先ほどの多数のミサイルでその分の敵機を撃墜したのはハーケンと思っているヴァンは、それを問うが、彼はマリのヒュッケバインのミサイルであると答えつつ、器用に回り込んで来た敵機をゲシュペンストの手持ちの兵装で撃破する。

「そうか。じゃあ、あの女に伝える。俺を援護しろ！　それで余計な事すんなってな！」  
『おいおい、女性に対してその頼み方は無いだろう、ブラックタキシード。もうちよつと丁寧にな！』

マ리에余計なことはせず、ただ援護しろと告げれば、ハーケンはこれを女性に物を頼む態度ではないと言って反対し、もう少し丁寧に物の頼みことをしろと言ったが、ヴァンは通信を切つてダンを遮蔽物から飛び出させ、多数の味方が撃破されて混乱している同盟軍の機動兵器群を斬り始める。

逃げる者も居れば、勇敢に機体の固定兵装で戦おうとする者も居たが、ヴァンが駆るダんに敵うはずも無く、一瞬で先ほど散つて行った戦友達の元へ送られる。

ヴァンが討ち漏らした敵機や無視した敵機は、ハーケンやマリによつて次々と始末されていく。その後をツァイトが続き、向かつて来る敵機に対しては、対空機銃で追い払うかハエ叩きのように撃ち落とす。

「ひっ、ヒィヒィ!!」

何名か生き残った者が居たが、戦意を損失しており、予備の機体に取り込むことなく逃げ始める。もはや、同盟軍機の中でヴァンが駆るダンに敵う機体は無かった。

「派手に暴れてるな、ブラックタキシード。こつちも羽目を外すとしますかな！」

「こつちも準備万端でヤンスよ」

「OK、一気に飛ばすぜ!!」

自分等の前で、無数の敵機を相手に暴れ回るダンの姿を見て、テンションが上がって来たハーケンは、アシエンに本気を出すと告げれば、彼女はそれに応える。

アシエンも乗る気であると答えれば、ハーケンは操縦桿を巧みに動かしつつ、ダンの右方より迫り来る敵機群に向けて単独で突っ込む。

『ひっ!! き、来たあ!!』

怯える敵機のパイロットの声が通信機から聞こえて来たが、この世界を荒らし回る勢力の一つである同盟軍の将兵に情けをくれてやるほどの優しさを、ハーケンは持ち合わせていない。

「ビビってやがるな…だが、殺しはしないが容赦しないぜー」

殺しはしないが、死ぬほど痛い目に遭わせるつもりだ。

そのつもりのハーケンは、敵機に乗るパイロットの恐怖が分かるほどの弾幕を躲しつ

つ、的確に動き回る敵機に向けて一発程の主兵装のライフルを撃ち込む。

狙いは正確であり、一発で完全撃破とはいかないものの、戦闘力を奪いことに成功する。

「もう終わりか。弱すぎるな」

「お前の言う通りだな、シンデレラ。これが最強の軍隊って言うなら、今すぐその名は返すべきだぜ」

撃っている内に、自分に対処しようとした敵機は全滅してしまったようだ。呆気なく全滅した同盟軍のリオンシリーズに対し、ハーケンとアシエンは呆れ果ててしまう。だが、二人の期待に応える程の機体が直ぐに現れた。

その敵機は巨大な浮遊砲台のような風貌を持つバレリオンだ。最初から長距離火力支援を目的としており、駆逐艦の主砲に耐えきれぬほどの重装甲を誇る。それが三機も一気に前線へと数十機の護衛のリオンと共に現れたのだ。

三機のバレリオンはハーケンのゲシユペンストを見るなり、直ぐに巨大な巨砲を撃ち込んで来る。

「おっと、ボスのご登場のようだな。だが、そんな大砲を持ち込んでも、俺たちは止められないぜ！」

それを難なく避けたハーケンは、重戦車のような機動兵器を投入してきても、自分等



は止められないと告げてから、周りのリオンを撃墜しながらバレイオンに接近する。「ちっ、やっぱり硬えな！ こいつじや貫けねえ…」

周りの敵機を撃破しつつ、一気にバレイオンの懐に飛び込んだハーケンのゲシユペンストであるが、手持ちの兵装では重装甲を歯が立たないようだ。だが、倒しようはある。「だったら、こいつだ！」

重装甲を持つ敵機に対し、ハーケンは機体を回転させながら距離を取り、ゲシユペンストが持つある必殺技を行う。

それは「究極！ ゲシユテペンストキック!!」。整備士泣かせと言われるほどの荒業であり、その攻撃はなんと、機体の右足で相手に飛び蹴りを食らわせると言う物だ。そんな大胆不敵な技を、ハーケンはこちらに向けて砲身を向けるバレイオンに向けて行った。

「究極！ ゲシユペンストキック！」

その掛け声と共に、ハーケンはバレイオンに蹴りをかました。

凄まじいけりを受けたバレイオンの装甲はへこみ、バランスを崩して倒れた。

荒野の上に倒れたバレイオンの主砲であるビックヘッド・レールガンは既に発射態勢にあり、倒れた瞬間に、ちょうど射程内に居た味方のバレイオンに向けて撃つてしまう。

このビックヘッド・レールガンの威力はすさまじい物であり、重装甲のバレイオンの

装甲を意図も容易く貫通し、撃破してしまった。

「うまく言ったようだな」

「偶然としか思えんばい」

ハーケンはこちらを狙っていたようだが、偶然であるらしく、それをアシエンに見透かされる。

「さーて、残る一機はどうしますかね…？」

一気に二機ものバレリオンを仕留めたハーケンだが、残る一機に対して対抗できる装備が無いので、どうするか悩む。

そんなハーケンの元に、マリのヒュッケバインが現れ、バレリオンに難なく取り付き、ロシユセイバーと呼ばれる刀身を重力波で形成する非実体剣でコックピット辺りに突き刺し、乗っているパイロットを殺して無力化した。

『ヒュー、俺が苦勞したデカ物をあつさりと…お嬢さん、あんた何者だ？』

苦勞して撃破したバレリオンを、難なく撃破したマリを見たハーケンは、何所で操縦を覚えたのか、それと何者であるかを通信で問うてくる。

「別に。ただ説明書読んでやっただけ」

『説明書を読んでね…俺もその位できるつもりだが、あんたのようには出来ねえよ…』

説明書を読んでやっただけだと答えるマリに対し、その答えにハーケンは人間離れしている彼女を技量差に驚きを隠せないでいる。

そんな彼の事を気にせず、マリは多数の護衛機と共に前に出て来る数隻の陸上戦艦に向かう。

無数の火砲が火を噴き、マリが駆るヒュッケバインに飛んでくるが、彼女は驚くことなくこの雨のような砲火を軽やかに避け、手近な距離に居るリオンに向けてビームライフルを撃ち込む。これを見て回避行動を取るリオンのパイロットであったが、放たれたビームはそこに吸い込まれるように当たり、その機体に乗っているパイロットは機体と共に運命を共にする。

マリは先読み射撃を行ったのだ。と、言うより敵機の動きは全てマリに見えている。同盟軍のパイロット達は、マリにとつて的でないのだ。幾ら高性能な機体へ乗り込もうと、彼らがエースのような技量を持たなければ、一瞬の内に彼女が持つ死神の鎌で命を狩り取られる

「何それ。連邦と同じじゃん」

少し連邦の敵方である同盟軍に期待していたマリだが、連邦軍と似たようなパイロットの質に、落胆して目に映る敵機に向けてビームを撃ち込んで撃墜する。

もうシューティングゲームに出て来る雑魚敵のようで、マリの視界に入った瞬間に

ビームを撃ち込まれて火達磨となつて荒野の上に落下して落ちる。

呆れるほどに、連邦も同盟のパイロット達も、マリにとつて的同然でつまらない相手なのだ。

『撃ち落とせ！ 来るぞ!!』

彼女のヒュツケバインが地上を走るリオンの陸戦型であるランドリオンを踏み台にして破壊してから空中高く飛躍すれば、陸上戦艦の艦長の叫び声が通信機より聞こえて来る。

陸上戦艦の乗員たちは艦長の声に合わせて、ハリネズミのように対空砲を無茶苦茶に撃つて弾幕を張る。だが、これもマリには見えているようで、弾幕の隙間を掻い潜りながら一気に陸上戦艦の艦橋まで接近する。

ビームライフルの銃口を向けた時、艦橋の風防ガラス越しより見えるクルーたちが、我先へと逃げ出そうとする瞬間が見えた。これからビームを撃ち込まれて蒸発する異星人たちの姿が見える。

並の人間なら多数の命を奪つたという実感を受け、衝撃を受ける物だが、マリはこれよりも残虐な行為を幾度かした経験があり、これより蒸発させる異星人たちの将兵達に對し、なんの同情も抱くことなくビームを撃ち込むトリガーを引いた。ビームが放たれた瞬間、カメラに見えていた異星人の将兵達は一瞬の内で蒸発し、艦橋そのものは巻き

起こった爆発で消し飛んだ。

「つまんない。っ!？」

陸上戦艦を無力化してから、背後よりガーリオンと呼ばれるリオンの指揮官専用型が現れ、手持ちの携帯火器でマリのヒュッケバインを撃とうとしたが、携帯火器の砲口を向けた瞬間に彼女は背後より迫る敵機に気付き、ビームライフルを背後に居る敵機へ向けて放ち、敵が撃つ前に撃墜する。

恐ろしい反射神経であり、ビームを自機の胴体に撃ち込まれたパイロットは、何が起こったのか分からぬまま炎上する機体と共に運命を共にして爆散した。

一隻の陸上戦艦を無力化したマリであるが、敵はまだまだ居り、損害に気にせず闇雲に数の多さに任せて突っ込んで来る。

「ちよつと多いわね。ブーメラン使おつと」

ヴァンのダンやハーケンのゲシュペンスト、弾幕を張りながら前進するツアイトも奮闘しているが、敵の数は衰えることない。

そればかりか、襲撃の知らせを前線基地にでも報告したのか、同盟軍の勢力圏内がある方向から増援が次々とやって来る。早いところ、同盟軍の転移装置に取り付いて、何処かの世界へ逃げた方が良いだろう。

そう考えるマリは、今は進路上の邪魔になる敵を片付けることに専念し、機体の背中

に付いてある扇形のパーツを幾つか射出させる。それが引力に惹かれるが如く円盤を形成した。

マリはその円盤を操作するコンソールを動かし、敵の集団に円盤を向かわす。

円盤は速度を上げ、やがて周りの敵機を切り裂くほどの速さとなり、周囲の敵を切り裂きながら周囲の敵を破壊して行く。陸上戦艦も同様であり、艦橋に突っ込んで中の者達を熱で蒸発させれば、艦内中を暴れ回って撃沈する。

十数機の敵機を落とせば、ブーメランのように機体の元へ戻り、再び扇状に戻って背中の専用ユニットの元へ戻る。この攻撃により同盟軍は更に混乱し、統制が乱れ始めた。

『艦長、敵が混乱しています！ 今がチャンスですぞ！』

『OK、この隙に一気に目的地へタツチダウンだ！』

リーとハーケンの通信が聞こえれば、敵が大勢を立て直す前に、一気に突入して目的地である同盟軍の大型の転移装置を目指す。それは門に近く、異世界からかなり大型な物を容易にこの世界へ送り込むことが出来る程の大きさだ。ツアイトも余裕で入ることが出来る程の面積がある。そこに入り、転送装置を動かせば、ルリが行ったとされる世界へ行くことが出来るだろう。

このチャンスを逃さず、一行は混乱する同盟軍を押し退けながら前進した。

『こちらツアイト、クロスゲートに取り付きました!』

混乱した敵部隊を押し退けながら、ようやくの所でツアイトがクロスゲートへ取り付くことに成功する。

取り付いたツアイトから、ミカルの通信が全員に聞こえるように入ってくる。

『よし、リンダと僕が制御装置を動かし、ルリの行く先を調べる。君たちはその間に敵を食い止めてくれ!』

『OK、アシエンを援護に回す! 行けるな!』

『了解でさ、艦長』

『よし、行け! お客さんたちは俺たちで対処する!』

ミカルの通信の後に、ハーケンは助手席に居るアシエンを援護に回すと皆に聞こえるように通信で告げた。冗談交じりの会話が交わされた後から、ハーケンのゲシュペンストからアシエンが飛び出て、クロスゲートの制御装置のある部屋へと、全力疾走で向かって行く。ミカルとリンダがクロスゲートの制御装置に続く通路へと突入すれば、内部を守る警備兵たちが凄まじい銃撃を浴びせて来る。

暫し銃撃で足止めを食っていたが、アシエンが到着して内部に居る警備兵たちを攻撃すれば、一瞬の内に片が付く。彼女に殴られたと思われる警備兵が、窓を突き破って外へ吹き飛ばされたのが見えた。アシエンは完全なる戦闘型アンドロイドのようだ。

だが、クロスゲートに取り付いても、敵は何が何でも取り戻そうと、更に増援部隊を送り、数に物を言わせて押し寄せて来る。

『おい、幾ら倒してもキリがねえぞ!』

『あいつ等、必死だな。そんなに取られたことを根に持つてんのか?』

ヴァンが幾ら倒してもキリが無いと文句を言えば、ハーケンはこれ程の大部隊を送り込む理由を、二度もクロスゲートを自分等のような者達に奪われると言う雪辱が嫌なのかと勝手に考察する。

ハーケンの言った通りなのだが、他の答えを考える程の余裕は無く、敵は大挙して押し寄せて来る。

「なんでブラックホールとか持つてないのかな、こいつ」

『それは危ないからじゃないの?』

マリはヒュツケバインに本来搭載されているはずのブラックホールエンジンが搭載されていないことに腹を立てたが、リンダがその理由が危ないと言う簡単な理由であるのではないかと告げる。

確かにそれが搭載されている状態でヒュツケバインが破壊でもされたら、マリはブラックホールにより、ハーケンたち諸共消滅してしまうだろう。押し寄せて来る敵の大群を排除していれば、同盟軍の背後で戦鬪らしく物が行われているのが見えた。どうや



ら第三勢力が参戦してきたようだ。その知らせが直ぐにリーから全員に告げられた。

『艦長、大変です！　こんな時に I S A の連中が追つて来ました!!』

『何っ!?　畜生、こんな時にかよ!』

やつて来たのは、彼が駆るゲシユペンストの元の所有している I S A のようだ。

クロスゲートを取り戻そうと躍起になる同盟軍を排除しつつ、I S A の同じ連邦兵よりも良く訓練されたパイロット達が乗る P T 群が三隻の巡洋艦と共に向かって来た。

中には A T や M S も居り、少々型が古いが、前の世界で散々な醜態を晒した連邦兵とは嘘のような動きをして、連邦兵と同レベルな技量の同盟軍のパイロット達が駆るリオンシリーズを潰しながら向かって来る。

クロスゲートに向かう前に、連邦軍の哨戒任務に就いている陸上戦艦を振り切ったが、この際に向かった先は分から無い筈だ。どうやら I S A の勘の良い指揮官が、自分たちの目的地を割り出したようだ。

その証拠に、自分等の目的地を割り出したとされる指揮官の降伏勧告を告げる声が聞こえて来る。

『私は I S A の機動部隊隊長、ジャン・テンペラー大佐である!　ハーケン・ブロウニング、君が盗み出した量産型ゲシユペンスト M k - II を大人しく我々に返せば、君らに攻

撃を加えている同盟軍から保護しよう。随分と追い込まれている様子じゃないか。この提案は受けた方が良いと私は思うが?』

テンペラーと言うISAの追跡隊の指揮官より、ゲシュペンストを返すように拡声器で言われるハーケンだが、ここまで来て大人しく盗んだ物を返す彼では無い。

直ぐに周りの戦闘音に負けないくらいの音量で、他にやる事があると云って返すつもりは無いと返答する。

「この地獄から救ってもらえるのはありがたいが、ミスター・テンペラー。それは出来ない相談だぜ。この通り俺は依頼を受けているんでな、ここで降りるわけには行かないんだ。第一、この世界を我が物顔で好き放題やってるあんた等に、従うつもりは無いぜ。それにこいつも返すつもりも無い。あんた等も俺たちの世界から様々な物を盗んでる。お互い様だぜ」

得意げに啖呵を切ったハーケンであるが、その返答は直ぐに来る。

『ジャン! こいつは真正銘の悪党だ! 盗んだ物も返さないクソツタレカウボーイを縛り首にしようぜ!』

『おい、聞こえてるか悪党! このガーザ保安官様がお前を豚箱に入れてやるってんだよ!』

『へい、悪党カウボーイ調子付いていられんのはそこまでだぜ! ご先祖様にインディ

アンが居るナツコ様がご先祖様の仇を取ってやつからな！ 覚悟しろ!!」

『おい、そのキモキザ野郎！ この前の借りを返してやる！ テメエの調子づいた顔面に一発ぶち込んでな!! そこを動かすなよ!!』

返答はむさ苦しい男達による数々の罵声であった。

それを何所で聞いていたのか、アシエンの何のフォローにもならない毒舌の通信が来る。

『気にしなさんな、いつものことなのですよ。キモキザ野郎』

「…アシエン、そいつは何のフォローにもなっていないぜ」

『あつ、失礼。むつつりスケベカウボーイ』

「…」

これには流石のハーケンも気付いたようだ。

そんなことはさておき、ルリの行く先が分かったと言う通信が入って来た。

『報告よ、ルリちゃんの行く先が分かったわ！ 連邦軍の勢力下にある惑星サジタリウスよ!』

「よし、ならはやいところかおう。こつちにおつかない追手が来ることだしな!」

朗報を聞いてか、ハーケンはISAの追手から逃れられるチャンスと捉え、携帯兵装のマシンガンを撃ちながら同じく朗報を聞いて一目散に戻るマリのヒュツケバインと

共に後退した。

それと同時に混乱した同盟軍は、高い統制力を誇るISAを抑えきれなくなったのか、ISAの突撃部隊をハーケンたちの元に送り込んでしまう。

『居たぞ、例の盗人だ!』

『ヒュツケバインも盗んでるぞ!』

『退け! ……は俺がやる!!』

突撃部隊は十二機の量産型ヒュツケバインMk-IIであり、携帯兵装で邪魔なりオンを片付けながらハーケンたちに向かって来る。外見はもう別物であり、唯一ヒュツケバインの物であるとすれば、胴体だけである。

戦闘に邪魔になりそうな物は全て剥ぎ取られ、代わりに実弾やビームパックなどの予備弾倉やミサイルが搭載され、目立たないカラーリングに施されている。実に実戦的なデザインに改造されまくっている。俗に言う量産型ヒュツケバインMk-II ISA仕様だ。

「クソツ、銃身が焼けるまで撃ち尽くしてやるぜ!」

近付いてくる数十機の精鋭のパイロットが乗るヒュツケバインの量産型に対し、ハーケンはゲシユペンストのマシガン銃身の銃身が焼け付くまで弾幕を張りつつ後退する。

『よし、ルリが行った世界に繋がるように調整した! みんな、早くツアイトへ!!』

「OK、勇者ガールパーティの向かった先に、行くとするか！」

銃身が焼けつくすまでマシンガンを撃ち続けた後、通信でミカルが行く先を設定してくれたので、ハーケンはその言葉に甘え、銃身が熱で曲がって使い物にならなくなったマシンガンを捨て、ツアイトへ全力で返そうとした。

だが、ここに来て問題が起こる。

「っ!? なんだ、どうしたんだブラックボーイ? ここに来てエンストか?」

スラストの具合がこの戦闘で受けた数々の被弾によつて調子が悪い様子だ。度々点かなくなったりして、背後より追撃してくるISAの追跡隊に落ち着かれそうになる。

「シット! もう少しだつて所でお縄になるのは嫌だぜ! 頑張つてくれ、ブラックガイ!」

もうガタが来ているゲシュテンペストを応援しつつ、操縦桿を動かしながらツアイトを目指すハーケンであるが、後もう少しで辿り着くと言うところで、ゲシュペンストのバックパックが爆発して地面に叩き付けられた。

「クソツ、おいおい冗談だろ!? ここまで来てこんな目に遭うなんてな! ナンバーテンド、全ク!!」

乗っているハーケンは無事であつたものの、もうゲシュペンストは限界であり、降り

捨てる他なかった。

直ぐにコックピットにある装備品を全て回収してから外へ出て機体から飛び降り、徒歩でツアイトまで向かおうとしたが、直ぐにI S Aの追跡隊に追い付かれてしまう。

「おいおい、そこまで俺の運が無えとな…もう覚悟するしか…」

自分を大きな手で捕まえようとして来るゴークル顔のヒュッケバインを見て、ハーケンは一瞬覚悟したが、まだ彼に捕まっては困る者がその巨人を破壊した。

「おっと、俺に惚れたかな？ マリ・ヴァセレート」

『良いからさっさと乗って。あんたが居なきやあいつ等従わないから』

「それが理由かよ、コールドビューティ。全く、俺の周りにはポイズンガールしか集まらないな」

数機の同型機の量産型をビームやブーメランで牽制しつつ、マリはハーケンを救出した。

それと救出した理由を、ツアイトクルーを従わせる物であると答えれば、期待した答えで無い事に落胆するハーケンが左手に乗ったのを確認してから、ツアイトまで飛び立つ。

「アディオス、エンドレス・フロンティア。それと当分の間はお前らの顔を見ずに済むぜ、ワイルドアーミーズ」

ヒュツケバインの掌の上で、ハーケンはこのエンドレス・フロンティアに暫しの別れを惜しみ、追ってくるISSAの追跡隊に対しては、中指を立ててマリとヴァン、それとツアイトのクルーたちと共にルリが向かった世界へと旅立った。

果たして、向かった先にルリは居るのか？

その答えは、向こうの世界へ行ってみなければわからない。

今までの世界とは違う全く別の世界に対し、どんな物が待ち受けているのかを、そこで何があるのかと言う期待を抱きつつ、彼らは見知らぬ異世界へとクロスゲートを潜って向かった。

## 勇者たちの行方

マリのルリを探して欲しいと言う依頼を受け、異世界よりやって来たバカであるヴァンと共に彼女が向かったとされる世界は、連邦軍の勢力圏内にある人が住めるほどの環境が整った惑星「サジタリウス」であった。

そこはかつて、メガミ人やノンダス人が主権、即ち支配権を巡って血で血を洗う闘争で血に塗れた星であり、メガミ人の大帝国「神聖百合帝国」が滅んでも、ワルキューレによって統治されても尚、男と女の闘争は続けられ、大地は血で赤く染まり果てていた。そんな闘争に終止符を打ったのは、惑星同盟との領土拡大競争に明け暮れる統合連邦だ。

彼らは領土拡大に向けての競争でこの星で殺し合いを続ける男と女を排除したに過ぎないが、現地で争いに怯える者達に取っては解放軍にも見えた。

絶え間ない争いのおかげで進まなかった技術は連邦の統治下によって驚異的な発展を遂げ、今日に至って暮らしは先進国の物と同様になり、大変豊かな暮らしとなっていた。

誰も連邦の植民地になっっていることを気にせず、その豊かで優れた科学力の暮らしを



甘受し、時には笑い合い、時には涙を流し合い、時には殴り合ったりすることもあがるが、男や女だけの種族の争いに怯えることなく比較的平和な時を過ごしている。

もう何も文句は無い見事で豊かな惑星であるが、経済格差が見え隠れしている。だが、誰もそのことを気にせず、この豊かな暮らしに夢中になって誰も見向きなどしなかった。

この後、誰もがやって来るマリヤハーケンたちの所為か、それとも駐屯している連邦軍の宇宙艦隊の所為で、恐怖へと変わることになり誰も気付かなかった。誰もがこの生活がいつまでも続くかと信じて…。

「……ここが、勇者ガールパーティが行った世界か…」

自分の育った世界であるエンドレス・フロンティアからルリ達がかつたとされる世界へ、ゲートを潜り抜けてこの世界に来たハーケンは、辺りを見渡してそこがこの世界であるかどうかを、ツァイトの艦橋より確かめた。

ここに来るまでに、ゲートを守る同盟軍の強固な防衛線を突破し、ISAの追撃を受け、新西暦の世界の愛機の代用品である量産型ゲシユペンストMk-IIを失った。それだけの苦勞をして来たこの世界に来たが、当初から期待していた物よりも違った風景が広がっていた。

「本当に勇者ガール一行はこの世界に来たのか？ 周り中、数年前にお釈迦になった骸ばかりじゃねえか」

ゲートを潜り抜けてマリとハーケンら一行を出迎えた異世界の物とは、連邦軍がこの惑星「サジタリウス」に侵攻した際に破壊された現地軍や連邦軍の兵器類の残骸であった。

あちらこちらに残骸が転がり、星から敵勢力が一掃されても一切の処理が行われた形跡が無い。

戦時中に仕掛けられた地雷やブービートラップを怖がったの事だろうか？

人が出は入りした形跡も、金目の物を目当てに残骸漁りをする野党も見当たらない。周囲が変に静まり返っているのも、まるで墓場のようだ。

「OK、とにかくツアイトの中に籠りつきりじゃ何も始まらない。外へ出ようか」

「ああ、賛成だ。こんな墓場のような場所を目的として彼女たちは来たわけじゃ無さそうだ」

「あなたの言う通りだな。兎に角、人が住んでそうな場所を探そうぜ」

「賛成。ちよつと漁りたいけど、こうも片付けられてないよね…」

ツアイトの艦内に居たところで何も分かりはしないので、ハーケンは外へ出ると環境に居るマリやヴァン、ミカルらに告げた。

これにミカルは賛同の声を上げ、ヴァンもそれに応じる。リンダも同じく同意したが、マリは無返答である。だが、賛成はしているようで、装備を整えてからハーケンらと共に船を降りようとする。

ツアイトから降りる際に、リーらが出迎え、細心の注意を払って行動するように釘を刺す。

「艦長、気を付けてくださいね。ここら一带に人気が無いとすれば、地雷がたんまりと仕掛けられている可能性がありますから」

「心配性だな、副長。なーに、地雷が仕掛けてあつても、このミスターブラックと…」

「このアシエンが居るからバッチグーでございますよ」

「はあ、ちよつと心配ですな」  
そんなリーに対し、ハーケンはアシエンと護衛に付くゲシュペンストに似た全高3mはある護衛のロボットを指差しながら心配はいらないと告げる。

だが、双方とも過去に問題を起こしたこともあるらしく、艦長の身を案じるリーは余計に心配になる。でも、同じクルーでツアイトの最高のメカニックである鞠音（まりおん）博士は違う様子だ。

「そう言えば、ここは連邦軍の支配地域でしたね」

「ああ、確かインフォメーションガイが言ってたが…」

「今度はタイプSを盗んでくださいね。量産型ではオリジナルに出来ませんから。それに他のタイプでは駄目ですからね。どうもタイプSじゃないと駄目なんです。タイプHを忠実に再現するにはね」

「OK、あつたら是非、頂いて行こう。ただし、あればの話だな」

「…盗むの前提なんだ」

この惑星サジタリウスが連邦の支配下と聞いて、鞠音からタイプHに近いゲシユペンスト・タイプSを盗んで来いと言われたので、ハーケンがあつたらと言う条件でそれを承諾した。小さい声でリンダがツツコんだが、マリとミカル、ヴァンは何も言わなかった様子だ。

「OK、エブリワン。さて、地雷に気を付けつつ、人気のある場所へ行こう」

ハーケンが仕切れば、皆はそれに応じ、ツアイトを降りて地雷原である兵器群の墓場の地へと足を着けた。

ここは連邦軍の支配下にある惑星なので、残された乗員達に取って可哀想ではあるが、ツアイトはこの兵器らの墓場に隠しておくことにする。幸い、連邦軍もここを気味悪がってか、それとも地雷が怖いのか、残骸の撤去を拱いている様子だ。それに哨戒機の一機も送ってこない。まさに絶好の隠れ場所だ。

「うっかりしたら、地雷を踏んでジョニーになっちまいそうだ」

「いや、最近の地雷は、踏めば一気にこの世からさようならさ。注意して進まないとな」  
「ちよつと！ 物騒なこと言わないで！」

「そんなにヤバいのか。地雷って」

「ああ、朴念仁が良く踏む地雷並にな」

「へえ、そうか」

細心の注意を払いつつ、ハーケンらはもう地雷原か分からない地へと一步一步、慎重に歩きながら進む。

その際、ハーケンは緊張をほぐすためか、冗談を口にする。だが、ミカルは最近の地雷、特に連邦制の地雷は踏んだ瞬間にこの世から召されることを告げる。これに少し怯えているリンダが叫び、地雷の事を余り知らないヴァンは、改めて地雷の怖さを理解した。

これにアシエンが余計なことを吹き込めば、バカのヴァンはそれをうのみにする。一行は注意しながら進んでいけば、先行しているファントムが地雷を踏んでしまい、爆発に吞まれた。

「伏せろ！」

地雷が爆発した瞬間に、ミカルが叫んでマリ以外の者は全員地面へと伏せる。

「どうやら対人地雷のようだ。君の護衛のロボットは無傷だ」

「対戦車用とか機動兵器用じゃ、一瞬で粉々だったな……」

踏んだ地雷の種類は対人地雷であつたらしく、フアントムの装甲には傷一つ付かず、あるじの指示があるまでそこで待機していた。もし、戦車や機動兵器用の地雷であつたなら、フアントムは粉々に吹き飛んでいることだろう。

それにマリ以外の者達は肝を冷やしつつ、墓場を抜けて人気のある場所へと進む。

「はあ……！ ようやく出られた……！」

「そこ、地雷かもしれないつすよ」

「変な事は言わないの。私が作ったこのマインセンサーに反応は無いから」

緊張しながらあるくこと数十分、一行は地雷原から抜け出すことに成功した。

ようやくの所で出られ、緊張が解されたのか、リンダはその場で仰向けとなる。これにアシエンが軽いノリで冗談を告げたが、リンダは地雷を感知する機器を持ち合わせていたのか、それを見せびらかしながらその手には引つ掛からないと告げる。

「よし、帰り道も同じような歩き方はしたくないからな。念のため、安全なルートをメモしておこう」

また同じように歩きたくはないので、ミカルは安全にツアイトへ戻れるルートをメモに示しておく。

「OK、安全なルートはメモしたようだな。さて、人気のありそうな場所、特に町とか村

とかを探すか」

ミカルがメモを書き終えたと言いで合図を送れば、ハーケンは皆を仕切つて村か街を探すと告げて再びこの広い平野を歩き始める。

墓場から離れても少なからずの残骸が目に入り、更には腐敗した双方の将兵の死体までもあつたが、地雷やトラップが仕掛けられた様子も無く、素通りして街道を探す。歩くこと小一時間ほど、ようやくのところで、一行は整備された街道を見付けることに成功した。直ぐにその道に沿つて、村か町らしき場所へと進む。

「艦長、フアントムが向こう側から車が来ると言つております」

「車？ やべえな、この辺にミスターブラックみたいなナイスガイは居るわけが無い。フアントムを見られたら厄介なことになりそうだ。済まないが、近くに隠れていてくれ」

先行するフアントムが自分等の行く先から車が近付いてくることを報告したので、喋れない彼の代わりにアシエンが告げれば、ハーケンは見られれば確実に問題になるフアントムに何処かへ身を潜めるよう指示を出した。

フアントムはそれに応じて、近くの茂みへとその巨体を隠し、主が良いと言うまでじつと茂みの中で息を潜める。

「OK、この辺に町は無いかと向こう側から来るドライバーに聞いてみるとするか」

「それが良い。僕たちはこの辺の地理には皆無だからな」

向こうから来る車の運転手に、この辺りの地理を聞いてみることにすれば、ミカルはそのハーケンの提案に賛同する。マリはこれに賛同では無いのか、車と運転手が連邦軍の物と分かれれば、即座に射殺できるように腰に隠してある拳銃に手を伸ばす。

車は物の数十分ほどで、ハーケンらが見えるところまで来た。車種はトラックのようであり、連邦の手によって近代化された物では無く、四駆のようであった。

直ぐにハーケンはヒッチハイクで行うジエスチャーを、トラックを運転する男に送り、止めようと試みる。それを見たトラックを運転する男、それも中年の男性は文句でも言い付けてやろうかと思っただのか、一行の近くで車を止め、窓を開けて何用かと問う。

「兄ちゃんら、どうした？ 迷子か？」

「まっ、そんなところさ。所で、この辺に町は何所にあるか教えてくれるかな？ ミスター」

ハーケンの言葉遣いに、少し苛立ちを覚えた男だが、余所者である彼らに文句を言えば言い争いに発展しそうなので、自分が来た方向を指差して走り去ろうとする。

「俺が来た方向からだ。分かったらさっさと行け。俺あ忙しいんだ」

「サンクス、ドライバー。手間を取らせて済まなかつたな」

町へと道を教えたトラックの運転手は忙しいのか、礼を言うハーケンの言葉も聞か



ず、自分の目的地へと走り去った。愛想の無い男を見て、アシエンは一瞬、マリの方へと視線を向けたが、彼女に睨まれたので、視線を前に戻す。

「愛想の無いおっさんでしたな。今度一発プチかましますかい？」

「止せ、バトルジャンキー。余所者にはみんなあなのさ。では、町へと行くとするか」  
アシエンの提案に、ハーケンは却下を立てて、運転手の男が教えてくれた手順に従い、街道に沿って町へと続く方向へと走り出した。それと同時に身を潜めているフアントムにも忘れずに指示を送り、人目を避けて移動するよう指示を出しておく。

そう数十分ほど街道に沿ってあるいていると、自ずと町が目に入った。賑わいは見えないが、少しばかり大きく、それなりの情報は入りそうだ。

「OK、嘘は言っていないようだ。さて、休憩としますかな、エブリワン？」

「賛成。もう二時間以上も歩いてるわ……」

「俺はまだいけるぞ」

「よし、ここは民主主義で行って、酒場辺りで休憩だ」

運転手が嘘を言っていないことを確認すれば、ハーケンは全員にその町で休むかと全員に提案すれば、歩き疲れているリンダはそれに賛同した。ヴァンを除く皆も同意しており、ハーケンは民主主義に則って休息を取る事にし、町へと向かった。尚、フアントムは近くで待機している。

「さて、大衆酒場で疲れを癒すとしますかな」

歩くこと数分ばかり、それほど賑わっていない町へと着けば、近くに酒場などがあるかどうか探し始めた。

「ブロウニング、酒場は案外、近くにあった。だが、僕ら全員は連邦の通貨は持ち合わせていない。どうする？」

「参ったな。何所へ行くにも、連邦後任のマネーが必要か……」

ミカルは直ぐに酒場を見付けたが、生憎と全員がこの惑星、それも連邦政府公認の共通通貨は持ち合わせない。それを聞いてハーケンはどうするのか悩み始めれば、マリの姿が何所にも居ないことに気付いた。

「おい、あのミステリアス・レディは何所へ行った？」

「そこら編でカツアゲでもしとるとでもちやいまつか？」

ハーケンがそのことを口にすれば、マリが近くの人間に金を巻き上げているのではないかとアシエンが言う。

実際、彼らの近くに歩いている連邦軍の二名の憲兵に対し、マリは色仕掛けなどで路地裏に誘い込み、彼らを伸してから財布を拝借して大量の通貨を入手した。

「これがあれば良いんでしょ？」

「おい、そいつは何所から頂戴したんだ？」

戻つて来たマリは、連邦軍の憲兵より巻き上げた紙幣を見せながら問う。これにハーケンらは質問で返し、何所で手に入れたのかを問えば、彼女は路地裏の方を無言で指差す。

「まさかな…」

それでマリが何をしたのか分かり、ハーケンは頭を抱えた。何をしたのかを確認するため、ヴァンが調べに行けば、彼は正確に見たことを一行に報告した。

「路地裏に制服着た二人の男が倒れてる。結構な力で伸ばされたようだな」

「おいおい、カツアゲレディ。まさかやったのはユーか？」

「ええ。でも、お金は入ったでしょ」

ヴァンの報告を聞き、ハーケンはやったのかと再び問えば、マリは包み隠さずに自分がやったことを告げた。

「はあ、取り敢えず、騒ぎになる前に酒場に入るとしよう」

気絶させられた憲兵二人が見つかつて騒ぎになる前に、一行は早々と町の出入り口付近より去つた。歩いて数分程で酒場に着けば、二人組となつて我が物顔で歩く憲兵を気にしつつ、一行は酒場へと入つた。

酒場に入れば、既に数十人ほどの先客が居り、殆どが酒を飲んでいたが、何名かはア

アイスコーヒーを飲んで喉を潤し、雑談を交わしていた。

「昼間から酒を飲んで居る奴は居るが、殆どはコーヒーぐらいだな。それもアイスの」  
「まあ、ここは少し熱いからな。アイスコーヒーかアイステイーぐらいが妥当だろう」

酒場の客が飲んで居る飲料を確認したハーケンが口にすれば、ミカルはアイスの類の物がさほどと告げる。

歩き続けているので、一行は空いている席へと座る。ハーケン、アシエン、ヴァン、ミカルはカウンター席へ座り、マリとリンダは空いているテーブル席へと座って脚を休ませる。

「お客さん方、ご注文は？」

「ミルク……」

「ああ、俺たち四人はアイスコーヒーで頼む。お嬢さんは何にする？」

酒場の店主からの注文に対し、ヴァンが何かを言い出す前に、ハーケンはカウンター席の全員はアイスコーヒー一択で頼む。それとマリとリンダに何を頼むか振り向いてから問う。

「私はアイステイーで」

「ホットテイー一つ」

「ほ、ホットテイー……？ こんなクソ熱い時に……？」

リンダはアイステイーを頼めば、マリはホットテイ、それも普通の熱い紅茶を頼んだ。それを聞いてか、マスターは強面の眉間にしわを寄せ、注文したマリに問い質す。

「それ以外に無し」

「変わったお嬢さんだな。そんな物を熱い時期に頼むの、昔ここを治めてたメガミ人の貴族だけだったよ」

マリが熱い時期に関わらず、紅茶を頼んだ時に、店主はまだこの惑星がメガミ人かノンドラス人によつて統治されている頃のことを思い出し、それを口にした。

「へえ、この惑星は昔メガミ人とかに治められてたのか。マスター、それよりこのお嬢ちゃんは何所かな？」

そのことに感心しながら、ハーケンは懐より写真を取り出す。その写真に写っているのは、ルリが写っている写真だ。マリからもらった物をコピーした物である。それを見た店主は、首を傾げながら思い出そうとする。

「可愛い嬢ちゃんだね。あんた、なんでも屋か何かか？」

「まあ、そんな所さ。で、何所に行つたのか分かるか？」

「さあね、こつちに来たのは来たが、パフェとか頼んで来てから喫茶店に行けと言つて保護者共も一緒にここから追つ払つたよ」

「なにい!? 追つ払つた!」

店主は写真を見て、ルリのことを思い出せば、自分の店から追っ払ったと答えた。それを聞いたハーケンは驚き、思わず声を上げる。

「ああ、うちは酒場だ。お子様が来るような所じゃない。だから追っ払った。行つた先は喫茶店で聞けば何とかなるだろう」

「おいおい、メイデン相手に失礼じゃないのかい。相手は子供なんだぜ？　もう少し言いつ方を優しくしてだな」

「うちは喫茶店とかファミレスとかじゃないんだ。それに看板にも書いてある。未成年はお断りだとな！　あんたがそれ以上、文句を付けるなら、この店から出てつて貰うが？」

「そいつは勘弁だ。確かにこのアダルトテイな店で、パフェを頼むのはあの勇者ガール、いや、プリティガールくらいなもんだろう。兎に角、有益な情報がありがとよ。マスター」  
「なーに、あんた等のような余所者に早く出てつて貰いたいだけさ。ほれ、注文の品だ。おい、サム！　向こうのテーブルにアイステイとレモンティーの注文したお客さんに持つていけ！」

喫茶店に行けば、ルリ達の行く先が分かると教えてくれた店主に、ハーケンはお礼を言えば、彼は四人が注文したアイスコーヒーを出して礼は要らないと答えた。それとバイトの男に、アイステイとレモンティーを注文したマリとリンダの座る席へ持つてい

けと命じる。

これに応じてバイトの男は、少し不機嫌な態度で二人の女性の元へ注文した品を持っていき、二つをテーブルの上に置いてから去る。

「なんか態度悪いわね」

去つて行くバイトの店員に、リンダもこれに不機嫌となったが、気にしては問題になりかねないので、ここは敢えて見逃しておく。

「あの、俺はミルク……」

「アホブラック、？ここ？は乗りだ。お前もノーマルで飲め」

「そうだ、？ここ？はこれに限る」

「……すみません」

一方で、カウンター席に座る四名のうち、ヴァンが他の飲料も頼もうかとしたが、アシエンらに止められる。ここでヴァンは、自分の飲み方が彼らや店主の気に触れる物であると分かり、敬語で謝罪し始める。

テーブルに四つのアイスコーヒーの入ったガラスコップが置かれれば、四人は同時にコップを取り、一気にそれを飲み干してテーブルに音を立てながらコップを置く。

「何やってんの、あいつ等？」

「……」

この四人の謎の飲み方を、リンダは呆れた様子で見ているが、マリは優雅にティータイムに行っていた。

「さて、喫茶店へと向かうとしようか」

休息が終わった所で、一行は再びルリに行く先を探す旅を再開した。尚、マリが一番飲み終えるのが遅かったらしく、実に二十分以上は待たなくてはならなかった様子だ。

酒場を追い出されたルリ一行は、喫茶店へと向かったのは確かであるが、ここは町なので、喫茶店の一つや二つ、それも五つ以上はあるだろう。だが、彼女らは集団で行動しているので、派手に目立つはずだ。聞き込みを行って、何所の喫茶店に入ったのかを確かめる。

「OK、向こうの喫茶店だな。サンクス、レディ。エブリワン、聞こえるか？ 勇者ガール一行が行ったのは……」

聞き込みを続けること数十分、通りすがりの女性に、ルリ一行が何所の喫茶店に行つたのかの確認が取れば、ハーケンは一同に通信機で知らせた。それを聞いてか、一同はその喫茶店前に集合する。

それから何所に行つたのかを確認したのは、ここでは普通の服装しているミカルであった。物の数分程で、彼は店から出て来てルリ達が何所へ行つたのかを知らせた。

「ルリ達の行き先が分かった。ここから南東にあるモスバサシテイらしい」



「そうか。モスバサね…そこまでの電車代はあるようだな。OK、モスバサシティまでエクスプレスでレッツゴウだ！」

ミカルよりルリ達の行く先が分かれば、ハーケンは一行を仕切つてモスバサシティ行きの特急のある駅へと向かった。

「早くしなくちゃ…！」

それから数時間後、彼らの目指すモスバサシティにて、一人の少女がこの巨大で高度な都市より逃げ出そうとしていた。

彼女は慌てた様子で、財布より取り出したカードを使って切符売り場で街を出られる列車の切符を買おうとしたが、保護者の計らいなのか、カードは使用不能であった。

「げっ、カードまで差し押さえちゃったの!? もう、小銭、小銭…！」

保護者の計らいでカードが使えないことに更に慌てたのか、彼女は小銭を取り出し、それでモスバサシティを出る列車の切符を買い込み、改札口を通つてホームへと出て、追手を気にしながら電車が来るのを待つ。

「追つてきてないわね…？」

そこで数秒後に止まった電車へと乗り込もうと、降りる客が皆降りたのを見計らつて、近くのドアへと駆け込む。

「キヤツ!? わっ!? ご、ごめんなさい!!」

「おいおい、お嬢さん、駆け込み乗車は厳禁だぜ?」

慌てて駆け込んだってしまった所為か、そこに居た女性の胸に顔をぶつけてしまう。

その場に居た女性は、もうこの街へと着いていたマリであった。その証拠に近くにはハーケンらが居たが、ミカルとリンダはツアイトに戻ったのか、何所にも姿は無い。ぶつかつた少女が慌てて謝罪すれば、近くに居るハーケンは、駆け込み乗車は危険だから止めるよう注意する。胸に飛び込んで来た少女に対してマリは、満更でもない様子で頭を下げる彼女の頭を撫でる。

「あ、あの…これは…?」

「ラツキーガール、素直に喜べ。お前はゲスの意味での90クラスの物にぶつかつた」

「は、はあ…?」

自分の頭を撫でるマリに対し、少女は何なのかと問うが、彼女は黙つたままぶつかつた部分を撫でるだけだ。それを見ていたアシエンは、マリの大きな胸にぶつかつた少女に対し、幸運だと思えと告げる。無論、そう言われた少女は混乱する。

そんな少女に対し、この場の空気を交えるためか、ハーケンは今乗っている列車で合っているかどうか問い始めた。

「所で、聞きたいんだが…街の奥まで続く路線はここかな? ただいま定刻通りに目的

地に到着しているのだが、この辺の地理には詳しくないんで余り良く分からないのだがね」

「あ、あの…」

「なんだい、お嬢さん？」

「…この路線、逆ですよ。それに、この列車は町を出る方向に向かって走ってますし…」

「…」

少女からの問いに、自分等が逆方向の列車に乗っていると分かったハーケンは、帽子を深く被って自分の表情を隠す。

「どうやらマリ達は、ハーケンの当てずっぽうで、危うく街から出そうになったようだ。」

この少女に質問しなければ、間違いなくモスバサシティから出てしまっただろう。

## 武神装攻ダイゼンガー第六話 卑劣なる連邦軍

ハーケンらが惑星サジタリウスのモスバシティでルリたち勇者一行を探す中、サジタリウス近海にて、ワルキューレの艦隊が集結し、惑星の衛星軌道上のステーションに集まる連邦軍艦隊に奇襲を仕掛けようとしていた。

ワルキューレの戦闘艦艇群より少し離れた距離に居る異様な風貌を持つ戦艦を旗艦とする七隻以上の艦隊が、他の十数隻の戦闘艦艇と共に本隊から光信号を受ける。

他に離れた方向には、派手に真つ青な塗装を施した艦艇群と、真つ赤な塗装を施している艦艇が見える。

青いのがアガサと呼ばれる騎士団の保有する宇宙艦隊で、赤いのがメイソンと呼ばれる騎士団の宇宙艦隊だ。彼らは双方で空間騎兵隊と呼ばれている。

『貴殿らゾンボルト戦闘集団は、第19装甲猟兵師団と共に側面より攻撃されたし。武運を祈るだそうです』

「そろそろ奇襲攻撃の時間か。ゼンガー・ゾンボルト、ダイゼンガーで参るー！」

母艦のハンガーにて、宇宙空間で生命を保護する動き易い宇宙服であるパイロットスーツを身に着けず、艦長より上の階級である白髪の武人のような容姿を持つ男、ゼン

ガー・ゾンボルトは、愛機である鎧武者のような外見を持ち、巨大な刀を持った超大型戦闘ロボを駆って、母艦より発艦した。

ゼンガーらはワルキューレに取っては新参者であり、古参連中であるアガサ騎士団やメイソン騎士団から目の敵にされているのだ。

そのまま先に発艦した指揮下のワルキューレの機動兵器、可変戦闘機の編隊を率いてこちらに気付かない連邦軍艦隊の側面へと回る。

「奇襲は俺の得意とする物ではないが…」

『なら、我が装甲猟兵師団が代わりに先陣を切ってやろうか？ 俺のVF-11Cのアーマードバック装備なら、単機で一個連隊ほど機動兵器をやれる』

『ふつ、言うな。このダイナミック・ゼネラル・ガーディアンは、単機で機動兵器二個師団を粉碎できるぞ。特に私のアウセンザイダーは、有意に一個軍団以上と渡り合う事も出来る』

前方でこちらに横つ腹を見せる連邦軍の艦艇を見て、正々堂々とした戦闘を得意とするゼンガーは、あまり得意では無い奇襲を任されてどう奇襲して良いか頭を悩ます。

そんな頭を悩ます彼のダイゼンガーのもとへ、冷やかしのか、それとも緊張をほぐすためか、装甲猟兵が通信を掛けて来る。

自分の機体なら一個連隊相当の敵部隊に大打撃を与えると豪語する猟兵に対し、ゼン

ガーの盟友であり、戦友でもあるレーツェル・ファインシュメツカーが愛機の自慢を始めた。

『けつ、そんな馬鹿デカいロボットなんぞ、直ぐに見付かってハチの巢だぜ』

「その為に、このダイナミック・ゼネラル・ガーディアンの装甲は厚いのだ。我らの戦い、良く見ておくが良い」

自慢するレーツェルに腹を立てたのか、猟兵は二名の乗る50m台の超大型ロボットを、直ぐに見付かつて的になると馬鹿にすれば、ゼンガーは挑発に乗らず、その為に装甲は厚めとなっていると告げてから、自分等の戦いを見たことが無い猟兵たちに対し、自分等の戦いを見ておけとも告げる。

『おい、先にアガサの連中がぶつ放したぞ！ それにメイソンの連中も攻撃してる！  
なんて奴らだ！』

『我ら新参者に対しての対抗心か？ 馬鹿々々しい。そのプライドで作戦を台無しにするつもりか？』

先に戦端を開いた、否、真正面より馬鹿正直に強襲を仕掛けたのは、ゼンガーらの新参者を目の敵にするアガサ騎士団の艦隊であった。これに続き、敵であるメイソン騎士団も攻撃し始める。

「つまらん理由だ。これで奇襲から強襲へと変わったな。このダイゼンガーが先陣を切

る。続け!!」

『承知!』

奇襲作戦を強襲作戦へと変えたアガサ騎士団とメイソン騎士団に対し、少し動揺を覚える装甲猟兵師団をゼンガーはまとめ上げ、自分が先陣を切つて慌てて迎撃態勢を取る連邦軍駐屯艦隊へと突撃する。

この後にレーツェルのアウセンザイターが続けば、他の猟兵たちが駆るバルキリー部隊も続く。

『敵襲、敵襲う!!』

『なんでワルキューレの部隊がここに居るんだ!?!』

『艦隊戦用意! 早くしろ!!』

通信機より強襲を受けた連邦軍の慌てた無線連絡が、次から次へと聞こえて来る。

どうやらこの世界に居る連邦軍艦隊は、ここを安全な後方地帯だと思っており、敵が出て来るなど思ってもみなかったようだ。

蒼と赤の騎士団の艦隊の砲撃を受け、次々と撃沈して行く連邦軍の艦艇が見える。

対応力の速い艦長は、即座に迎撃準備を整え、艦載機を出して対応に当たっていたが、運悪く前方側に居た艦艇は餌食となる。

逆に対応力の遅い艦長が乗る艦艇は右往左往するばかりで、騎士団のビーム砲や対艦

ミサイルで沈められた。

「ほう、強襲にしては中々やる。では、実際に我らの力、あ奴らにも見せてやろう」

奇襲が失敗しながらも、強襲攻撃を得意とするアガサ、メイソンの双方の騎士団は、連邦軍艦隊を圧倒していた。

それを見ていたゼンガーは彼らに認めさせようと思つてか、自分のダイゼンガーに向けてビーム砲を撃つてくる連邦軍の戦艦に向かう。

『う、うわあああ！　だ、ダイゼンガーだ!!』

『う、撃て！　近付けるな!!』

「ルチウム海戦の影響か。ならば、死にたくなければ我の前に立ち塞がるな!!」

向かつて来るゼンガーのダイゼンガーを見た連邦軍の将兵達は、その姿を見て恐れおのき始めた。

彼は統合連邦軍と戦うのは、これが初めてでは無い。

最初の戦闘はルチウムと呼ばれるスペース・コロニー群がある宙域にて、今乗つているダイゼンガーで盟友と共に出撃し、相手方であった第67連邦宇宙軍艦隊の将兵達を恐怖に陥れた。

この第67宇宙艦隊は、艦艇一万五千隻と言う保有する膨大な数の全ての艦艇をかき集め、四百隻相当のワルクューレの宇宙艦隊へ総攻撃を仕掛けたが、ゼンガーやレー



ツエルを初めとするクロガネ隊と呼ばれる異世界より来た部隊によって撃退されて敗走した。

何故、異世界のゼンガー達がワルキューレに属しているかは、短い理由であるが、彼らの世界が連邦の敵方である惑星同盟軍によって自分等の世界が侵略を受けたからだ。

強大な力を持つ彼らもこの侵攻に抵抗はしたが、惑星同盟よりも危険な敵を倒してから日が浅かったがため、長くは持たず、何度も守って来た世界を救って来た彼らも、撤退するしか無く、こうして他の仲間たちと共にワルキューレに亡命してきた訳だ。

何度も世界を救って来た強力な彼等を、連邦や同盟の巨大な勢力の同時攻撃によって戦力が減っているワルキューレは無条件で受け入れ、強力な戦力を手に入れた。

これによりゼンガーらは、前の世界で経験したDC戦争以上に連邦軍に恐れられることとなる。

「ぬんー！」

艦載機の機動兵器の攻撃を物ともせず、ゼンガーは声を上げて戦艦に一太刀を浴びせる。

ダイゼンガーの持つ斬艦刀ざんかんとうと呼ばれる巨大な実体剣は、例えば戦艦であろうと、小惑星であろうとほぼ全ての物を斬れる代物なのだ。

連邦軍の大量に建造されている戦艦など、一振りですべて切断されてしまう。

『せ、戦艦が一振りで…!?!』

『や、やっぱりあのダイゼンガーだ…!』

戦艦が一振りですつに割られたのを見て、恐怖した艦載機のパイロット達は戦意を損失し始めた。

そんな彼らにとどめを刺すように、ゼンガーは連邦軍に対して投降勧告を行う。

「連邦軍の将兵らに告げる！ この参式斬艦刀の錆となりたくなければ、即時撤退するか投降せよ！ 私はゼンガー・ゾンボルト、悪を断つ剣なり！ よって無用な殺生はせぬ！ 即時退くか、降伏するか、それとも蛮勇となつて我に挑むか！ その三択の中からどちらかを選べ！」

投降勧告を行うゼンガーであつたが、これが逆に連邦軍の戦意を回復させてしまったようだ。

『だ、誰がお前のような奴に投降するか!』

『そんなデカ物、一斉射撃を加えれば宇宙の塵だぜ!』

『捌殺しにしてやる!!』

彼らにもプライドがあるようで、罵声を浴びせた後に、ダイゼンガーに凄まじい砲火で浴びせると言う返答を行う。

「愚かな…蚤の如く、我がダイゼンガーに挑むか…! ならば良し！ 全力で貴様らの

相手をする！ 覚悟せよ!!」

蚤の如く挑んで来る連邦宇宙艦隊の艦艇や艦載機らに対し、ゼンガーは全力を持って突っ込む。雨のような砲火に晒されるが、ダイゼンガーの装甲には、対艦ビーム砲も対艦ミサイルも全く通じず、ただ弾かれるばかりである。

「怯むな！ 距離が近づけば貫通できるはずだ！ もつと撃ちまくれ!!」

戦艦の一艦長からの怒号が無線機より聞こえて来るが、雨のような砲撃を弾きながら迫るダイゼンガーの前では無意味であり、近付かれて前方の駆逐艦や巡洋艦などが斬艦刀の錆となる。

「斬艦刀・雷光斬り!」

数隻の艦艇と数十機の艦載機を斬艦刀で全て斬り捨てた後、ゼンガーはダイゼンガーが持つ斬艦刀を巨大な両刃の剣に変え、逃げようとする空母と随伴しているフリゲート艦諸共叩き斬る。刀身の長さは尋常ではないので、一瞬にして空母は二隻の護衛艦と共に切り裂かれて宇宙の藻屑となった。

「ダイナミック・ナックル!」

三隻の軍艦を宇宙の藻屑にした後、近付いて近接戦闘武器でダイゼンガーに挑む機動兵器群に対し、ゼンガーは空いている左手の拳で技名を叫びながら薙ぎ払う。

全長が50m台のロボットの振り払いを受ければ、20m級の人型機動兵器などバラ

バラになる事は確實だ。振り払いによつてバラバラとなつた機体からは、パイロット達  
が宇宙へと投げ出されていく。恐ろしく惨い光景であるが、ゼンガーは慣れているの  
か、空かさず向かつて来る敵を排除し続ける。

「ゼネラル・ブラスター!!」

次に振り向いた方向に見える無数の敵部隊に対し、ゼンガーは技名を叫びつつ、ダイ  
ゼンガー唯一の射撃兵装であるゼネラル・ブラスターを発射した。

それは両肩部の外装の下にある超大型レンズより発射される。レンズから熱光線が  
発射されれば、射程範囲に居た連邦軍機や艦艇は高熱の光線で溶かされてドロドロとな  
る。

『ひつ、ひいいい!! ば、化け物だああ!!』

ダイゼンガーの力を出し過ぎた故か、その圧倒的な力を見た連邦兵たちは戦意を損失  
し、パニックに陥り始めた。

『お、おい…俺たち必要じゃないんじゃないか?』

同じくダイゼンガーの圧倒的な強さを見ていたワルキューレのバルキリーを駆る獵  
兵たちも、ゼンガーのダイゼンガーと、レーツェルのアウセンザイターの二機だけで良  
いのではないかと言いはじめた。

『クソ、これ以上、新参者なんかに取りられてたまるか!』

だが、ゼンガーやレーツェルに手柄を取られていくことを良く思わない者も居たようだ。

襲い掛かる連邦軍機を艦艇共々潰して行く二機の巨大ロボットに焦りを覚えてか、猟兵が乗る黒いVF-11Cサンダーボルトは前に出て、全身に装備されたアーマードパックにある無数のミサイルを発射して、動揺して動きが悪い連邦軍機を撃墜する。

『へっへっ！ どうだ！ 一個大隊はやったぜ!!』

ミサイルを撃ち尽くしたアーマーを排出し、大型のガンポッドを持って次なる戦闘に備えたが、逆襲に來た無数の連邦軍機による集中砲火を受け、その猟兵の乗っていたVF-11Cは自分が仕留めた連邦軍機と同様の運命を辿る。

「馬鹿者め、つまらん対抗心を抱くからだ」

自分とレーツェンに対抗意識を抱いて死んだ猟兵を叱りつつ、ゼンガーはこちらに主砲を浴びせて来る重巡洋艦を斬艦刀で切り裂いた。切り裂かれた重巡洋艦は二つに別れ、火を噴きながら左右に別れる中、ゼンガーのダイゼンガーの背後より、強力な対艦ミサイルを装備した大型攻撃機が迫り、そのミサイルを撃ち込もうとしていた。

だが、大型攻撃機はゼンガーの戦友が駆るアウセンザイターの両手に握られた大型銃、ランツェ・カノーネによって撃墜される。

『ゼンガー、背中ががら空きだぞ!』

「すまん、レーツェル。背後の警戒が疎かになっていた！俺もまだまだだな！」

『その為に私が居る！では、行くか！』

「承知！引き続き、敵戦力の掃討を続ける！」

二機のダイナミック・ゼネラル・ガーディアンが揃ったのち、それを駆る二人は無数に群がる敵機や敵艦の掃討を続けた。

「はあ、結局乗れなかったじゃない…」

「誰かさんの所為でな」

「…」

宇宙でかつて共に戦ったゼンガーが、この惑星を支配下に置く連邦軍と交戦しているとはいざ知らず、ハーケンらは街を出てしまいう直前で出会った少女の知らせで、街から出られずに済んだ。

この列車だと感で良い当てたハーケンは、間違った恥ずかしさの余り、帽子を深く被つてその表情を隠していたが、自分の家族とされるアシエンには見透かされたのか、毒舌を掛けられている。

「で、街の奥にある列車は、反対側のホームかな、お嬢さん？」

「ええ、そうよ。反対側。あんた達が何所に行くか知んないけど、ちゃんと行先とか確認

しなきや駄目よ。でも、こんなに迷う辺り、この辺に詳しくなさそうだけど、あんた達はこの辺初めて？」

何事も無かったように立ち直ったハーケンは、自分等を救ってくれた少女に街の奥不覚へと行く路線が反対側のホームなのかを問う。

その問いに少女はそれが合っていると答えれば、この街の住人では無く、余所者であるのかと問い返した。

「ああ、さつきも言った通り、俺たちはこの辺の住人じゃないんでね。こうして危うく街を出ちまう所だったのさ。サンキューだぜ、親切ガール」

「まあ、この辺の路線、複雑過ぎだから。取り敢えず、案内したいんだけど…」

問い返しに律儀に答えるハーケンは、街から出てしまうとところを救ってくれた少女に礼を言う。これに少女は、モスバサシテイの路線は複雑であり、間違ってしまうのは仕方のない事と答えてから、急いでいるので案内は出来ないと告げようとしたが、見付かってしまったようだ。

「ん、なんだ？」

「ああ、見付かった…」

『見付けたぞ。さあ、勘弁して貰おうか！』

周囲に子犬の泣き声が聞こえれば、次にテレビドラマの台詞が次々と拡声器より聞こ

えて来る。

駅に居る者達は、これを不思議そうに聞いていたが、少女だけは理解していた様子だ。直ぐにハーケンは、少女の顔付きを見て何かを知っていると見抜き、これが何なのかを問う。

「親切ガール、これが何か知っている様子だな？ 聞かせて貰おうかな？」

「ええ、ああ…うん。これはね、私の世話をしているAIの仕業なの」

「AI…随分と人騒がせなAIだ。このアンドロイド…」

この騒ぎを起こしているのはAIだと少女が答えれば、アシエンは直ぐに止めてやろうと、自分がアンドロイドと明かそうとした時、無用な騒ぎを避けたいマリは、アシエンの口を塞いだ。

「で、君はそのAIから逃れようとしたのかい？ そいつは、家出じゃないかな？」

「ええ、そうよ。家出って言うのは、合ってるちゃ、合ってるけど、私、連邦軍に入隊するの。機動兵器のパイロットになるのよ」

「…連邦軍か」

街を出て家出をするのかと問うハーケンに対し、少女はそのような物であると答え、連邦軍に入隊してパイロットになるとも答えた。

連邦軍に入隊すると聞いて、ハーケンは顔を暗くした。自分等の世界、エンドレス・フ



ロンティアを敵方の同盟軍と共に荒らし回る連邦軍に入ると言ったからだ。

連邦のパイロットとなった目前の少女を殺める可能性があるためか、はたまた压制側の将兵にしたくはないがためか、ハーケン連邦軍に入隊するのは止めておけと告げる。

「入隊するのは止めておけ。表で言っている事と、違う事をやらされるかもしれないぞ」「表で言っていると違うこと…? 何言ってるの、政府が嘘をつくわけがないでしょ?」

連邦軍が市民に対して嘘を言っていると告げるハーケンであるが、連邦政府が発しているプロパガンダに毒された少女は、それを信じようとしなない。

そんな彼女に対し、次の言葉を掛けようとするハーケンであったが、嘘と暴力でまみれた世界で育つて来たヴァンが割って入って来た。

「あのな、お前が連邦とか言う連中が嘘を言っていないと駄々を捏ねてるが、大人つて奴は嘘吐きなんだよ。何故なら本当の事を言えば、やらないから嘘をつくんだ。自分で自分等はかつこよくて良い奴で、あいつ等は悪い奴でかつこわるいだって言って嘘をつく。分かったか?」

「…そんなわけ無いじゃない…政府が嘘をつくなんて…」

「済まないが、これが現実だ。そのブラックタキシードの言う通り、大人は嘘吐きさ。駄々こねガールが入隊するのは止めないが、思ったのと違う事をやらされても知ら

ねえからな。考え直すなら、今の内だぜ？」

割って入って来たヴァンが、バカなのに珍しい事を言ったことに驚いたハーケンだが、呆気にとられることなく、未だ政府が嘘をつかないと信じている少女に入隊した後に、非人道的兼自分がやりたくも無い任務をやらされても知らないと告げ、連邦軍に入隊するのを思い止まらせようとする。

そんな時に、近くの公衆電話より彼女の親らしき声が受話器より聞こえて来た。

『シディー、そこに居ることは分かっているのよ！ この電話に出なさい！』

「ほら、駄々こねガール。君のママが呼んでるぞ。声を聴かせて安心させてやりな」  
「…分かったわよ」

声の主はシディーと呼ばれる少女の母親であり、直ぐに電話に出るように受話器から叫んでいた。

それを聞いていたハーケンは、シディーに母親を安心させるように言えば、彼女はそれに応じて声が聞こえている公衆電話機の前に立ち、受話器を持ってテレビ電話の画面を見つめる。画面には、シディーの母親らしき人物が映っており、その表情は怒っているように見えたが、見付かった彼女の無事であることが分かって安心しているようにも見えた。

だが、シディーはそんな母親の気も知らず、口論を始めてしまう。

「ママ、どうしていつも邪魔するの！　これから連邦軍のパイロットになって、エースになろうかと思ったのに！」

『連邦軍のパイロットになる？　馬鹿なことは言わないの！　母さん連邦軍の士官学校に入つて、除隊してから大学に入つて卒業した学者になつたけど、従軍時代には碌でもないことをやらされた物よ。そして今でも政府は嘘をついて、多くの若者をまるで消耗品のように前線に送り込んで殺してるわ。機動兵器のパイロットも同様よ。父さんのように貴女を軍の無謀な作戦で無駄死にさせたくないわ。直ぐに家に帰りなさい！』

「もう、研究ばっかして偉そうなこと言わないでよ！　自分だけ……」

この口論はハーケンらにも聞こえており、彼は心配そうにそれを見ていた。

「はあ、ありやあ、親の愛情が足りないようだな……」

「艦長は、私と親父で愛情たっぷり育てましたからダイジヨVですなのよ」

見てられない歯痒さを覚えるハーケンが今の気持ちを口にすれば、アシエンは、彼がシディーのようにああならなかったのは、自分とシヨーンのおかげであると無表情で自慢しながら左手でVの字を描くジェスチャーを取った。

口論は続いていたが、上空に空を切り裂くような音が鳴り響き、何か巨大な物が近くに落下する大きな物音が聞こえた。

「っ……っ……っ……!?!」

「な、何よ…!?!」

「周囲に多数の反応! これは機動兵器でやんすよ!」

音が鳴った方向を一同が見れば、アシエンは周囲、それも駅周辺だけでなく街全体に機動兵器の反応を感じたので、直ぐにハーケンらに報告した。

それを証明する形で、即座に駅の屋根が崩れて連邦軍全体で運用されているRGM-89ジエガンJ型がホーム内に落ちて来た。墜落してホームへ落ちたジエガンの胴体にあるコックピットのハッチが開き、そこから負傷した連邦軍のパイロットが転げ落ちる。

落ちて来た連邦軍の人型兵器を見て、駅内に居る人々は動揺を覚えて騒ぎ始める。

「な、なんで連邦軍のMSが!?!」

「まさか、街中で戦闘が!?!」

「空に居るのは、ワルキューレの戦闘機なんかじゃないか!?!」

巨大な物が墜落した影響で空いた天井の穴から見える外の様子を見ようと、人々が一齐に見始める。

「おいおい、まさか戦闘ってことは無いだろうな」

これにハーケンは、ホームに居る人々と同じ心境で、外で何か起こっているのか確かめるべく、双眼鏡を懐から出し、外の様子を確かめる。外で行われているのは、彼の思っ

た最悪の予想であつた。つまり、街の上空で戦闘が行われているのだ。

「クソツ、ナンバーテンだ！ アシェンの言つた通り、機動兵器がごまんと居て、街の上で平気でドンパチやつてるぞ！ やっぱ連邦は嘔吐きだな！」

「嘘つ、連邦軍がそんなことをするわけ……」

未だに連邦軍を正義だと信じているシディーは、それを信じようとしなかつたが、映像通信に映る母親はそれが間違いであると改めて告げる。

『そのナルシストの男の言う通り、連邦政府は嘔吐きよ！ 普通なら敵が攻めて来たと分かつた途端に避難命令なんか出すはずだけど、サジタリウスの指揮官は馬鹿みたいだわ。避難警報を出してない！ とにかく、貴方はこの街を出なさい！ もうじき、ここは馬鹿な指揮官の所為で戦場になるわ！』

連邦政府が信用できないことを告げてから、母は娘であるシディーにもうじき戦場となる街を出るように告げたが、彼女は聞く耳を持たなかつた。

「嫌よ！ ママを置いて私だけ逃げるなんて出来ないわ！ 私が迎えに行くから、そこでじつとしてね！」

『ば、バカ！ 戦場になるつて言つたでしょ!? 早く街を出て非難しなさい！ エイジャに直ぐにこの付近で動ける車を見付けて貰つて……』

「そうやってまたエイジャに頼み込む！ もう良いわ、私一人でも助けに行く！」

『何を馬鹿なことを！ 待って！ ちよつ…』

シディーは母を置いて一人で街を出るのは後ろめたさを感じたのか、助けに行くと  
言ったのだ。

もう直ぐ戰場、もはや戰場となりつつある街の中央にある自分の元へ迎えに行くと言  
う娘に対し、母は必死で説得を試みるも、シディーは受話器を捨てて駅の入りに、我  
先にと殺到する人混みの中へと無謀に向かう。

それから静止の声を映像越しに掛ける母親であったが、落ちて来た連邦軍機の残骸で  
その公衆電話は下敷きとなって破壊された。

「おい、待て！ ワガママガール！ 一人で行くのは、うわっ!？」

「バカ！ 勝手に決めて向かってんじや、うお!？」

一人、母親を助けようと既に戰場となつている街の中央に向かうシディーを止めよう  
と、ハーケンとヴァンは腕を掴もうとしたが、逃げ惑う人々に妨げられ、彼女を見失つ  
てしまった。

「たく、次から次へと…で、どうするんだい？ この街はもうバトルシティになる直前  
だ。逃げるか？ それともあの無謀ガールと同じく街の中央へ行つて勇者ガールの痕  
跡を探すか？」

シディーを見失つたハーケンは、依頼者であるマリに今後どうするかを問う。そんな

苛立ちが混じっている彼の問いに対し、彼女は即座に返答を出した。

「予定は変わらない。例えば戦闘が起きてようとも、この街を管理してるAIのデータセンターに行くわ」

「OK、その意気だ。とことん付き合うぜ。例え火の中、水の中ってな！」

「艦長が言うならあきちも続くでせうろう。ついでにバカ娘を引つ叩くために」

「置いてきぼりにされたら餓死しそうだな。取り敢えず、あんたについてくぜ」

マリの期待通りの返答に、ハーケン是指を鳴らしながらシディーと同じく街の中央に向かう彼女の後へ付いて行った。アシエンもヴァンもこれに随行し、外へ出ようと殺到する人々を押し退けながら進んだ。

「えーと、近くに無人タクシー…って、無いか」

母親、ハーケン、ヴァンの静止の声も聞かず、我武者羅に外へ飛び出したシディーは、街が戦場になったと知って恐慌状態の街の様子を見て、無人タクシーが動いている訳が無いと一人ツツコミをして落ち込んだ。

持っている形態を出し、無人タクシーでも呼び込もうとしたが、どれも反応は無い。

それを裏付けるように、大勢の人々が無人タクシーに乗って街へ出ようとしているのが見える。

「やっぱりね、みんな街を出ようと、屋根の上に乗ってまで……やっぱり歩くしかないって事ね」

街の中央に行くには、歩いて行くしかない。早い移動手段が無い彼女に取って、これが最良の決断であった。

反対側に走る車と言えば、軍用車両ばかりであり、荷台に大勢の兵員を乗せたトラックや屋根の上に数名ほどを乗せている装甲兵員輸送車も見えたが、自分のような少女をとても乗せてくれるとは思えない雰囲気を出している。

仕方なく、彼女は歩いて街の中央へと向かう事にする。

「ママは確か、この街の地下で発見されたノンダス人か、メガミ人だかの遺跡の調査をしていたわね。この距離からすると……うわあ……めっちゃ遠い……」

携帯を操作し、現在地点から母親の居る遺跡までの距離まで計算すれば、目を背けたくなるような答えが画面に表示された。だが、うだうだと言ってはいられない。自分の肉親に危機が迫っているのだ。

そう決心した彼女は、徒歩で街の中央の地下にある遺跡まで移動した。

「おい、あれ。パトカーじゃねえか？」

「なんで警察がこんな所に？ ポリ公共は中央に居るんじゃないのか？」

徒歩での移動を開始して数十分後、街から離れようとする一団の声がシディーの耳に



入つて来た。

それに反応し、彼らの見る方向へ視線を向ければ、数台のパトカーが護衛の二機の警察仕様のスコープドックと共に、自分と同じ反対側から来ているのが見えた。

シディーの近くまで来れば、その警察の車列は止まり、パトカーからライフルや短機関銃、散弾銃などを持った複数の武装警官が居り、周りを包囲する。警察仕様のATも同様にパトカーの周りに人が集まらないよう、避難民たちを威嚇する。

一台のパトカーより、身なりの良い制服を着た肥満体系の中年男が護衛と共に居り、彼らを引き連れてシディーの元へ来る。

「やあ、シディーちゃん。こんな所へお散歩ですか？」

「あ、あんた、モスバサシテイの警察署長の……！」

「如何にも。わしはモスバサシテイ警察署長のキズラーだ。さて、早速だが来てもらいましようかな。軍より貴女を避難させると言われておりますので」

「ちよ、ちよつと！ 離しなさいよ！ 嘔吐きの軍隊が私に何のようなの!？」

その男はこの街の警察署長であるキズラーであり、彼の評判を知っているシディーは嫌悪感に満ちた目付きで睨みつけた。だが、か弱い少女の睨みなんぞに怯む男では無く、彼女の腕を掴んで無理やりにも連れて行こうとしたが、シディーは抵抗してその太い腕を振り払った。

シディーが抵抗したのは、キズラーの評判はモスバサシテイ全体で最悪と知つての事だ。

この男に目を付けられれば、何をされるか知つた物じや無い。街を出ようとする避難民たちも、周囲に居る彼の手下と化している武装警官に撃ち殺されたくないばかりか、助けに行こうともしなかつた。

「おやおや、それは公務執行妨害に当たりますよ？ さて、これ以上ここに居ては、ワールドキャット空軍の戦闘機の機銃掃射の的にされかねない。直ぐに来てもらいましうかな」

「ちよ、何を！ 離しなさいって！ 訴えるわよ!!」

「フッフ、訴える？ 裁判を起こすとても？ 無駄だ、このわしに盾突く弁護士など居ない。連邦のどの領域に居る弁護士でもな。さあ、大人しく…」

「おい、止めろよおっさん。その子、嫌がつてんじゃねえか」

「な、何者だ!？」

抵抗する彼女に対し、キズラーは二名の部下に両手を掴ませて無理やりにも街の郊外にある連邦軍の基地まで連れて行こうとしたが、この場に居ない部下以外の男の声が聞こえた。キズラーと手下たちが向けた視線に居た男は、黒いテンガロハットに黒いタキシードを身に着けた奇抜な格好で、銃に似た蛮刀を右腰に身に着けた男、ヴァンがそ

ここに居た。

「てめえ、俺たちや警官だぜえ？ 逆らつたらどうなるか分かつてんだろうなア!」

一人の柄の悪い武装警官が、シディーを助けようとするヴァンに向かつてガンを飛ばし、手にしている自動小銃の銃口を向ける。だが、銃口を向けるだけでヴァンが止まるはずが無く、彼はその警官を押し退け、シディーを助けるためにキズラーの元へ向かう。

「お、おい!! テメエ! 何ガン無視してんだコラあ!」

自分を押して退けて署長まで近付いたヴァンに対し、警官は手にしている自動小銃を撃とうとしたが、彼が目にも止まらぬ速さで抜いた蛮刀で自分が手にしている銃の銃身を切り落される。

「ひっ、ヒイイイ!? な、なんじやこりやああ!?」

警官は衝撃の余り、尻餅をついて絶叫した。それを見ていたキズラーを含む悪徳警官らは、少しは怯えた物の、何とか気を取り直してヴァンに手にしている銃の銃口を向けて威嚇する。

「な、何者だ!」

「俺か? 俺は夜明けのヴァンだ。取り敢えずその子を離せ。その子は向こうに居る母ちゃんを助けに行くんだ」

キズラーに問われたヴァンは、蛮刀を持ちながら名を告げ、シディーを離すように告げる。

「向こうだと？ 街の中央に行こうと言うのか？ 馬鹿め、今ごろ街の中央は敵が上陸して連邦軍と交戦している！ そんな場所に行こうと言うのか？ ふん、貴様らどうかしているぞ！」

中央を指差しながら言ったヴァンに対し、キズラーは馬鹿にしたように罵声を浴びせる。

確かに、既に戦場となつている中央側に行こうなどと、気がどうかしていると疑つても仕方ない事だが、シディーは唯一の肉親である母親を助けに行くのだ。娘を思う母親にとつては、大変危険で馬鹿な行動であるが、別に間違つたことでは無い。

そんなシディーの思いを馬鹿にするキズラーに対し、追い付いたとされるハーケンが、ヴァンに銃口を向ける数名の警官の銃を、素早い早撃ちで弾いてから反論してくる。「こ、今度は何だ!？」

「おいおい、危険を冒してまで母親を助けに行く？ それが何所の笑い所があるんだい？ 悪徳ポリスチーフ」

短機関銃を持つ警官が振り向いた方向には、回転式の拳銃、それもコルトSAAと呼ばれるアメリカの西部劇を代表するリボルバーを右手に握つたハーケンがそこに居た。

新たに現れた更なる強敵に、キズラーと悪徳警官たちは戦意を失い始めるが、自分等には強力な装備があるので、何を恐れるかと気を持ち直して銃口を向ける。今度は殺すつもりだろう。銃を手にする警官らの目に、躊躇いの気持ちは無かった。

即座にハーケンやヴァンに向けて銃の引き金が引かれたが、ヴァンの方は身体改造で培った身体能力で弾丸を避け、ハーケンの方は駆け付けて来たアシエンによつて全て防がれる。

「お、おお…!?!」

「じゅ、銃弾を防いだ…!?!」

ハーケンの前に現れ、彼に当たる弾だけを全て受け止めたアシエンは、受け止めたであろう全ての弾丸を離して下へ落とし、自分等に銃口を向ける警官らに拳を向けて構える。

「艦長、このマツポー共はどうします?」

「派手にやつて良いぜ。ただし、死なない程度にな」

「了解でヤンス。ここは一気にコードD T Dでケリをつけるでさうろう」

アシエンに悪徳警官らの対処を問われたハーケンは、派手にやつて良いと答えた。それに応じ、アシエンは自分に取つての必殺技とも言えるコードD T Dを発動する。

「な、なんだ?! 急に女の全身から何故か煙が!?!」

一人が叫んだ時に、アシエンのコードD T Dは発動していた。

全身にある排出口から一気に全身を覆い尽くす程の煙が噴き出す。この直後に、彼女のタイトの部分が消え始め、露出度が高めとなる。それと同時に無表情だった顔付きが一変、無邪気な笑顔に変わり、髪型も額を露わにしている物へと変わる。

「コードD T D発動！ 僕にお任せ！」

口調どころか性格も変わった彼女は、元気よく無邪気な子供のようにそう言ってから、自分の姿を見て驚いている悪徳警官たちの方へ目にも止まらぬ速さで迫る。

「な、何をしている!? 撃て。撃て…」

驚きの余り固まっている警官らに対し、隊長らしき警官が直ぐに我に変えそうと叫んだが、その直後にアシエンの拳を受けて吹き飛ばされる。それから物の数秒後に、彼ら近くに居た警官たちは瞬きする間に拳や蹴りを打ち込まれて全滅した。

「くっ、クソっ！ 脳天吹っ飛ばしてやらアーツ!!」

気絶せずに済んだ警官の一人は、腰のホルスターに治めてある警察用の回転式拳銃を抜き、アシエンに向けて放った。撃ち込んだ拳銃弾はアシエンの頭に命中し、その反動で彼女は顔を上に向ける。

「へへへ、どうだ…！」

自分がやってやったと思う警官であったが、コードD T Dを発動しているアシエンに

それが通用するはずが無かった。なんと彼女は、放たれた弾丸を歯で挟んで防ぎ切ったのだ。

「ぺっ！ まっずーい！」

平然となく無邪気な笑みを消すことなく、アシエンは噛んだ弾丸を撃った本人の方へ吐いて返した。

「ぎにゃアアア!!？」

吐き出した弾丸は撃った時と同じ速度となり、悪徳警官の引き金を握る人差し指を破壊する。自分の指を銃弾で碎かれた警官は、凄まじい痛覚で絶叫してのた打ち回り始める。

「ゴエ!？」

「ブガッ!？」

ヴァンに立ち向かった警官らと言えば、アシエンが銃弾を吐き返した時点で全滅していた。

『な、なんて奴らだ…!』

圧倒的に強い二人を見たATのパイロットも同様に覚えたが、この機体が持つ装備から勝てると思ひ、警察仕様のヘビィライフルをアシエンに向けて撃とうとする。だが、照準を合わせる前に、アシエンに一瞬の内に近付かれ、強力なパンチを胴体に打ち込ま

れる。

「アシエンパンチ！」

その拳は大男、否、ゴリラのパンチよりも強力であり、言ってみれば巨大な鉄塊を打ち込まれたような感じだ。そんな拳を受けたスコープドックの装甲は拉げ、道路の上に倒れる。

「ひっ、ヒイイイ…いやだああ!!」

残る一機のATのパイロットは、戦意を損失したのか機体ごとこの場から逃げようとしたが、アシエンが逃すはずも無く、一気に近付かれて強力で仕込まれた散弾を受けて撃破される。

「アシエンキック！ ご免あそばせ」

無邪気にそう言つてATを撃破するアシエンであったが、パイロットは殺してはいない。破壊されたATより、パイロットが一目散に悲鳴を上げながら飛び出し、逃げ出し始める。

「うわあ…」

「し、死にたくねえ！」

「お、オイコラ！ ま、待て！ ひええ!?!」

二人の圧倒的な強さを見て今度こそ完全に戦意を損失した警官たちは、キズラーを置



いてパトカーに乗って逃げ出し始めた。これにキズラーは、まだ動いてないパトカーに駆け込み、直ぐに出すように運転手に告げる。

「お、おい！ 早く出せ！ 殺される!!」

「無理」

「うへっ!!? な、なんだお前は!!」

だが、運転手は返答しない。何故なら、運転席にマリが座っているからだ。彼女の姿を見たキズラーはマリもまたおかしな能力を使うと思つて怯えて車外に飛び出し、逃げようとする。

しかし、マリが逃がすはずも無く、彼の前に立つて見下した目付きで睨みつつ、近くのパトカーを殴り付けた。マリによって殴られたパトカーは一瞬にして廃車と化し、反対車線をわけ隔てるガードレールに当たる。それを間近で見っていたキズラーは、余りの衝撃と恐怖の余り、泡を吹いて失神する。

「おっと、これは怒らせない方が良さそうだな。で、大丈夫かい、親孝行ガール?」

「え? ええ…私は大丈夫…大丈夫…」

マリの思わぬ腕力の強さを同じく見ていたハーケンは、我を忘れて呆然としていたシディーを介抱する。差し出された手に、シディーは我を取り戻し、自力で立ち上がって首位で気絶している警官たちと、失神して泡を吹いているキズラー、ATの残骸を見て

何が起こったのかを問う。

「い、一体何が…?」

「お前、覚えてないのか? ここで警官共がな…」

「ブラツクタキシード、そいつは無理も無いと思うぜ。なんたつて、想像もつかないことが起きたからな。まあ、俺たちは慣れ過ぎてなんとも無いがな」

「まあ、そうだな…んなこと、出来る奴なんてそうそうに居ねえし…」

ここで自分たちがしてきたことをまるで見ていなかっただのか、問い始めるシディーに対し、ヴァンは何も覚えてないのかと言ったが、こんな芸当を映画か漫画、アニメで見ることが無い少女に、信じろと言うのが無理なので、彼女の心境に配慮するハーケンは余り責めないように告げる。

それに応じてか、ヴァンもシディーを心配して問い詰めないことにした。

「さて、お嬢ちゃん。本当に街の奥まで行きますかね? 今の状況とあの状況でも」

マリが出したジュースを飲み、気分を落ち着かせているシディーに、ハーケンは多数の落下傘が降下して行くモスバサシティを指差しながらそれでも助けに行くのかと問う。

その問いは彼女に取って愚問であったのか、街が戦場になっていようとも、母を助けに行く決心は揺るがず、シディーは行くとハーケンに答えた。

「行くわ。例えどんな地獄だろうともね。だって私の唯一の肉親だもの」

「OK、中々のガッツの持ち主だ。気に入ったぜ。それじゃあ、君の目的地までエスコートしようか。ちょうど俺たちの目的地もそこなんでね」

「え、なんであんた達まで……?」

身の危険が迫っても決心が揺るがないシディーを気に入ったハーケンは気に入った、目的地までついて行くと言えば、彼女は無関係な自分に対してついて行くのかを問う。

「そいつは愚問さ。目的地が同じで合って、それに、久しぶりにそう言う目をした人間に会えたからさ」

シディーからの問いに対し、ハーケンは新西暦の世界に居た者達と同じ熱い眼差しをしているからだと答えた。

一方で、マリとハーケンらがこれから向かうモスバサシティでは、街の被害を最小限に食い留めようとする攻め側のワルキューレと、街の被害を顧みずに敵を追い出そうとする連邦軍との激しい攻防戦が行われていた。

戦況は完全にワルキューレが押ししており、連邦軍が完全に後手に回って苦戦していた。それどころか、連邦軍はまだ市民が残っているにも関わらず、被害も気にせずに入った敵機へ向けて強力な武器を使用している。これには市民も連邦に反感を持つ

のは仕方の無い事だった。

更にそればかりでは無い。なんと市民よりも先に逃げ出す部隊まで出始めたのだ。

「っ！ お、おい！ お前ら！ なんて勝手に後退してんだ？」

UNSC陸軍に属する戦車中隊は、随伴歩兵を引き連れて防衛線の構築へと向かおうとしたが、その進路方向より後退中の連邦地上軍の61式戦車部隊が来た。

中隊長からの問いに対し、同盟軍の戦車部隊隊長は怖くなって逃げたと、キューボラから大声で返答する。

「敵が圧倒的すぎるんだ！ 俺たちじゃ敵わねえ！ それに敵の空挺兵があちこちに居る！ このままじゃ殺されちゃうよ!!」

「ふざけんな、臆病者！ 今すぐ戻って戦え!!」

「こんな状況でやれるか!」

「黙れこの玉無しが！ テメエの股については飾りか!」

それを聞いて怒鳴り散らすUNSCの中隊長であったが、向こうも言い返して来たので口論となった。

この隙に、周囲のビルに入り込んだワルキューレの空挺兵、それも女性兵士で使用しているのは第二次世界大戦下の英陸軍の空挺兵装備の小隊規模の人数が配置を完了し、手にしている対戦車擲弾発射器PIATやM1バズーカ無反動砲を構え、立ち止まって

いる戦車部隊に向けて浴びせる。

エンジンがある後部に向かって攻撃なので、即座に61式戦車は火達磨となったが、スコープオン戦車はこの攻撃を想定して設計されていたのか、殆ど無傷であった。

「敵が潜んでいるぞ！ 各員、迎撃準備！ 前の連中は放っておけ!!」

味方が襲われているにも関わらず、UNSCの将兵らは戦意を損失して逃げ出す彼らを放置し、自分等だけでも前に進んでやろうかと思つてビルに身を潜めるワルキューレの空挺兵等に銃撃を浴びせた。

だが、ワルキューレの空挺部隊は歩兵だけでなく、保有する機動兵器の一つ、戦術歩行戦闘機、略して戦術機も降下させていたのだ。その戦術機がUNSCの戦車中隊の背後から二機ほど現れ、18mの巨体に握られた本来装備していない小口径の突撃砲を浴びせる。

「後方より、ワイルドキャットのMS擬き！」

「まさか、こんな奴らまでも…!? 一体、この防空網はどうなっているんだ！」

みすみすと街に敵部隊、それも機動兵器すらも降下させたモスバサシテイの防空網の薄さに驚きつつ、燃え盛る戦車と共にその中隊長は運命を共にした。それだけでなく、空においても装備の質では勝る連邦軍も、醜態を極めていた。

『この大型のジェガンタイプじゃ、大気圏内での可変戦闘機の相手は無理だ!』

街の上空において、敵空挺部隊を輸送する輸送機の攻撃に向かった旅団規模のジエガンと小型MSのヘビーガン、Gキャノン、ジエムズガンの混成部隊は、ワルキューレのバルキリー部隊、それも一個大隊程度の相手に苦戦していた。

火力と装甲なら勝る連邦軍MSだが、機動力においては遥かにバルキリーが上回っていた。撃ったビームが直ぐに避けられ、そのお返しにガンポッドやミサイルを胴体に撃ち込まれて撃墜される。仲間の仇を取ろうとも、呆気なく返り討ちにされるばかりだ。

『ひ、広がるな！ 固まれ！ 固まってお互いの死角を…』

指示を出す指揮官機であったが、止まっている所へミサイルを撃ち込まれて撃墜された。これにより、部隊はパニックを起こし、次々と各個撃破されていく。

『な、なんでこんな連中なんかに!? うわあ!』

プロパガンダに影響され、ワルキューレは対したことが無い相手だと思っていたジエムズガンのパイロットであったが、自分だけ地上に降りて建物に身を隠そうとした時に、あろうことか、地上支援機のレシプロ機であるタイフーン戦闘爆撃機型に対地ロケット弾を足に撃ち込まれて立て無くされた。

「お、俺の機体をやったのは、か、化石の航空機だって言うのかよ!」

自分の機体をやったのは、レシプロ機だと分かった途端に焦りを見せたパイロットであったが、この後にコックピットを何者かにジャックされてこじ開けられ、そこに手榴

弾を投げ込まれて殺害された。

彼を殺害したのは、ワルキューレの擲弾兵部隊だ。手にはコックピットを開ける際に使用したとされる端末機が握られている。敵のMSの無力化を確認した部隊長は、手にしているHK G36A突撃銃を抱えつつ、ハンドサインで移動すると指示を出し、部下たちを引き連れて作戦の手順に則っての行動を取る。

何もレシプロ機にやられたのはMSばかりでない。質と火力で勝るはずの連邦軍の車両でさえ、たかが第二次世界大戦下に開発された英戦車部隊に圧倒されているのだ。

沿岸に着水した宇宙戦闘艇のようなデザインの強襲揚陸艦より降りて来るクロムウエル巡航戦車やM4シャーマン・ファイヤフライを相手にしていた連邦軍の戦車部隊が、勢いに押されて退却を始めている。

「お、おい、何所に行くんだ!」

歩兵を置いて真先に逃げる戦車を見た歩兵部隊も、直ぐに逃げようとその場を離れたが、上陸してきた敵戦車部隊や歩兵部隊の銃撃を背中から受けてしまう。

連邦軍の歩兵部隊に銃撃を浴びせたワルキューレの歩兵部隊もまた、第二次世界大戦時に英軍や英連邦内で使用されていた装備であった。一瞬の内で、自分等が化石と馬鹿にする装備の敵部隊によって連邦軍の防衛部隊は壊滅状態に陥る。

もはや、そのプロパガンダに映る強力な軍隊である連邦軍の姿は何所にも無かつ

た。

『モスバサシテイの皆さま、ご安心ください！ ただいま連邦軍と市民軍が上陸して来た敵を押し返しています！ 市民の皆様は落ち着いて避難誘導に従い、最寄りのシェルターか、避難列車にお乗りください』

戦闘の最中、未だに連邦軍のプロパガンダが放送されていたが、その放送に誰も耳を傾けず、ただ我先にと街から逃げ出そうとするか、生前を掛けて押し寄せる敵と戦うかのどちらかの人間しか居なかつた。



## 母を求めて三千メートル

シディーの母を迎えに行くべく、既に銃声が響き渡る戦場となつてゐる街の奥、それも旧市街地へと進むハーケンたちの前に、街から出ようとする避難民たちが立ち塞がつた。

荷物を屋根の上までに積んだ車も渋滞を起こしており、向こうから先は進め無さそうだ。反対側を行こうとしても、そこは軍用車両が占拠して行けそうにも無い。

「こりゃあ、八方ふさがりつて奴だな」

「参つたわ……反対側は軍隊の車両で溢れてるし……どうすれば良いかしら？」

目前に見える人の波を見て、ハーケンは帽子を押さえながら悩めば、シディーはどうすればよいか、回転の速い頭を動かしてどのようにすべきか考える。

そんな一行の元へ、この危機迫つた状況に似つかない活気に満ちた声が聞こえて来た。

「ケバブは、ケバブはいらんかね？ 今ならタダだよー！ ほら、おいしいケバブだよー！」

その声ができる方向へ視線を向ければ、肥満体系の巨漢の男が、料金も取らずに自分の店で作ったケバブをただで避難民に提供していた。

そんな時と同じく、シディーの携帯に母親からの連絡が入ってくる。

『シディー、大丈夫？』

「えっ？ ママ？ どうして？」

突然の母からの連絡に、少しばかり動揺するシディーであったが、何とか落ち着いて電話に出る。

『あなたが心配だからエイジャを使って位置を割り出したのよ。それより、貴方の携帯の反応が街の中央に向かっているみたいだけど…どういう事？』

「そ、それは…」

「そりゃあ、おたくの娘さんが、貴女を助けに行こうと思ってのことです。ね、アーキオロジイママ」

エイジャと呼ばれるAIを駆使し、場所を割り出したシディーの母は、街を出ると言ったのに、なんで街に入っているのかを問い質す。

それを聞かれて答えに悩むシディーの代わりに、ハーケンが携帯を掠め取り、その目的を母親に明かした。

『その声、あんたは駅のナルシストの…？』で、私を助けに行く？ 冗談はお良しなさ

い。敵は遺跡の上の辺りにごまんと居るのよ。それに連邦軍が見境無しに彼女らを追い払おうと街を吹き飛ばす勢いで戦闘してる。そんな危ない場所に、娘は行かせられないわ。悪いけど、娘を連れて街を出て』

娘の代わりに理由を明かすハーケンに対し、母はきつぱりと娘を連れて街へ出ると告げる。

そんな娘の生命を大事とする母に、ハーケンは食い下がらずに反論する。

「OK、マダム。あんたの娘を大事に思う気持ちは痛いほど分かる。かつて俺にも似たような経験があつてだが、娘さんは大変肝が据わつたお子さんだ。それに、例え何が待ち受けて言おうとも進む覚悟がある。そこで冷静を保つて、自分の事は良いから逃げろと言うあんたに似ている。それに、俺たちは先ほど、あんたの娘さんをさらおうとした悪徳ポリス共を撃退した」

『悪徳ポリス？ キズラーの事ね。あのクソツタレに一泡吹かせたことに感謝してるけど、仕返しに来るわよ、絶対に』

「望むところさ。諦めさせるまで、何度でも叩き潰してやるとも。それと、この携帯は壊した方が良いですか、マダム？」

反論しながらシディーをさらおうとしたキズラーの武装警官たちを撃退したことも明かせば、彼女の母はまた奴が狙つてくると返した。それにハーケンは望むところと答

え、追跡されるのを避けるため、携帯を壊した方が良いか問う。

『ええ、壊してちょうだい。それなら追跡がある程度避けられるはずよ。それと、監視カメラがある区画はなるべく避けて。あいつは警察署長だから、監視カメラも使ってくるはずよ』

「OK、マダム。携帯は壊しておく。それと、最後に貴方の娘さんに代わろう。ガッツ・ガール。この携帯に取って最後のママとの連絡だ。声を聴かせて安心させてやりな」

シデイーの母が追跡を避ける手順を説明すれば、ハーケンが携帯を壊す前に、元の持ち主である彼女に携帯を返し、母と話すように告げる。

「あつ、ママ…本当に大丈夫?」

『それはこっちの台詞よ。変な連中なんかを友達にして、友達は選べたっていつも言うてるでしょ?』

「ええ、これが終わったら、今の連中なんかと縁を切って、真つ当な友達を選ぶから…だから、死なないでね」

『そつちこそ。じゃあ、しつかりとその変なお友達に守って、私の所まで来るのよ』

「うん、約束だからね。ママも無事で…」

『大丈夫、私との連絡は公衆電話ですれば良いから。無事に私の前で姿を見せてね』

「分かった。じゃあ、切るね…」

そうこの携帯における母親との連絡を済ませた後、その携帯を地面に叩き付けて破壊した。

「決心はついたかい？」

「ええ、何が何でもママの所へ行くわ」

「気に入ったぞ、マザコン娘。このアシエンが、全ての障壁、後、あのクセエマツポー署長共々も打ち砕く。お前は安心してその金髪巨乳ロリコンの身体に抱き着いておけ」

「そ、それ…約束って意味なの…？」

「そうだ。何か問題か？ 反抗期家出不良少女」

「いや…別に…」

ハーケンからの問いに、シディーは決心がついたと返せば、アシエンは彼女なりにか、毒舌を交えつつ全ての身を守ることを誓う。

これにシディーは苦笑いを浮かべつつ、ハーケンの顔を見て何とかしてくれと言うサインを送るが、彼は「それが自分等のやり方だ」と返すだけなので、一々アシエンの毒舌に気にしないことにする。

「さて、腹ごしらえのついでに情報収集と参るか」

「腹ごしらえ？ まさか、あのお肉屋さんの所に？」

肉屋の店主の元で腹を満たしつつ、情報収集をしようハーケンに対し、シディー

はあの巨漢の店主の元へ向かうのかと告げる。それにハーケンが律儀に答え、欠伸をしているヴァンにケバブが好きかどうか問う。

「ああ、そうだ。ブラックタキシード、あんたはケバブが好きかい？」

「あん？ 俺は、なんでも良いが……」

「OK、決まりだ。さあ、あのブッチャー・ファットマンの元へ行つて、ケバブを貰うかね」

そう言つて決めれば、ハーケンたちは巨漢の肉屋の元へと向かう。

向かっている最中、彼の店前に避難中であろう車が強引に入り込み、クラクションを鳴らしながら無理やり進もうとしたが、その巨漢の肉屋に車の前部のボンネットを破壊され、悲鳴を上げながら車を捨てて逃げ去つた。車すら簡単に素手で破壊する巨漢の店主の元へ、ハーケンらは近寄り、サンドイッチにしたケバブ、それもケバブサンドを受け取ろうと近づく。

「へい、ブッチャーマン。ケバブを三つほど頂けないかい？」

「ああ、良いとも。今なら無料だ。さあ、ソースはどっちにするかな？ それとそのままかい？ 香辛料やヨーグルトで味付けしているから、塩をぶつかけただけの物も良いぞ」

ハーケンが気軽に話しかければ、肉屋の巨漢はパンを二枚ほど用意し、一枚の上にケ

バブとサラダを乗せれば、ソースはどれにするか問う。

「そうだな、俺はチリソースで頼む。ブラックタキシード、あんたはどれにする？」

「俺は調味料をありったけだ」

「調味料をありったけ？　おいおい、黒尽くめの旦那。そいつはケバブに対しての冒瀆じゃないのかい？　まあ、今となつちや怒った所で意味が無いな。で、そちらのお嬢さん方は？　サラダも付いてヘルシーだ。油っ気もなるべく少ないよ。脂っこいのを好むなら、串焼きでも良いがね」

ハーケンがチリソース付きを頼み、ヴァンがどのソースにするかと問われれば、いつも通り彼は調味料をありったけと答えた。

これにケバブを冒瀆していると顔を強張らせる巨漢の店主であったが、今の状況で目の奇抜な格好の男を叩き伏せても意味が無いため、注文に応じて店にある自分が選び抜いた調味料を掛け始めた。その間に、マリやシディー、アシエンにどの食べ方にするかを問う。

「私は串焼きだ。肉屋」

「私は遠慮しとくわ。今の状態で食べる気しないし…」

「…いらない」

アシエンは串焼きを食べると言ったが、マリとシディーは断った。これに店主も少し

落胆しながらも、注文された品の調理を進める。

「おっと、その緑の髪の美人さんは頼んだのに。御二方は食べないのか。残念だな、もう最後かもしれないのに」

「家出不良少女、肉を食べなきゃ、あそこの金髪雌豚みたいにムチムチになれんぞ」

「煩いわね！ 私は脂っこい物はあまり好きじゃないの！」

「フン、後で後悔してもしらんがな」

残念がる店主の気持ちにでも反応したのか、アシエンは肉を食べなきゃマリのようなプロポーションにはなれないとシディーに告げれば、彼女は顔を赤くして怒り出す。そんな様子にハーケンは微笑みつつ、ケバブを調理している店主に監視カメラを避けられるルートが何所にあるのかを問う。

「取り込み中、失礼するぞ。少し聞きたいんだが、監視カメラを抜けて、街の中央まで進められるルートはあるかい？」

「監視カメラを避けられるルート？ ああ、あんた等の事情は、俺の好物のケバブを食べてくれた礼で聞かないで、向こうの誰も使っていない道があるだろう？ そこを通れば監視カメラ網を抜けて行けば、街の中央に出られると思うよ」

「サンクス、ミスター・ブッチャー。有益な情報、感謝だぜ」

理由も聞かずにそこまでの道を教えてくれた店主に礼を言うハーケンであったが、そ



の道はいわく付きの道であると店主は調理しながら付け加える。

「でも、その道は結構ヤバいって噂だ。昔、ここを治めていたメガミ人が、領地拡大を図るノンダス人どもの戦をしてた最中の名残がまだ残って居ててな。まだ死体とか、兵器の残骸とかの撤去が進んでないってことだよ。そのため酷い悪臭がして、誰も近付けないとかって話さ。通る時はガスマスクとか必要だ。近くに防災用品のガスマスクを置いてるかもしれないから、持っていきな。なに、勝手に持ってたって誰も気にも留めやしないさ。ほら、出来上がりだ。召し上がれ」

「サンキュー。何から何まで済まないな」

「良いって事さ。この街の中で、あんた等ほどの人が良い連中はそうは居ない」

昔の戦争を名残が残る道と、その影響で出た悪臭が酷い所であると告げれば、丁寧にガスマスクがある場所も教えてくれた。それと同時に注文の品が出来上がり、それぞれに頼んだ物を渡す。そんな親切な店主に更に礼を言えば、彼はハーケンらのような人間に会えて嬉しいからそうすると答える。

「…デリイシヤスだ、ブツチャーマン。良いケバブだぜ、なんで繁盛しないんだ？　こんなに美味いってのに」

「そいつはありがとう。まあ、俺がこんな見た目をしてる所為でもあるがな。まあ、路頭に迷う心配はないさ」

美味しいケバブをごちそうになったハーケンは、美味しいと告げて何故、繁盛しないのかを店主に問う。理由は簡単であり、店主のその巨漢ぶりと車のボンネットをへこませる程の怪力の所為であると本人が答えた。

「まあ、そいつは致し方の無い事さ。人はまず見た目からだって言うしな。取り敢えず、美味しいケバブ、ありがとよ。生き残って良い肉屋を目指せよ」

「ああ、この街で骨を埋めるつもりだったが、あんたのおかげで生きることにした。食べてくれてありがとな！」

「達者でな！ お互い生きてたらまた会おうぜ！」

ケバブを食べながら、避難所に備蓄されているガスマスクを取りに向かう際に、そのケバブを提供してくれた店主に礼を言いつつ別れを告げた。

彼はこの街で最期を迎えるつもりであったが、ハーケンらに会えて生きる気力を取り戻したので、持てるだけの物を持ちに店の中へと消えた。そんな諦め気味だった店主の気持ちを変えたハーケンに、シディーは一体どんな魔法を使ったのかを問う。

「ねえ、あの人。最初に見た時にここを動かないつもりだったけど…どんな魔法を使ったの？」

「どんなマジックだった？ そいつを使った覚えは無いがな。ただ言えば、そうだな、ハートを掴んだって事さ」

「へえ、ハートね…」

「いつも女を口説くために、艦長が使う魔法でヤンス」

「おい、アシエン。そりやねえだろう。ドリームを壊すんじゃない」

そうするつもりは無かったハーケンであるが、シディーに本当の事を教え、相手の気持ちも思つての行動であると答える。そんなハーケンに対し、その手を使うのは女を口説くための物だと告げれば、彼は流石に怒る。

そんなハーケンらに対し、シディーはまだ名前を聞いていなかったのか、名前を問はず。

「所で、名前を聞いてなかったけど、あんた等は何者なの？」

「おっと、レディに名前を明かさなかつたとは、こいつは失礼だったな。俺はハーケン・ブロウニング、しがさないさすらいの賞金稼ぎさ」

これに大変失礼だったとハーケンは釈明し、自分の名前を格好良く名乗つて決める。

「このかつこつけのチャラスキーの部下であります、アシエン・ブレイデルと申す者。これで分かつたか、貧乳小娘」

次に上司のハーケンに毒舌を入れつつ、アシエンが名乗り始める。この際に彼女は、シディーに失礼な毒舌を掛けた。

「俺はヴァン、夜明けのヴァンだ。姓名とか、そう言うのは分かんねえからよろしく。そ

れと女の名前はエレナ以外あんまり中々覚えられねえ。以上だ」

聞いてもないのに勝手にヴァンが名乗り始めれば、絶対に名乗らないマリに代わって、ハーケンが彼女の名を告げる。

「で、その華麗で綺麗で優雅なビューティホーウーマンは、マリ・ヴァセレート。とてもミステリアスな美女で、俺たちのボスつて所さ。俺はこのお嬢さんの依頼で、このサジタリウスに来ている。依頼内容は人探し。多分、君のママの所にも用がありそうだから、その時はよろしく頼むぜ」

勝手に自分の名を告げるハーケンに、マリは睨み付けたが、その場の空気を変えようと、シディーも名乗り始める。

「じゃ、私ね。私はシディー、シディー・プローディネンス。お母さんは考古学者だわ。ママを迎えに行つて、この街を出て行く間までだけど、よろしく」

「OK、全員の自己紹介は済んだようだな。さて、ガスマスクを取りに行くときですか」  
これで全員分の自己紹介を終えれば、ハーケンがこの場を仕切つて避難所に備蓄されているガスマスクを取りに行った。

ガスマスクを調達し、肉屋の亭主が教えてくれた監視網を抜けられるルートへ入ったハーケンらは、その日も当たらない昔の戦場の名残が残る道を見て、驚きの声を上げる。

「上の辺りが異様に発展しているのに。どうしてここは当時のままなんだ？」

「そこらに転がってる戦車とかの残骸を解析しますと、述べ二十年以上は放置されている模様でさうろう」

「呆れた。こんな物を二十年も放っておいたなんて…」

アシエンの解析で出た分析は、述べ二十年以上も放置された物であった。

兵器ばかりでは無く、腐敗した死体や白骨化している物ですら、放置されていたのである。

上の方でかなりの近代的な都市が築かれているにも拘らず、メガミ人に統治されていたころのままの姿を残す旧市街の方は手付かずが無かった。どうやら、上層の経済発展を優先させて、ここまで放置したようだ。

「死体まであるな…腐って、誰が誰だか分からないが、武器を見る限り、統治時代も放棄していたそうだな」

「旧市街の壁にある銃弾の跡を見る限り、連邦が攻めてくる前から領土争いが起こっていた様子でっさね」

周囲に転がるボロボロの野戦服と、腐り果てた手と白骨化した手に握られた金属部分が錆び付いたボルトアクション式の小銃を見る限り、連邦軍がサジタリウスに攻めてくる以前から、放置していたところが分かるとアシエンが分析して結果を報告する。

「不気味だわ…オバケでも出るんじゃないかしら…?」

「マスクしてても臭いな」

そんな死臭で溢れた光当たらない道を、シディーは怯えながら、文句を言いつつも、先へと進むヴァンの後へ続く。

メガミ人の帝国の元皇帝であるマリに取って、見慣れた軍服と武器、兵器が見えたが、彼女はそれを仲間たちに明かすことなく、最後尾を歩いて周囲を見つめるだけだった。暫く死臭に溢れる道を街の中央に向けて歩き続ければ、進行方向より複数の灯りが見え、声が聞こえて来る。

「隠れろ…!」

蛮刀を抜いて臨戦態勢を取るヴァンに対し、ハーケンは遭遇すれば戦闘になることを知っているので、彼を朽ち果てたパンター戦車の残骸に引きずり込み、その場で身を隠す。一同もそれに続き、向かって来る集団から死角となるパンター戦車の右側へと隠れる。

数秒もしないうちに、辺りにライトを照らす集団が見えた。

「ワイルドキャット…!」

シディーがその姿を見て、ワルキューレの部隊であると口にした。

全員が女性であり、市街戦迷彩の装備を身に着け、武器はブルパップ式のアサルトラ

イフルであるL85A2突撃銃や、軽機関銃のFNミニミが握られていた。他にはステアーAUGであったり、AR15のカナダモデル、C7A1突撃銃を持った者もチラホラ見える。

暗視装置でも持って来てないのであるうか、銃身に付けたライトの灯りを頼りに周囲に漂う悪臭を耐えつつ道を進んでいる。

どうやら、街の中央はワルキューレの手に落ちてしまっているようだ。彼女らがここを通って来たのは、そうとしか思えない。

その敵兵等の集団を見て、慌ててそこから飛び出そうとするシディーをハーケンは抑える。ここを通る集団は少人数では無く、中隊規模のようで、二列横隊を組んで悪臭漂う道の辺りを警戒しつつ進む。彼女らが完全に通り過ぎたのは、身を隠して二十分後であった。

「あれで、向こう側はパニックだな」

「ママ……」

その集団を見て、中央側は完全に制圧された物であると分かれば、シディーは自分の母の身を案じつつ、死臭で溢れるこの道を進んだ。

「クソツ、瓦礫で防がれてるな」

「艦長、さっきの連中が入って来たときされるもんがあります」

「OK、早く出よう」

死臭で満たされた薄暗い通路を進む中、街の中央部へと続く道が戦闘の所為なのか、瓦礫で防がれているため、先ほどの集団がここに入った際に使った出入り口を通って外へ出ようとする。

だが、中隊規模の部隊が通っているの、見張りが居ないと変わりないので、まずはハーケンが外の様子を確認するために、頭だけを出して辺りを見渡す。周囲にはワルキューレの歩兵が数名ほど居たが、誰もここを見張るものは居らず、戦場となつてあちらこちらに煙が上がる街の中心部を眺めているだけだ。

そんな彼女らの目を盗んで、ハーケンは無言のハンドサインで「こつそりと出てこい」と指示を出し、彼女らが気付く前に、その場所から離れる。離れた直後に、誰か気付いてないか確認して居ないことを確認すれば、ガスマスクを捨ててから息を整える。

「ふう、なんとか排水管みたいな場所を通り抜けたな」

「わあ…滅茶苦茶臭う…」

「臭過ぎで、鼻が利かねえ」

ハーケンが閉じていた口を開けば、シディーは服に染みついた死臭を気にし、ヴァンは鼻をつまんで臭いを消そうと努力する。マリとアシエンと言えば、持ち込んだ無臭用



の香水を振り掛けていた。

「アシエン、スプレーを」

「了解でやんす。無臭ダ」

それを見たハーケンが、自分等にも掛けるように指示すれば、アシエンはそれに応じて謎の台詞を吐きつつ、無臭用香水のスプレーを彼らに振り掛ける。

「ちよつと臭わなくなつたかも」

「まあ、臭いで感づかれることは無かつたな。あそこの近くの連中は、鼻がバカになつてたから気付かれなかつたかもしれんが。行くか」

臭いがマシになれば、一行は再び街の中央へと向かう。シディーの携帯端末機は捨てて破壊してしまつたので、コンパスと避難所で失敬した地図を頼りに街の中心部へ向かうルートを確認する。

「街の中心部に向かう最先端のルートは…」

「この近くにある橋でヤンスね。おい、調味料ジャンキー、偵察に行つてこい」

ハーケンが片手にコンパスを持ちながら地図を見れば、アシエンが的確に現在地の近くにある橋を指差し、橋がどうなっているかどうかヴァンに確認するよう命令する。

「なんで俺なんだよ」

「良いから行け、犬。お前は視覚と嗅覚が人並み外れた超人だ。そんな物はたやすい事

だろう」

「けつ、行ってやるよ」

これに少しばかり口論となったが、ヴァンは苛立ちながらも瓦礫だらけの道を通りながら、橋の偵察へと向かった。

それから数分くらいして、ヴァンが偵察より戻って来た。

「で、どうだい。橋の様子は？」

「連邦軍の軍服を着た連中で溢れてる。それから街を出ようとする避難民がいっぱい通ってる。逆側は連邦の兵隊と車両でいっぱいだ。それに、**「r b：機動兵器 > ヨロイ」**が何体か居る。亀とか犬見てえなのも居る」

偵察より戻ったヴァンの報告で、ハーケンは即座に機動兵器を保有する連邦軍の部隊が近くの橋を占拠していると判断した。

「完全に抑えてるって感じだな」

「どうしやす、強行突破でもしますか？」

「今の俺たちにはPTは無い。ここは、波に逆らってみようぜ」

アシエンが前回と同じく強行突破をするのかと問えば、ハーケンはPTを持っていないので却下し、普通に行こうと決める。

瓦礫だらけの通りを抜け、橋の近くまで来れば、向こう側はゾイドと呼ばれる機械生

命体の機動兵器や軍用車で溢れ、こちら側は避難民と車で溢れかえっていた。逆に進むとすれば、まず流されてしまう事は確実だ。本当にあの人の波に逆らうのかと、シディーは言い出したハーケンに問い詰める。

「あの中に行くの!?!」

「ああ、行くぜ。しつかりと手を掴んでおけよ」

「わ、私はまだ心の準備が!」

シディーの問いにハーケンは自信満々に答えれば、彼女の手を取って意気揚々と人の波へと真つ向から挑む。アシエンもヴァンも、ハーケンと同じく真つ向から挑んでいる。マリはその中に入り込むのは嫌だったのか、橋側に行つて進んでいた。

「おい、あれ……!」

「ペリカンだぞ!」

そんな人の津波に真つ向から挑んだハーケンたちの上空より、UNSCの全軍で運用されているペリカンと呼ばれる77型降下艇が現れた。

「おい、この辺にUNSCの戦区なんてあったか?」

「んなもん聞いてねえよ! とにかく邪魔だ! どっかに行かせろ!!」

流石の橋を陣取る連邦軍の将兵や憲兵たちも、これには予想外なのか、無線でそこから離れるように怒鳴り付ける。乗っている男はそれに耳を貸すことは無い。乗ってい

るのはあのキズラー警察署長だからだ。

『見付けたぞ！ この犯罪者共め！ あいつです！ あいつ等、能力者です!!』

『おい！ どっか行け！ 何の用だ!?!』

後部ハッチから短機関銃を持ったキズラーが現れ、ハーケンらを見付けば、隣に立つ男、それもサイキックハンターの指揮官に、彼らが能力者であると言っていた。

そんな余計な連中を追い払おうと、連邦軍の将校は拡声器で追い張ろうとしたが、聞く耳を持たない。優先権は我々にあると、サイキックハンターの指揮官は現場の指揮官に恫喝に近い声量で告げる。

『優先権は我々サイキックハンターにある！ よって当任務よりも能力者捕獲、または殺害を優先せよ!!』

『ふざけるな！ この橋を守ってるのは俺たちなんだぞ!!』

『黙れ！ 指揮権は我々にある！ 直ちに避難民に紛れた能力者共を…』

『敵機だあ!!』

『っ!?!』

現場の指揮官に今の任務を放棄し、ハーケンらを捕獲、または殺害を強要するサイキックハンターの指揮官であつたが、前線に居る将校がそれを承諾するはずが無く、怒

号で返されて拒否される。

お構いなしに、サイキックハンターの指揮官は直ぐに指令を実行するように持つている拳銃で脅そうとしたが、遂にこの橋にもワルキューレの部隊が強襲しに来た。

対空機銃砲についている兵士が指差しながら叫んだ方向には、ワルキューレが保有している独自のエンジンで動くMSであるジンクスIV二機に、可変戦闘機のVF-25メサイアよりも上位機種であるVF-31ジークフリート、数ある種類の一つである制空戦闘機タイプであるJ型が単機で強襲を仕掛けて来る。

『う、うわあああ!!』

「ば、バカー！ 撃つな!!」

亀型の小型ゾイド、カノントータスに乗るパイロットが、高速で向かって来る高性能制空戦闘機タイプに向け、背中の主砲で撃ち落そうと叫びながら撃とうとする。

それを止める将校であるが、恐怖に覚えるパイロットには聞こえず、強力な主砲が発射された。砲声は凄まじく、近くに居た者達の鼓膜が破れ、みんなが両手で耳を抑えてうめき声を上げる。その余波は少し離れた距離に居る者達にも響き渡り、ハーケンらも砲声と言う名の音波兵器を受けて避難民たちと一緒に耳を抑えた。

「敵機だ！ 撃ち落とせ！」

低空飛行で向かって来るバルキリーに向け、士官が怒号を飛ばすが、対空機銃では捉

えられる物では無く、ビーム式ガンポッドを撃たれて吹き飛ばされる。橋の警護についているGキヤノンや地球連合軍のMSのダガーLも迎撃を行うも、ジnkクスIV二機に赤いビームをコックピットや頭部に撃ち込まれて返り討ちにされた。

『な、なんで敵機が!?!』

『た、退避しろ! 戦闘に巻き込まれるぞ!!』

突然の敵機の強襲に、キズラーは慌てふためき、サイキックハンターの指揮官は戦闘に巻き込まれると思つてか、橋の味方を見捨てて自分等だけ逃げようとしたが、戦闘機のパライター形態より鳥人間のガウオーク形態に変形して両腕に装備されたミニガンポッドで二機の敵機を同時に撃破し、そして人型形態であるバトロイド形態に変形したVF-31Jに、乗っているペリカンを踏み付けられ、機内から振り落とされた。

「わあああ!!」

機内より振り落とされた二人は、そのまま近くのゴミ収集車の上に落下する。落されたトマトのように潰れると思つたが、運が良かったのか、荷台に屋根の無いゴミ収集車であつたため、二人は生ゴミだらけになつただけで済んだ。

「へっ、ざまみろ」

「いい気味だ」

ゴミ山の上に落下した二人の様子を見ていたハーケンとヴァンは、虫が良くて慌てて

抜け出そうとする二人に向けてそう吐き捨てる。だが、ここの連邦軍の部隊が避難民たちを守るはずが無く、あろうことか巻き込んで来たのだ。

「艦長！ 連邦軍がこっちにも！」

「おいおい、それでも軍隊か!？」

アシエンが知らせた頃にはもう遅く、たった二機の赤い粒子を撒き散らすMSに一方的にやられる連邦軍のMS部隊のうち一機が、避難民の列に突っ込んで来たのだ。

他には一機の高性能バルキリーに蹂躪される連邦軍の車両部隊から逃げ出して来た搭乗員たちは避難民に向けて殺到してくる。物の数秒ほどで兵士と市民とのもみ合いとなり、橋から落下する者が続出する。

これを抑えようと、VF-31Jのパイロットは、ブーメラン型の小型無人機を数機ほど展開して、ワルキューレは市民を攻撃する意思は無いと告げる。

『落ちていくください。我々ワルキューレは貴方がた市民に一切の気概は加えたりしません。落ち着いて最寄りの避難所に向かってください』

その無人機の拡声器より発せられる声は、とても清らかな女性の声であったが、誰も耳を貸す者など居なかった。

「きゃっ!？」

死の恐怖で逃れようとする兵士たちに押され、橋の辺りで中心側に渡ろうとしたマリ

は、押し寄せて来た避難民に押されて川へと落ちてしまった。

「わっ、ちよ、ちよつと!？」

「シディーー! おい、退いてくれ!!」

シディーもまた、川に落ちるとは行かなかつたものの、中心側に逃げる集団に呑み込まれてハーケンらと逸れてしまう。必死に追おうとするハーケンとアシエン、ヴァンであるが、彼らも反対側に逃げる集団に呑み込まれてしまい、シディーから離されてしまった。

その後、避難民を巻き込んだ戦闘は続いたが、赤く発光して高速で動き回るジンクスIVや、VF-31Jに街の警護についていた連邦の機動兵器は一掃され、後からやって来たワルキューレの歩兵部隊に、残つて居る連邦軍の将兵達は投降して戦闘は終了した。

「クソツ、シディーが向こう側に…」

戦闘が終わった後、中心側へと流されたシディーの身を心配するハーケンであるが、心配は自分の方をした方が良いとアシエンに言われる。

「艦長、そつちもそれどころじゃ無いようです」

「おつと、マジか…」



橋の上に居るハーケン、アシエン、ヴァンに、ワルキューレの歩兵部隊が手にしている銃の銃口を向けていた。逃げられると言うか、逃がさないように背後にも数名ほど古いライフルを手にし、それに似合う装備をした皿型のヘルメットを被った女兵士たちが居るので、逃げようにも逃げられなかった。

「どうすんだ？ これじゃあ動きようがねえ」

「まあ、待て。ここはプランBで…」

「んなもんねえです、艦長」

「ああ…くそ」

ヴァンにどう対処するかと問われれば、適当に思い付いたプランBでやろうとしたが、そんな物は無いとアシエンに言われた。だが、その手を使わずとも、拘束は免れそうだった。

「中尉、川に落ちた女の人が…」

「えっ、何？」

ハーケンらを捕らえた黒いベレー帽を被った歩兵部隊の女指揮官の元へ、年若い迷彩カバーを付けた皿型のヘルメットを被る女性兵士が報告に来る。それを聞いた女性指揮官は、ハーケンらに古い小銃や短機関銃を向けていた兵士らに、銃口を下げるように無言で指示を出す。

「おいおい、どういう風の吹き回しだ？」

兵士たちからの銃口を下げられ、驚いた声を上げたハーケンの視線に映っていたのは、ワルキューレの将兵らを従わせるマリの姿であった。

## 連邦軍の悪行

「地上はどうなっている？」

「はっ、既にほぼ制圧済みであります！」

一方で、宇宙に居る連邦軍の駐屯艦隊を完全に周辺宙域より駆逐したゼンガーらのワルキューレの宇宙艦隊は、軌道エレベーター内部に入り、更なる残敵の駆逐を行っていた。

余りにも大き過ぎるダイゼンガーとアウセンザイターを艦艇用ドックに、戦友であるゼンガーと共に入れ込んだレーツェルは、近くでドック内の連邦軍の物資を自分が属する艦艇に運んでいる兵士に、地上の制圧はどう進んでいるか問う。

彼は地上から聞いた戦況をそのままそっくり自分より階級が遙か上、それも大佐であるレーツェルに報告してから物資を自分の母艦に向けて運び込む。

「既に制圧済みか。ゼンガー、地上での戦い、我々の出番は無さそうだぞ」

「ふむ、地上での戦いでは我らは無用か。だが、もしもの時がある。俺は地上へ降りるぞ」

地上の戦況を聞いて、一個機甲軍規模の戦闘力を持つゼンガーとアウセンザイターを

駆る自分等の出番は無いと、隣に立つゼンガーに告げる。

だが、もしもの時があるので、その為にゼンガーは地上へと降りるとレーツェルに告げれば、彼はそれに同調する。

「確かに。地上の制圧と言っても、一つの大都市だけだ。連邦は惑星にまだかなりの地上戦力を残している。それらが大半して押し寄せれば、一個機甲軍くらいは戦力しかない下の部隊は踏み潰されることは確実だな。宇宙は私のアウセンザイターと、アガサやメイソン騎士団だけで十分だ。ある程度の艦艇が揃うまでは連邦は仕掛けては来ないだろう。行って良いぞ」

地上における連邦軍は、まだかなりの戦力を持っているので、地上の味方部隊だけでは持ちこたえられない。

そう判断したゼンガーに、レーツェルは的確な考えであると評価する。

ゼンガーがダイゼンガーと共に地上に加勢に向かった所で、宇宙には彼のアウセンザイターを初めとする強力な兵器がまだ残っている。早い話、ダイゼンガーは余りに余分過ぎるのだ。

「済まん、エルザム、いや、レーツェル」

「何、そのまま地上に居る連邦軍部隊全てを潰しても構わんと言う事さ。私は宇宙の部隊を貰うがな」

「ほう、随分と自信があるな。では、行って参るぞ」

「ああ、宇宙は任せておけ」

そうレーツェルと冗談を交わしながら、ゼンガーはダイゼンガーに乗り込み、地上の部隊へと加勢に向かった。

「ああ……みんなと逸れちゃった……」

橋の戦闘の所為で、マリとハーケンたちと逸れてしまったシデイーは、一人街の中心部に行ってしまったことで、不安になっていた。

戦闘から逃れるため、他の避難民らと共に橋から離れたが、夢中になって、更に中心部へと向かってしまったようだ。橋へ戻ろうにも、撃墜された連邦軍のMSが戻り道を塞いで戻れなくなっている。前に進むしか道は無い。

『わあああ！ ママあ！ 死にたくないよお!!』

「こんなことで泣くもんですか……」

街の中心部に近付いた所で、銃声や爆音がはつきりと聞こえ、遠くから瀕死の兵士の叫び声が聞こえて来たが、ここで臆しては、母は助けられないので、シデイーは勇気を振り絞って、街の中心部へと向かう。

かなりの激戦区であるため、双方の兵士の叫び声が聞こえて来る。

シデイーら統合連邦市民等が話すアメリカ英語は連邦軍で、英国訛りの英語を喋っているのがワルキューレだ。

英国訛りの英語が進行方向より聞こえて来たので、シデイーは直ぐに物陰へと隠れる。こんな状況なので、いつ撃たれるか分かったもんじやない。

「に、人数は…いっぱい居るわね…しかも、大昔の世界大戦の戦争映画みたいな格好じゃない…」

身を隠している場所から、約一個小隊規模のワルキューレの歩兵部隊を見て、シデイーはこの場に似合わない装備だと小声で呟いた。

彼女らの個人装備は、遙か先の装備を誇る連邦軍相手にするのは無理がある物だった。

第二次世界大戦後期に使用されたりエンフィールドライフルのモデルであるN04や、大量生産型ステン短機関銃の安定モデルであるMkV、軽機関銃は同じく大戦中で運用されていたブレン・ガンだ。対戦車火器は嘩然と言っても過言では無いピアット対戦車榴弾発射器だ。個人装備も、それに似合う物ばかりである。

これで最先端の装備の軍隊と戦えと言うのは無理な話だが、連邦軍の歩兵の質は恐ろしく劣る物であり、この装備でも十分に対処できてしまうほどだ。

「死ねえ！ 雌<sup>ビッチ</sup>犬ども!!」

大戦中の陣形に則り、歩きながら前進する彼女らの頭上より、本隊より逸れたであろう迷子兵が窓から飛び出し、手にしている分隊支援火器タイプの軽機関銃を乱射した。その軽機関銃はかなりの連射力を誇っており、道路を歩いていた旧式装備の彼女らは次々と薙ぎ倒され、ある者は足を電気ノコギリのような連射力で引き裂かれる。

「わあああ……！」

近くから聞こえる凄まじい銃声にシデイーは震え上がり、両耳を抑えて早くこの銃撃戦が終わってほしいと身を隠している場所から祈る。

彼女が振るえている間、ワルキューレの歩兵部隊は三階辺りから来る銃撃を避けるために散らばり、それぞれの遮蔽物から近くの三階の窓から機関銃を撃つ連邦軍の迷子兵に向けて手にしている銃を撃ち始める。

銃の性能差は、迷子兵が持っているライトマシンガンが勝っているようだが、数の差は旧式の小火器を使うワルキューレに分がある。これにより、一瞬にして迷子兵はハチの巣にされた。

「このアマあ……！」

他にも迷子兵がワルキューレの歩兵部隊から見て右手のビル二階より出て来たが、持っているのはブルパップ式のアサルトライフルであり、撃つ前に叫んだがため、勘の鋭い女兵士が持つ、リーエンフィールドNo4の銃弾を胸に撃ち込まれ、そこから転げ

落ちる。

銃声が止んだ頃には、足を引き裂かれた女兵士の悲痛な叫び声だけが響き渡るだけだった。他には血を吹き出しながら、苦しむ者も見える。そんな彼女らに対し、衛生兵らが応急処置を行う。

「今がチャンス……?」

女兵士らの注意が負傷兵や戦死者の認識票に向いているのを、物陰から確認すれば、シディーは素早くそこから離れる。

「っ!?!」

向こうまでに通り過ぎた瞬間、警戒している小銃兵がシディーの足音を聞き取ってその方向へと銃口を向けたが、そこに彼女は居らず、小銃兵は気のせいだと思って再び周りの警戒を始めた。

「うわあ……ワイルドキャットが直ぐそこに来てるって言うのに……」

小競り合いが乱発している通りを抜け、川沿いにあるカジノ辺りまで来たシディーであったが、そこに彼女を待ち受けていたのは、火事場泥棒を働く市民たちであった。

彼女の言う通り、直ぐそこにワルキューレの部隊が展開しており、連邦軍と交戦しているのだが、戦闘に乗じて火事場泥棒を働く者達には、戦闘がここまで広がるまでが勝



負だと思っているようだ。

中には銃を持っている者も居り、それで金品を脅し取ったり、金庫の鍵を撃つてこじ開けたりしている。それはまるで、この世の終わりの光景のようだった。

「動いているATMは…あつた！」

母との連絡を取る為、シディーは略奪者達の目線を潜り抜けながらまだ無事なATMに近付いたが、近くに数名ほどの銃を持った略奪者が居たので、迂闊に飛び出せばハチの巣にされるのは確実だ。

そこでシディーは落ちていた携帯を拾い上げ、街のシステム全般を管理するエイジャに連絡を取り、パトカーのサイレンを鳴らすように指示を出す。

「エイジャ、聞こえてる。パトカーのサイレンよ」

彼女がエイジャに命じれば、AIはそれを即座に実行した。

『さ、サツだ！』

『畜生、逃げるぞ！ こんな所でしょつ引かれてたまるか!!』

パトカーのサイレン音を聞いた略奪者たちは、蜘蛛の子散らすようにカジノの周辺から逃げ出していく。その隙を見て、シディーはATMに近付き、母に連絡を取るようエイジャに命じる。

「エイジャ、直ぐにママに連絡して。大至急よ！」

『タツチパネルに手を添えて…』

『シディー、大丈夫？ さっきのお友達は…逃げたのね!』

エイジャは直ぐにシディーの指示に応じて母に連絡を取った。娘からの連絡を受けた母は即座に出て、シディーが無事かどうか問う。画面に映る彼女の背後に、マリやハーケンの姿が無かったため、母であるプローディネンス博士は娘を置いて逃げたと判断した。

「違うわ！ 逸れただけよ！ それより、ママの方は大丈夫なの？」

『ええ、こっちは大丈夫よ。ここには手を出して来ない。それと貴方に朗報よ、ワイルドキャットは私たち市民を攻撃しないわ。むしろ攻撃しているように見えるのは、連邦軍の所為よ』

マリとハーケンらが逃げ出してないと断言すれば、そちらは無事なのかを問う。プローディネンスは背後に目をやってから、ここは大丈夫だと答え、ワルキューレが市民を攻撃しないと娘に朗報を伝える。そして、市民や街に被害をもたらしているのは、連邦軍であると強調した。

「確かに、まるでド素人みたいに戦果を広げて街や市民に被害を出してるわ。今もそう」

それを聞いたシディーは、街の被害を顧みずに未だに戦闘を続ける空の連邦軍機を見て、連邦の放送は全てプロパガンダであったことを理解し、その様子を発掘現場に居る

母親に報告する。

『私が居た頃とは大違いね…兎に角、連邦軍の部隊とは会わない方が良いわ。あいつ等と一緒に行動したら、ワイルドキャットに撃たれることは間違いないよ。それに子供を盾にして街を逃げ出そうとする部隊まで居るから…』

「嘘…!? 子供を盾に? 流石にそんなことをするわけ…」

『これがその証拠よ』

それを聞いてか、今の連邦軍を見て落胆した後、シデイーに連邦の部隊とは共に行動しないように告げてから、子供を盾にして街から出ようとする連邦軍の部隊が居る事も告げる。

これに、流石に信じられないシデイーは、疑問の声を上げるが、母親が見せた証拠の映像を見て、驚きの余り絶句する。

映像に映っていたのは、母親より奪った幼い子供を両手に抱き抱え、子供を高く上げて上空を飛び回るワルクューレのバルキリー隊に見せびらかして逃げようとする連邦軍の歩兵であった。

「私って…そんな軍隊に入隊しようとしてたなんて…」

『これで分かったでしょ。あんな軍隊に入るくらいなら、農業やるか、工場で働いていた方がマシよ。政治を自分たちの思うままにしたいように、徴兵を受けなきゃ投票権も無

い上に政治家にもなれない。とんだ腐った連中だわ。それと貴方は早くここから……」

憧れていた連邦軍の本当の姿を見て、シディーはもう絶望するしか無かった。それを見ていた母親は、娘が軍に入るのを完全に考え直したと思い、この街から逃げ出すように告げようとしたが、シディーは曲げる気は無かったようだ。

「いいえ、ママを迎えに行くわ、絶対だね。それと連邦兵にタグを付けておかないと」

『曲げる気は無いのね。街に居る連邦兵全員にマークね。良い考えね、これで生存率は挙がる。こういうのを思い付くなんて、私が見ない間に賢くなっちゃったようね』

「ええ、ママに張り合おうと、私もそれなりに勉強してきたから」

娘の思わぬ成長ぶりに、母は少しばかり感動を覚えた。

『ごめんね、いつも忙しきにかまけて、エイジャに任せつきりで面倒みられなくて』

「良いのよ、今は過ぎたことだし。それに、ママが頑張ってくれてるおかげで……」

「嬢ちゃん、パトカーのサイレンとはよく考えたね」

誤って来る母に、シディーはそのおかげで今の自分があることを告げようとした瞬間、散弾銃を持った老婆が背後より現れた。

『直ぐに離れなさい！』

「そう、ATMの画面に映ってるあんたのママだかなんだか知らない女の言う通りにしな。じゃなきや、こいつであんたの賢いオツムを吹っ飛ばすよ」

「お、おばさん。今がどんな状況か、分かって？」

銃を持った老婆を見たプロディネンスは、直ぐにシディーにATMから離れるように叫んだ。それを聞いてか、老婆は母の言う通りにした方が良く、シディーに散弾銃の銃口を突き付けながら脅しを掛ける。

これに怯まずに今がどんな状況なのか理解しているかと問うシディーであったが、今の老婆の頭には金の事しか無く、散弾銃のポンプを引いて空薬莖を排出して新しい弾を薬室へと入れ込めば、天井へ銃口を向けて引き金を引いて威嚇射撃を行う。

「こいつが聞こえなかったのかい、お嬢ちゃん？ あたしやメガミ人共がここを治めた時代から二十五年も金庫に金を治めてたんだい！ 今が御引き出しの時だつてね！

さあ、貯金箱を割るよー！」

「ヒイイイ!? 分かりました!!」

老婆が本気であると、その目を見て理解したシディーは、直ぐに老婆の前から退き、近くの倒れている物に身を隠す。

「出せっ！ 私が収めてた金全部!!」

『現金を引き出す際には、カードと通帳を挿入し、番号を入力してください』

「出せつて言うのが分からないのかい!? このポンコツが!!」

「出しなさい！ エイジャ！ 撃ちかねないわ!!」

ATMに近付いた老婆は、手にしている散弾銃を向けて今まで自分が収めて来た金を全部出すように要求したが、映っているプロードイネンス博士の映像は途切れ、いつものATMの物に変わり、銃口を向けられようが、いつもの接客を行う音声を流すばかりだった。

これに腹を立てたのか、老婆は散弾銃を撃とうとする。流石に母親との通信手段を破壊されては困るのか、シディーは金庫の中にある金を全て吐き出すように叫ぶ。

「おお…ジャックポッドだ…大当たりだよ!!」

その指示に何の疑いも無く、エイジャは管理しているATMから紙幣や貨幣を吐き出し始めた。それを見て、老婆は感激しておそらく他人の物でもある紙幣をかき集め、掛けている鞆に突っ込んでいく。

『直ぐに略奪を止めなさい! 止めない場合は即座に射殺します!!』

「やべっ! ワイルドキャットだ!!」

「逃げる! 婆さんなんかほっておけ!」

ATMから金が次々と吐き出される中、ワルキューレの歩兵と戦車の部隊がカジノ前に現れ、略奪者達に略奪を止めるよう英国訛りのある英語で警告した。それを聞いて残って居る略奪者たちは逃げ出し始めたが、老婆は目前の金に目を奪われてワルキューレが来たことに気付いて無いようだ。

『その御婆さん！ 直ちに略奪行為を止めなさい！』

「ああ、ワイルドキャットが…お婆さん、直ぐにそこから…」

「なんだい、あんた等は!?! これは私の金だよ！ アンタ等のもんじゃないよ!?!」

老婆以外の略奪者は全てカジノより逃げ去ったので、ワルキューレの将校は拡声器で老婆に略奪行為を告げるが、彼女は自分の金を奪い取りに来た者達と判断して、無数の将兵らに向けて散弾銃の銃口を向けた。その結果は、ご覧の通りの末路だ。

「つ!? 撃てえー!」

散弾銃を向けたので、ワルキューレの将兵らはそれを敵対行為とみなし、無数の銃口が火を噴いた。

「ぎやあああ!!」

無数の銃弾を浴びた老婆は、その場に血を吹き出しながら倒れ込む。

老婆がまだ動いているのを確認すれば、指揮官はハンドサインで四名ほどの小銃兵と一人のステン短機関銃を持つ兵士に指示を出し、老婆の元へ向かわせる。残りの者達は、周囲を警戒するか、カジノへ向け、持っている銃を向ける。

「こ、このアパズレ共め…そいつは、あたしの金…ぐえー!」

あれだけ撃たれたにも関わらず、まだ息のある老婆は自分の生死を確認しに来た女兵士の一人の脚を掴んだ。この瞬間に、女兵士が持っている小銃の銃剣を突き刺され、

息絶える。

完全に死んでいるかどうか、脈を確認して、動いて無い事を分ければ、ハンドサインで死んだと指揮官に報告する。

「撤回！」

それを確認した長い黒髪を束ね、その上に赤いベレー帽を被り、軍服の上からでも見る胸のサイズがこの場に居る女兵士たちの誰よりも大きく、青い瞳を持つ女性指揮官は、指揮下の部隊に外で待機している車両部隊に戻るように指示を出す。

『シディー、大丈夫？』

「っ!？」

「今まではね！」

戻ろうとした瞬間に、娘を心配するプローディネンスの声が聞こえて来たので、それに驚いて古過ぎる装備の女兵士たちは一斉に撃ち始めた。

「きやあああ!!」

自分を隠れている場所に無数の銃弾が撃ち込まれたので、恐怖の余り、思わずシディーは叫んでしまう。

「撃ち方止め！ 撃ち方止め!!」

百発以上の銃弾が撃ち込まれた後、指揮官はハンドサインを出しながら撃つのを止め



るように大声で指示を出す。

それを見た女兵士たちは、今撃っている分の弾丸を撃ち尽くせば、撃つのを止めて再装填を始める。体勢を低くし、右足の膝を道路の上に付けた巨乳の女性指揮官は額に汗を浸らせつつ、短機関銃を持つ兵士数名に自分についてくるように指示を出し、声がした方向へ向かう。

何か撃ち殺してないか調べるためだ。それに応じた短機関銃を持つ女兵士数名は、自分等とは違うM1A1トンプソン短機関銃を持つ巨乳の指揮官の後へ続く。一人、手に手榴弾を手にしている者が居り、それでも投げ込まれたらシデイーは一貫の終わりだ。

「ハロー？ ハロー?!」

指揮官は銃を抱えつつ、辺りに向けて声を掛ける。この瞬間にシデイーの近くまで来たため、彼女は物陰で震える少女に声を掛けた。

「大丈夫？」

「ヒツ、こ、殺さないで……!」

無事を問うてくる女性指揮官に対し、シデイーは命乞いを始めたが、彼女らは無駄に市民に向けて撃つ弾は無かったようだ。

銃に安全装置を掛け、シデイーの手を取って外に居る者達に付近の安全は確保されたことをハンドサインで知らせる。それを見てか、全員が安心して煙草を取り出すか、水

筒の水を飲んでその場で小休止し始める。

「市民を撃たないってのは、本当らしいわね……」

目前に映るワルキューレの兵士等を見て、シデイーはホツとして胸を下ろした。そんな彼女に対し、女性指揮官は地図を持った中隊長を呼んで来る。

「あの、ここは何所か分かる？」

「えっ？ ああ……この通りですか？ それならあつちが近道です」

用は道を聞いたかったようだ。

随分とアナログな方法でルートを辿るワルキューレに驚きながらも、用意されたジューズで喉を潤しつつ、敵軍に連邦軍の基地への近道を嘘偽りなく教える。普通なら申し訳ない気持ちになりそうだが、守るべく市民を巻き添えにする軍隊に、彼女はなんの同情も抱かず、自分ら民間人を攻撃しないワルキューレに道を丁寧に教えた。

「ありがとう。じゃあ、お礼にこれ」

「え、ええ……ありがとう……」

道を教えてくれたシデイーに、車両部隊の隊長は、お礼にチョコを彼女に渡せば、自分の部隊を率いて目的地へと向かう。そんな女だらけの軍隊を、シデイーはただ呆然と見ているだけだった。

ワルキューレの部隊に道を教え、その礼としてチョコレートを貰ったシディーの元に、逸れたマリとハーケンらが、何処かで調達したのか、宅配会社のトラックで現れた。運転席に居るハーケンは、シディーを見付けるなり、愉快に声を掛けて来る。

「よう、迷子ガール！ 探したぜ！」

「あ、あんた達!?! 橋を渡って来たの!?!」

「ああ、俺の依頼者が攻め側のガールズ&アーミーズと顔見知りだったようだな。おかげさまで橋を無料で渡れたぜ」

どうやって橋を渡れたのかを問えば、マリがワルキューレと関係していて、そのおかげで橋を渡れたとハーケンは答えた。

「そのトラックは?」

「さあ、乗りな。詳しい事は乗ってから話そう」

シディーの近くまでトラックを止めれば、トラックを何所で調達したのかを問う彼女に対し、ハーケンは乗ってから話すと答え、彼女を後部座席へ乗せた。

「おう、お前。無事だったか」

「小娘にしては、随分と運が良いな」

「そこは大丈夫かって言うところでしょう!?!」

助手席にはアシエンが座り、自分の席の近くにはヴァンが座っている。他にマリが

ヴァンより離れた席に腰を下ろしていた。

逸れたシディーを見て、ヴァンが先に声を掛けて、アシエンが中々の運の良さと褒める。これに彼女は二人にツツコミを入れ込む。だが、そんなやり取りをしている場合では無いので、母親にハーケンらと合流できたことを直ぐに伝えるため、携帯の類は無い  
か問う。

「ああ、そうだわ。携帯とかなんかを貸して。ママにあんた等と合流できたことを知らせないと」

「おつ、ママに報告かい？ アシエン、ガールズアーミーズに貰った無線機を貸してやりな」

「良しなのです。ほれ、これでお前のママに連絡を取るが良い」

「え、ええ。ありがと。どうやって使うの、これ？」

それを聞いて、ハーケンはアシエンにワルキューレより借りた無線機を貸すように告げた。その無線機は古い軍用の携帯型無線機であり、どうやって使うかシディーは頭を悩ませたが、マリが無言で扱い方を教えてくれた。

「…」

「あ、ありがと…」

無言で無線機の使い方を教えてくれたマリに礼を言えば、シディーは母親にアナログ

な方法で連絡を取る。発掘現場までは、その連絡方法にも対応しているエイジャが手伝ってくれたので、直ぐに母親との連絡が取れた。それと同時に、トラックが走り始める。

「ああ、ママ。聞こえる?」

『ええ、聞こえるわよ。公衆電話から連絡してきてるの?』

「いや、戦争映画とかで見る通信兵が背負ってる無線機とかだよ。ハーケンらと合流で来たわ」

『服装とか言動と共に変わった連中ね。これなら大丈夫そうだよ。更に安全性を高めるため、地下への道を教えるわよ。そのキザな奴にも聞こえるように音を上げて』

心強い者達と合流できたことを母に報告すれば、プロードイネンスはトラックを運転するハーケンにも聞こえるようにシディーに無線機の音を大きくするよう指示を出す。これに応じて受話器から耳を離せば、シディーはハーケンの耳の近くに受話器を向ける。

『発掘現場は地下を走る列車からでも行けるわ。ただし、路線は貨物列車用だけだね。それと今は知ってる場所だけ…』

地下鉄より発掘現場への行き方を注意して聞いていれば、プロードイネンスは何所を走っているのかを問う。これにハーケンはカーナビを見るアシエンに何所を走ってい

るのかを問えば、彼女はその区画を答える。

「六番街でござす」

「六番街だ、マザー」

『六番街ね、なら近いわ。このまま戦闘に巻き込まれずに来てちようだい。娘を巻き込めば、どうなるか分かっているわね?』

「心配ご無用ですよ、マザー。娘さんはちゃんと貴方の元へ送り届け、貴方共々街より脱出させてご覧に入れましょう」

『調子の良い事を言うわね。でも、貴方なら信頼できそうだわ。ちゃんとやってね』

「イエス、ママ」

娘共々街より脱出させて見せる。

そう意気揚々と語るハーケンに、母は少し不安になりながらも、彼は信頼に値する人物だと、長年の勤で判断した。それから最後になるかもしれないので、ハーケンは受話器をシディーに返す。受話器を再び手に取ったシディーは、話すことが思い付かないのか、母に何所に避難しているのかを問う。

「ああ、ママ。今はどの辺りに?」

『ラボよ。発掘現場の近くで交戦しているようだから、退避壕にもなるラボに避難したの』

「それなら安心ね。連邦の奴らがワルクユーレを見るなりぶつ放したって、私たちが来るまで持ちこたえられそうだわ」

『ええ、だからあなたは安心して…っ?!? なんてこと…!』

「ママ、どうしたの!?!」

最後の連絡になりそうなので、長めに話そうとしたシディーであったが、母の居るラボから凄い爆破音が聞こえ、彼女の絶望感に満ちた声が聞こえた。それを聞いて母の身に危険が及んだと察したシディーは、直ぐに何があったのかを問う。

『この付近で、連邦軍が反撃に出たみたいよ! それにその辺りに連邦軍の部隊が集中して激戦区になってる! 前言撤回よ、直ぐに退き返して、お友達と一緒に街から離れ…』

「えっ? ちよつと、ママ!?! ママ! どうしたの!?!」

敗走気味だった連邦軍が突然、反撃を行って来たので、発掘現場の上とシディーたちが居る辺りが激戦区になったと知らせる母であったが、娘にハーケンらと共に街を出るように告げたが、最後まで言い切る前に通信が途切れてしまう。

切れた通信に何度も呼び掛けるシディーであったが、雑音が聞こえて来るだけで母には連絡が付かない。

「通信が切れたようだな。何かあったのが妥当だろう」

「受話器から聞こえる声からして、連邦の奴らの気が変わって反撃出たって事だな。その証拠に戦闘の音が近付く度に大きくなりやがる」

途切れた無線に、アシエンはプロードイネンスの身に何かあったと考え、ハーケンは目的地に近付くにつれて戦闘音はつきりと聞こえて来ると告げる。

「だが、俺たちの目的地はそこだ。マムには悪いが、ここは敢えて行かせて貰うぜ」

このまま進めば、戦闘に巻き込まれることは確実だが、目的地はそこであるため、敢えてハーケンは前に進むため、アクセルを強く踏んだ。

プロードイネンスの引き返せと言う言葉に従うことなく、目的地までトラックで突っ切ろうとしたハーケンたちであったが、やはり戦闘に巻き込まれてしまい、乗っていたトラックが流れ弾を受けて横転してしまう。

「OK、エブリワン。みんな、大丈夫か？」

横転した車内で、ハーケンは全員無事であるかどうかぶつけた頭を摩りながら問うた。

「俺は大丈夫だ。なんとたって、頑丈だからな」

「艦長、私は無事でヤンスよ」

「イテテ、私は大丈夫」



「OK、無事だな。ブロンドのミステリアスは、横転する前に、脱出したようだ」

車内に居る全員の声を聴いた後、唯一の脱出口であるドアを蹴り開けたハーケンは、横転する前に脱出したマリの姿を見て、全員が無事であることを確認した。それから全員を横転したトラックの車内から出し、再び徒歩への移動を開始する。

「さて、これほどの激戦区、チキンランで駆けるとするか」

周囲に繰り広げられる戦闘を見つつ、ハーケンはこの中を突っ切ると全員に告げ、言い出しつぺの自分が先頭を走った。

「しっかり私に掴まれ、ぺったんこ娘」

「ちよつと、一言余計、わっ!」

これに続き、アシエンはシディーを掴んで先を走るハーケンの後へ続く。

ヴァンも然り、改造された身体能力を駆使して流れ弾を避けつつ、ハーケンの後を追う。マリも同様に殿ではあるが、彼の後へ続いた。

途中、連邦軍のMS、Gキャノンが近くに巨大な両足を道路に着け、上空を飛び交うワルキューレのバルキリーに向け、背中のガトリング砲で対空射撃を行う。この際、大量の大きい空葉莢が逃げ回る市民たちに向けて排出され、流れ弾よりも酷い惨状を引き起こしていた。

一人の幼い我が子を抱いて逃げる母親の頭に、その巨大な空葉莢が当たり、彼女の命

を奪ったのだ。この危険な空葉莢を市民に向けて排出し続ける機体に乗る連邦軍のパイロットは、それに気付かず、ずっと上空に居る敵機へ向けて対空射撃を続けている。

未だに死んだ母親に縋りつく幼い子供を放つてはおけなかったのか、マリは流れ弾や空葉莢、空から落ちて来る連邦軍機の残骸を躲しつつ、その子を母親より引き離す。

「もう死んでるから」

空葉莢を受けた頭部より未だに血を流している骸となった母に、マリは見開いた瞼を閉じ、その子供を連れてハーケンたちと合流する。

「おっと、クールなイメージだったが、優しいところがあるんだな」

子供を抱きながら合流したマリを見て、ハーケンは彼女に改めて内に秘めた優しさがあると分かる。

そんな激戦区の中を突っ切る一行の前に、戦争博物館が見えた。

「OK、一旦あそこで休憩と行こう！」

そうハーケンが言えば、一行は彼の後に続いて戦争博物館に退避しようとする。向かう前に、連邦軍のヘビーガンとGキヤノン、重武装のスコープドック九機、それにサイドカーの助手席に立っている連邦軍将校に見付かってしまう。

「な、何者だ!!? 貴様ら!!」

そう将校が叫べば、彼に随伴するスコープドックの携帯兵装を向けられる。

「おい！ 今は俺たちにガンを向けている場合じゃ…」

歩兵やスコップドックに手にしている銃を向けられたハーケンは、敵にその銃口を向けると言おうとしたが、この瞬間に戦争博物館の正門が破れ、そこから二度目の世界大戦時にソ連軍によって運用されていたT-34、それも戦後に更に多く生産された85mm砲塔型が出て来た。

キューボラから上半身を外へ出しているこの古い戦車を所有する博物館の館長は、目に見えるワルキューレ機に向け、戦車の長砲身を向けながら拡声器越しで告げる。

『おのれ、メガミ人共！ この惑星を取り戻そうと贅沢な装備を持って帰って来たか！  
だが、このわしが居る限り、そうはさせません！ 頼りない連邦軍に代わって、このわしがお前たちをこの星から叩き出してくれる!!』

「なんだ、あの戦車に乗ったディレクターは？」

意気揚々と正門を突き破って現れた戦車に乗る博物館の館長に、流石のハーケンも伏せて驚きは隠せなかった。

『食らえ！ お前たちアパズレ共の戦車を葬り去った徹甲弾を!!』

拡声器を使って叫びながら、戦車の主砲を上空で連邦軍機を次々と撃ち落とすVF-25Sメサイアに向けて撃ち込んだが、撃ち込まれた徹甲弾は当たることなく、更に砲弾を撃った衝撃で砲身が爆発して撃てなくなる。

『ぬあ!? なんて砲身が爆発するんだ!? この戦車は、半世紀近くも動く傑作戦車だぞ!? それに手入れだつて…!』

爆発した砲身を見て、博物館館長は半世紀近くも動くはずのT-34の砲身が爆発したのが理解できないでいた。

この原因は前の戦争での酷使における砲身寿命か、それとも経年劣化の影響なのかもしれないが、その間にあのVF-25Sの僚機の一般タイプのVF-25Aが背後より迫ってくる。博物館前に居た連邦軍機は、向かって来たVF-25を見て逃げ出し始めていたが、館長は気付いていないようだ。

「な、なんで閉まらないんだ?」

「うわあああ!!」

「おい! なんて逃げるんだ貴様ら!? 戻つて…」

仕方なく、車内に戻つてから携帯型対戦車火器を取り出して肉薄しようとするが、キューボラのハッチは閉まらない。それどころか、背後より迫る敵機に怯えて乗員たちが逃げ出し始めた。これを止めようとした館長であったが、キューボラごと、バトロイド形態に変形したVF-25Aに蹴り飛ばされ、強い打撲で即死する。

「しめた、あの戦車を頂戴して目的地へ向かうか! 行くぞー!」

物陰に隠れて一部始終を見ていたハーケンは、あの誰も居なくなつた戦車を借りて目

的地へ向かうと決め、そこから飛び出して戦車へ向かう。

「OK、武装は全部排除だ。砲弾も弾薬も全部な。行け！」

「はいなのです、艦長。調味料ジャンキー、お前も来い。そこの雌豚もだ」

一気に走り抜けて戦車まで近付けば、車内に入つて撃たれる要因となる武装や弾薬の類を捨てるようにハーケンが命じた。相変わらずの毒舌であるが、ツツコミを入れている場合では無いので、車内に飛び込んで武装や弾薬を車外へと放り出す。この様子を、シディーはマリが助けた幼い子供、それも男児を抱えながら見ていた。

「く、クソ……このままでは……ん、あれは……？」

少数のVF-25やVF-31などの高性能バルキリー相手に二個大隊規模の戦力がズタズタにされていくのを見て、連邦軍将校は自分も他の友軍機と共に駆逐されると思っていたが、男児を抱えるシディーを見て、悪魔のようなひらめきを浮かべた。

「来い！」

「ちよ、ちよつと何よ!？」

それが思い付いた将校は、即座に行動に移り、シディーと男児を無理やり掴む。子供を盾にして、この街から逃げ出そうと言うのだ。

「おい、てめえら! 何してやがる!？」

『地面に伏せてろ!』

砲弾を纏めて捨てようとした時に、ヴァンは嫌がるシディーを無理やり掴んで盾にしようとする将兵達を見て、助けに行こうとした。

だが、ATの威嚇射撃を受けて防がれてしまう。煙が晴れた頃には、シディーのこめかみに拳銃の銃口を突き付ける将校の姿があった。それに、一機のATの高く挙げられた左手に男児が握られている。

「おいおい、これが軍隊のやり方か？」

「全員その場を動くな！ それとワイルドキャットの奴らもだ！」

銃声に気付いて、ハーケンもその様子を見て連邦の卑劣なやり方に苛立ちを覚え、拳銃に手を掛けようとしたが、シディーに銃口を突き付けられては手を出せない。

そんなハーケンたちに向けて大声で脅しを掛けつつ、地上や上空で味方機を次々と撃ち落とすワルクキューレの部隊にも告げる。VF-25Sに乗る部隊指揮官が、自機をガウオーク形態へと変形させ、道路の上に着地させてからキャノピーを開け、拡声器を持つて正規軍とは思えない行動に出た連邦軍に対しての抗議を行う。

『貴様ら！ 子供を盾にするなど、正規軍のやる事か！』

子供を盾にして逃げようとする連邦軍部隊に対し、抗議するヘルメットの下にマスクをした指揮官であったが、これに将校は拳銃弾で返答する。

「うわっ!？」

「お前らは子供やここいらの市民を撃てないんだろ!? 解放する気も無い癖にな! 我々が街を出るまでは子供は解放しない! 完全に撤退するまで我々を見逃せ!!」

拳銃弾をヘルメットに受けてコックピットの中へ退散する敵の指揮官に、連邦軍将校は抗議に応じる気も無く、子供たちを解放させたければ、自分等の撤退を黙認しろと大声で告げる。

『子供を解放したければ、直ちに戦闘を中止し、我が軍全体の撤退を黙認せよ! 応じない場合は、子供を人質にしたまま貴官らを撃つ!』

「なんて無茶苦茶な連中だ。これが軍隊って奴か?」

これを復唱する他の連邦軍将校に対し、ハーケンは半ば呆れ気味となる。

強硬手段に出る連邦軍に対して、マリはシディーと男児を解放しようと、この場で効果的な魔法の詠唱を始めたが、その必要は空から来るある男のおかげで必要なかった。その男は、巨大なロボットに乗って上空より現れた。

『子供を人質にとるとは、軍隊の風上にも置けぬ!』

「おっと、この声は……!」

「あのもみ上げ野郎すつな」

「もみ上げ野郎……?」

拡声器越し聞こえたハーケンとアシエンには聞き覚えのある声、それに反応して、

ヴァンは毒舌アンドロイドの発した言葉に疑問を抱いた。

「OK、ボスならなんとかしてくれそうだな」

声が出た方向にあり、上空よりこのサジタリウスのモスバサシテイに現れたのは、地上への加勢に向かったゼンガー・ゾンボルトのダイゼンガーであった。その巨大で圧倒的な戦闘力を持つロボットに乗る男を知るハーケンは、かの男ならこの状況を何とかしてくれると呟いた。



# 武神装攻ダイゼンガー第九話 悪を斬れ！ 斬艦刀!!

「あ、あれは……！」

「だ、ダイゼンガー……！」

上空より現れし巨大な鋼鉄の武人、その名もダイゼンガーを見た連邦兵たちは、噂に聞く破壊神の姿を見て、恐れおののき始める。その巨大な剣、参式斬艦刀を携えし破壊神に乗る男、ゼンガー・ゾンボルトは、堂々と拡声器を使い、コックピットから名乗り始める。

『我が名はゼンガー・ゾンボルト、悪を断つ剣なり！』

「や、やっぱり……」

「ぜ、ゼンガー、破壊神ゼンガーだ……！」

ゼンガーの名を聞いた連邦兵たちは、宇宙軍の将兵達をもたらした仇名を聞いて震え上がり、思わず手にしている銃を手放しそうになる。そんな自分の姿に、別世界であるが、DC戦争以上の時に恐れを抱く連邦軍の将兵達に対し、ゼンガーは人質にしている子供たちを解放するよう警告する。

『貴官らのしていることは軍隊の風上にも置けぬ鬼畜の所業！ 即時に人質にして盾に

している子供らを解放すれば、このゼンガーは一切の手出しはせぬ! 応じぬ場合は、貴様らを悪と断定し、この参式斬艦刀で貴様らを断つ!」

そう恐れを抱く連邦軍の将兵らに警告するゼンガーであったが、シディーらを人質に取る連邦軍将校がこれに応じるはずが無かった。理由は他のワルキューレの部隊が手を出して来ないと言う保証が無いからだ。

例えゼンガーが見逃しても、仮面を着けたパイロットが駆るバルキリー部隊に駆られるか、街中で待ち伏せ攻撃を行う空挺部隊にやられる可能性がある。

「黙れえ! お前が見逃そうとも、他のワイルドキャットの部隊が見逃すはずが無いだろうが! ふざけたことを抜かしやがって! おい、お前ら、餓鬼を盾にしたまま脱出だ!」

『はっ!』

自分の警告に応じず、子供を盾にしたまま逃げようとする連邦軍部隊を見たゼンガーは、彼らを悪として断罪するしか無いと判断した。

『愚かな…! 外道へと進むか…! ならば!』

「あーあ、ボスを怒らせちゃった」

戦闘能力が無くなった戦車から、近くでそれを見ていたハーケンは、子供らを解放しなかつた連邦軍部隊の事を気毒と思った。

何故なら、幾ら子供を人質に、それも盾にしたとはいえ、ゼンガーに勝てる保証が連邦軍部隊に何一つ無いからだ。ゼンガーは操縦桿、剣型の操縦桿を動かし、ダイゼンガーのロケットパンチとも言える攻撃を行った。

『ダイナミック・ナックル!』

そう叫んだ瞬間にダイゼンガーの両手が標的に向かって飛び、二機のMS、ヘビーガンとGキャノンが無力化する。

それも周囲の建造物に被害を出さず、道路のみに被害を最小限にとどめさせての芸当だ。これを見た連邦軍将校は、シデイーを近くに居る部下に向けて投げ付け、彼女らをもっと前に出すように怒号を飛ばす。

「奴め、本気か!? 餓鬼をもっと前に出せ! 連中が前に出ないようにしろ!!」

指揮官の指示に応じ、代わってシデイーのこめかみに拳銃の銃口を突き付ける兵士は前に出て、スコープドックに乗る操縦者も、左手に掴んでいる男児を高く上げてから前に出てゼンガーを威嚇する。

「おいおい、そいつはボスの怒りを逆なでするような行為だぜ?」

『おのれ、そこまで腐っているとは! 我自らが貴様らを斬る!!』

そんな行動に出る連邦軍の部隊に対し、ハーケンはもう手遅れだと言え、それを現すかのように、ゼンガーはコックピットのハッチを開き、単身生身で子供らを解放しよ

うと、日本刀一本を携えてダイゼンガーより飛び降りる。

飛び降りた高さは、並の人間なら死んでもおかしくない程の物だが、ゼンガーは何事も無かったように着地し、全力疾走で連邦軍部隊の元へ向かう。

「お、おお…!?!」

「飛び降りた!?!」

これに驚く連邦軍の将兵達であるが、そんな彼らに向けて指揮官は射撃命令を飛ばす。

「貴様ら! 何をクズクズしているか?! さっさと撃たんか!」

その怒号で我に返った連邦兵たちは、手にしているライフルや軽機関銃の類を、全力疾走で向かって来るゼンガーに向けて放つが、あり得ないことに、彼は鞘から引き抜いた日本刀の刀身を凄まじい速さで振り回し、自分に当たる銃弾を全て弾いたのだ。

「ひっ、ヒィィィ!?!」

「銃弾を斬りおとしたり、弾いてる!?!」

「もみ上げの大将、人外差に磨きが掛かっちゃいますね」

「どうなってるんだありやあ…まあ、俺の世界やあの連中たちにも出来る奴が居るが、まさか新西暦の世界にも居たとはな…!」

これには連邦兵達も驚愕せずにはいられず、流石のハーケンたちも驚くほかなかつ

た。銃弾を弾きながら連邦兵達に近付いたゼンガーは、手近な兵士たち数名を素早く斬り捨て、シディーを人質にする兵士たちの前へ目にも止まらぬ速さで近付く。

「ひっ!?!、っ、っ、こいつがどうなっても…」

瞬く間に数名の味方を斬り捨て、自分の目前まで来たゼンガーに向け、シディーのこめかみに銃口を強く押し付け、拳銃の引き金に指を掛けた兵士であったが、言い終える前に、片名の鞘を額に強く当てられ、脳震盪を起こして気絶してしまう。

「きゃっ!?!」

この際に、シディーを抑えていた手の力が抜け、彼女は解放される。ゼンガーは解放されたばかりの少女を銃弾より守るべく、即座にシディーの背後に立ち、彼女に向けて飛んでくる銃弾を弾く。

「おっと、ボスだけじゃないぜ!」

ゼンガーに続き、ハーケンもステークの発射口とりツパーを取り付け、大型銃剣の付いた先代より受け継いだ武器、ナイトファウルを取り出し、ゼンガーに向けて銃を撃つ兵士達に銃弾を放つ。

放たれた弾丸は全て命中、ゼンガーに向けて銃を撃っていた連邦兵たちはバタバタと倒れていった。その間にアシェンがシディーに近付き、ゼンガーに彼女は自分に任せろと告げる。

「むっ、お前は確か…」

「お久しぶりーっ、もみ上げ野郎。このちっばいは任せてシヨタを救いに行け」  
「助かる」

新西暦の世界でハーケンと共に戦ったアシエンを見たゼンガーであったが、それを懐かしんでいる暇は無いので、シディーを彼女に任せ、男児を抱えるATに向けて走り出す。ゼンガーに向けて銃を撃つ連邦兵たちはまだ居たが、ハーケンの援護射撃によって全滅し、後はAT部隊のみであった。

「通常の刀身では斬れんか…ならば…!!」

ゼンガーはATの装甲は斬艦刀では斬れぬと判断し、それを断ち切るための刀身にすするため、手にしている日本刀に力を込めた。

「靈式斬艦刀!!」

『か、刀が!?!』

『馬鹿デカい大剣に変わったあ!?!』

ゼンガーが力を込めれば、刀身はたちまち大きくなり、ダイゼンガーが持つ斬艦刀を人間サイズにまでした物と変わり果てる。それを見たATのパイロット達は驚きの声を上げたが、その直後に機体ごと斬られ、斬艦刀の錆となる。

僅か数秒ほどで、二個分隊程居たAT部隊は、男児を抱えているスコップドック一機

のみとなった。

「う、うわあああ!!」

次は自分が斬られる番だと思った連邦兵は、機体を捨てて逃げ去った。この時、ATの左腕は男児を抱えたままであったが、ゼンガーの素早く、そして正確な斬撃で左腕ごと斬りおとされ、男児が拘束より解放される。

「大丈夫か？」

男児は斬りおとされた腕と共に宙を舞ったが、ゼンガーに受け取られて無事に済む。

『生身のゼンガーはこの俺が……!』

だが、油断は出来ない。戦意を失っていないパイロットが乗る中型のオオカミ型ゾイド「コマンドウルフ」が大きな口でゼンガーを噛もうとしたが、ヴァンの蛮刀で頭を斬りおとされて無力化される。

『今度は俺が……うわあああ!!? なんだこれは!?!』

次に偶然にも近くに居たダガーIがビームを撃とうとしたが、マリが唱えた魔法なのか、機体全身から茨の根が生え、数秒も経たないうちに植物の一部となったかのように動かなくなった。

「あ、ああ……」

一瞬の内に、自分の部隊と他の部隊を排除したマリとハーケン、ゼンガーらの人知を超える程の力を見た指揮官は、自分一人だけでも逃げようとしたが、後からやって来たワルキューレの歩兵部隊に銃口を向けられ、先ほどの威勢が嘘のように彼女らに投降した。

戦闘が終わった後、ゼンガーは男児を抱えながらハーケンらと合流する。ハーケンらの姿を、新西暦の世界を同盟軍によって追われて以降に見たゼンガーは、本当に本人たちであるかどうか問う。

「ハーケン、ブロウニングか…?」

目前の良く知る武人のような人物に名を問われたハーケンは、はぐらかすことなく素直に答える。

「ああ、俺だぜ。スーパーサムライ。偽物だと答えてほしかったかい?」

「その口調、まさしくハーケンのようだな。一体この世界で何をしているんだ?」

答えように本人であることを確認すれば、ハーケンたちがこの世界に来た事情を知らないゼンガーは、彼に何をしに来たのかを問う。

「そいつはこっちの台詞だぜ、ミスターブシドー。なんであんたがガールズアーミーズのゲストジェネラルなんかになってんだ?」



「そうだったな。実はこれには事情があつてだな」

ハーケンにはゼンガーがワルキューレになぜ属しているのかを問い返して来たので、まずは自分が何故にワルキューレに属している理由を語った。

「なるほど、そつちの世界にここのファツキン・アーミーの敵方であるライアー・アーミーに侵略されて、仕方なくガールズアーミーのお世話になつてることか」

新西暦の世界が惑星同盟軍の侵攻を受け、世界より脱出する他なかつたと訳を話せば、ハーケンはそれに納得して頷く。自分の世界も、新西暦程とは行かない物の、双方の巨大勢力から徐々に侵略されつつあるのだ。

「そうなる。で、お前たちはこの世界で何をしてるんだ？ 次元転移装置の誤作動にでも巻き込まれたのか？」

「いや、違うぜ。そちらのエレガント・ウーマンの依頼で、この世界に来たのさ。依頼内容は人探し。シーのプリティガールを探してる」

「ほう、中々気品に溢れる女性だ。何所の王族か、それとも貴族か財閥の令嬢か？」

次に問われたハーケンは、この世界に来た理由をマリの依頼、それもルリの探索を手伝っているとゼンガーに彼女を指差しながら答えた。マリの姿を見たゼンガーは、その美貌さに何処かの王族か貴族、財閥の令嬢と勘違いした。

「いや、そういう話は聞いていない。まあ、俺たちの世界のような人間であるだけは分か

るな」

「そうか。では、この子の母親か父親は何所だ? ずっと抱えているのは少々な…」

マリがそのような家系の類の人物だとは分からないとハーケンが答えれば、ゼンガーは抱えている男児の親は何所なのかを問う。男児の母親の最期を知っているハーケンは、少し表情を暗くして、母親が亡くなっていることをゼンガーに告げた。

「ああ、そのボーイのマザーは…」

「戦闘に巻き込まれて死んだか…誰か、この子を避難所まで連れて行ってやってくれ!」  
男児の母親の最期を知ったゼンガーは、近くを歩く兵士に男児を最寄りの避難所まで連れて行くように指示した。命令に応じた兵士が男児を代わって抱えれば、ゼンガーはまだ物事も分からないであろう男児に、これからも強く生きるよう告げる。

「幼子よ、君の母は死んだが、父か親戚と共に強く生きろ。何事にも屈してはならんぞ」  
自分の言っていることは、男児は理解してないだろうが、それでも気持ちだけは伝わっただろう。男児は命じられた兵士に抱えられたまま、避難所へと消えて行った。

「さて、その少女も…」

「私は良い。これから迎えに行くんだから」

シディーにも避難所へ連れて行くように兵士に指示を出そうとしたが、彼女は母親を迎えに行くためにそれを断る。

「迎えに行く…？ 君の身内は動けないのか？」

「いえ、ラボに居るのよ。この近くの発掘現場のね」

「それは危険だ。俺が迎えに行く。君は…」

シディーの母親が居る場所が、激戦区であると知ったゼンガーは、危険だから自分が代わって行くと告げたが、ハーケンより愚問であると告げられる。

「おっと、善意サムライ。そいつは愚問だぜ。彼女は自分で迎えに行くと言ってるんだ。それに、さつきは人質に取られていたのに、行く気が失せてない」

「確かに一切の恐れを抱いてないな。では、俺も同行しよう。同行者は多い方が良い」

あれほどの事が遭ったにも関わらず、シディーが母親を迎えに行くことに、何の後悔もしていない表情をしていることをゼンガーが見れば、自分も同行したいとハーケンに告げる。

「OK、ボスが行くなら百人力だ。それに車もある。これでエビフィングだ」

流石にダイゼンガーは不要だが、ゼンガー本人が同行するなら力強いので、彼の同行を即座に許可する。発掘現場まで行く乗用車もあるので、これで万全の状態だ。

「では、一個分隊程を…」

「いや、兵隊の同行は撃たれる可能性がある。それに連邦の占領地域も通る。だから、降伏の印であるホワイトフラッグを立てて行く」

「うむ、これで避難民の車と捉えられて怪しまれずに行けるな。では、行くか」

「OK、全員乗車だ!」

一個分隊ほどの歩兵も同行させようとするゼンガーであったが、それでは撃たれるので、ハーケンには白旗を立てながら向かうと告げれば彼は納得し、先に戦闘力を全て剥ぎ取ったT-34中戦車に乗り込んだ。それに続き、ハーケンらも中戦車に乗り込み、避難所まで向かう。

白旗を立てるので、これで撃たれることなく進むことが可能だ。戦車に乗りながら、一行はシディーの母、プロローディネンス博士が避難している発掘現場のラボへと向かった。

発掘現場にあるラボに通じる地下通路まで向かうまでは、激戦区を通るしかなかったが、白旗と装甲のおかげか、なんとか連邦軍の支配下にある地下通路まで到着することが出来た。

「後はここを通れば…」

キューボラから上半身を出し、地下通路へと入ったのを確認したシディーは、母の元まで後一步だと口にした。

ちなみに、戦車を動かしているのはアシエンであり、彼女の余り信用ならない性能差

とは裏腹に、安全運転を行っている。そんなシデイーの元に、増援として外に出撃する三機のジエガンR型のパイロットが、開きつ放しのコックピットから声を掛ける。

「おい、譲ちゃん！ 列車ならもう出ちまったぜ！」

「えっ？ 私達を置いて…!？」

「とにかく、ワイルドキャットが入って来れば、手を挙げて降参するだな！」

通り際に列車は出たと告げる連邦のパイロットに対し、その訳を問うシデイーであるが、彼は適当に答えてから地下通路への出入り口へと僚機と共に向かった。

「おい、止めようぜ！」

「どうしてだよ？ 行かないきや、俺たち銃殺刑で殺されちまうんだぞ？」

出入り口までもう少しの所で、先頭の機体に乗るパイロットが機体を立ち止まらせ、援軍に行くのは止めようと告げた。これに同僚は、銃殺刑で殺されると言つて何とか行かせようとしたが、もう無駄であると言われる。

「お偉いさん方は、とつくに逃げ出してるさ！ それに最後の列車はこの町一番のクソツタレのキズラーとサイキックハンター共が占領して、誰かを待ってる。あんな奴らのために死ねるか？」

「そりやそうだな。じゃあ、トンネルを通つて、隣町まで逃げるか」

行くのが無駄な理由が、キズラーらが無理やり占領した避難列車の発進までの時間稼

ぎが無駄であると告げると、二機目の機体に乗るパイロットはそれに納得して、隣町までトンネルを通って逃げると発言した。

これは立派な敵前逃亡だが、負け戦に行くほどの戦意は彼らにはないと言う事だ。

いざ、逃げ出そうとした時に、彼らの三機のジェガンが居る地下通路の物資運搬用のエレベーター近くに、ワルキューレの機体、それもVF-31Jが現れた。小型クラスの機動兵器しか入れないスペースをVTOLのように飛行できるガウオーク形態で侵入し、こちらの侵入に驚いている三機のジェガンを捉える。

「なんだよ……!」

現れた敵機に、先頭のジェガンのパイロットはコックピットのハッチを閉め、頭部側のバルカン砲を撃ちながら後退した。背後の二機も、飛んでくる破片から身を守るために、ハッチを閉めてバルカン砲やシールドのミサイルを撃ちながら奥へと後退し始める。

無論ながら、避難中の避難民にも飛び火し、何名かの犠牲が出たが、三機のジェガンは民間人を守りもせず、自分たちだけトンネルを通ってこの街から逃げ出した。

民間人を置いて逃げ出したジェガンを追跡せず、VF-31Jのパイロットはキャノピーを開け、自分の目で周囲を確認し始める。それから出入り口より、ガウオーク形態のVF-25メサイア三機が入ってくる。同じくキャノピーを開けており、先頭のVF

—25Sにはあの仮面を着けたパイロットが乗っている。

「奴らめ、ジークフリートを見るだけで逃げて行つたぞ」

「追います?」

V F—31Jを見るだけで逃げた三機のジエガンを気にして口にした仮面に、V F—31Jのコックピットの中でチョコスティックを食す少女のパイロットが、追わないのかと問う。

だが、彼らには逃げた臆病者を追う時間も暇も無い。

「放っておけ、それより我々には優先すべき任務がある。敵わぬと知りながらも民間人を守るために戦わない連中の相手をしている暇は無い」

少女にそう告げると、後続の歩兵部隊に民間人の保護と避難所に逃げた連邦兵の拘束を命じる。

「歩兵部隊は先に突入し、民間人の保護と逃げている連邦兵を拘束しろ! 我々はここを確保する!」

「イエッサー!」

L85A2ブルパップライフルを持つ士官に命じれば、仮面は出入り口を確保した。ここに居ても出番が無いのか、V F—31Jのパイロットはキャノピーを閉め、機体と共に自分を必要とする部隊の元へ飛び去って行つた。

先の逃げ出した三機のジェガンのことは知らず、マリとハーケンらは脱出用の列車があるホーム近くまで来ていたが、出入り口に群がる人々が道を塞いだため、ハーケンは手近な男に問う。

「人だかりが凄いな。へい、ミスター。ここを通り過ぎてったソルジャーは、列車はもう行ったとか言ってたが、あるように見えるが?」

問われた男は、向こう側で起こっている騒ぎの要因を、聞いて来た奇妙な格好の男に語った。

「クソツタレのキズラーの悪徳警官共と、サイキックハンターの連中が脱出用列車を占領してるんだ。連邦軍の負傷兵や兵隊共も追っ払ってるぜ」

「…マジの悪徳ポリスチーフだな」

「警官とは思えん行動だ。市民や負傷者を締め出すなど」

キズラーとサイキックハンター達が脱出用の列車を占拠していると分かれば、ハーケンは呆れ、ゼンガーは警官にあるまじき行動をする警察署長に怒りを覚える。

この問題を解決して、プロードイネンス博士が避難している発掘現場のラボまで向かうには、キズラーの前に自分を出すしかないと思ったシディーは、ここは自らあの警察署長の前に出ると告げる。



「きつと、私を捕まえるまで列車から出そうも無さそうね。ここは私が行くしかなさそうね」

「あの変態野郎のどこに行くのか?」

あの男の所まで行くと言ったシディーに、ヴァンはまた誘拐されに行くのかと問う。

「ええ、行つてガツンと言つてやるわ。それに私が行かなきゃあいつはここが戦場になるまで占拠し続けるわ」

「ほう、随分と強気な事を言う。随分と肝の据わっているようだな。俺も同行しよう、市民を守る警官とは思えぬこの行動、許すわけにはいかん」

違つとヴァンにシディーが答えれば、その勇氣に感化されたのか、それともキズラーに一言いいたいのか、ゼンガーもついていくと言つた。

「じゃあ、みんなで悪徳署長に文句を言いに行くか」

「ええ、街のみんなに私達が代わつて言いに行かないとね!」

「ついでに顔面にパンチとキックすつぜよ」

そうと決まれば、ハーケンが仕切り、シディーが賛同すれば、最後にアシエンが殴り付けることも忘れずに言えば、一同は人を掻き分けてキズラーとサイキックハンター達が占領している列車まで向かう。

群衆の中には連邦軍の将兵達が混ざつており、その殆どが先に逃げ出した指揮官たち

に置き去りにされた者と負傷兵たちだ。最終列車を占拠するキズラーとサイキックハンター達に対し、群衆と共に非難している。

列車の守備には数名の警官とハンター達の他に、スコープドックや、連邦軍の最強の兵科である機動歩兵が四人ほど着いていた。機動歩兵はスパルタンのミニユルアーマーとは違って余り小回りが利きそうにないが、戦闘力はスパルタンより少々上回っており、スパルタンよりも危険とも言える。

「俺たちを先に乗せてくれんじゃないのか!?!」

「ふざけんじゃねえぞ!」

「失礼、失礼、通るよ」

「おい、何すんだ!?!」

そう怒りを露わにする群衆たちを掻き分けつつ、シディーたちは最終列車を占拠するキズラーたちの元へ向かう。人だかりを掻き分けながら進むシディーを発見した武装警官の一人は、上司であるキズラーに報告する。

「ん、署長! 例の少女です!」

「来たか。よし、その子だけを通せ。ハンター共にも協力させろ」

「はっ!」

キズラーがサイキックハンター達にも協力するように武装警官に言えば、彼らは言わ

れた通りに、シディーだけを誘導しようと、手にしている銃を群衆や負傷兵たちに向けて怒鳴り付ける。

「その少女を前に出せ！」

ハンターは群衆や負傷兵たちに向け、高圧的な態度でシディーだけを前に出すように命じたが、これが彼らの怒りを焚き付けてしまったようだ。怒りに燃える群衆と連邦兵たちは、一気に武装警官やサイキックハンター達に襲い掛かる。

「ふざけんな！」

「てめえらが降りろ!!」

怒りに燃える群衆が列車へ殺到すれば、それに合わせてか、ワルキューレの部隊が入り口を死守する連邦軍部隊に攻撃を仕掛ける。

「出入り口からワイルドキャットの部隊が！」

「これ以上は群衆を抑えられません!!」

「駄目です！ 発車しましょう!!」

群衆と敵部隊の侵入に対し、部下たちはキズラーや隊長に指示を請う。これに安全圏とも言える列車の中に居るキズラーは、ハンター達の隊長にどのような対処が効果的なのかを問えば、彼は冷酷な指示を出す。

「これはどう対処して良いですかな？」

「射殺だ、列車に近付く者全て射殺しろ。我が軍の兵も含めてだ。それから守備隊には死守命令を出せ」

「だ、そうだ。直ぐに伝えろ」

この冷酷な指示に、キズラーが直ぐに実行しろと命じれば、部下たちは友軍の兵士が混じっている群衆に向けて手にしている銃を撃とうとした。だが、その銃弾は群衆を掻き分けて来たハーケンやアシエンに、手にしている銃を弾かれる。

「な、なんだ!?!」

「フン!」

「ぐあ!?!」

何が起こったのか理解できず、混乱した警官やハンター達に、ヴァンとゼンガーは一気に群衆から抜け出して、各々の得物で銃を撃とうとする者達を瞬く間に制圧する。

「な、何が起こっている!?!」

「わ、分かりません! 突然、変な連中が……」

この騒ぎは、列車の中に居るキズラーにも聞こえており、慌てて出て来た彼は、部下に何が起こっているのかを問うた。

彼も何が起こっているのか理解できなかったが、ハーケンらの存在を告げようとした時に、マリアに魔法の力で群衆の中へ引っ張られる。

「し、シディー、あ、あいつ等は…!？」

「あんたの言う通りに来たわよ、警察署長。さあ、列車を市民や負傷している兵隊さんたちにも明け渡しなさい」

「ふん、何を今さら。こちらにはまだ、ATと機動歩兵が居るー!」

一瞬の内、ATや機動歩兵以外の部下とハンター達が全滅させられたので、映画や漫画、ゲームで見られない光景を現実に見て呆然としている群衆たちの中より出て来たシディーに問えば、彼女は列車を市民や負傷兵たちに明け渡すように告げる。

これにキズラーは、まだ負けを認めず、待機しているATや機動歩兵に武器を撃つ構えを見せさせるよう顎で指示を出す。機動歩兵を見たゼンガーは、厄介な敵を相手に自分等だけでは群衆やシディーたちは守り切れないと判断し、刀を鞘に納める。

「むっ、機動歩兵か…厄介だな」

「連邦軍最強の兵科って奴か。ちっ、これで対等になったつもりか？ ファツキンポリスメン」

ゼンガーが重装備なアーマーを着込んだ機動歩兵を見ながら言えば、その存在を知っているハーケンも銃をホルスターに収め、対等になったつもりなのかをキズラーに問う。

この問いにキズラーは勝ち誇った笑を見せながら、自分等が戦力さで勝っていると答

え、シディーに自分の列車に乗るように告げる。

「我々が勝っている様に見えるがな。では、シディー。私と共に来てくれるかな?」

「…っ! 最低ね、あんた」

「何とでも言え。それに私は…」

シディーに非難されれば、キズラーはそれに乗らず、あることを喋ろうとした。だが、それはサイキックハンターの隊長に取られる。

「君の母は我々サイキックハンターが殺害した。魔法の類に関わった罪でな」

「おい、そいつはジョークにしちゃ、コールすぎないかい? もうちょつと洒落たジョークを言わなくちゃ、パーティーのスピーチは出来ないぜ」

「そうよ、突然、何を言い出すかと思ったら、私のママを殺した? バカじゃないの?」  
ある事とは、シディーの母であるプロードイネンス博士を殺したと言う物であったが、シディーとハーケンらは冗談と受け取る。

馬鹿にされたと思ってムキになった隊長は、それが事実であることを告げるため、自分の左腕の上に装着された端末を動かし、プロードイネンス博士の遺体が映った映像をシディーらに見せつけた。

「これが証拠だ! この女は発掘現場で発見された遺跡に魔力反応があるにも関わら

ず、我がサイキックハンターに通報せず、我々に黙って無断で調査を行った！我々は一度遺跡の調査の停止命令を出し、その後遺跡を爆破するように忠告したが、あの女はそれを無視し、調査を続行した！これに我々は規定に則り、魔力に取り付かれた者と断定して処分を下した！ただし、消火装置による窒息死であるがな。だが、言い様だ！」

「そう、つい先刻な。私が止めろと言ったんだが、法律は守らねばな」

「ま、ママ……？うそでしょ……そんな……!？」

ロボの消火装置が撒き散らされた消火剤で窒息死した母親の遺体を、映像越しに見たシディーは、何が起こったのかを信じられず、両膝を着いた。

それを得意げに、キズラーは止めたが法律には逆らえないと告げる。これにハーケン は、アシエンにあの映像が本物であるかどうかを問う。

「おい、フェイクならフェイクだと言ってくれ……」

「残念ながら、あの映像は本物です。加工された形跡はなく、遺体も彼女本人であります」

「卑劣な……!」

偽の映像であることを信じたかったハーケンであるが、解析したアシエンは、映像を本物であると特定し、更に遺体まで本人であると申し訳ない表情で告げた。

それを聞いて、ゼンガーは刀の鞘を強く握ったが、周りに居る機動歩兵の所為か、下手に動けない。もし動けば、この場に居る全員が、殺されてしまうだろう。

「てめえ! なんで嬢ちゃんの母ちゃんを巻き込んだ!? 俺たちと関係ないだろうが!!」

「喧しい! この女は我々に黙って調査していたんだ! 法律や規則を守らん者の当然の末路だ!!」

「お前たちみたいなの危険な奴らが居るから、俺たち普通の人間の生命が脅かされてるんだよ!」

『そうだ、そうだ! 化け物は死ぬ!!』

ヴァンもシディーの母を自分たちで勝手に作った法律や規則で殺したハンター達に怒りを隠せず、直ぐに隊長にぶつけたが、自分たちが絶対であると信じる彼らには通じず、逆に反論される。

彼らからしてみれば、ハーケンやヴァン、ゼンガーのような化け物染みた強さを持つ者達は、化け物と同じなのだ。母親の死を現実を受け入れるしか無かったシディーは、泣き崩れ始める。

「そんな、ママ……私は……」

「今の内に涙が枯れるまで泣いておくと良い。だが、列車の中で泣き続けられるのは勘



「お願いしたいがね」

泣き崩れる少女を見ながら、キズラーは酒瓶を開け、中身をガラスコップに注ぎながら飲む。そんなキズラーに合わせるように、隊長も紙コップを取り出し、同じく中身を注いで飲み始め、遺跡の付近と機密データ保持のためにデータセンターの破壊に向かわせた部隊の状況はどうかを近くの部下に問う。

「で、データの回収はどうなっている？ それにデータセンターの破壊はどうした？ 流石に遅すぎやしないか？」

「サー、地下まで侵攻してきたワイルドキャットの部隊に阻まれ、多数の犠牲者が出ております。データセンターの部隊も同様であり、どちらとも撤退したいと言っておりますが……」

その報告を聞いた隊長は紙コップを投げ捨て、部下の胸倉を掴みながら怒鳴り付ける。

「馬鹿者！ 遺跡のデータはいいとしても、データセンターには連邦軍の全軍の機密データが幾つか入っているんだぞ!!? それが反乱軍共に漏れたらどうするつもりだ！

死んでも破壊するまで戻って来るなど伝える!!」

「さ、サー……」

「部下を消耗品のように扱うなど、指揮官失格だな」

部下を消耗品としか思っていない隊長に、ゼンガーは両腕を組みながら一言告げる。

これに反応してか、隊長は拳銃をゼンガーに向けながら怒鳴り付ける。

「黙れ! まず貴様から死にたいか!」

「フン、このゼンガー・ゾンボルト。鉛球程度などでは俺は殺せん」

拳銃を向けながら怒鳴り付ける隊長に対し、ゼンガーは何の動揺もせず、ただ武人として立ち続け、卑劣な行為しか出来ない隊長を睨み付けながら、その程度では死なないと告げる。これにますます怒り、引き金に指を掛けようとした。だが、撃とうとした瞬間に拳銃の隙間から茨が生え始める。マリの魔法だ。

「い、茨…!?! うわあ!?!」

茨が生え始めた拳銃を、隊長は慌てて投げ捨て、無線機で待機している狙撃兵や機関銃兵、機動歩兵とA T部隊に攻撃を命じる。

「ここ、攻撃だ! 抵抗した奴らを攻撃しろ!!」

「お、お前たちもだ! 奴らを殺せ!!」

それに慌てて合わせたかのように、キズラーもハーケンたちに攻撃を命じた。頼りの狙撃兵と機関銃手は茨に吞まれ、A T部隊はハーケンのカード爆弾、機動歩兵はシディーがエイジヤに命じたのか、火器管制システムと歩行制御装置をハッキングさせて停止させた。

「ど、どうした!? 何故動かん!？」

「歩行制御装置と、火器管制システムが動きません!!」

「なにいい!? このままではやられてしまう!」

「おのれ、シディー! 早くハッキングを解け!!」

この場で唯一ハーケンらと対等に戦えそうな機動歩兵が使えなくなってしまうのを聞いて、キズラーと隊長の顔が青ざめ、直ぐにシディーにエイジャのハッキングを止めさせるように怒鳴ったが、母親を殺した者達の指図を彼女が聞くはずが無かった。

「シンデレラ、派手に暴れて良いぜ!」

「了解。コード、フアンタズム・フェニックス発動!」

その間に、武装警官やハンター達は、ハーケンたちに一掃されていく。

ハーケンが必殺技の解放を許可すれば、アシエンはそれに応じてそれを発動し、周囲に居た武装警官やハンター達を一掃し始めた。数名を殴りや蹴りで無力化した後、コードD T Dを発動して、更に数名を纏めて倒し続け、ハッキングの影響を受けないATの元へ向かう。

「ワアアア!!」

「ああ、なんか怠いな〜! これで、フィニッシュユ!」

パイロットが乗り捨てたスコープドックに向け、アシエンは早く終わらせるためか、

近接用爆発技であるグラス・ヒールを食らわせて破壊した。ヴァンもかなりの数の敵を倒しており、更にATにまで生身で破壊しようと、蛮刀を突き刺そうと、ATに飛びつく。攻撃を躲しつつ、ATに張り付けば、蛮刀を突き刺して無力化する。

「クソツ、これでも……!」

ロケットランチャーを持つハンターは、周りが次々とやられ、後は自分だけになるのではと思い、ゼンガーに向けて手にしている対物火器を撃とうとしたが、ハーケンが持つリボルバー、「ロングトゥーム・スペシャル」を撃ち込まれる。

「ど、どうして起動しない!? うわっ!」

「おら、出る!」

戦っているのはハーケンたちだけでは無い。市民や負傷兵たちも彼らに協力し、共に戦っているのだ。彼らは機動歩兵のアーマーの中に居る操縦者を、ハッチを開けて叩き出す。

近くの警官やハンターらにも襲い掛かり、キズラーや隊長の恐怖を仰ぐ。更にはエイジャが列車のドアを全て開いたのか、列車の中にも群衆が雪崩れ込む。残りのAT部隊や機動歩兵部隊は、全てマリの魔法でやられるか、ハーケンたちや群衆に潰された。

「だ、駄目だ……ここにも奴らが……!」

「わ、我々だけでも……!」

そう自分等だけで逃げようとするキズラー達であったが、その前に怒りに燃えるゼンガーが立ちはだかる。

「この悪を断つ劍、ゼンガー・ゾンボルトが、シディーに代わり、彼女の母の仇討ちを取る為、貴様らを斬る！」

「ふ、ふざけやがって！ 正義の味方気取りか!? 死ねえ!!」

「冥府への案内つかまつる！」

立ちはだかったゼンガーに対し、隊長は中半怒りながらも右腕のガントレットにある隠し劍を出して斬り掛かったが、最強とも言える剣士である彼に挑むなど、愚の骨頂であった。一瞬の内に突きを躲され、腹を斬られて息絶える。

「う、うわあ…!?!」

隊長が斬り殺されたのを見て、キズラーは尻餅について後退さる。ズボンの股間の辺りは、失禁でもしているのか、濡れ始めていた。

これを見ていた部下がゼンガーに向けて一発の銃弾を放ったが、彼が持つ刀が再び靈式斬艦刀となり、一振りするだけで銃弾が碎け散り、放った本人も風圧に斬られたかのように、血を吹き出して列車から落ちる。

「ま、待て…! 金なら幾らでも出そう! わ、わしは様々なコネを持っている! お前を連邦軍の将軍だつて出来るんだぞ!?!」

必死に自分のコネが凄いと命乞いをするキズラーであったが、これが逆にゼンガーを怒らせてしまったようだ。

「自らの信じる物以外を信じず、それ以外を異端と見る貴様らに、掛ける情けは無い! この靈式斬艦刀で、貴様が今までその欲望で死んでいった者達に、詫びると良い!!」

「ひえええ!!」

目前の巨悪に怒りを燃やすゼンガーは、手にしている靈式斬艦刀に更なる力を込めた。すると、この刀を斬艦刀へと作り上げた靈力を操る巫女と同等の力が伝わって来た。

「(この力、神夜かぐやと同等の力? そうか、この惑星の地下遺跡には、靈力に関する物であったのか!)」

そうプロローディネンス博士が調査していた地下遺跡が、靈力に関する物であった事が分かれば、その巨大な刀身を振り下ろした。

「チエストオオオ!!」

掛け声を上げながら靈力がこもった巨大な刀身を、掛け声を上げながら振り下ろせば、キズラーは左右に両断され、靈力によってその肉体は消滅した。

この街の警察署長でありながら、汚職に塗れ、更に自らの欲望で数多くの人間を苦しめたか、殺して来たキズラーを斬ったゼンガーは、彼を斬り殺した靈式斬艦刀を肩に担

ぎ、決め台詞を吐いた。

「我が名はゼンガー・ゾンボルト、悪を断剣なり！」

彼がその言葉を放った頃には、ホーム内における戦闘は終わっていた。勝敗はもちろ  
ん、シディーが出会った変わった変わった友達であるマリとハーケンたちであった。

## 物量の波

連邦軍制圧下にある惑星サジタリウスのモスバサシテイにおける戦いは、攻め側のワルキューレの勝利に終わった。

戦闘は数時間余りで終了となっている。連邦から見ても、兵力に劣るワルキューレがこの都市を僅か数時間余りで占領できたのは、現地の連邦軍部隊の士気と、練度不足のおかげであろう。それか敵の指揮官が部下よりも先に逃げ出してくれたおかげだ。

そのおかげで、ワルキューレは連邦の制圧下にある惑星での目標を遂行することが出来た。

さて、なぜワルキューレがこの惑星を攻撃、それも大都市の一つを攻撃したのかは、現地に居るメガミ人やノンダス人ゲリラの支援でもあるが、もう一つはプロードイネンス博士が調査を行っていた遺跡にある。

その遺跡は魔術関連の物であり、戦局を左右しそうな魔力を秘めた書物が眠っているとされている。

それに目を付けた戦乙女たちが、魔術や様々な超常現象を排除する専門家たちであるサイキックハンターが破壊しようとする前に、こうして攻めて占領したわけだ。



数時間余り、それも約四時間余りで街を占領したワルキューレの部隊は、直ぐに街の周囲一帯に防御線を築き、遺跡の呪物や魔法関連の書物を回収しきるまで防御の構えを見せた。

これに対する連邦軍は、先ほどの醜態を敵方である同盟軍には見せまいと、地上と宇宙で膨大な数の部隊を集め、自分等が反乱軍と表するワルキューレに対しての反攻作戦に打って出ようとしていた。

「お前たち、乗らなくて良かったのか？」

先の戦いでこの街の悪徳警察署長、キズラーを自分の正義の剣「靈式斬艦刀」で斬ったゼンガーは、残って居る連邦軍の捕虜達に、先ほど市民と負傷兵を乗せて出発した列車になぜ乗らなかったかを問うた。

「そりゃあ、負傷者に席を開けねえとな。俺たちは元気だからよ」

「ほう、俺が思っていた連邦兵とは違う返答だな。てつきり、負傷兵を捨ててまで逃げろと思っていたが」

「それ、偏見過ぎるだろ。俺たちUNSCの海兵隊は、自分が残りたいと思う奴以外、救うヒーローなんだぜ？」

答えを聞いたゼンガーが、自分等に対するイメージを口にすれば、それは偏見だと海

兵隊員は豪語する。彼らが何故ワルキューレの捕虜となったかは、自軍の助けを待っているからだ。

UNSCの海兵隊を初めとする連邦軍の中で優等生に当たる勢力の将兵達の他に、同勢力所属の陸軍や空軍、海軍、ISA全軍の将兵達、COGの将兵達、ヘリック共和国の将兵らは自軍の助けが来るまで捕虜となつてここに残ると決めている。

だが、優等生では無い地球連邦や地球連合、他の勢力の者達は市民権や選挙権を得るために志願入隊や徴兵を受け入れた者ばかりなので、自分等を消耗品扱いする自軍に対する忠誠心は無く、更に自分等を見捨てて街から逃げ出した指揮官たちを恨み、ワルキューレに志願しようとする者達さえ居る程に、自軍に対する誇りや名誉も無かつた。

そんな劣等生組の勢力の将兵達のように、ゼンガーはこれらの志願兵を受け入れる反巨大勢力同盟軍と言う名の義勇軍に、海兵隊員などの優等生組に問い掛けた。

「で、お前たちはワルキューレの反連邦・反同盟十字軍に志願するつもりはあるか？」  
「馬鹿言え、俺はマリーンズだ。十字軍に志願してエルサレムに遠征はしない。遠征するとしたら海兵隊員としてだ」

「そうだ。俺は厳しい訓練を受けて来た戦略惑星同盟軍の兵士だ。エルサレムにはISA Aとして行く」

「俺たちCOG、いや、ギアーズはローカスト共を全員、血祭りにしてから行く」

「俺はゾイドで行つてやる。ただし、戦争が終わつてからな」

「中々、元氣のある奴らじゃないか。連邦軍も勿体無いことをしたな」

その問いは愚問であつたが、敵ながら元氣のある連中とゼンガーは彼らを褒め称えた。

「よう、エンジョイ侍。捕虜との会話は楽しいかい？」

そんなゼンガーの元へ、ハーケンが煙草を口に啣えながら近付いてくる。

「おお、ハーケンか。シディーはどうしている？」

「今、ロイヤルレデイが慰めている所だ。なにせ母親を知らぬ間に殺され、それを自慢げに見せ付けられたからな……ありや、トラウマになりかねないぜ」

「サイキックハンターめ、残された者の気持ちなど分かんのか」

「連中、血も涙も無さそうだしな。多分、あいつ等の方が異端者じゃねえかな。何でもかんでも自分等が優先で正しいと思つてるやがるんじゃないやねえか？」

声を掛けて来たハーケンに、ゼンガーがシディーの様子を問えば、彼は彼女の身を案じつつ、顔を暗くしながら答える。

これにゼンガーとハーケンは、彼女の母を殺したサイキックハンターの事を皮肉る。

暗い話ほうざりしているのか、ハーケンはゼンガーに、自分が去つてからの新西暦の世界について聞き始めた。

「さて、ダークな話はこのままでにして、明るい話題と行こうか。ジャステイスサムライ、新西暦のメンズは元気かな？ 元の世界を追い出されて、鬱病になってなきや良いが」  
「そうだな。連邦軍は暫く攻めてこないだろう。宇宙のレーツェルも交えて話そう」  
「おっと、ダークホースも一緒か。こいつは良いぜ」

ゼンガーがレーツェルも宇宙に居ることを伝えれば、ハーケン喜び、早速、ワルキューレの通信施設へと向かった。

一方でマリ達が何をしているのかと言えば、マリはシディーでも慰めるためなのか、将校用の茶席を占領して紅茶を嗜み、ヴァンは相変わらずに提供された軍用レーションに様々な調味料を掛けて食し、アシエンは自分に話しかけて来たワルキューレの将兵等に、毒舌をかましていた。

そんな彼女たちを置いて起き、ハーケンとゼンガーは通信本部として使われている一室に入り、レーツェルを交えての新西暦組の面子がどう過ごしているのかを聞く。

「よう、ダークホース。愛馬のトロンベは元気かな？」

『その格好にその口調、ハーケン・ブロウニングか。私の愛馬、トロンベは元気にしているぞ。それに私と妻以外に懐かないトロンベが、別の者に心を許している』

まずは他愛のない身の上話をしてから、新西暦の面子がどうなっているのかを問う。

「そいつは良い知らせだ。なんせ俺は門前払いだったからな。で、新西暦のメンズの様

子はどうかい？」

『ああ、元気にしている。みな強いばかりに、ギリアムなどの鋼龍戦隊のリーダー格は新設された部隊の指揮官となり、他の面子はそれぞれの戦線の火消し役として使われて散り散りになってしまったが、定期的に手紙が私の元へ来ている。ゼンガーも一枚か二枚の手紙を持っている筈だ』

「OK、ヒーロー侍に見せて貰おう」

新西暦の世界で戦った戦友達がワルクューレの部隊指揮官となるか、切迫した状況である戦線に派遣されてバラバラになっていると聞かされたが、手紙だけは届いているとレーツェルに伝えられれば、あの面子の強さを知るハーケンはホツと胸をなでおろす。

それに手紙はゼンガーの元へ届いているので、後で読ませて貰うと同じく正義を断つ剣を携える男と同じ部隊指揮官となっているレーツェルに返す。

『さて、いきなりで済まないが、ハーケン・ブロウニング、君もワルクューレに来ないか？ 君の世界も連邦や同盟に支配されている。悪い話では無いと思うが』

「ここで勧誘かい？ ブラックホース。まあ、ヴァルキリーアーミーズの女将校とベッドで夜を共にしたことはあるが、初めて新西暦の世界に俺が来た時の状況とは違い過ぎるしな……」

『まあ、いきなりの物だ。返答には困る物だろう。答えが出たら言ってくれ』

戦友達の無事を聞いて安堵するハーケンに、レーツエルはエンドレス・フロンティアが連邦や同盟の支配下に置かれていることを知ってか、彼をワルキューレに勧誘し始める。

これにハーケンは、連邦は嫌いであるが、友人が何名か居る上、ロストエレシアは完全に連邦軍の勢力下にあるので迷い始める。

いきなりであったのか、レーツエルは返答を待つことにして、別の話題へ変えようとしてか、ハーケンたちが新西暦の世界からエンドレス・フロンティアに戻ったことを問う。

『少し話題を変えよう。で、新西暦の世界から無限の開拓地に帰った後に何があった？』  
「プリンセスたちからの質問攻めさ。みんな楽し気なパーティーに参加できなかったことに、かなり怒っていたよ。俺とアシエンからすれば、零児達と同じようにエトランゼな気分だったかな」

新西暦から無限の開拓地へと帰った後、レーツエルに知り合いの姫たちからの質問攻めにされたと返し、置いて行かれたことに怒られたとも告げる。

それにハーケンは四度目の世界の命運をかけた戦いをパーティーとも評する。これには幾度か世界を救って来た流石のゼンガーとレーツエルも驚きを隠せなかった。

「あの戦いをパーティー呼ばわりとは…流石は無限の開拓地だ。短い間にしか居なかつ

だが、あの場に居る者達はみなただ者ではなかったからな」

『ゼンガールの言う通り、あの世界の命運をかけた戦いをパーティーと表するとは、まことに恐ろしい世界だな。無限の開拓地とは』

「なに、新西暦の世界ほどにないにしても、バトルが日常茶飯事だからな。あんた等も来ると良いさ、中々楽しいワールドだぜ。エンドレス・フロンティアは」

『無限の開拓地と聞く通り、飽きはし無さそうだな。では、私は書類整理などがある。先ほどの話、考えておいてくれ』

「ああ、考えておくさ」

無限の開拓地に行ったことがあるアクセル・アルマー、アルファミイ、コウタ・アズマより聞いていたが、改めて無限の開拓地の凄さを知ったゼンガールと、経験者より聞くよりも、現地の人間より直接聞いたレーツェルは、その世界へ行ってみたいと思った。

仕事を立て込んでいるのか、ハーケンに勧誘の件を考えておいてくれと告げた後、通信を切った。

「で、ワルキューレに入るつもりは？」

「ヴァルキリーアーミーズにね、さっき話した通り、連邦は嫌いだが、知り合いのジエネラルを裏切るのは、あいつみたいで嫌なんだよ」

「あいつ？」

「ああ、そうか。ジャステイスサムライは聞いてなかったのか。マークハンターさ。あいつはトンデモねえ守銭奴だったな」

ゼンガーに勧誘の件を聞かれ、ハーケンは助けた連邦軍の将軍を殺したくない気持ちと、二度目の世界を救う戦いで悩まされた賞金稼ぎの事を彼に話した。

「金さえ積まれれば、どんなこともする男か…」

「薄汚い男さ。だが、実力はかなり高い。実際、あいつは連邦や同盟に金を詰まれて、勇者ガール一行を襲ったようだ」

マークハンターの金さえあればどんな仕事でもする賞金稼ぎと知り、ゼンガーは薄汚い男であると評した。そんなゼンガーに、ハーケンは彼が自分たちの世界を侵略している連邦や同盟に金を詰まれてルリ達を襲っていたことも話す。

「勇者ガール？」

「おっと、それも話して無かったな。では…」

『連邦軍が来たぞ！』

またハーケンは、ゼンガーが知らないルリ達のこと話したため、それを伝えようとしたが、連邦軍が反撃に出たことを知らせる怒号で遮られた。

「これがママの調査していた遺跡…？」



ハーケンとゼンガーがレーツェルと思い出話に盛り上がっている頃、マリは二人に黙ってシディーと共にサイキックハンターの隊長によつて殺されたプローディネンス博士が調査していた遺跡に来ていた。

目前にそびえ立つ地上の未来の都市群とは違い、神聖的なデザインの遺跡をマリは見詰める。

ここにルリの行く先に関する手掛かりがあるかもしれない。

そう思ったマリは、即座に行動に移し、遺跡へと歩み寄る。当然ながら、遺跡に先に着いていた調査隊の護衛である警備兵に阻まれる。

「許可の無い者は立ち寄れません。直ぐに……あれ？」

出入り口へと迫るマリを追い返そうとする警備兵であるが、瞬きした際に、目の前に居た彼女はいつの間にか遺跡まで入っていた。

これに何が起こったのか理解できず、首を傾げる警備兵たちであったが、その間にシディーにも抜けられ、あっさりと侵入を許してしまう。許可の無い進入にも関わらず、マリは遺跡の奥までシディーと共に進む。

「止まりなさい！ 貴方は不法侵入……」

途中、幾人かの障害と出くわしたが、その都度に魔法などを使って鮮やかに突破する。

「ああ、私たち不味い事しちやつてるかも……」

これにシディーは少し心配になったが、それをやっているマリは一切気にも留めなかったようだ。

奥まで辿り着けば、マリは祭壇らしき場所に向けて手を翳し、遺跡に居るとされる人物を呼び出そうと声を上げる。

「遺跡に残留する精霊よ、私の声に従い、その姿を見せよ！」

「あれ、あんたつてそんな話し方だっけ…？ それに、周りになんかオーラが…」

シディーはマリの声を余り聞いたことが無かったが、威圧的な言い方を初めて聞き、それに全身が碧いオーラに包まれていることに驚く。これには追い出そうとして近付いた研究員たちも同様で、何が起こったのか分からず、混乱している。

そんな彼女たちの事を気にせず、マリに呼ばれた遺跡に残留する精霊は、呼び出した彼女の前に、霊体でありながらも姿を現した。

その姿とは、壁画などで見るような女神そのものであり、人間離れた美しさで見惚れてしまいそうな物であった。呼び出された精霊は、呼び出した者であるマリに対し何の用であるかを問う。

『我は聖なる力を持つ者のため、この遺跡を守護するために残留した精霊なり。して、何で呼び出した？ 神を殺した墮天使の祖先よ』

「神を殺した墮天使の、祖先…?!」

精霊が放った神を殺した墮天使の祖先と言う言葉に、シデイーは強く反応してマリを見たが、彼女は何の反応もせず、ただルリがこの場に訪れ、何所へ行ったのかを問う。「ルリちゃんって娘が居たでしょ？ その娘がここに来たはず。何所に行ったか知らない？」

先ほどの口調とは違うが、威圧的なのは変わらず、マリは精霊にいつもの口調で問えば、精霊は浮遊しながらその問いに答えた。

『ルリ…数多の世界を救うため、神に選ばれた勇者の事か。彼の者はここで我が守りし聖具を受け取るためにここへ立ち寄った。行く先についてだが、分ならず仕舞いだ。同行するライデンと呼ばれる雷神は行く先を話さず、それを手にしてからはここを去った。わざわざ遠いところを済まん』

「…役立たず」

「え、それ聞いて終わり？ ちょっと！」

結局のところ、行く先は分ならず仕舞い。それを聞いたマリは、精霊に向けて小声で悪口を言った後、何の礼も無しに、シデイーを置いて去って行く。

『何所へ行く？ 他に用は無いのか？』

「無いわ。これでまた振り出しね」

役に立たなかつた精霊の問いに、マリは無いと答えながらその場を後にしようとする

る。そんなマリに対し、精霊はある言葉を投げ掛ける。

『彼の者をお前は取り返そうとしているが、それは叶わぬ願いかもしれんぞ』

その言葉に反応してか、マリは精霊の居る方向へ振り向き、ルリは絶対に自分の元へ連れ返すと断言する。

「叶わない？ あんた本気で言ってるの？ 私に不可能なんて無いの！ その為に、人間辞めたんだから」

自分に不可能何て無い。

そう断言するマリに対し、精霊は両手を組みながらやれるものならやってみると告げた。

『そうか…：なら、精々運命に抗うと良い』

マリに向けて告げる精霊であったが、彼女は無視してその場を後にした。役目を終えたところで、元の場所へ帰ろうとする精霊であるが、この遺跡を調査していた研究者の娘であるシディーに声を掛けられる。

「あ、あの…：私の母について、何か知りませんか…？」

『ただの人間？ ああ、この遺跡を調べ回っていた研究者の娘か。あ奴なら覚えておる。我を見付けぬことは出来なかったが、少女のような眼でこの遺跡を調べ回っていた。だが、我ら精霊の類を異端とする者達によって殺されてしまったようだ…』

「そうなんですか……」

母の事を精霊より聞き、シディーは暗い表情を浮かべる。そんなシディーに気付いてか、精霊は母の遺言を告げる。

『それと死ぬ間際に遺言を聞いた。シディー、私が居なくとも強く生き、幸せになれと。最期までお前の写真を握り締めながら息を引き取った。だから敵討ちをするゼンガー・ゾンボルトなる霊力を込めた剣を携えし剣士に力を貸した』

「あのお侍さんみたいなきことをママは最期に言ったのね……それ聞いちゃうと、何が何でも強く生きなくちゃ……!」

母の遺言とゼンガーに力を貸したのは、精霊のであることを聞いたシディーは、強く生きる決心を付け、母の遺体があるラボへと向かおうとした。

「ありがとう、精霊さん。ママを遺言書の場所へ埋葬してくるわ」

『うむ、精一杯、お前の母の分まで生きよ。応援しておるぞ』

マリとは違って礼を言ってから去ろうとするシディーに、精霊はエールを送る。そんな彼女はこの場を後にしてから、連邦軍が攻撃を仕掛けて来た地鳴りが起こる。

『やれやれ、地上の愚か者共め。また無辜の民を巻き込むか』

また民間人を巻き添えにしようとする連邦軍に、精霊は呆れた言葉を呟いた。

「MS隊、ならばPT隊はデータセンターへ突っ込め！ 連中に聖域の場所を探らせてはならん!!」

そのころ地上では、周りを巨大な氷河の塊に偽造した連邦軍の宇宙戦闘艦、それも一隻の巡洋艦クラスの艦艇がその偽装外装を外し、モスバサシテイにいるワルキューレの部隊に強襲を仕掛けていた。

目標は巡洋艦の艦長が言った通り、自軍の機密情報が保管されているデータセンターの破壊だ。周囲にはまだ避難民のテントがあるが、連邦宇宙軍は民間人の安全よりも、自軍の機密情報の方が優先らしい。

「まだ民間人が居ますが!？」

「まだ民間人だと？ ふん、その程度の犠牲など、聖域の場所を知られて起こる惨事に比べて安い物だ!」

副長からの問いに、艦長はそう返せば、随伴機と共にデータセンターへ突っ込む。これを阻止せんと、ワルキューレの機動兵器部隊が集中砲火を浴びせるが、全速力で空中を航行しているがため、致命傷を与えられない。

「データセンターを射程内に収めました！ 砲術長からの返答で照準は既に完了しております!!」

「よし、撃てい!」

「っ!? 十時方向よりP Tが一機接近!!」

「なにっ!？」

副長からの返答で、射撃命令を出そうとした艦長であったが、レーダー手からの報告で出せなかった。即座に対空砲で接近してくるP Tを撃墜するよう怒号を出す。

「邪魔者めが! とつとつと撃墜せんか!」

「やっています早過ぎます!!」

向かって来るP T、それも自軍で採用されている量産型ゲシュペンストMk-IIよりも高い機動力を持つゲシュペンストが、対空砲火の弾幕を避けつつ時間に向かって来る。

余りにも早いために照準が追い付かず、味方機を誤射してしまう。そればかりか懐まで、そのP Tに接近される。

「き、来た!」

「ぐわああ!？」

データセンターへ突撃を仕掛けた巡洋艦は、突如として現れたゲシュペンストの胸部のビーム砲でブリッジを吹き飛ばされ、主砲を撃つことも無く無力化された。

そのゲシュペンストは、H型でS型をベースに作られたタイプだ。

頓挫した計画通りに製造されたコピー機である。コックピット内部には、メインパイ

ロットのサポートを考慮してか、副座が設けられている。この機体に乗っていたのは、ハーケンとアシエンだ。いわば、H型はハーケン達の運用のために設計されたと言っても過言では無い。

頓挫した設計に作った本人は、彼らのために設計された機体とは知る由も無いだろう。

では、何故ハーケンたちがこの機体に乗って連邦軍の巡洋艦を攻撃したのか？

それは時を数十分前に戻す必要がある。

「なに、連邦軍だった？　ボス、あんたの読みじゃ…」

連邦軍の襲撃の方を聞いたハーケンは、近くに居るゼンガーに問うた。

「ああ、どうやら連邦軍が反撃に出たようだ。直ぐに反攻作戦に出ることは出来ないはずだが…これは、残党による襲撃と捉えて良いだろう」

これにゼンガーは、連邦軍が反攻作戦に出たと思っただが、制圧してからまだそれほど時は経っていないので、反攻では無く残存戦力による襲撃と捉える。

「やれやれ、諦めの悪い連中だぜ。まだ街を壊したりないようだな」

「お前の言うとおりらしいな。では、俺が直接奴らを…」

『待て、ゼンガーよ。少し前にゲシユペンスト・タイプハーケンを地上へ送った。もう直



ぐそこに運び出されている筈だが』

諦めの悪い連邦軍に悪態をつくハーケンに反応して、ゼンガーは愛機であるダイゼンガーで襲撃してきた連邦軍の残存部隊を迎撃しようとしたが、再び通信が繋がりに、レーツェルが新西暦の世界でハーケンらが使っていたゲシュペンスト・タイプHを送ったとの知らせを出す。

「ナイスタイミングだ、ダークホース。早速悪党退治とさせてもらうぜ」

『ああ、この日のためにと思っただけ調整は済ませてある。肩慣らしにでも思ってくれ』

「OK、ウォーミングアップとしゃれこむか」

「ハーケン、なるべく街には被害を出さぬようにな」

「そう言う事は、百も承知だぜ、ボス」

いいタイミングでH型を持って来てくれたレーツェルに、ハーケンは感謝の言葉を掛ければ、その場を後にしようとする。出て行く間に、ゼンガーより街に余り被害を出さないように忠告を受けたが、そのことはハーケンも分かっている。笑みを浮かべながら返し、この場を後にする。

彼が出て行ってから数分余り、レーツェルが事前に連絡でも付けていたのか、近くに新西暦の戦いで愛機として搭乗していたゲシュペンスト・タイプHが駐機されていた。運び込めと言われて言われた通りにここに運び込んだ黒光りの機体を見て、やや首を傾

げる整備班長に対し、ハーケンは声を掛けることなく自分の愛機に近付く。

「お、おい。それはお前の……」

「かっこつけ野郎と私の愛機でヤンス」

「えっ？ あのキザ野郎とお前って……ちよっ!？」

いきなり運び込んだ機体に乗り込むハーケンに声を掛けた中年の整備班長だが、聞いてないのかコックピットのハッチを開けたまま機体を起動しようとしていた。

そんな班長に答えようとしてか、同じくこの知らせを受けていたアシエンがそれを告げてから、恐ろしく飛翔してコックピットへと乗り込み、ハーケンと共に起動準備を始める。これを止めようとした班長であったが、機体は既に起動状態であり、完全な稼働状態となったゲシユペンスト・タイプHは、街中でデータセンターを目指して突っ込む巡洋艦の迎撃に向かった。

「暴走族が乗った巡洋艦は、北西の方向にいやがります」

「OK、そつちか。飛ばすから掴まってるよ!」

「シートベルト着用なんで心配ご無用なのです」

アシエンから巡洋艦の位置を聞けば、ハーケンは操縦桿を動かしてその方向へと向かう。向かっている最中に、辺り一面にビームを撃ちまくる連邦軍機を発見した。機種はPTの量産型ビルトシュバインであり、空中浮遊しながらワルキューレの機動兵器に向

けて撃っている。

「こつちに気付いていないようだな。ナイトファウルのセーフティーは解除！　ぶっ放すぜ！」

こちらに気付かない量産型ビルトシユバインに向け、単発でPTサイズのナイトファウルの弾丸を放つ。放たれた弾丸は敵機に吸い込まれるように命中し、それに当たった量産型ビルトシユバインは道路の上に墜落した。

「第一射目、命中しやがりました」

「OK、感覚は覚えてるな。じゃ、続けて行くとしますか！」

敵機の命中を確認し、新西暦での戦いの感覚を思い出せば、ハーケンは続けさまに自分に気付いて向かって来る敵機との交戦を始める。

『ゲシユペンスト!?　S型か!?!』

『なんでS型が！　鹵獲されたのか!?!』

「まっ、似てるしな」

「このHタイプは、艦長と私のために作られた物。お前たちの知るSタイプでは無い」

ゲシユペンスト・ハーケンを見た連邦兵たちは、外見がタイプSに似ているためにそれを勘違いする。これにハーケんとアシエンは答える形で、動きの悪い一機の敵機を撃ち落とした。

『この野郎!』

「背後より敵機!」

「おっと! 背中は、美女以外はお断りだぜ!」

背後よりジェットストライカーパックを背中に付けたダガーLが右手に持ったビームサーベルで斬り掛かって来たが、アシエンのサポートで気付いたハーケンは、ナイトファウルを背後に向け、銃口下に搭載されたパイルバンカーで突き刺した。

パイルバンカーをコックピットに突き刺されたダガーLはそのまま機能を停止して下へと落下して行く。

「スラツシユリツパー!」

次に背部のウエポンラックより投降武器であるグラン・スラツシユリツパーを二つほど飛ばし、二機の敵機を一度に撃墜する。

それから自分に攻撃してくる敵機を撃墜しつつ、対空砲火で弾幕を張る巡洋艦に近づく。対空砲火を避けながら巡洋艦に近づく最中、足元より量産型ビルトシユバインが近接武器で串刺しにしようとするのが近づいて来た。

「足元より敵機が来ちよります」

「おいおい、下品な奴だな!」

これもアシエンが察知したため、直ぐにハーケンは機体の近接武器を収めている左手

のグラン・プラズマカッターを引き抜き、下から突き刺そうとして来る敵機の胴体にビームソードを突き刺して無力化した。

爆発に吞まれる前にビームを消してソードを引き抜いてから元の位置に戻し、弾幕を避けつつ敵艦へと接近する。

途中、自分に突っ込んで来る敵機が居たが、味方の対空砲火の誤射に遭って撃墜された。そのおかげか、それともタイプHの機動力のおかげか、容易にブリッジまで接近に成功する。

「ジ・エンドだー」

このままブリッジまで近付けば、機体胸部に搭載されているビーム砲を撃ち込んで巡洋艦を無力化した。

「敵艦沈黙。ブリッジを失った巡洋艦は主砲をぶつ放すことなく降参したつちや。搭載機も戦闘止めて白旗上げちよります」

「OK、これで良い。これ以上のバトルは街の復興を遅らせるだけだ」

アシエンが解析して巡洋艦の残りのクルーがワルクユーレに投降したことを知らせれば、ハーケンが操縦桿から手を放して両手を後頭部に組んで楽な姿勢を取る。そんな二人の元に、あることを知らせる無線が繋がる。

『おい、あの赤い地上戦艦は!? 我が軍の認証コードを発してるけどー!』

「赤い地上戦艦……？　おい、撃つなよ！　そいつは俺の地上戦艦だ！」

「赤い地上戦艦と聞いてか、ハーケンは直ぐに自分の地上戦艦であるツアイト・クロコデイルであると分かれば、発見した将兵に撃たないように怒鳴る。

直ぐにツアイトの元へ向かうため、操縦桿を動かし、その方向へと全速力で向かう。その途中、ツアイトより通信が入った。

『艦長、艦長でありますか？　副長のリイ・リーです！　ワルキューレの連中がこちらに大砲を向けておりますが……』

「副長か！　大丈夫だぜ、さつき撃たないように告げた。で、なんでこっちに来たんだ？　あのバトルマシンの墓場に隠れていると告げた筈だが」

通信を入れて来たのは副長であるリイ・リーだ。そんな副長にハーケンは安心しろと告げてからなんでモスバサシテイに来たのかを問う。

『それが大変なことになりました……』

『連邦軍の大部隊が、その街を包围してるんだ！』

「なんだって!?　今のは余興ってことか！　ボス、聞こえるか!?　さっきの戦闘はその余興だ。メインパーティーはこれから始まるようだぜ……!」

リイが来たわけを話そうとすれば、ミカルが途中で割って入り、街が連邦軍の大部隊に包围されていることを知らせる。

先の戦闘がその余興であると分かれれば、直ぐにゼンガーに知らせた。通信よりそれを知ったゼンガーは、宇宙でも同様の知らせを聞いたとハーケンに告げる。

『やはりそうか……今し方、レーツェルより報告が入った。宇宙にも連邦軍の大艦隊が反攻のために集結しつつあるようだ……!』

「地上と宇宙の同時攻撃か……OK、地上の方は俺たちに任せな! ボスは宇宙に行つてダークホースを助けな!」

ゼンガーの知らせを聞いてか、ハーケンは自分等に地上波任せると告げた。

『助かる! 宇宙の方が片付けば、直ぐに助けに入る!』

「ああ、その前に地上が片付いちまうかもな!」

宇宙への救援に向かうゼンガーが、宇宙の方が片付くまで持ち堪えろと告げたが、ハーケンはこれに冗談交じりで返した。それからハーケンらは地上の大部隊の迎撃に向かい、ゼンガーはダイゼンガーに乗り込み、宇宙へと救援へと向かった。

一方で宇宙では、連邦宇宙軍と宇宙海軍が先程の醜態を晴らすためか、凄まじい数の艦艇を集めて連合艦隊を組み、反攻の準備を進めていた。

数はワルキューレの宇宙艦隊の約十倍、およそ二千隻とやり過ぎとも言える程の数の艦艇だ。艦載機も含めれば、膨大な数であろう。そんな物量が今にもサジタリウスを襲

撃したワルキューレの宇宙艦隊を呑み込もうとしている。

そんな大規模な連邦艦隊に対し、ワルキューレは地上の味方を守るために迎え撃つ準備を行った。



## 来る古の帝国

『敵は恐れるに足らず！　我が連邦軍艦隊が、常に制宙権を握っていることを思い知らせてやれ！』

惑星サジタリウスの周辺宙域にて、この世界に駐屯する連邦軍艦隊が攻撃のために集結し、陣形を整えつつあった。彼らは先ほどの戦いで無残にやられたにも関わらず、ワルキューレのことを未だに正規軍とは認めず、ただの反乱軍として扱っている。

そんな敵を恐れるに足らずと言いつつ、連邦艦隊は打ち合わせ通りの位置に艦艇を配置する。

『39戦隊は左へ回る』

『艦砲射撃終了後、順次MS隊並びPT隊、AT隊は発艦！』

『メガ粒子砲充填完了！』

『UCA艦隊は右翼に移動する！』

無線通信がひっきりなしに聞こえ、それに合わせるように連邦軍の艦艇は指定された位置に向かう。

『連邦軍の第9機動歩兵師団とUNSC海軍の連中はどうした!?!』

『第9は機動歩兵を降下させたいからって前に出てない！ 海軍の奴らもODSTも同じ理由だ！』

『俺たちを囷にする気か！』

『大丈夫だ、数は我々の方が上だ！ 初射で70パーセントはやれる！』

連邦軍の艦艇と強力な艦砲であるMACガンを持つ艦艇を保有するUNSC海軍の艦艇が居ないことに、傘下勢力の将兵達は口論を始めたが、彼らが居なくとも、数の優位は圧倒的であるため、放っておいて数の差で押すことにした。

『レーザー解析、入ります！』

『敵艦隊、射程圏内に入りました！』

『反乱軍如きにサジタリウスを好き勝手にさせるか！ 全艦、敵艦隊に一斉射撃、撃てえ！！』

ワルキューレの艦隊を射程圏内に捉えれば、連邦軍艦隊は指揮する提督の一声で直ぐに一斉射撃を行った。

実弾やビームなどの艦砲射撃が一斉に行われれば、後からミサイルによる攻撃が開始される。その数はまるで雨のようであり、ミサイルに至っては凄まじい数で、小惑星一つを粉碎するほどの数だ。

そんな雨のような一斉射撃に対し、圧倒的数の連邦艦隊を迎え撃つゼンガーのダイゼ

ンガーと、レーツェルのアウセンザイターは、臆することなく構える。

『来るぞゼンガー!』

「この程度、あの時の戦いとは比べ物にならない!」

この逃げ出すような攻撃に、それを上回る程の攻撃を受けて来たゼンガーにとつては、比較する程の物ではないため、上昇して一斉射をアウセンザイターと共に回避した。艦隊はビームを無力化する攪乱幕や、シールドなどで防御した。

防衛側のワルクューレの機体も回避しているが、何機かは避け切れずに雨のような砲火に吞まれた。艦艇も防ぎ切れずに撃沈する物も続出する。

次に無数のミサイルが飛んできたが、ワルクューレは直ぐに対応策を打つ。それは気化爆弾を用いた対空弾だ。大型のミサイルタイプもある。その弾頭を発射できる艦艇と搭載機で撃ち込み、無数のミサイルを爆風で迎撃した。

『敵艦隊に牽制射撃、撃エーッ!!』

『平民共に騎士の艦隊戦を見せてやれ!!』

敵艦隊からの一斉射撃が終われば、直ちにワルクューレの宇宙艦隊は反撃を行う。

連邦艦隊より数が少なく、迫力が無い物だが、狙いは正確であり、防御策で偽装バルーンを射出した連邦艦艇を幾隻か撃沈した。既に連邦軍艦隊は艦載機を発艦させた後であり、戦闘は艦隊戦から艦載機同士による戦闘に移行した。

連邦側の艦載機の数は、様々な種類の空母と搭載可能な艦艇を含めて膨大な数だが、戦闘力はワルキューレ側が遙かに上回る。これにより、ダイゼンガーとアウセンザイターは有象無象に出て来る連邦軍機を次々と撃墜して行く。

『ゼンガー、この数は前の戦いよりも!』

「ああ、圧倒的だ! まるで一カ国の全軍を相手にしているかのようだ!」

自分たちは圧倒的強さを持つ機体に乗っているが、流石に連邦軍機の数の多さに苦勞しているようだ。艦載機のみならず、コルベット艦やフリゲート艦も突っ込んで来る。中には駆逐艦も含まれていた。

「まるでルチウム海戦のようだ。いや、あの時は仲間がかなりいた!」

何機叩き潰そうが、何隻沈めようが恐れることなく突っ込んで来る。

そんな有象無象に突っ込んで来る連邦艦隊に、ゼンガーはルチウム海戦を思い出した。あの時は他の新西暦の戦友達と一緒に、物足りないくらいの優位であったが、今回はレーツェルのアウセンザイターとクロガネだけだ。無数に向かつて来る敵に徐々に対処しきれなくなる。

『ぬう、キリが無い!』

「やはり、大將首以上を討ち取らねば……!」

無数の敵機を相手に奮闘する二機だが、やはり驚異的な戦闘力を持つ特機、スーパー

ロボットでもこれ程の数を相手にするのは無理がある。

こういう時は、指揮官機や戦艦や重巡洋艦、空母などを落とすのが手っ取り早いですが、その対応策としてか、全て後ろへ下がらせて二機の特機の疲弊を狙っている。実に狡猾な作戦だが、連邦艦隊の損害は尋常ではないだろう。

圧倒的な数の敵を相手にして居た所為か、背後より現れた伏兵への対応が遅れてしまった。

『背後より、新たな敵艦隊！』

『何っ！ 背後より敵艦隊!? やはり本隊は囷か！』

「目標はデータセンターか！」

クロガネの通信士官からの報告で、背後よりの伏兵、連邦軍の別動隊とUNSC海軍の戦隊の出現を知ったレーツェルは本隊が囷と知る。地上での巡洋艦の襲撃を知るゼンガーは、敵の狙いが地上のデータセンターと察する。

「おのれ！ やらせん!! ぐっ…!」

『行かせてはもらえんか…!』

直ぐに向かおうとしたゼンガーとレーツェルであるが、前に出て来た一隻の戦艦とサラミス改級巡洋艦三隻の主砲で阻まれる。

「ハーケンよ、重荷を背負わせて済まぬ…!」

逃した連邦軍の別動隊に対処できなかったゼンガーは、地上の大兵力のみならず、宇宙からの降下機動兵による猛攻の重荷を背負わせてしまったハーケンに、申し訳なきように謝罪の言葉を述べた。

「わーお、絶景だな」

宇宙に居る連邦艦隊が攻撃を開始した頃、それに並行して地上に居る連邦軍部隊も攻勢を始めた。

自分の愛機であるゲシユペンスト・タイプHに乗るハーケンが、コックピットのハッチを開け、双眼鏡から見える連邦軍の攻勢を見て、関心の声を上げる。

最初に始まったのは砲撃だ。長距離キャノン砲を搭載したステゴサウルス型の大型ゾイド「ゴルドス」による砲撃より始まる。この砲撃には、亀型の小型ゾイドであるカノントータスも、砲撃戦に特化した装備を身に付けて参加している。他に自走砲、地上戦艦などが数両ほど参加していた。

元々ゴルドスは電子戦のゾイドであったが、強行偵察をする際に機動力の無さと大き過ぎ、更に接近戦も苦手な防衛面に置いて問題があるため、後継機として開発された中型にサイズダウンされたゴルヘックスに電子戦と情報収集の役割を譲った。

しかし、砲撃能力には優れているので、長距離キャノン砲を搭載して砲撃仕様として

現役に留まる。

連邦地上軍全軍に配備されているゴルドスは全て砲撃仕様に改装され、カノントータス共々砲兵隊に運用されている。

このように、連邦軍はとても優秀な砲撃専用の機動兵器を有しているが、その砲撃しているのは、ワルキューレが鹵獲品で作り上げた偽の陣地であった。

連邦の砲兵たちは無人の陣地、それも自軍の鹵獲品で作り上げられた陣地を砲撃すると言ふ無駄弾を使わされているとは知らず、指示された通りの砲撃数を終えるまで撃ち続けている。

それが終われば、今度は空からの爆撃に切り替える。砲撃で十分な筈だが、念には念を入れなければならない。もともと、標的は無人の陣地であるが…。

爆撃を行うのは、連邦軍の大型爆撃機と、爆装を全身に身につけたプテラノドン型の小型ゾイド「プテラス」だ。

プテラスは戦闘機型ゾイドであるが、帝国の飛行ゾイドに対応しきれなくなり、後継機のレイノスやストームソーダに戦闘機ゾイドの座を譲り、早期警戒機か迎撃機、戦闘爆撃機として連邦軍の地上の航空隊に配備されている。

砲兵と同じく、無人の陣地を爆撃してしまっているが、爆撃手達は気付かず、砲兵と同じ指示された通りに爆撃して基地へと引き返した。

砲撃と爆撃が終われば、本隊、つまり機甲部隊や歩兵部隊などの陸戦部隊が前進を始める。

その数は地上を埋め尽くす物であり、後列の歩兵のみならず、前例の機甲部隊、人型兵器や四足歩行や二足歩行ゾイドの数も尋常では無かった。

ハーケンやダンに乗るヴァンらが担当している地域は、もつとも敵の戦力が集中する場所であり、他の地域に比べて かなりの数、それも軍規模の戦力が集中している。合わせて十万足らずのワルクューレを圧倒している。他は軍とはいかない物の、軍団規模の戦力がまるまる投入されていた。

この数の敵を、ゲータが収集するか、ゲリラ活動を行う工作員を全員送り込むまで僅かな戦力で守れと言うが、他の戦線もこのような戦力差の開いた戦闘を余儀なくされているため、誰も仕方ないと言って文句すら言わなかったようだ。

地響きが鳴るほどの敵の大群が迫る中、ワルクューレの戦闘工兵たちが、砲撃と爆撃で破壊尽された偽の陣地に近付き、仕掛け爆弾を仕掛ける。それと並行し、張り巡らされた罠が無事であるかどうか確認してから本物の防衛陣地へと戻る。

『敵は全滅した！ 街はもう直ぐだ！ 前進しろ!!』

偽の陣地を本物と勘違いしている指揮官は、このまま一気に街へ突っ込めと無線で指示を出した。待ち伏せと罠が設置されているとは知らず、指示に応じて大規模な戦力が



街へと前進する。

前進速度は自軍の機密情報が抜き出される可能性があるためか、全速力であり、途中の罠にも気付かずには前進を続ける。

それから物の数秒で、先陣を切っていた陸戦のMSやゾイド、AT部隊がワルキューレの張り巡らした罠にはまった。その罠とは、対戦車壕ならぬ対機動兵器壕だ。

通常の主力戦車並の壕の深さを、20m級の大型兵器が埋まるほどの30mの深さまで掘った壕であり、いわゆる巨人サイズの落とし穴だ。そんな塹壕に勢いよく機械の人や動物、恐竜が次々と落ちて行く。戦車らも例外では無く、穴の底へ落ちて大破する。

『生まれ！ 罠だ！ 罠だ!!』

前進していた先遣隊が穴に落ちたのを見て、後続の部隊の隊長が大慌てで停止命令を出した。

だが、これがワルキューレの狙いであり、足を止めた連邦軍の部隊に、無数の機関砲やロケット、ミサイル、ビームが浴びせられる。

『て、敵機……!!?』

最初に敵を撃撃したコマンドウルフに乗り込むパイロットは、全員に聞こえるように無線で叫ぼうとしたが、他の友軍機と同様に砲火に吞まれて撃破される。

突然現れた敵部隊に、連邦軍の機動兵器部隊は対処も出来ず、ただ一方的にやられて

いく。後続の機甲部隊と歩兵部隊もどうようであり、凄まじい砲火に晒されて多数の損害を出していた。

歩兵の損害は甚大であり、塹壕内に隠れていたワルキューレの歩兵部隊による銃撃を浴び、まるでドミノ倒しのようにバタバタと倒れていく。相手の装備が自分等から見れば、化石以下の第二次世界大戦後期のイギリス軍装備の歩兵部隊に。

「退け！ 退けえ!! ぶわっ!!」

「せ、戦車は!!? 戦車は何所だ!!?」

塹壕に隠れる敵から一方的に撃たれる連邦軍の歩兵部隊は慌てふためき、統制が取れずに逃げ出す者まで居たが、後から来た機動兵器部隊に踏み潰されるだけだった。空にも連邦軍の機動兵器の大部隊が居たが、下にある無数の対空砲やミサイル攻撃で蠅のうに落とされるばかりだ。

『一体何が…!?!』

穴へ落ちた機動兵器部隊は、穴から自力で出ようとしたが、ワルキューレの戦闘工兵が起動した仕掛け爆弾で一網打尽となり、全機がスクラップとなった。

第一波に大損害を負わせたワルキューレだが、連邦軍はその損害を物ともせず、無限に湧き出す泉の如く次々と部隊を前進させる。流石に数に物を言わせた大群の相手に、対応力が限界に達したのか、ワルキューレの第一防衛ラインの守備隊は第二防衛ライン

まで後退を始めた。後退を始めたと同時に、連邦軍は損害や罨に構わず数に物を言わせて前進する。

「そろそろこつちの出番だな」

『すげえヨロイの数だな。あんな数、あの鉤爪の野郎のところに居た数なんかと比較にならねえくれえだ』

「まあ、相手が馬鹿デカイ軍隊だからな。腐るほどあるんじゃないかな？」

「艦長、そんな所に居たら流れ弾に当たっておちんじまいます。中に入つてどうぞ」  
「OK、出番だからな。さて、張り切つて行くか」

第二防衛ラインには、ハーケンのゲシュペンストとヴァンのダンが控えていた。

ヴァンは初めて見る連邦軍の無数の機動兵器に、憎き男の拠点に乗り込んだ際に相手をした軍団の事を思い出す。これにハーケンは冗談で返しつつ、身を案じるような発言をするアシエンに応えてコックピットの中へ戻る。彼がコックピットの中へ入り、操縦桿を握る頃には、既に戦闘が開始された後だった。

ワルキューレの防衛部隊による航空戦力のヴァルキリーを含めた巧みな戦術で次々と撃破されていく連邦軍機であるが、数に物を言わせて突っ込んで来る。果てしない消耗戦だ。

そんな中、ハーケンとヴァンは圧倒的な技量で次から次へと出て来る連邦軍機を撃破

し続ける。ヴァンのダンは手にしている蛮刀で目に見える敵を斬り続け、周囲にスクラップの山を築き上げ、ハーケンは機体を回転させながら次々と撃破している。

「それ、二人揃って天国へ行きな！」

ハーケンは巧みに操縦桿を動かし、上空に居る量産型ビルトシュバインをPTサイズ  
のナイトファウルの銃撃で撃墜した後、銃口下のパイルバンカーを地上の量産型ヒュッ  
ケバインMK-IIのコックピットに突き刺して仕留める。

二機の敵機を数秒ほどで片付ければ、ダンを上空から狙おうとする敵機を落とす。

「へい、ブラック・タキシード。頭上注意だぜ」

『おう、悪いな。キザ野郎』

「礼を言うなら、このウルフの群れをどうにかした後にはようぜ」

『狼ヨロイの大群か。何匹来ようが関係ねえ！』

礼を言うヴァンに対し、ハーケンはオオカミの群れの如く襲い掛かるコマンドウルフ  
の大群をどうにかした後にはと告げれば、彼はダンの蛮刀を大太刀と小太刀の二つに  
分け、背中の大型ビーム砲を撃ちながら突っ込んで来るコマンドウルフの大群に単独で  
挑んだ。

このフォローをしなくてはならないハーケンは、ため息をつきながらヴァンの援護に  
入る。

「あの調味料ジャンキー、一人で突っ込んだりしちゃったりしますが。放置しますかい？」  
「はあ、あいつの世界の仲間はそのフォローに苦労していたようだな。仕方ねえ、そいつと同じくあいつのフォローをするか」

アシエンに問われながらも、ハーケンは援護すると言って、ダンの背後から撃とうとする連邦軍機をナイトファウルやグラン・スラッシュリッパで仕留める。その二機の機動兵器に乗るエトランゼのハーケンやヴァンの活躍ぶりを見ていたワルキューレの将兵達は、関心の声を上げる。

『あの二人、強い……』

『もう、あの二人だけで良いんじゃないかな？』

ハーケンとヴァンだけで防衛線を維持できると思うワルキューレの将兵達であるが、当の本人より手伝えと注意される。

「へい、アーミーガールズ。俺たちだけじゃこのバトルフィールドはキープできねえぜ。レディたちも手伝ってくれ！」

彼が戦いながらそう告げれば、MSやゾイド、戦術機に乗るワルキューレのパイロット達は、連邦軍を押し返そうとハーケンらに加勢する。歩兵も戦車も同様であり、崩れつつある敵に反撃を行う。

『何をしている!? 進め! 進むんだ!!』

圧倒的強さのハーケンやヴァンに押され、下がり始めた指揮下の部隊に対し、指揮官は無理にでも前進させようと、自機の携帯兵装を上に向けて撃つたが、一度崩れた大部隊の歯止めは効かず、一気に崩れ始める。

『敵が退いてる!』

「OK、これで少しは…」

「艦長、新たなる反応を確認。巨大な機動兵器みたいでやっちゃ」

「おいおい、なに送り込んで来やがったんだ?」

敵の態勢が崩れて敗走を始めたので、少し休憩が出来ると思ったハーケンであったが、リーダーを見たアシエンが連邦軍の新手の反応を感じてそれを知らせた。

『っ!? 馬鹿デケエ恐竜のヨロイが来たぞ!!』

「こいつは初めて見たな。ブラック・タキシードの言った通り、ヨロイとは行かなくとも馬鹿デカいトリケラトプスだ」

「ついでにドリルの角を装備しちよりまっくす」

最初に見たヴァンが叫べば、ハーケンとアシエンは現れたトリケラトプス型の超大型ゾイドを確認して特徴を口にする。

そのトリケラトプス型の超大型ゾイドとは、ヘリック共和国が対デスザウラー対策で建造したマッドサンダーだ。重装甲に頭部の角の巨大ドリル、幾つもの強力な兵装を備

え、更に司令室まで備えており、移動式の前線指揮車両としての機能を持っている。だが、対空兵装は備えてない。

そんな前線突破型兵器兼前線司令部の到来を見た連邦軍は、戦意を取り戻して再び数に物を言わせてワルクューレを呑み込もうとする。ワルクューレもまた、マッドサンダーに向けて火力を集中させるが、マッドサンダーの重装甲の前には歯が立たず、角の巨大なドリルによる強力な回転力によって発生する衝撃波で、吹き飛ばされる。

『おい、あのデカ物、強えぞ！　ワルクューレのヨロイを紙みてえに吹っ飛ばしてやがる！』

「見りゃあ分かる！　あれじゃあこっちが押される一方だ！　ここはディフェンスに入ったら負ける！　勝つならアタックだ！」

「脆い横っ腹と関節部分に集中砲火を浴びせれば、鎧袖一触でヤンス」  
『守るより攻めろか！　俺の得意分野だ!!』

ワルクューレの機動兵器を角の回転と背中への衝撃砲やビームキャノンで倒しつつ前進するマッドサンダーに対し、ヴァンはどう対処するかを問えば、ハーケンは守勢に入るよりも攻勢に入ると言えば、アシエンはマッドサンダーの弱点を告げる。それを聞いたヴァンは、得意分野だと豪語し、ダンを危険な巨大ゾイドに突っ込ませた。

「OK、ブラック・タキシード。俺もアタックと行くか！」

「翼の疾走、見るが良い！」

単独で向かってくる敵機を倒しながらマッドサンダーへ近付こうとするヴァンのダ  
ンに対し、ハーケンもこれに続いて上空の敵機を倒しながら標的のマッドサンダーへ近  
付く。

『馬鹿め！ たった二機で何ができる?! 捻り潰してしまえ!!』

『イエツサー!』

マッドサンダーに乗る軍団長は、随伴機にたった二機で迫るダンとゲシュペンスト・  
タイプHの迎撃を命じた。随伴機の量産型ゴジュラスMk-II六機は背中の長距離砲  
で迎撃を試みたが、あつさりと避けられた挙句、射線上に入ってしまった味方機を誤射  
してしまう。

『こ、こいつ! ドスゴドス隊並びアロザウラー隊、奴らを叩き潰せ!!』

味方機を誤射したゴジュラスのパイロットは、これ以上は友軍機を誤射したくないの  
か、近接戦闘に控えているゴドスの後継機、ドスゴドスやアロザウター部隊にダンとゲ  
シュペンスト・タイプHの迎撃をやらせる。

指示に応じ、小型と中型ゾイドの恐竜型ゾイド部隊は向かって来る二機に特異な近接  
戦闘で挑んだが、パイロットの技量の差か、あつさりと返り討ちにされ、更に僅か数秒  
ほどで全滅に近い状態にされた。



これに突撃を命じた士官クラスのパイロットは、ハーケンとヴァンの余りの強さに恐怖を覚える。

『ひっ、く、来るな！ 来るな!!』

『落ち着け！ 敵はたったの二機だ！ 無茶苦茶に撃つんじゃない!!』

随伴機の六機の強化型ゴジュラスに乗るパイロットは恐怖し、ハーケンとヴァンを近づけないために自機の兵装を滅茶苦茶に撃ち始めた。軍団長が乗るマッドサンダーより落ち着くように無線が入るが、彼らはそれを聞かず、増援に來た味方を誤射し続ける。

『邪魔だ!!』

パニックに陥って兵装を乱射するゴジュラスに近付いたダンは、太刀と小刀に分けた蛮刀を元の状態に戻し、巨体を支える脚を斬りおとしてから首を刎ねた。

巨大な首が宙を舞う中、ヴァンは空かさず二機目のゴジュラスの頭部に向け、蛮刀を飛ばして無力化する。

『オラアア!!』

続け様にそのゴジュラスより蛮刀を引き抜き、三機目に近付いて連続で斬り付ける波状攻撃を仕掛け、巨体をバラバラに分断した。

「OK、負けちゃいらねえな！」

ダンに滅多切りにされたゴジュラスは爆発を起こす中、ハーケンも負けてはいられず、パイルバンカーで近場のゴジュラスのコックピットを突き刺し、グラン・スラッシュリッパーで上空より飛来した戦闘機ゾイド二機を撃墜する。

バンカーを突き刺したまま、何所からか入手したのか、リボルバー式の携帯兵装で残る二機のコックピットを正確に撃ち抜いて無力化した。

「早撃ちには自信があるのさ」

「艦長、知らねえ奴に自慢してないで直ぐに索敵つす」

「分かつてるさ」

そう誰かに自慢するハーケンに対し、アシエンは早く索敵をしろと告げれば、彼は突き刺しているナイトファウルを引き抜き、護衛の居なくなつたマッドサンダーにヴァンのダンと共に襲い掛かる。

『お、おのれえ！ 突撃せよ!!』

護衛の居なくなつたマッドサンダーに乗る軍団長は、真正面から襲い掛かる二機の特機とも言える機動兵器に、自機が得意とする突撃を仕掛けた。

マッドサンダーの突撃は、二つの角の巨大ドリルをフル回転させてからする物であり、その突撃は最強の威力を発揮する。故にこの突撃を受ければ、ハーケンのゲシユペンストもヴァンのダンも一溜りも無いだろう。だが、数々の修羅場を潜り抜けて来た二

人が、この程度の事で負けるはずが無い。

『見えてんだよ!』

「おっと!」

凄まじい速度で放たれる突撃を軽やかに避けた二機は、直ぐに攻撃へ移る。

専用のゲシユペンストを駆るハーケンは、ゲシユペンスト固有の必殺技、ゲシユペンストキックを足に向けて仕掛け、ヴァンは蛮刀の刀身にエネルギーを溜め込み、巨大な剣を作り上げる。

「究極!・ゲシユペンストキック!!」

その掛け声と共に、ハーケンは機体の強力な蹴りをマッドサンダーの右脚に食らわせた。

強力な蹴りを受けたマッドサンダーの右前脚は碎け、巨体を支えきれずに地面に崩れる。この隙に、ヴァンはダンが溜め込んだ巨大なエネルギーの剣をマッドサンダーへ向けて振り下ろした。

『チエストオオオオ!!』

ハーケンと同じく掛け声、それも彼より大きく叫んで振り下ろし、巨体のマッドサンダーを真っ二つに切り裂いた。

巨大なエネルギーの剣に両断されたマッドサンダーは、良き場の失った動力源の暴走

により物の数秒後に大爆発を起こす。この爆発を背に、ハーケンは格好良くヴァンに自分の考えた通り名を贈る。

「ナイスだ、ブラック・タキシード。俺から良い通り名を与えよう。ビックハントのヴァン、もしくは恐竜殺しのヴァンだ！」

「へっ、俺はハンターじゃねえよ！　だが、その通り名は気に入った！」

「そいつは感謝だけ、ミスター・ブラック・タキシード。何処かで名乗ると良いさ」

新しい通り名を受け入れなかったヴァンだが、響きが良かったために気に入ったようだ。

マッドサンダーがたった二機の異邦人が乗る機動兵器によって破壊されたのを見た連邦軍の将兵達は、完全に士気が崩壊し、更に戦意まで損失して攻撃を止めて我先にと逃げ出し始める。

『ば、化け物だ…!!』

『たった二機で倒しやがった…!!』

『勝てるわけがねえ!!』

数は連邦軍が圧倒的であったが、マッドサンダーが破れたのが原因か、士気が維持できず、将校の静止の声に従わず、無秩序に敗走し始める。

『やった！ 敵が退いて行く!!』

「OK、あのビックトリケラトプスにはジェネラルが乗っていたらしい。これで、少しは……今度は何だ？」

自軍の最強ゾイドであるマッドサンダーがやられて無様に逃げ出す連邦軍を見て、ハーケンが勝利したと思ったが、新たな反応を知らせる警告音が鳴り響いた。

「街の方より連邦軍の別働隊が上空より出現！ それから連邦軍が逃げてる方向からはアンノウン！ こりゃあヤベエ連中なの確実すつよ」

「やれやれ、連邦軍の別働隊は分かるが、今度は何所の連中だ？」

アシエンからの知らせに、ハーケンは頭を抱えつつ、前方より現れた正体不明の敵に警戒する。

『キザ野郎！ 俺たちは何所へ行けば良い!?!』

「街の連邦軍は、ミステリアスレディとヴァルキュリーアーミーズに任せる。俺たちメイズは、前方のアンノウンエネミーだ」

連邦軍の別働隊が現れた街へ戻って戦うか、そのままここに留まって戦うのかを問うヴァンに対し、ハーケンはこの場に留まって正体不明の敵と戦うと告げた。その物の数秒後に、正体不明の敵が、敗走する連邦軍を蹴散らしながらはつきりと見える距離まで来る。

「おっと、こいつは驚いた…まさかスーパーロボットだったとは…」

それはヴァンが駆るダンと同じ、25m級の高機動で移動する機動兵器だ。背後には10m級の機動兵器群や謎のタイプのゾイド集団が連邦軍機を薙ぎ倒しながらこちらへ接近して来る。それにヴァンは、先頭に立つ機動兵器に見覚えがあったのか、その名を口にする。

『あ、あいつは…!? メッツァ・オブ・チューズデイ…!』

「おい、ミスター・思い出しメン、知っているのか?」

『ああ、あのレイピア野郎、何年か前に俺が殺した奴が乗ってたヨロイだ! なんでここにあるんだ!』

ハーケンに問われたヴァンは直ぐに答えたが、何故ここに居るのかは彼でも分からないうだ。

「ミスターも分からないようじや俺にも分からねえな。あいつの仕業とは思えないが、兎に角、やるならやるしかねえな…!」

それを聞いてか、ハーケンは何であろうと戦うしかないと判断した。

丁度その時に、宇宙からゼンガーやレーツェルの通信が入ってくる。彼らの居る宇宙の戦場にも、地上に現れた謎の軍隊が現れたようだ。

『ハーケン、無事か?! レーツェルだ! こちらの戦場で謎の集団が現れ、いきなり攻撃

してきた！ それも連邦や我々ワルキューレ問わずだ！」

『我々の知らん兵器ばかりで構成された部隊だ、惑星同盟軍の物では無い！ ワルキューレの話によれば、ネオ・ムガルとやらの連中らしい！』

「そつちもアンノウンエネミーか。こつちもそのネオ・ムガルらしいお客さんが暴れ回つてるところだ。迷惑な客は、早く出てつて貰いたいもんだぜ」

宇宙で戦う二人の知らせを聞いてか、ハーケンは軽口を混ぜながら地上にも居ることを告げる。

『なにいい！ 地上にもだと?! ぬう、同時攻撃と言う訳か……』

『攻撃の目的は不明……いずれは分かる事だが、まるで我々が今まで戦つて来た敵のようだ！』

それを聞いてか、ゼンガーは何度も経験した屈辱を思い出し、レーツェルはかつて戦つて来た敵勢力の事を思い出す。

「だろ？ とにかくだ、ここで何か大きなビックウオーが起るかもしれない」

そう映像通信に映る二人を見ながら告げれば、ハーケンは前方より来るネオ・ムガルと思われる機動兵器の集団と、ワルキューレの精鋭部隊が乗る機動兵器部隊、主力部隊支援のためにモスバサシティに直接降下した連邦軍の別動隊の派遣部隊を見る。

「前方よりは訳の分からんネオ・ムガルとか言う連中のロボット軍団に、後方からは連邦

の軌道降下部隊のヒュッケバイン Mk-II 量産型一個大隊。サンドイツチにされた気分だっっちゃ」

「OK、エブリワン。役者は揃ったな。それじゃあ、二回目か三回目だが、スーパーロボットウォーズとしやれこもうか!!」

『応っ!』

『承知っ!!』

『トロンベよ、今が駆け抜けるとき!!』

レーダーを見ていたアシエンからの知らせで、ハーケンは役者がそろったと確認して、スーパーロボットつと言つても、殆どリアルタイプの物ばかりであるが、スーパーロボット大戦の開幕を宣言した。



# Rock s! 前編

ハーケンが地上でスーパーロボット大戦の開幕を宣言した後、ゼンガーやレーツェルが死闘を繰り広げている宇宙でもその大戦が始まっていた。

「斬艦刀・電光石火!!」

『ランツェ・カノーネW発射!!』

ゼンガーが乗るダイゼンガーとレーツェルのアウセンザイターは、操縦者が放った技名と共に、突然現れて連邦軍やワルキューレに対して無差別に攻撃するネオ・ムガルと呼ばされる謎の勢力の機動兵器や宇宙艦艇を次々と沈める。

地上に現れたネオ・ムガルと同じく、連邦でも同盟でもなく、ワルキューレも保有していない機動兵器や艦艇を多数投入しており、中には人員不足を解消するためか、MSの無人型や無人戦闘機などの無人機も投入していたが、ダイゼンガーとアウセンザイターの敵では無かった。

50m級の特機、スーパーロボットが暴れる中、それと同等の強さを持つ、ネオ・ムガルの特機とも言える機体がダイゼンガーに斬り掛かる。その機体は斧をモチーフとした機体であり、形は違うが、ヴァンが乗るダンと同じタイプの機体のようだ。

「むっ? ああの機体は……!」

その機体に乗るパイロットの殺気を僅かに感じ取ったゼンガーは、そちらの方向へダイゼンガーを振り向け、斬艦刀を構えて攻撃を防いだ。

『ほう、この一撃を受け止めるとは、中々の剣士と言える……!』  
「何奴?!」

斬艦刀の刀身で巨大な斧を受け止めれば、斧を持つ機体に乗る老人より感心の声を伝える映像通信が入る。

通信映像に映るその老人は、数々の修羅場を潜り抜けて来た顔つきをしており、ゼンガーやレーツェルよりも技量は高そうだ。ヨロイに乗っている時のヴァンと同じようだが、老人は胡坐を組んで右手の操縦桿らしき物を握っている。そんな老人に感心の声を頂いたゼンガーは、映像に映る老人に何者かを問う。

『これは失礼した。私の名はガドヴェド・ガオード、咎人としてこの世に呼び出された物だ。この機体は月曜日の名を持つヨロイ、ディアブロ・オブ・マンデイ。それで貴様の名は?』

「我が名はゼンガー・ゾンボルト、悪を断つ剣! そして我の機体はダイゼンガー! 我が魂の甲冑なり!」

名を問われてガドヴェドと名乗った老人に対し、ゼンガーも名乗り上げる。

『ゼンガー・ゾンボルト、悪を断つ剣か…フッフ、面白い！ 私は生前に大罪を犯した咎人。その剣で咎人である私を断てるかどうか試してみよ！』

「咎人か…！ 良からう、ご老体の罪、このゼンガーが断ち切る！ 行くぞ!!」

ゼンガーの名を聞いたガドヴェドは、悪を断剣と聞いて少し馬鹿にしたが、彼の目を見てそれが事実であると確信し、決闘を申し込んだ。決闘を申し込まれたゼンガーは、ガドヴェドの顔を見て畏が無いと判断し、決闘を申し入れた。

『ゼンガー、畏である可能性は？ あの老人が嘘をついている可能性が…』

「いや、あのご老体は嘘をつかん。それに自分の罪を悔いている。それが嘘であるなら悪として斬るまで…!!」

レーツェルよりガドヴェドが嘘をついている可能性があると言ったが、ゼンガーは決闘を申し込んだ老人が嘘はつかないタイプと言えば、それに負けて決闘の邪魔立てしようとする輩を排除すると告げて承知する。

『そうだと良いが…では、私は決闘の邪魔をしようとする輩を排除しよう』

「助かる、我が戦友よ。向こうも邪魔立てしようとする輩も排除する様子だ」

決闘を許してくれたレーツェルに礼を告げれば、ゼンガーはガドヴェドが駆るディアブロに接近する。

『ヒヤッハー！ 纏めて死ねえ!!』

『っ!? 外道共め!!』

「決闘の邪魔立てをするとは……! 許せん!!」

ゼンガーが決闘相手に近付こうとした時、罪を悔いてない咎人と言う事か、無法者らが駆る様々な機動兵器が襲い掛かって来た。

それに気付いたゼンガーとレーツェルは、即座に無法者達が乗る機動兵器群を次々と撃破して行く。ガドヴェドが誘い込んだと思っていたが、当の本人がこれに激怒しており、彼も味方である無法者達を二機の特機と共に巨大な斧で斬り捨てる。

『この馬鹿共め! これは神聖なる決闘だ! 貴様らのような生前の罪を悔いらん連中が邪魔をするな!!』

『ひっ!? や、止めてタボっ!』

無線機より無法者達の断末魔が響き渡る中、決闘の邪魔をした味方機を次々と仕留めるガドヴェドのディアブロを見て、二人は感心の声を上げる。

『中々に騎士道精神溢れる老人のようだ』

「俺の見込んだ通り、あの老人は正々堂々とした戦士! 相手にとって不足無し!!」

レーツェルが邪魔をした友軍機を片付けるガドヴェドを見て言えば、ゼンガーは不足の無い相手と判断して、彼と共に邪魔をしたネオ・ムガルの機動兵器を排除する。

『ほう、中々の太刀筋。相当鍛えているな!』

「ご老体こそまさに現役の動きです。まるでわが師のようだ。何故、咎人として呼び出されたかは、私には分かりません。その動きは英雄の物です」

『なに、道を誤っただけのこと。では、始めようか！』

「例えご老体でも手加減はしません！ このダイゼンガー、押し参るー！」

『その正義の剣とやらで私を断罪して見せよ!!』

二人が言葉を交わす最中、決闘の邪魔をした無法者達を全て片付けたので、二人は遠慮なしに各々の得物をぶつけた。

ダイゼンガーとディアプロの差は一目瞭然であり、巨大なダイゼンガーの方が勝っているように見えるが、ディアプロには歴戦練磨のガドヴェドが乗っており、ダイゼンガーを駆るゼンガーと互角に渡り合っている。

双方の機体は特機、つまりスーパーロボットであり、斬艦刀と巨大な斧の刃が交わることよつて斬撃による凄まじい衝撃が巻き起こった。

それをゼンガーとガドヴェドが互いの得物をぶつけ合うことよつて何度も巻き起こされ、その衝撃に巻き込まれた連邦軍機が斬撃によつて斬れる。

『あの二機から離れろ！ 巻き込まれるぞ!!』

双方とも討ち取ろうとした連邦軍機であるが、激しい打ち合いの衝撃波は凄まじい物であり、近付けずに離れる。

そんな時に、現世に蘇り、悪事を働く陰となる咎人に対抗するために、同じく冥府より甦らされた陽となる者、英霊たちがこの宇宙におけるスーパーロボット大戦に参加した。

『この不死身のコーラサワー様が悪党退治に来てやったどわっ?!』

ワルキューレが採用している疑似太陽炉と言うエンジンを積んだMS「ジングクスIV」に乗る英雄の男が、堂々と名乗り上げようとした瞬間にゼンガーとガドヴェドの戦いの余波で巻き起こる衝撃波に巻き込まれて吹き飛ばされた。

『全く、コーラサワーの奴め。周囲は注意しろといつも言われてるだろうが』

そんなコーラサワーと言う英雄に対し、古い可変戦闘機であるVF-115バルキリーの専用カラーに乗る英雄の一人が、キャノピー越しより見えた吹き飛ぶ彼の機体に向けて注意する。

他にも様々な英雄が駆る機動兵器たちも戦場に現れ、咎人の集団と無人機で構成されたネオ・ムガルに攻撃を仕掛ける。英霊たちの機体の中には、ダイゼンガーやアウセンザイター並の特機も含まれていた。

その集団に気付いたゼンガーは、指揮を執っているであろうVF-115に乗るパイロットに直接通信を掛ける。

『突然の無線連絡を失礼。私の名はレーツェル・ファインシュメツカー。君たちはこの

スーパーロボットウォーズと言うパーティーに呼ばれた者達かな?』

『す、スーパーロボットウォーズ? 馬鹿言え、ヘンテコグラサン野郎。俺たちは蘇った悪党共がこの世で暴れ回っているからって、神様に冥府から叩き起こされて悪党退治してんだ。祭りに来たんじゃない』

『そうか。ならば、私もそれに動じさせてもらおう』

『おう。あんたが乗ってる馬鹿デカイロボットがもう一機加われば、百人力だぜ』

スーパーロボット大戦に参加しに来たと冗談交じりで問い掛けたレーツェルだが、映像通信に映る男は真面目に返した。

そうと聞いてか、レーツェルも動じれば、相手は心強いと返答してから大量に迫って来た10m級の無人兵器型の機動兵器を、機体の追加装備であるミサイルやビーム砲で次々と勢い良く片付ける。

『ほう、中々の腕前だ。流石は英霊と言った感じかな? この私とでかつての英霊たちには負けられんな!』

僅か数秒ほどで数十機の敵機を撃墜した英霊のVF-1Sを見て、レーツェルも負けられないのか、アウセンザイターの機動力と火力をフルに生かして有象無象に群がるネオ・ムガルの部隊を蹂躪する。

英霊たちの参戦により、宇宙におけるスーパーロボット大戦は本格化し、連邦軍艦隊

対ワルキューレから、ワルキューレと英霊対ネオ・ムガルと言う構造に変わった。ネオ・ムガルの戦闘介入によって混乱に陥っていた連邦軍艦隊は、スーパードボット大戦に参戦することなく、突然の謎の勢力の襲撃で大損害を被り、地上の攻撃部隊と同じく敗走を始めた。

『こちらアルファ一、データセンターの制圧完了。現在、機密データの回収に移行中。オーバー』

「アルファリーダー了解、データの回収が完了次第、即時撤収せよ。アウト」

一方の地上、モスバサシテイでは、連邦宇宙海軍情報部の特殊部隊によって、データセンターは呆気なく制圧された。

流石は特殊部隊と言った所で、他の連邦軍とは大違いで装備も練度も高く、旧式な装備ばかりなワルキューレの部隊を早期に制圧して見せた様だ。データセンターを制圧した実行部隊より連絡を受けた本部に居る部隊長は、自分の上司である女性士官に報告する。

「デア中佐、データセンターの制圧、完了いたしました！ 機密データは目下回収中であります！」

『予定通りね。データ回収が終わるまで、データセンターと撤収ルートは死守よ。私は



P T隊、ODS Tの部隊と共にルートの維持に努めるわ。貴方はデータ回収が完了次第、即時に撤収しなさい』

「はっ！」

報告が終われば、映像通信に映るデアと呼ばれた女性士官の映像が切れた。

「撤収だど？ 大佐殿、撤収の必要性は？」

『今のところは無いな。強力な敵兵器は、全て包囲している地上軍の対処に当たっている。それと正体不明の敵が現れ、我が軍とワイルドキャットを見境なく攻撃しているらしい。用心に越したことはないぞ、大尉』

「そんな連中、我々ONIのゲシュペンスト・タイプMの改良型の敵ではありません。それに練度は海軍や海兵隊より上回っております。振り返ちにして：どうした？」

近くの映像通信に映るODS TのP T連隊の連隊長に問えば、彼はネオ・ムガルの介入を知らせた。

だが、この大尉はネオ・ムガルの事を単なるテロ組織と過小評価しており、自分等が保有する機動兵器と練度さえあれば振り返ちにしてみせると豪語する。そんな彼の元に、部下がハンドサインで敵の襲撃を知らせに来る。

『どうした？』

「大佐殿、少しお待ちを」

言い切る前に黙ったONIの大尉に、連隊長は問い掛けたが、彼は待つように告げてから部下が投げ渡したライフルを受け取り、通信担当やリーダー担当、警備兵三名を残して四名の部下を引き連れて外へ出る。

外へ出た先では、強力な装甲服に身を包んだ機動歩兵と「r.b.機動降下兵 > O DST」らが何者かと交戦していた。

彼らの足元には、この街を占領していたワルキューレの将兵の屍が転がっている。彼らが撃っている方向には、金髪碧眼の北欧系の長身美女が居た。銃弾は目前で何かに守られている様に弾けているが、大尉は気付いてない。

「おい、なんで美女を撃ってる?」

「ありや魔女だ! あのビッチは魔法を使ってる!」

「はあ?」

近くに居るODSTの隊員に聞けば、彼は撃っているのは魔女だと口汚く答える。これに何か理解できない大尉であったが、重機関銃以上なら防げることが出来る装甲と、単独で戦車中隊を相手に出来る機動力を持つ一人の機動歩兵が急に爆散した。

「おい、あの女は何をした!?!」

「だから魔法だって言ってるだろ! あんたも伏せるか逃げる!」

「駄目だ! 退却しろ!」

「な、何を!? 逃げるな貴様ら!!」

急に爆散した機動歩兵を見た大尉は、直ぐに近くに居るODST隊員に問い掛けたが、彼は先ほど言った通りだと怒鳴り付けながら答えた。それから一人の指揮官が他の隊員や機動歩兵らに退却を命じる。

ライフルを向けて逃げようとする将兵らを止めようとしたが、彼らは情報部の将校の言う事を聞かず、女一人に背を向けて逃げ始める。

「一体何が…」

機動歩兵とODSTの双方の精鋭部隊がたかが一人の女一人に逃げ始める将兵らを見て、大尉は何が何だか分からないでいたが、一言発した直後にその女が放った氷の刃に頭を突き刺されて即死した。

「た、大尉!? くそおおお!!」

残った部下は、その女に向けて手にしている銃を撃つが、目前に迫った所で何かに弾かれるばかりであり、部下たちも上司の後を追った。仮設の本部施設に居た本部要員たちは、何の抵抗もせず、逃げて行く機動歩兵やODST等の後へ続いた。

敵を全て殲滅した金髪の女は、上司が持っていた端末を魔法の力で取り、それで位置を確認してからそこへ向かった。

「ツアイトは……そこね……」

宇宙でゼンガーらが戦い、地上でハーケンらが戦う中、遺跡より出たマリは、遭遇する降下してきた機動歩兵やODSTを倒しつつ、ツアイトに向かっていた。端末で位置を確認すれば、自分を見て短機関銃やライフルを撃ってくるODSTの隊員を排除しながら向かう。

「なんだあの女は!?!」

「とにかくだ! 撃て、撃て!!」

自分に銃を撃ってくる隊員らは、マリーに銃弾を弾かれて恐怖するが、何処かに弱点があるかと思つてひたすら撃ち続ける。

だが、銃弾は彼女に届くことなく、彼女が手にしているSIG SG551自動小銃を撃ち込まれて全滅する。

『……いつ!!』

次に背後より強力なパワードスーツを纏った一人の機動歩兵が襲い掛かって来たが、彼女が何所からともなく取り出したバスタードソードと同じタイプの剣をヘルメットに突き刺され、一瞬の内に息絶える。それを引き抜いたマリは、刀身に付いた血を吹き払い、急いでツアイトの元へ魔法を使って向かう。

ツアイトには物の数分で着き、艦内へ入ろうとしたが、周囲は既に機動歩兵とODS

Tに包囲されていた。他にもODST所属の量産型ヒュッケバインMK-IIも居り、船体が傷付いている。そう長くは持たないだろう。

やられてしまったては困るので、まずはビルに隠れているPTを茨の魔法で無力化する。

『わっ、ワアアアア!? た、助けてくれえええ!!』

「あの女だ!!」

「畜生、ここは雑魚ばっかじゃねえのかよ!?!」

コックピット内で突如となく茨が生え、呑み込まれるパイロットが悲鳴を上げる中、彼女の存在に気付いた敵部隊は標的をマリンに切り替えたが、一瞬の内に蹴散らされていく。

「お、俺たちが…」

「たったの三分で…」

一人の女に、精鋭であるはずの自分たちが三分で殲滅されたのを実感した隊員等は、そのまま息絶えた。

『ヴァセレートか!』

『早く中に! 鞠音さんがヒュッケバインを準備してる!』

精鋭部隊を三分で全滅させた者を、マリだと直ぐに分かったVF-25の狙撃仕様に

乗るミカルは、ツアイトに乗るように告げれば、同じVF-25系統だが、早期警戒型に乗るリンダは、鞠音が彼女のヒュッケバインを準備していると告げた。それを聞いた彼女は、直ぐに艦内へと入り、自分のヒュッケバインかVF-25Fメサイアがあるハンガーへと走る。

「あら、来たわね。貴方のヒュッケバイン、直ぐに発進できますわよ」

マリの到着を待っていた鞠音は、白いヒュッケバインに手を翳しながら直ぐに出撃の準備は出来ていると告げる。それに乗り込もうとしたが、何か変わっていることに直ぐに気付き、足を止める。

「おや、どうしました？ 私が手を加えたヒュッケバインに何か文句でも？」

「大あり。なんで変わってるの？」

「ほう、私が改良したメカに文句を付けるとは…別に乗らなくて結構ですよ。その予備の機体に乗れば良いですわ。でも、あれは無重力地帯で真価を発揮する機体。重力下の戦場で自由に飛び回れますかね…？」

二度見して自分のヒュッケバインが勝手にいじられていることに気付けば、自分の許可なく少々の改良を施した鞠音博士に問い詰め、別の愛機であるVF-25Fに乗り込もうとしたが、彼女にその機体での重力下の戦闘はほぼ不可能だと言われる。

「さあ、乗ってみてください。そこらの連邦軍機や突然現れたネオ・ムガルなどと言う奴

らなどと比較になりませんわよ……！」

自分の改良でパワーアップしたヒュッケバインなら圧倒的だと怪しげな笑みを浮かべる鞠音博士の言葉を信じ、マリは自分の白いヒュッケバインに乗り込んだ。あらゆる装置を起動させて行く中、改良された部分を見ると、自分の知らないシステムが組み立てられていることに気付く。

「これ、何？」

『ああ、それですか。元の所有者の連邦軍が封印していたようなので、解除させて頂きましたわ。全く、連邦はこの機体を殺し過ぎですね……本来のエンジンであるブラックホルエンジンを取り外すなんて、勿体なさ過ぎですよ……！』

「そ、そう……じゃあ、ぶつつけ本番で試してみるわ」

『ええ、是非ともそうしてください。機動兵器がウジャウジャしている方へ行っても構いませんわよ。その機体の本来の力と、この私の改良があれば物の数ではありませんわ』

マリの問いに答えた鞠音は、システムの封印解除でヒュッケバインの本来の力を知り、それに近い力を発揮させたと興奮しながら答える。

博士のこの表情には流石のマリも引いていたが、何とか持ち直して専用のライフルを手にとって戦場へと出撃する。

ハッチを開けて外へ出て行く最中に、何か変な物を仕込んでいたのではないかと疑って調べると、様々な物が追加されていることに気付いた。

どうやら鞠音博士は、暇を持て余してこのヒュツケバインを改良して居たようだ。しかし過ぎ去ったことなので、文句を言うのは後にし、操縦桿を動かして白き凶鳥を空へ舞えさせる。

「へえ、操縦桿は動かしやすい…」

変な改造を施されていたので、心配していたが、中々扱い易くしてくれたようだ。

そう思いながら、友軍機と交戦している同じ機体だが、後継機の量産型であるMk-IIや量産型ビルトシユバインを手にしているライフルで撃墜する。

『白いヒュツケバイン!? 敵か!』

一瞬の内で三機の友軍機が撃墜されたのを見たODST所属の量産型ヒュツケバインMK-IIに乗るパイロットは、マリが乗る白いヒュツケバインに向けて攻撃を始めたが、放った全ての攻撃は躲され、ロシユセイバーと呼ばれる刀身が重力波で形成されている非実体剣に切り裂かれて撃破される。

『な、なんて奴だ!』

『怯むな! 撃て、撃て!!』

一瞬の内に四機の味方が撃墜されたので、残る連邦軍機は攻撃を始めるが、それらも



全て躲され、瞬く間に全滅させられる。

「なんか精鋭って聞くけど、弱く感じる」

機体性能が良すぎたのか、それとも自分の腕が遥か上なのか、海兵隊の精鋭であるO D S Tの隊員等が乗るP T部隊ですら、マリは物足りないと感じた。そんな彼女の元へ、ネオ・ムガルの機動兵器部隊が大挙して押し寄せて来る。

「あいつ等は確か…なんだっけ？ まあ、良いや」

その昔に自分の帝国が存在していた時に滅ぼした国家の残党であるが、当時の女帝であったマリは全く知らなかったらしく、気にすることなく破壊し回る。

彼らもマリに取っては手応えが無さ過ぎ、それに有人機に勝るはずの無人機ですら呆気なく落とされてしまう。

この場に彼女を止められる者は、エース位の技量を持つパイロット位な物だろう。彼女は連邦軍機やネオ・ムガルの敵機を駆逐しながら凶鳥と共に街を舞い続けた。

『や、奴だ！ 奴が!! グワアアア!!』

「一体何が起こってるのよ？」

『どうやらサイキックハンターが騒いでいる例の女が現れたようです…』

データセンターに近づくワルキューレやネオ・ムガルの機動兵器を駆逐していたデア

中佐は、ゲシユペンスト・タイプMのコックピット内で友軍機のパイロットが上げる悲鳴を無線から聞いていた。何が起こっているのかを部下に問い質せば、彼はそれがマリであると答える。

「まさかあの女がここに居るとはね…これはちよつと、何人か死ぬわよ。心して掛かるしかないわ」

部下からの情報で相手がマリだと分かったデアは、部下たちに心して掛かるように告げる。その物の数秒後に、マリが駆る白いヒュツケバインが本来の機体性能が持つ機動力で待ってくる。

『は、早い!』

「全員気を引き締めなさい! 相手は人だと思わないで!!」

余りの速さに驚く部下に、デアは飛んでくるビームを咄嗟の判断で躲し、部下たちに相手を人だと思ふなど言ってから反撃に移った。

「マジで人間離れしてるわね! あれじゃあ、中はスクランブルエッグ状態だわ!」

どの攻撃もまるで来るのが分かっていたかのように避け、更に人間離れした動きを見せるので、デアは通常の状態ならミンチのような状態になると叫び、ひたすらにゲシユペンストが持つODST専用の短機関銃をPTサイズにした機関銃を撃ち続けるが、これも当たらず、味方機の一機を落とされる。

『畜生、良くも!!』

「待ちなさい! あいつに接近したら…!」

味方を落とされて憎しみを抱いた一人の部下が乗るゲシユペンストが左腕のサーベルホルダーからプラズマカッターを引き抜き、マリの白いヒュツケバインに斬り掛かったが、あつさりと避けられ、逆にサーベルで胴体を切り裂かれて撃墜された。

『モギア!』

「さっきの二人みたいになりたくなかったら下がらなさい! こいつの相手は、私がするわ…!」

『あいつは危険すぎます…! 六機で掛ければ…』

「馬鹿言いなさい! 全員あの世に送られるのがオチよ。それよりあんた等はアンノウンの対処をしなさい。味方がそいつ等の所為で混乱してるわ」

『りよ、了解…!』

二人の部下の命を一瞬にして奪われ、激情する残りの部下たちを黙らせたデアは、一人でマりに挑むと告げた。

そんな彼女に危険すぎると部下は共闘しようとするが、かえって損害を増やすばかりなので却下され、乱入者のネオ・ムガルの対処を命じられる。これに部下たちは自分たちでは歯が立たない悔しさに負け、その命令に応じて上官を一人残し、命じられたとお

りにネオ・ムガルの対処へ当たる。

「はあ、あの時の事を思い出すわね……」

一人でマリと戦うことになったデアは、かつて死闘を繰り広げていた戦争の事を思い出した。

あの時は頼りになる仲間たちが大勢居て、強力な敵に立ち向かえたが、今はそんな仲間たちは居らず、たった一人で大部隊を殲滅する女が相手だ。絶対的な強敵を相手に死の恐怖に捉えられながらも、彼女はそれを抑え付け、マリが駆る白き凶鳥に単独で挑んだ。

マシンガンを撃ちながら近付くが、これも全て避けられ、反撃のビームが凄まじい速さで来る。それを死線で培って来た反射神経で躲し、背部のウエポンラックに搭載されているミサイルを空かさずお見舞いする。

「はあ、それも全部避けるつもり……?」

避けられない距離でミサイルを撃ったつもりだが、マリはその全てのミサイルを自分の肉体を破壊するような機動を行って迎撃していた。それを見ていたデアは、驚くしか無かった。

物の数分程で全てのミサイルを迎撃したマリのヒュッケバインは、直ぐにデアのゲシユペンストへ向けてビームを連続で撃ち込んで来る。デアも臆せず飛んでくる

ビームを避けるが、全てを避け切れるわけが無く、胴体や左脚に被弾する。

「左脇腹に左脚に被弾！　PT操縦には自信があるけど、相手は化け物クラスね……！」

PT操縦には自信があるデアだが、相手をしているのが化け物クラスだと分かれば、少しばかり恐怖が湧いてくる。今すぐにも逃げ出したい気分であるが、相手はそれを許さず、直ぐにでも背中にビームを撃ち込んで来るだろう。

「消耗戦と行こうかしら……！」

覚悟を決めたデアは、マリに近接戦闘を挑むため、マシンガンを左手に持ち替え、左腕のサーベルホルダーよりプラズマカッターを引き抜き、マシンガンで牽制しながらマリのヒュツケバインに接近した。

「邪魔だ！　退け!!」

主戦場で戦うヴァンはと言えば、自分のヨロイであるダンを駆り、群がるネオ・ムガルの敵機を蹴散らしながら、かつて自分が倒した敵のヨロイであるメツツア・オブ・チューズデイに単独で向かった。

そのヨロイは逃げ回る連邦軍機を容赦なく手にしているレイピアで切り裂いており、風貌とは似つかない虐殺者かに見えた。

そんなこと馬鹿には関係ない。倒した筈の敵が生きることが気になるだけだ。

ネオ・ムガルの集団を壱刀で斬り捨てると、かつて倒したヨロイの前に立ってここに立っているのかを問う。

「テメエ！　なんで生きてる!!」

『そ、その声は…!!　欠番メンバーだと!?　何故貴様がここに居る!?　英霊?　否!』

咎人として転生したのか!?』

「何言ってるんだテメエは!?　俺は生きてここに居んだよ!!」

使い慣れない映像通信を使ってメッツアに問えば、自分に初めて敗北を認めさせ、殺した筈である男が映った。

その男は、ヴァンがこの世界に来ていることに驚いており、死んで英霊、自分と同じ咎人として蘇ったのかと問い返せば、それを知らないバカは知らんと返してから自分は生きてこの世界に居ると突き返す。

『生きているだと…!!　それに異世界転移まで!!　馬鹿な!　貴様のような輩がそんなことを…!!　はっ!?　ど、同志はどうしたのだ!?　貴様のような奴が同志を殺せるはずが無い!　殺されて咎人として転生されたはずだ!!』

「同志?　カギ爪の野郎か!　俺がぶっ殺してやったよ!!　この壱刀でズバツとな!!」

『なんだと…!!　そんなはずが無い…!　同志が貴様如きに…!!』

突き返せば、ヴァンはメッツアに乗る騎士のような男が敬愛する同志と呼ばれる男を

殺したと告げた。

それを聞いた男は凄まじく動揺を覚え、怒っているのかそれとも悲しんでいるのかを分らない程であり、ヴァンにその顔を見せないためか、表情を下に向けていた。それから暫く声押し殺して黙っていれば、不気味に笑い出し始めた。

『フハハハ、そうか、同志は貴様に殺されたのか……！ 分かつたぞ……私が再び現世に転生した理由が！ 私が現世に呼び戻された理由は、貴様、ヴァン！ 同志の仇である貴様を殺す為だ！ このウイリアム・ウイル・ウー！ 同志の仇を遂行するため、貴様を我が剣にて殺す!!』

「何の理屈が分からねえが、もういつペンぶつ殺してやるまでだ!!」

不気味に笑い出し始めた後、蘇った理由が自分の敬愛している同志の仇を思い込めば、ウイリアム・ウイル・ウーと呼ばれた咎人は、自身が駆るヨロイであるメツアの猛り立つレイピアで突き刺そうとヴァンが駆るダンに突撃した。

これにダンは真つ向から挑み、突き刺されるレイピアを壱刀で防ぎ、蹴りを入れ込もうとする。

『そんな小細工は効かん!!』

相手は三度ほど手合わせして動きを読んでいたのか、避けられてメツアのレイピアの突きが来る。素早い突きだが、ヴァンは数々の死線を潜り抜けて来たので、それを避

けて刀を叩き付けるも、それを戻したレイピアの刀身で塞がれてしまう。

『どうした！ それで私と戦うつもりか!?』

「一々うるせえ野郎だ！ 直ぐに黙らせてやる!!」

自分の攻撃を防いだウイリアムからの挑発には乗らず、ヴァンは連撃を仕掛けたが、一度目に死んだときに動きを読んでいたのか、幾度も防がれ、逆に胴体に一太刀を浴びた。ダンに一太刀を浴びせたウイリアムは、この程度の奴に自分の敬愛する同志が殺されたと知って呆れたのか、それとも怒りを感じたのか、その怒りをヴァンにぶつける。

『それで同志を殺しただと？ 嘘をつくな！ 貴様如きに同志が殺されるはずが無い!!』

「黙れつつつてんだろうが！ このゾンビ野郎が!!」

罵倒には罵倒で返しつつ、ヴァンは冷静となつて相手の攻撃を読んで遂にメツツアに一太刀を浴びせることに成功した。

「へっ、どうだ!」

『おのれ、調子に乗るな!』

相手の機体を傷付けることに成功したヴァンは子供のよ様な笑みを浮かべたが、それがウイリアムの逆鱗に火を点けたのか、更に攻撃を強め、ダンの背後に居る味方機を切り裂いてしまうほどの斬撃すら飛ばして来る。



『や、ヤベエ！ あいつ等から離れる！ 巻き込まれるぞ!!』

ウイリアムが周りを気にせず斬撃を飛ばしてくるので、周囲に居たネオ・ムガルの機動兵器群が離れ始めた。

「おい、お前！ 味方を巻き込んでるぞ!!」

『そんなもの知った事か！ 奴らは咎人だ！ 殺して何が悪いか?!』

「お前も悪いことやつて生き返らされた奴じゃねえか！」

味方機を巻き込むウイリアムに注意するヴァンだが、彼は巻き込んだのは過去に罪を犯した咎人なので、殺して何が悪いと怒鳴り付ける。

しかし、ウイリアムも過去に罪を犯した咎人であり、バカであるヴァンでも彼が罪を犯したことを元の世界に居た仲間聞いた事があったので、それに関してツツコミを入れながら蛮刀を叩き付けた。

『野良犬の分際ではぎくなく！』

この指摘もとい、ツツコミが更にウイリアムの怒りに火を注いだのか、更に攻撃が激しくなった。

その攻撃をヴァンはダンを必死に動かして高速の突きを避け、反撃の糸口を見付けては直ぐにそこへ蛮刀を叩き入れる。こうした攻防戦が続く中、ヴァンとウイリアムの戦いは周りを巻き込む膠着状態へと発展した。

「さて、向こうもあっちもスーパーロボットウォーズって所だな。俺のところにも、お客さんが来たようだ」

「ちいちゃいのと中くらいなのがわんさかこっちへ向かってきてるでやんすよ」

各々がそれぞれの強敵と死闘を繰り広げる中、ハーケンとアシエンが乗るゲシユペンスト・タイプHの元へも、ネオ・ムガルの強敵が乗る機動兵器群が迫りつつあった。

地上や宇宙の者達が戦っている間、ハーケンらも指を咥えて見ているわけでは無い。彼らもワルキューレの部隊を守る為、ここでネオ・ムガルの侵攻部隊を彼女らと共闘して食い止めていたのだ。

他の方面へは対処できなかったが、先の連邦軍と同じくここに戦力を集中してくれていたために、敵本隊への街の侵入を拒むことが出来た。そんなハーケンらの元へは、水陸両用タイプのATと、空中を自由に舞う10m級の機動兵器が大勢の部下を引き連れて向かって来る。その後ろからは、バギーなどに乗ったモヒカンの集団が続いていた。

「更にモヒカンの大軍団が接近中。こりやあ英霊さんたちにも手伝ってもらわなきゃ、全員地獄へ送り返すことは出来ないでやっちゃ」

「OK、ヒーローズと一緒に協力してライダー共を含めて地獄へ送り返そうか!」

それをアシエンに知らせれば、ハーケンは飛んできたミサイルを回避し、有象無象に

突っ込んで来る敵機をナイトファウルで次々と破壊する。乗っているパイロットの腕がお粗末すぎたのか、それとも何も考えていない馬鹿なのか、まるで的のように撃たれて破壊されるばかりだ。流石のハーケンも、これには呆れ果てる。

「おいおい、まるで的当てゲームだな。これじゃあ、赤ん坊でも当てられそうだ」

「あなたの射撃の腕がヤバ過ぎることよ」

「おっ、毒舌シンデレラがこの俺を褒めてくれたぞ」

「いや、別に褒めて無いです。つか、自惚れすんな、ナルキモ」

「いつもの毒舌アンドロイドか……まあ、いつもの事さ！」

アシエンに褒められたと思つたハーケンであるが、その後いつもの彼女に戻つたため、引き続き操縦桿を動かしつつ、敵機を撃破し続ける。

その時、ハーケンはワルキューレの少数の歩兵部隊がネオ・ムガルの歩兵隊、ではなく無法者の集団に追い回されているのが見えた。ワルキューレの歩兵隊は全員女性であるので、女性のために命を張るハーケンは、直ぐにアシエンに救出を命じる。

「アシエン、レディ・アーミーズがレイダース共に襲われている。行けるか？」

「アイアイサー、艦長。世紀末救世主伝説、行くでザンス！」

ハーケンに問われれば、アシエンはコックピットから飛び出し、無法者の集団に飛び降り、女と見て舌を出しながら下品な笑みを浮かべるモヒカンの男を自慢の両足である

グラスヒールで踏み潰した。

「ボギヤツ!!」

「な、なんだこの女あ!!」

踏み潰した男が変な断末魔を上げて息絶えた後、アシエンを見た無法者達は驚きの声を上げた。

「私の名はアシエン・ブレイデル。この名、死んだ後もとくと覚えておくが良い」

「ふざけやがって! ぶっ殺してやる!!」

「ヒヤッハー! 女だア!!」

「食ってやるぜ!!」

アシエンが無法者達に向けて名乗り上げれば、無法者達は一齐に拳を構える彼女に襲い掛かった。

これに彼女は何の恐れも抱かず、次々と飛び掛かって来る無法者達に硬い拳を打ち込む。一人、二人、三人、四人と連続で打ち倒していけば、本の数秒ほどでアシエンに向かって来た無法者達は全て地面の上に転がっていた。

「こ、このアマあ……! ぶっ殺……あ、あべし!」

殴られて上がるうとした一人の無法者が立ち上がるうとした瞬間、頭が急に爆発して即死した。その物の数秒後で、アシエンに殴られた無法者達が次々と爆死して行く。

「な、なんだこりゃあ!」

「拳を打ち込む瞬間にこの炸裂弾を撃ち込んだ。ツツコミどころ満載だが、ようは時限信管みたいでもんをぶち込んだって所よ」

急に爆発した仲間を見て驚きの声を上げる無法者らに、アシエンは拳を打ち込むのと同時に炸裂弾を撃ち込んだと解説する。だが、どうやって痛みも与えずに撃ち込んだ理由は不明だ。

「このアマ! 訳の分からねえことをほぎきやがつて! 死ねやあ!!」

意味不明な返答をしたアシエンの答えに怒りを感じたのか、無法者達が更に大勢で挑んで来る。

「おい、雌豚共。機関銃を二挺ほど寄越せ。四十秒以内にだ」

「えっ? あつ、は、はい……!」

これにアシエンは、近場に居るワルクューレの女性兵士たちに持つている銃を寄越すように言えば、彼女らは指示に応じて手にしているL85A2突撃銃やFNミニミ軽機関銃を投げ渡した。

その二挺の銃を受け取ったアシエンは、雄叫びを上げながら突っ込んで来る無法者達に向けて乱射する。雨のような弾丸を浴びた無法者達はバタバタと薙ぎ倒れられていく。

「このアマア！ 吹き飛ばせ!!」

「危ない!!」

「っ!?!」

大多数の仲間たちを殺された怒りか、3mはある大男がロケットランチャーをアシエンに向けて撃ち込んだ。女性兵士の叫びで気付いたアシエンであったが、ロケット弾は早く、避け切れずに当たってしまう。

「へっへっ、どうだ!?!」

強敵であるアシエンを倒したと思つた大男であったが、煙が晴れた場所にはコードD TDを発動した彼女の姿と子供のような無邪気な笑みがあつた。

「キエエエ!?! い、生きてるう!?!」

「世紀末救世主の如くに覚醒!?! じゃなくてコードD TD発動!?! 僕ちんのラツシュ&オーバーキルタイム、始まるよ!?!」

無邪気に恐れおののく無法者達に語りながら、アシエンは通常状態の倍の速さで周りに居る無法者達を殴るや蹴るなどして一掃した。掃討に掛かった時間は僅か二十秒辺り。彼女に殴られるや蹴られた者達は時限信管式らしい炸裂弾でも撃ち込まれたのか、謎の爆発を起こして息絶える。

「ちくしよ!?! このハンマーでも、くらえい!!」

大勢の仲間を謎の技で殺し、自分に標的を向けたアシエンに対し、3 mの大男は巨大なハンマーで彼女を叩き潰そうとしたが、振り下ろすよりも早く懐に飛び込まれ、無数の拳を打ち込まれた。

「アシエンパンチ、連打、連打！ おーっ、アツタタタタ!!」

放たれる拳の速度は一秒間に十六発。その機関銃のように放たれる拳は十秒も続き、男の腹は何度も硬い大槌で打ち込まれた鉄板のようにボコボコになっていた。

「くっ、くえ〜!?! な、にやんだこりゃあ〜!?!」

「そんでとどめのストライキン！ オウーワツチャーー!」

「プゲエ!?!」

自分の腹が恐ろしく信じられない状態になって恐怖している大男に、何の慈悲も無しにアシエンはとどめのグラスヒール、散弾による蹴りを入れ込み、相手の巨体を空中高く上げた。強力な蹴りで空中高くまで上げられた大男は、断末魔を上げながら謎の爆死をする。

『ひっで、ブッー!!』

「Yes! オーバーキル!!」

断末魔を上げて空中爆発した大男を背に、アシエンは決め台詞とポーズを取った。

「シンデレラは張り切っているな。さて、こつちもダンスと行こうか!」

カメラに映る映像でコードDTDの状態のアシエンが派手に暴れ回っているのを、戦いながら見ていたハーケンには負けずに、向かって来る敵機を落としながら地上戦艦を機体の胸部にあるニュートロン・ブラスターを撃ち込んで撃沈させる。

『な、何だあいつらは!? あんな奴がワルキューレに居たなんて聞いてないぞ?!』

『おのれ、客将を取り入れたか! メガミ人共め! このわしが叩き潰してくれるわ!!』  
「おっと、このルーキーな俺は大人気なようだな。だが、サインはレディ限定だぜ!」

二人の異邦人の圧倒的な強さに、乱入してきたネオ・ムガルの咎人らが混乱する中、ネオ・ムガルの正規兵が乗る識別不能な機動兵器が一個中隊分向かって来る。これにハーケンは、自信満々な笑みを浮かべて正規兵等が乗る敵部隊を単独で迎え撃つ。

最初に仕掛けて来るのは正規兵等が乗る一個中隊分であり、約六機の見事な連携攻撃だ。その連携攻撃を見事に全て避け、一機目をナイトファウルに搭載されている剣で切り裂く。

『な、何?!』

『こちらの攻撃を避けて撃破しただと?!』

「ちよつと、強くなりすぎたかな?」

驚きの声を上げる五機に対し、ハーケンは自分が強過ぎたと自惚れする。

そうしている間に残る五機が仕掛けて来たが、またもハーケンはそれらの攻撃を掻い



潜って、スラツシユリツパーで一氣に二機も仕留める。

『ば、バカな!? こんな訳の分からん奴に三機も!?』

「俺が相当な場数を踏んで来たからだぜ、おっさんたち。そう言うのは慣れっこなのさ」  
三機もの味方がどこの馬の骨か分からない男が乗るゲシユペンストに撃破されたため、残る三機が混乱する中、ハーケンは今までに経験した死線を自慢げに語る。そんな三機を仕留めようとした時に、空と地上から自分に向けての攻撃が来た。それも三機を巻き込むような勢いだ。巻き込まれた三機のうち二機の敵機は味方の誤射によって墜される。

『な、何をするんだゴステロ大尉!? それにカン・ユ一大尉も!?』

『ちっ、もう少し足止めしてくれりゃいい物を!』

『全く口ばつかりな奴らだぜ! おかげで仕留めそこなつちまったじゃねえか!』

『き、貴様ら! 咎人の分際で!!』

「おっと、なんだ? 仲間割れか?」

その攻撃を察知して避けていたハーケンは、ネオ・ムガルの咎人と正規兵が仲間割れを起こしたのを見て疑問に思ったが、逆に好機と捉えて空で味方機諸共自分を攻撃した10m級の機動兵器に向けて攻撃した。

『ちっ、攻撃されたじゃねえか!』

『うわっ!! や、止めてくれえ!!』

標的にした敵機は近くに居た同じ10m級、一般機型を盾にして攻撃を避けた。盾にされた敵機は頭部にコックピットがあつたためか、パイロットは確実に死亡し、機体を失つた機体は地面へと落下して行く。この行動を見ていたハーケンは、繋がっている無線機で味方を盾にしたパイロットに抗議する。

「おいおい、マジでヴィランって奴だな。それじゃあ、背中からいつ撃たれてもおかしくないぜ。おつさん」

『なんだあ、このチャライのあ? いきなり説教してきやがって! こいつが偶然、近くに居たのが悪いんだよ! ムカつく面の野郎だ! おい、カン・ユー! 協力しろ!』

『このいけすかねえ野郎をぶっ殺すんだ!』  
『貴様! 同じ大尉だからと言ってこの俺に命令するな! 貴様だけでやれ!!』

『この咎人風情が! ……』

抗議したが、相手は味方を盾にした罪悪感など微塵も無く、逆に起こり始めた。地上に居る自分よりもマシな悪人面の男に、ハーケンを共に殺すように物を頼むようでは無い態度で命じるが、流石に断られる。

そんな二人の元に、二人の部下を殺された正規兵の隊長が銃殺刑にしようと、手にしている主兵装で二名の咎人に刑を執行しようとする。だが、それを悟られて地上と空の

攻撃を同時に受けて返り討ちにされた。

「ちよつと待て。お前らに仲間意識とかあるのか？ 例え仲が悪くても、殺すのは無しだろ？」

『ふん、対した指揮能力も無いくせにこの俺に銃を向けたからやったまでだ』

『俺たちを勝手に蘇らせて、いい気になって顎で使おうとするからぶつ殺したまでだ！

テメエも殺してやるぜ!!』

自分等を勝手に蘇らせ、顎で使おうとする奴らだから殺したと返す二人の悪党に対し、ハーケンは怒りを覚えたが、激情せずに冷静になってアシエンを呼び戻す。

「OK、あんた等が根っこからの悪党だって事は分かった。アシエン、戻れ！」

『了解なり、艦長』

地上の歩兵の掃討を終えた通常状態に戻ったアシエンをコックピットへ呼び戻してから、悪党が乗る二機の機動兵器に挑む。

「さて、ヒーロー・ガール。悪党退治と行くか！」

「イエッサー、泣くまで殴り続けてやんよ」

『ほう、一機で我々に歯向かうと言うか！ 返り討ちにしてくれるわ!』

『コックピットから引き摺り出して斃殺しにしてやるぜ!!』

そう宣言すれば、アシエンもそれに同意する。この宣言に二名の悪党は乗り、ゲシユ

ペンスト・タイプHとの死闘を始める。

開幕早々に空と地上からの同時攻撃晒されるハーケンであるが、その攻撃を潜り抜け、地上にいる小隊規模で行動するAT部隊の攻撃を避けながら一機ずつ確実に仕留めて行く。

『ぬっ!?! く、クソ!』

味方機を次々と撃破され、少し焦るATの方の悪党は、ハーケンの攻撃を避けつつ反撃に出る。

「ちっ、腕の方はピカイチか」

「空より殺人中毒者が接近中!」

「空のキリングマンも相当な腕前だぜ!」

あのAT乗りの技量の高さに舌を巻くハーケンだが、空よりもそれと同等の技量を持つ男が駆る機動兵器が襲い掛かる。

アシエンの報告で攻撃を避けることは出来たハーケンは、地上のAT乗りと同様に褒め、攻撃を避けながらナイトファウルを撃ち込む。だが、敵機の機動力は高く、放った全ての弾丸が避けられてしまう。

「地上は強力な火力を持つ水陸両用型AT、ダイビングビートル。そんでお空はさつき解説して分かったSPTってちゆう10m級機動兵器タイプのブルグレン。前も言っ

た感じで言っちゃいますけど、サンドイッチじゃんよ」

「やれやれ、サンドイッチは食べる方が好きなんだけどな。挟むハンスは面の酷い悪党二人じゃ無くて、美女二人だけにして欲しいぜ」

「艦長、それマジでスケベ過ぎつす」

「下品な発言、ソーリーだ」

こう危険な状態に晒されて居るにも拘らず、ハーケンとアシエンはコックピット内で軽口を交わしながら強敵が乗る地上のダイビングビートルと、空の強敵が乗るブルグレンと死闘を繰り広げた。

Rocks!  
後編

スーパーロボット大戦が始まり、更に戦闘が激しさを増して、双方とも膠着状態に陥る中、ワルキューレの増援部隊が惑星サジタリウス周辺宙域に現れる。

その規模は百隻余りの大艦隊であり、乱入してきたネオ・ムガルの部隊を圧倒するほどの数だ。

大艦隊の先攻としてか、青い巨大なロボがネオ・ムガルの無人機を次々と両手のブレードで破壊しながらゼンガーらの元へ近付く。

『むっ、あれは…!?!』

『ワルキューレの増援部隊か！ それにあれはソウルゲイン！ アクセル・アルマーか!!』

「ゼンガーにレーツェル、貴様たちのピンチと聞いて助けに来た。これがな！」

気付いたガドヴエドが声を上げた後、ゼンガーは増援部隊に先行して無数の敵機を片付けながら近付く青い特機「ソウルゲイン」を見て、即座に新西暦の世界の戦友である赤毛の青年、アクセル・アルマーだと見抜く。

戦友が来たと聞いてか、レーツェルも敵機を撃破しつつ近付き、アクセルとの連絡を

取る。

『アクセル・アルマー、君はヴィジヤマ戦線に居たのではないのか?』

「ちようど他の隊と交代でな。貴様たちが連邦軍の制圧下で苦戦していると聞いて駆け付けて来た。どうした? この程度の敵、お前たちなら造作も無い筈だが?」

『君はまだネオ・ムガルと交戦していないから分からないが、彼らは思ったよりも強力だ。英霊たちが来なければ、どうなっていた事か』

ゼンガーとレーツェルが居るのに、この程度の相手に苦戦していると勘違いするアクセルであるが、連絡を取って来たレーツェルは英霊たちが来なければネオ・ムガルに潰されていたと返した。

そうと聞いて見慣れないロボット軍団が英霊たちの駆る物であると分かれば、アクセルは救出後に脱出することを告げる。

「そうか。あの見慣れないロボの連中は、英霊の連中と言う事か。まあ良い、地上へはラミアとアルフィミイを向かわせた。時期に戦闘が終わるだろう。そしてここから脱出だ、これがな」

『脱出か。だが、敵はまだ戦意がある! 大将首を討ち取らねば、敵は撤退せん』

「それなら、あの馬鹿デカイ派手な戦艦を潰すまで! 行くぞ!!」

脱出と聞いてか、ゼンガーは敵の諦めが悪いことを知らせれば、アクセルは遠くに派

手に目立つ戦艦が旗艦と判断して単独で向かう。

途中、幾らか妨害があつたが、英霊たちが派手に暴れ回って殆どが一掃された後なので、すんなりと進めた。道中、赤く光って無数の敵機を一掃したパトリック・コーラサワーが乗るジンクスⅣと出会う。

『どうだ!? このコーラサワー様の実力を! 俺が本気を出せば、この程度朝飯前:』  
「退け!」

『うわあああ!? 俺の扱い酷過ぎだろおお! てか、お前は誰なんだ!? 勝手に現れて退けなんてよ! 聞いてんのか!』

そう自慢げに話すパトリックのジンクスⅣを、アクセルは躊躇なく跳ね飛ばし、先へと進んだ。

何とか持ち直したパトリックは、アクセルのソウルゲインに向けて怒りをぶつけるが、彼は聞かずに敵旗艦へと単独で突っ込んだ。

「邪魔だ! 清龍鱗!!」

盾になろうとする敵の駆逐艦に対し、アクセルはソウルゲインの射撃技とも言える物を行う。機体が両手を合わせてエネルギーを溜め込み、十分な程に溜まれば駆逐艦に向けて放つ。

その威力は凄まじく、一撃で駆逐艦が真っ二つに割れる程の物であつた。直ぐに代わ



りの随伴機や護衛艦が立ち向かって来たが、アクセルのソウルゲインに敵うはずが無い。

「白虎咬！」

代わりとして現れた軍団に対し、アクセルはソウルゲインの両手にエネルギーを込め、連続パンチを食らわせる。

凄まじい速さで打ち込まれる拳は立ちはだかった全ての護衛機と護衛艦に打ち込まれ、その全てを撃破する。数十機と数隻ほどの爆発が巻き起こり、爆炎で包まれる中、ソウルゲインはそこから現れ、空かさず次なる攻撃を盾になろうとする戦艦に行く。

「そうはさせん！ 玄武金剛弾!!」

アクセルがそう叫べば、ソウルゲインの前腕部はスピニングながら右腕から飛び出し、戦艦にぶつかった。俗に言うロケットパンチだ。

飛んできた前腕部を受けた戦艦はバランスを崩し、航行不能状態に近い程の物になる中、アクセルは機体の両腕にあるブレードで容赦なくとどめを刺す。

「一気に決める！ コード麒麟、発動!!」

早期に勝負を付けるため、アクセルはソウルゲインの必殺技を発動した。

両腕のブレードが伸び、機動性も通常状態の倍以上の速度が出る。対空砲火の弾幕を避け、一気にブリッジまで接近すれば、躊躇なくブレードをブリッジに叩き込み、敵旗

艦を沈める。

「失せろ、この世界からな」

そう決め台詞を吐けば、敵旗艦は爆発しながら沈んでいく。

『き、旗艦が!?!』

『て、撤退だ! 撤退せよ!!』

旗艦をソウルゲインにやられたネオ・ムガルの部隊は、蜘蛛の子を散らすように撤退を始めた。

『ゼンガー・ゾンボルト! この勝負預けるぞ!!』

『ご老体、次の機会にまた手合わせ願おう!』

『その間に、他の誰にも負けることは許さんぞ!』

流石のガドヴェドもここまでと判断してか、残りの部下たちを率いて撤退を始めた。かくして、宇宙におけるスーパーロボット大戦は、ネオ・ムガルの旗艦が増援として来たソウルゲインに撃沈されて終了した。

「ラミア、幽霊さんと凶鳥さんが喧嘩をしておりますの」

『アルフィミイ、お前の任務は都市部の友軍の救出だ。私は敵の本部にカチコミに行く。取り敢えず、余り潰さないようにしくよろ…ではなくようにな』

「分かりましたですの」

通信映像に映るラムミアと呼ばれる女性に、目前でマリが乗る白いヒュツケバインとデアが駆るゲシュペンスト・タイプMが交戦しているのを見ていたアルフェミーと呼ばれる少女は、それを伝えれば、彼女は自分等に出された指令を伝えてから、自分の任務に向かう。

命令を受諾すれば、アルフェミーは自分の愛機…もとい半身である機動兵器型の物「ペルゼイン・リヒカイト」を駆って連邦軍機を含め、ネオ・ムガルの機動兵器に強襲を仕掛ける。

「ヒュツケバインとビルトシュバインの量産機は連邦軍…破壊ですの」

『な、なんだあいつは!』

『あの例の戦場に居た奴か!』

『今は単機だ! 囲んでやっちまえ!』

「ペルゼインちゃんは大人気ですの」

最初に標的にした連邦軍機のパイロット達から、自分が乗る機体の事を知っていたので、子供のように喜ぶアルフェミーであるが、相手は殺す気であるので容赦なく機体が唯一持っている携帯火器である刀「オニレンゲ」を握りながら近付く。

『奴の武器は日本刀一本だけだ! 離れて…』

「武器はオニレンゲだけではありませんの」

敵はペルゼイン・リヒカイトの武器が日本刀一本だけだと思っていたが、何の前触れも無しに機体全体より光線が放たれたので、ネオ・ムガルも含む数十機が撃墜された。

突然、全体から光線が出て多数の味方機が落とされたのを見て慌てふためく連邦軍に容赦なくアルフィミイは追撃の手を掛ける。

「まだまだですよ」

機体両肩の鬼面を変化させ、周囲に居る連邦軍機やネオ・ムガル機のみを標的とさせ、口から光線を吐かせた。

放たれる光線は正確に敵機のみを撃墜し、モスバサシテイ上空で戦闘を行っていた連邦軍やネオ・ムガルに相当な損害を負わせることに成功する。圧倒的な強さであるペルゼイン・リヒカイトの前に、ネオ・ムガルの部隊は統制が乱れ、各々がバラバラに逃げ出し始めた。

「ネオ・ムガルの方々が逃げ出し始めたですよ」

『この化け物が!!』

ネオ・ムガルが敗走するのを見ていたアルフィミイであるが、背後より迫るONIの所属のゲシュペンストがプラズマカタールで斬り掛かって来た。それに気付いたアルフィミイは、直ぐに背後より迫り来る敵機に振り返らせ、オニレンゲを胴体に突き刺す。

『う、うおおお!?!』

「後ろから襲い掛かる失礼な人はマブイタチですの」

突き刺した刀身を抉るように、何度も刺してからそれを引き抜く。引き抜いた後に、機体のオイルがペルゼインの胴体に返り血のように降り掛かる。刀身には、パイロットの血がオイルに混じって付いていた。

『死ねえ! 化け物!!』

「人を化け物扱いする人にはお仕置きですの」

それから物の数秒ほどで、同型機の二機が仲間の仇をまたペルゼインに向かって来たが、傀儡が何所からともなく出した刀で両断され、一矢報いることなく撃破された。

ペルゼイン・リヒカイトの参入により、連邦軍の損害も馬鹿にならなくなり、ODSTのPT部隊は撤退し始めた。その様子が盗聴機能を備える無線機より聞こえて来る。

『被害甚大! もう戦闘が行えません! ODS Tが撤退を始めました! 機動歩兵もです!』

『なんてこと! データ回収は!?!』

『完了して撤収中! 中佐も早く!』

『分かったわ! こいつを引き離してからね!』

「早く逃げてくれて助かりますの」

指揮官のデア中佐が撤退すると言ったので、アルフィミイは笑みを浮かべた。

デアのゲシュペンストとマリのヒュツケバインとの戦いは、デアが蹴りを相手の胴体に入れて離脱したので、引き分けと言う形で終了した。そんなマリの白いヒュツケバインが、ライフルを向けながらアルフィミイのペルゼインに近付いてくる。

『あんた、何者?』

「白い凶鳥さんに乗ってる人ですか? 私は味方ですの。ペルゼインちゃんはこんな顔ですけど、味方ですの」

『そう、じゃあもう戦闘が終わったってこと?』

「そう言う事ですの」

無線で問い掛けて来るマリに対し、アルフィミイはそう返せば、デアのゲシュペンストの戦闘でボロボロになった白いヒュツケバインはライフルの銃口を下げた。

アルフィミイのペルゼイン・リヒカイトがモスバサシテイの連邦軍機やネオ・ムガル機の掃討を行っている頃、ラミア・ラヴレスの駆る翼の生えた女騎士のような出で立ちを持つ機動兵器「アンジュルグ」を駆って上空に居るネオ・ムガル機を实体剣で斬り捨てながら本部へと向かう。

「敵の本部は…護衛が大量に居る方だな」

直ぐに大量の敵が居る場所が本部だと分かれば、アシエンは次々と敵機を斬り捨てながら敵の本陣へと突き進む。

「ん？ あれはゲシユペンスト・ハーケン！ 誰が乗っている？」

無数の敵機を撃墜しながら向かうラミアは、道中に二人の強者と死闘を繰り広げるハーケンとアシエンが乗るゲシユペンスト・タイプHを発見した。この時、彼女はハーケンたちがこの世界に来ているとは知らなかったため、誰が乗っているか確認するため、そこへ向かう。

『な、なんだ貴様は!?!』

『俺の楽しみを邪魔しやがって!』

ダイビングビートルとブルグレンに攻撃を仕掛ければ、その二つの機体に乗るパイロット達からの攻撃を受ける。

「雑魚とは違って腕が良いな」

ハーケンを追い詰める技量を持つ二人なので、ラミアは少し苦戦するが、なんとか動きを見て対処する。

『おい、まさかとは思いますが、シンデレラのシスターか?』

「その口調は、やはりハーケン・ブロウニングか。お前さんは何しに来たっちゃ？」

そのゲシユペンストを助ければ、以前に新西暦の世界で顔を合わせた男が映像に映

り、問い掛けて来る。次に自分の姉とも言える女性が出て来る。ラミアも次に移った姉であるアシエンと同じく言語機能に障害を持った人造人間であるのだ。

『おう妹よ、久しいのう。あの練習はしているか?』

「いや、あれマジで無理です。つか、白兵用じゃねえし。それより苦戦しているようですが、アシエン姉さま」

『ふん、この程度の悪党相手に手こずっているのは、大事に障るっちゃ! 行くぞラミア!』

「了解です、アシエン姉さま。今こそ駆け抜ける時!」

『おつ、随分やる気だな。アシエンもシスターシンデレラも。OK、空の奴は任せる!』

俺たちは地上をやるぜ!』

「了解、空は任せるなりよ」

ハーケンの次に出たアシエンに、例の練習はしているかどうか問われれば、してないと答えた。

それと二人の強敵に手こずっている様子なので、調子が悪いのかと問えば、アシエンはやる気を見せた。これに乗ってか、ハーケンはダイビングビートルの対処に回ると告げ、空のブルグレンを任される。その指示に応じ、ラミアはブルグレンの対処に入った。『なんだこのデカイ変な機械あ! 派手にぶっ壊してやるぜ!』



「壊されるのは貴様だ、完全悪人面」

自分の邪魔をしたラミアに対し、ブルグレンに乗る男はレーザーで執念な攻撃を仕掛けて来る。それにラミアは悪口で答え、レーザーを回避しながら低射撃武器であるシャドウレーザーを撃ちつつブルグレンに接近しようとする。

『く、クソお！ デカいくせにはえぞ！』

「お前が撃つのが遅いんじゃないのか？」

『だ、黙れえ！ このアマ！ 引き摺り出して殲殺しにしてやる!!』

ブルグレンのパイロットが苛立ちの声を聴いたラミアは、相手の冷静さを奪おうと、挑発的な言葉を掛ければ、相手は思った通りに逆上して更に攻撃を強めて来る。

攻撃が強まって少し被弾したが、なんとか近付くことに成功する。接近した際に、ミラージュソードを実態からエネルギー状態へと変えて斬り掛かる。

「ミラージュソード・Eモード！」

『ぬあ!?!』

突然、実体剣からエネルギー状態に変わったので、驚く敵機のパイロットであるが、その間に左腕を斬りおとされる。

『お、俺の機体の左腕が!?!』

「ミラージュサインを使う！」

相手が怯んでいる間に、ラミアは機体の格闘の必殺技を使う。

機体の翼を大きく広げ、瞬間移動しながら五芒星を描くようにブルグレンを斬り刻んだ後、正面から超高速の突きを入れてとどめを刺した。

『くっ、クソオ！ なんてだ!?!』

自機が破壊されたパイロットは、脱出装置を起動させて爆発直前のブルグレンより脱出した。

敵機を撃破した後、索敵に入りつつハーケンらがダイビングビートルをどうしているか見た。案の定、彼らもダイビングビートルを追い詰め、撃破寸前の所まで行っていた。

「おっさん、もう降りられないぜ!」

『う、うわあああ!』

ハーケンはゲシユペンストではとどめを刺さず、直接自分の手に握った展開ギミックを備えたりボルバーであるロングトウム・スペシャルでとどめを刺そうとしていた。

エネルギーが銃身に溜まる中、機体の足の一本を破壊されたダイビングビートルの乗り手は、死に怯えて機体を捨てて逃げ始める。

その瞬間に高エネルギー弾が放たれ、それを受けたダイビングビートルは爆散した。乗っていた悪人面のパイロットは爆風で吹き飛ばされて地面に顔をぶつけたが、しぶとく生き残り、悲鳴を上げながら逃げ去った。

「た、助けてくれえええ!!」

「ちっ、仕留めそこなつたか」

『艦長、また仕掛けて来ると思いますが、今は良いつしよ。ラミア、早く行ってやりな』

これにハーケンは舌打ちをしたが、アシエンはひとまず脅威は去つたと言つて、ラミアに敵の本部を潰すように告げる。

「アイアイサー、アシエン姉さま。ケリを付けに行きます」

『早く終わらせて、特訓するぜよ』

それに応じ、ラミアはアンジュルグの翼を更に羽ばたかせ、高度を上げて地上にある敵本部を狙える位置まで向かう。当然ながら、ネオ・ムガルのSPTやその他諸々の空中戦が可能な機動兵器が邪魔立てしてくるが、展開したイリユージョン・アローの早撃ちで撃破される。

「次が来る前にカードを切らせて貰う。コード・ファントムフェニックス発動!」

瞬く間に全機を撃破したラミアは、機体のリミッターを解除させ、イリユージョン・アローで使用する弓を右手に握り、左手から高出力の矢を発生いさせて敵本部に狙いを定める。

エネルギーが十分に溜まれば、直ぐにその強力な矢を本部に向けて放つ。放たれた矢は炎を帯び、やがては不死鳥となって敵本部へと直撃し、凄まじい大爆発を起こす。爆

発は周囲の守備隊を巻き込み、敵本部は跡形も無くこの地より消え去った。

「敵本部沈黙を確認。敵部隊、撤退を開始中だわさ。なんだこの言語モードは？」

敵本部をアンジュルグの必殺技で吹き飛ばした後、敵軍の撤退を確認してからラミアは自分の言語機能の異常を見付けて疑問に思った。

『この状態は?! クソツ、本部がやられたのか?! なんとも情けない奴らだ! だが、これでは立て直せん…! やもえん…!』

敵本部の消滅により、ネオ・ムガルは更に混乱して宇宙と同様に散り散りに逃げ始めた。

ヴァンのダンと一騎打ちを行っていたメツツアを駆るウィリアム・ウィル・ウーは、自軍が混乱して敗走状態になっているのを見て、このままでは自分も落ち武者狩りに遭うと判断してか、勝負を捨てて撤退を始める。

「おい待て! 自分から喧嘩を吹っかけておいて逃げんのか?!」

『黙れ! 勝負は預ける! その間に首を洗っておけ! 欠番ナンバー!!』

「ちっ、つくづく勝手な野郎だぜ」

味方の敗走を知って勝負を捨てて撤退するメツツアに乗るウィリアムに問うヴァンだが、彼は負けを認めず、首を洗って待っておけと言ってから戦場から飛んで離脱した。

あのダイビングビートルとブルグレンのパイロット、それに正規兵等は殆どの者を置いて拠点がある世界へと次元転移で逃げて行った。

「ま、待ってくれ！」

「置いてかないでくれ！」

正規兵等を除く咎人らはその場に置いて行かれ、ワルキューレの追撃隊に順次皆殺しにされるまで掃討された。

「終わったか……」

戦闘の音はまだ聞こえているが、戦闘は終わったので、ヴァンはダンから降りて周囲を見回す。それと同時にボロボロのダンは、元の中継ステーションがある場所へと待機状態となって戻って行った。

「腹減ったな……」

ダンが去った後のヴァンは、その場に座り込み、腹が減ったとぼやいた。

それと同時に、宇宙からはアクセルのソウルゲインを含めたゼンガーのダイゼンガーとレーツェルのアウセンザイターが降りて来て、空からはハーケンとアシエンのゲシユペンストを含むラミアのアンジュルグ、アルフィミイのペルゼイン・リヒカイトが来た。それに地上からはツアイトを含めるマリのヒュッケバインも来る。

「なんだこりゃあ？」

知らない者も含めるのが来たので、ヴァンは頭を傾げた。そんな彼に、ハーケンは拡声器で声を掛ける。

『よう、ブラック・タキシード！ 生きてたか？』

「おう、チャラ男！ お前も生きてたか!? そんなでこいつ等なんだ!? また馬鹿デカイヨロイがあんぞ!!」

『ヨロイ? 何を言ってるんだ?』

拡声器で無事を問うハーケンに対し、ヴァンは聞こえるくらいの大声でアクセルたちの事を問う。それにハーケンは機体から降りてから答えた。

「ああ、このスーパーな連中か。こいつ等は、エトランゼの時に世話になった連中さ」  
「エルドラみてえなもんか」

ハーケンからアクセルたちの事を聞いて、ヴァンは自分の世界に居たスーパーロボットに疑似したヨロイのことを思い出した。そんなヴァンの元へ、レーツェルとアクセルたちが機体から降りて挨拶をしてくる。

「君が知らぬ異世界より来た者か。私の名はレーツェル・ファインシユメツカード」

「俺は夜明けのヴァン。そのカウボーイからビックハントのヴァンとか言われてる」

「ほう、通り名で名乗るか。姓名はあるか?」

「ねえよ。俺は生まれた時から野良犬見てえに生きてたからよ。父ちゃんも母ちゃんの

顔も知らねえ」

「そうか。済まない事をした」

初めに挨拶してきたレーツェルに、握手のための手を取って通り名を名乗る。

通り名しか名乗らないヴァンに対し、レーツェルは姓名を問うが、彼は生まれた時から野良犬のように自分の力だけで生きて来たので、親の顔などいざ知らず、分からないと答えた。これにレーツェルが謝罪した後、次はアクセルが自己紹介を始める。

「親知らずとな。俺はアクセル・アルマー。元はシャドウミラーと、クロガネ隊所属だが、今は第94機甲師団の師団長直属部隊の隊長だ」

「ワカメみてえな頭してんな、お前」

「なっ!? き、貴様! それを最初に言うか!」

自己紹介したアクセルに対し、ヴァンは自分の第一印象を伝え、彼を怒らせる。そんなアクセルを置いておき、ラミアとアルフィミーが自己紹介を始めた。

「ワカメは置いておき、私の名はラミア・ラヴレス。一応サイボーグなんでしくよろ」

「私、アインスト・アルフィミーでございますの」

「ら、ラミアと…アインスト…ああ、覚えられねえ」

二名の女性の自己紹介を聞いたヴァンだが、彼は愛する女性の名以外、他の女性の名は中々覚えられない。

「ヴァンさんはそっち系ですか？」

「いや、そいつは愛する女一筋。そんなもって童貞ぜよ」

「見た目に沿わず、中々ロマンチックな奴だろ。チエリーだがな」

「本当にロマンチックですよ」

これにアルフィミイはヴァンをゲイだと思ったが、アシエンに愛した女一筋で童貞だと教えられ、ハーケンからはロマンチックな男であると告げられる。

「ほう、中々と凄いな」

「これは驚きだ。こんな男、そうは居ないだろう」

「…お前たちも言えた義理では…いや、この俺もか」

ロマンチストで童貞と聞いてか、レーツェルとアクセルが乗って来る。彼らもまた変わった人間であるとゼンガーに注意されるが、自分も似たような物なので、言える立場ではないと思つて敢えて言わずに黙る。

「腹減つたな。飯とか持つて来てねえのか？」

その後に腹が減つたとヴァンが告げれば、ハーケンはツアイトを指差しながら艦内で食事を取ろうと言つてマリが居た方向を見たが、そこに彼女の姿は無かつた。

「腹が減つたか。それじゃあ、みんなで俺の自慢の戦艦、ツアイトで…おや、あのミスティアアスレディは何所へ行つた？」



「慣れ合うつもりは無いと言って、何処かへ行ってしまうましたの。お供そうなお二人も一緒に行ってしまうましたの」

「勝手な女だ。自己紹介もせずに勝手に勝手に行くとは」

マリがミカルやリンダと共に何処かへ行つたとアルフィミイが告げれば、彼女を知らないアクセルは勝手な女と表した。

「でも、ちゃんと報酬は払つてるでヤンス」

「そこは律儀だな。OK、エブリワン。さあ、ツアイトで食事を取ろうか」

消えたマリであるが、ちゃんと報酬は払っているので、ハーケンはそれを水に流してその場に居る全員をツアイトへ案内した。

惑星サジタリウスで行われたスーパーロボット大戦より一カ月後、マリ・ヴァセレートの姿は惑星同盟軍の制圧下にある世界の要塞へと無理に改造された惑星にあった。

彼女は魔法やハッキング技術を駆使して要塞の奥深くへと忍び込み、そこでコンピュータを操作して自分の旅の目的とも言えるルリの行方を探っていた。目撃者の情報通りにここまで来たが、サジタリウスと同様に既に去った後のようだが、マリは諦めず、キーボードを超人的な速さで打ちながら次の手掛かりを探す。

「おい、女！ 大人しく……っ！ お前はワラキアの……」

彼女の背後から、惑星ワラキアで剣を交わしたことがある大剣を携えし大男、「r b: 瀬戸 > せと」シユンが現れ、マリの姿を見るなり驚きの声を上げた。

彼の背中にはあの大剣、スレイブがあるはずだが、その巨大な鉄塊のような剣は無く、それらしきストラップを右手に握っている。腰には何らかの装置を付けたベルトを身に着けている。ここで強敵であるマリと鉢合わせするなど、彼からしてみれば予想外の展開であったが、彼女は何も驚くことなく、席を離れてシユンを睨み付ける。

「なんでここに居るか知らねえが、取り敢えず、そこにある紫色に光っている水晶みてえなのを外してこつちに渡せ。やり合うつもりは更々ねえからよ」

席を離れて睨み付けるマリに対し、シユンは臨戦態勢を取りながらも彼女の近くある紫色に光る水晶を渡すよう命じる。

だが、ルリに関しての手掛かりが掴めずに苛立つ彼女はそれを聞かず、八つ当たりとしてシユンに魔法による魔弾攻撃を仕掛けた。

「っ!? このアマ!!」

これにシユンは避けきれず、魔法の攻撃を受け、壁を突き破って向こう側まで吹っ飛ばされる。

「な、なんだお前は!?!」

「いきなりかよ。相変わらず容赦ねえ女だ…!」

壁まで突き破って吹き飛ばされたシユンは、先ほど自分の侵入に気が付いた同盟軍の警備兵に銃口を向けられていたが、そんなことをお構いなしにあれほどの攻撃を食らったのにも関わらず、立ち上がって右手に握っていた大剣のストラップを、あの巨大な鉄塊のような物へと変えて柄を握る。

「うわあああ!!? な、なんだこれは!!?」

「いきなり右手から馬鹿デカイ剣が!?!」

「全く、あの瞬間にバリアジャケットを着てなきや今ごろお陀仏だぜ!」

驚きの声を上げる警備兵らを見無視し、シユンは大剣を構え、追撃の手を加えて来るマリーに警戒する。そんなシユンの姿は、黒い甲冑を身に纏い、その上から黒いマントを羽織った漆黒のような剣士の姿へと変わっていた。

マリーの攻撃を受けた瞬間に、自分のバリアジャケットと言う管理局の魔導士が戦闘の際に身に纏う戦闘服を身に着けていたのだろう。ベルトからはロシア語でマリーの接近を知らせる音声が流れる。

『魔女が接近中! 魔女が接近中!!』

「んなもん、言われなくたって分かってんだよ」

「貴様何者だ!?! うわっ!?!」

それを分かっているシユンはベルトに言い返す。何が何だか分からない警備兵は、

シユンに銃口を向けながら問い詰めるが、追撃に来たマリの魔弾を受け、頭を吹き飛ばされて即死する。

「ヒイイイ!?!」

「早速来たか……!」

この攻撃にシユンは臆することなく、左腕のガントレットにボウガン式のプラズマ砲を装着し、それをマリに向けて撃ちまくる。

発射されたプラズマ弾は凄まじい速さの連射力であり、それに火力も高く、壁が砕けて行くが、マリは飛んでくるのが分かっているかの如く、避けながら迫る。

「ちっ、とんだ魔女だぜ!」

これにシユンはプラズマボウガンでの対処を止め、床に突き刺している大剣を片手だけで引き抜き、片手半剣で挑んで来るマリの剣撃を防いだ。

剣と剣がぶつかり合う音が要塞内に響き渡る中、マリとシユンの双方の剣士による常人離れた斬り合いが繰り広げられる。ワラキアで行われた初の手合わせでは、統合連邦軍ある最強の兵士との戦いで終わっていたが、この要塞に改造された再開された。

激しい打ち合いが行われる中、マリは単なる八つ当たり、シユンは目標を達成させ、生き残るためと思いを込めて目の相手に剣を打ち込んだ。

## あとがき

どうも、復讐異世界旅行記外伝のご愛読ありがとうございます。ごさいました。

つつても、外伝はまだまだ続くんですけど（笑）。でも、本編の執筆を優先するので、作者の気分次第で再開します（笑）。

さて、なんでこんなSSを書く気になったと言えば、三カ月前に無限のフロンティア（二作目も含む）のプレイ動画を全て見たからです。

九年前、中防の頃にCMを見て「すげえヤラシイゲームだな」と思って避けていましたが、いざ大人になってナムカプのプレイ動画を見終えてからムゲフロのプレイ動画を見てみると、「すげえ面白えなオイ！」と思って、それに影響され、ハーケンらを書きたいと思ったわけです。

実際、書き始めたのは引き続き主人公「ハーケン・ブラウニング」が、ヒロインでバンプレストオリジナル史上最大のバストサイズを持つ女性キャラ「楠舞神夜（なんぶかぐや）」と共に出演したプロジェクトクロスゾーンを見終わった後だったんですけど（笑）。

その途中、コードギアスの監督が前にやっていたガン×ソードと言う痛快復讐劇な口ポットアニメを見た所為か、主人公のヴァンだけが愛機のダンと一緒に参戦。他のキャ

ラも出そうかと思いましたが、收拾がつかないので、ヴァンのみに。

書いてる最中に、ガドヴェドもウイリアムも出そうと思っちゃったわけですが。ちなみにネタバレになるんですけど、二人とも物語の途中で主人公にやられちゃって死んでます（笑）。

で、咎人。復讐者本編にも過去に大罪を犯した人と言う事で勝手に蘇らされて使役されちゃってますが、名前はどうかするか考えておらず、青き革命のヴァルキュリアを思い出して、咎人と命名。滅茶適当な思い付きですいません（汗）。

でつ、物語の主人公は本編でもう一人の主人公となっている筈で、能力失ったつて言う設定が無くなってチート状態のマリ・ヴァセレートですが、実質的な主人公はハーケンです。

だってあんまり台詞少ない上に、特に目立った行動もしないので、ハーケンがより目立ってしまったってヒロインの座もへったくれもありません。

尚、アシエンは絶対にヒロインじゃない（笑）。つか、ヒロインなんて外伝には存在しない！

エピソードに、本編の主人公であるシユンが出ますが、黒い剣士時代のガッツみたいになってマリと戦って終了と言う…。久々に書きましたが、出番無さ過ぎだな（笑）。

それでストーリー構成についてですが、前半は自分の思い付いた通りに書き、中編の

最初は予定通り（ジョジョ第三部の酒場シーンみたいなどこ入るけど）で、ハイロー3：ODSTの一般人の視点で描かれたオーディオログのストーリーにある程度参考。

そこにハーケン等や、スパロボの最強剣士であるゼンガー親分をぶっこんで、随分とハチャメチャになりましたが（笑）。

オーディオログでは海兵隊は来ておらず、警察と市民兵が頑張つてコヴナント軍を止めてましたが（悪徳署長はお構いなしに、職権を乱用して主人公を追い回してたけど）、こちらでは正規軍である連邦軍が駐屯して遺跡と現地抵抗組織に増援を送り込むためにサジタリウスに攻めて来たワルキューレと交戦しますが、本編でご覧の通り、ガンダムF91に登場する連邦軍並に市民を巻き込み、街の被害を更に広げると言うギャグレベル状態の衰退ぶりを見せびらかします。でも、一部はマジの正規軍だけど。

これは敵対組織の惑星同盟軍も同様であり、デカくなりすぎて馬鹿ばっかになったと言う事です。

大き過ぎて管理体制が整ってないと言う意味であり、相手に対抗しようと「こつちも大きくしよう！」ってことになって結果的に馬鹿ばかりになり、戦術も戦略もただ機動兵器を突っ込ませるだけと言う将兵の人命を無視したバカげた物へと変貌します。

勝手に乱入してきたネオ・ムガルも同様で、正規兵以外は全て捨て駒状態…。ホント、戦争は地獄だぜ。

対するワルキューレは大戦後期のドイツ軍の如く四面楚歌状態であり、将兵の装備が粗悪、と言うより第二次世界大戦の装備で遙か未来の軍隊と戦うと言うかなり無茶をしております。

物語終盤には、ネオ・ムガルが乱入してスーパーロボット大戦となり、敵側にガドヴェドやウイリアム、そして遂に念願のカン・ユウ大尉やゴステロ様の夢の競演が実現できた。

これは自分に取って満足：いや、ゴステロ様の性分であるいじめと人殺しが好きな場面が書いてない。これは本編で書かないと…。

最後には味方の増援としてアクセルやラミア、アルフィミイも参戦。祭りも終焉を迎えます。

そしてマリは、彼らに何も言わず、ただ報酬を置いてルリを探す旅に戻ります。

ここでもぶっちゃけますけど、下品な話、リメイク前の復讐者の世界周りとリメイク後の復讐異世界旅行記は、多重クロスSS、の○太とスーパーロボットかどうか忘れたけど、あれを実写版「スターシップ・トゥルーパーズ」並にデイスリまくった物です。

最初は見えて、「ああすげえ面白そうだな」と思ってた見ましたが、いざ読んでみれば、多重クロスの名を借りた反米や日本万歳物SSだったと言う…。

それ以降、読むに堪えられず、「こんなの多重クロスSSじゃない！」と思つて生まれ



たのが、復讐者の世界周りであります。

学黙、作者が死んで未完となったエロ物ゾンビ漫画に政治やらを混ぜ込んでおかしくなってるゾンビ漫画の二次創作を終わらせたと、自分の思い付く限りでやってみました。が、挫折して書くのを止めてしまいます。

理由はモチベーションの問題ですかね……。そこで、主人公を男のシユンにした復讐異世界旅行記が生まれます。

ここでまた躓きましたが、無理にベルセルク風味に書き換えてなんとか自分なりに軌道に乗らせ、緋弾のアリア編の終わり間近、と言うより残り二話で終了ですが。

先の話を書きすけど、緋アリア編終了後に魔法少女リリカルなのは、それも初代なのは突入します。まあ、どのように突入するかはまだ言えませんが。

では、ここで後書きは終わりです。本編でも執筆に集中します。

ピックアップでの投稿は、ここ暫くはありませんが、気紛れでまた外伝を投稿するかもしれません。

それでは、こんなSSを読んでくれた皆さま、本篇が連載されるハメールンでお会いしましょう。

2020年十月五日の追記

前々より言っていた外伝の投稿を、柴犬編を終わらせた後、投稿を始めました。

前にも言っていたが、色々と忙しくてハメルーンでの投稿はしてなかったが、柴犬編が終わってから、少々アイデアが思い付かなくなり、やる気でも出そうかと思つて、投稿することに決めました。

今読み返してみれば、色々荒かったところもあるし、修正されてないのも幾つか見付かっている。

これをハメルーンにも投稿して、どう読者に反応されるのかが気になってみたが、結果は冷やかな物であった。

続けてオリジナルかな？ その辺の話も独立させて、柴犬編と共に投稿しようと思ふ。

では、かなり短いですが、短編集とか前々作のリメイク、柴犬編もお楽しみに。